

科学研究費補助金 基盤研究 (B) 課題番号：20401013

研究課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」

トヨタ財団2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」

題目「中国湖南省藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承」

瑶族文化研究所

第二号

通訊

— つうじん —





目 次

I. ヤオ族文化研究所活動 …………… 2	ヤオ族研究文献目録 吉野晃編 I … 107
II. ヤオ族文化研究所獲得資金 …………… 2	ヤオ族研究文献目録 丸山宏編 I … 112
III. 研究報告 …………… 3	ヤオ族研究文献目録 廣田律子編 I 116
在慕尼黑調査、研讨馆藏瑶族手本の日子 …………… 4	VI. 書評…………… 118
張 勁松	田畑久夫「ヤオ族の評皇券牒—盤瓠神話と移動経路を中心に—(I)～(IV)」…………… 119
「掛三燈」の儀礼 …………… 6	三村 宜敬
松本 浩一	李金叶『中国とベトナム山地民族の世界—ヤオ族音楽文化に関する基礎的研究』…………… 121
ユーミエンの儀礼の研究における課題：儀礼の意味と伝承、不易と変差 …… 17	佐川 潤子
吉野 晃	竹村卓二「ヤオ族の《家先単》とその運用—漢族との境界維持の視点から—」(1991年・『国立民族学博物館研究報告』)124
湖南省藍山県ヤオ族传统文化の諸相—馮栄軍氏からの聞き取り内容— …… 19	広川 英一郎
丸山 宏	十文字美信『澄み透った闇』(1987年・春秋社)…………… 125
榜文の翻刻と現代和訳の一例—約束榜— …………… 26	内藤 久義
森 由利亚	『盤瓠文化探源』(2004年・中南大学出版社)…………… 129
度戒をめぐる人的関係網…………… 29	譚 静
泉水 英計	
文献に見る盤王伝承 …………… 51	
廣田 律子	
2010年3月バイエルン州立図書館所蔵ヤオ族写本調査報告 …………… 58	
丸山 宏	
IV. 資料…………… 60	
2008年の度戒参加者の相互関係 …… 61	
泉水 英計	
中国湖南省藍山瑶族度戒科儀的書表執行程序 …………… 67	
馮 栄軍	
丸山 宏	
森 由利亚	
2008年ヤオ族度戒儀礼程序 …………… 71	
V. ヤオ族研究文献目録 …………… 106	

I. ヤオ族文化研究所活動

1. 研究会開催情況

2008年度	
ヤオ族度戒儀礼調査第1回研究会	2008/01/28
ヤオ族度戒儀礼調査第2回研究会	2008/03/21
ヤオ族度戒儀礼調査第3回研究会	2008/06/07
ヤオ族度戒儀礼調査第4回研究会	2008/07/13
ヤオ族度戒儀礼調査第5回研究会	2008/08/31
ヤオ族度戒儀礼調査第6回研究会	2008/09/23
ヤオ族度戒儀礼調査第7回研究会	2008/10/19
ヤオ族度戒儀礼調査第8回研究会	2008/10/29
ヤオ族度戒儀礼調査第9回研究会	2008/11/09
ヤオ族度戒儀礼調査第10回研究会	2009/01/04
ヤオ族度戒儀礼調査第11回研究会	2009/02/08

2009年度	
ヤオ族度戒儀礼調査第12回研究会	2009/03/14～03/15
ヤオ族度戒儀礼調査第13回研究会	2009/04/05
ヤオ族度戒儀礼調査第14回研究会	2009/05/02
ヤオ族度戒儀礼調査第15回研究会	2009/06/14
ヤオ族度戒儀礼調査第16回研究会	2009/07/12
中国民話の会での報告	2009/07/12
ヤオ族度戒儀礼調査第17回研究会	2009/07/30
ヤオ族度戒儀礼調査第18回研究会	2009/09/23
ヤオ族度戒儀礼調査第19回研究会	2009/11/15
ヤオ族度戒儀礼調査第20回研究会	2010/01/24
ヤオ族度戒儀礼調査第21回研究会	2010/03/09

2. 第1回湖南瑶族伝統文化研討会 2009/08/06 長沙

湖南省民間文芸家協会、湖南省民族研究所と共同開催

発表者	氏名	テーマ
湖南省民委副主任	趙仁秀	挨拶
湖南省文聯党組副書記・副主席	江学恭	挨拶
湖南炎黄文化研究会会長	何光岳	「瑶人的来源和遷徙」
ヤオ族文化研究所客員教授	吉野晃	「儀礼の意義与伝承不変与变化之初探——優勉儀礼中的研究課題之一」
湖南省民間文芸家協会主席	張勁松	「藍山県瑶族度戒儀式的文化層」
湖南省文聯	黄愛平	「瑶族度戒儀式所折射的現實意義」
湖南省藍山県	盤榮富・馮榮軍	「度戒的主要功能与当代文化価値」
ヤオ族文化研究所客員教授	松本浩一	「《掛三灯》的儀礼：其前半部分」
ヤオ族文化研究所客員教授	丸山宏	「瑶族度戒儀礼調査之感想与研究課題」
ヤオ族文化研究所所長	廣田律子	「度戒儀式中演技性之管見」
中央民族大学音楽学院	龚易男	「藍山県瑶族度戒儀式音楽簡介及思考」
その他の参加者	蘇素卿・李利・譚静・陽盛海・金雅・朱朝暉・左漢中・謝子元・朱永華・黄晋・周来生・何紅喜・任涛・崔莉・叶楊瀟	

3. 補足調査 2009/08/04～08/12 長沙

主醮師 趙金仔・書表師 馮榮軍・第八会首 馮基華・藍山県民委主任 盤榮富から聞き取り調査を行なった。

4. バイエレン州立図書館資料閲覧 2010/03/13～03/21 ミュンヘン

バイエレン州立図書館収蔵のヤオ族文献を閲覧し、関係資料を収集した。

5. 資料の公開に向け資料整理を進め、ホームページを整備した。http://www.yaoken.org/

II. ヤオ族文化研究所獲得資金

科学研究費補助金 基盤研究 (B)	
研究課題名	「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」
課題番号	20401013
補助金額	4,290,000 円
トヨタ財団 2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」	
企画題目	「中国湖南省藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承」
助成番号	D09-ID-020
助成期間	2009/11/1～2011/10/31
助成金額	2,500,000 円

III. 研究報告



在慕尼黑调查、研讨馆藏瑶族手本的日子

湖南省民间文艺家协会主席

瑶族文化研究所客員教授

张 劲松

2010年3月13日，作为日本神奈川大学瑶族文化研究所的研究项目“蓝山瑶族仪礼和仪礼文本的综合研究”的课题中方成员，我应日本和德国方面邀请，同研究所的专家学者一起，乘机赴慕尼黑调查、研讨馆藏瑶族手本。

当日德国时间17、30是北京时间的晚上零点30分，我们一行到达慕尼黑机场。来机场迎接我们的是巴伐利亚州立图书馆（以下简称“图书馆”）近东东部负责人，看上去50来岁年纪，名叫Lucia Obi。与我们打招呼时，她不用等人介绍就能叫出我们每一个人的名字。看得出来，为了迎接我们的来访，她事先肯定做了周到的准备工作。当我自我介绍时，我“张”字刚出口，她一步跨上来，紧握我的手：说：“张教授，您好，我们馆里藏有您的书和文章，我在论文里还参考引用您的著作呢，有你们这些世界知名学者来我们馆光顾瑶族手本，我好高兴，好高兴！”说着我向她要了一张名片，中文名叫做“优雅碧”，早年在中国的台湾留学，后来回到德国工作，10年前接任馆藏瑶族手本编目和研究瑶族文化，她到过中国瑶族许多地方，也来过长沙，拜访过瑶族学者李本高先生。她还告诉我，她有一个同事是中国北京人，叫张玉芝。有什么要办的事尽管跟她们说……听她说流利的汉语，还有自我介绍，我的陌生感和语言不通的担心全放了下来，好象我们早就是同行朋友。

14日是星期日，因我们在德国居留的时间不多，Lucia Obi女士便放弃休息，特“开小灶”领我们去馆里工作。这家图书馆已有450多年历史，是德国四大图书馆建馆最早的，比柏林图书馆还早一百年，原是宫廷图书馆，二战时被飞机轰炸成为瓦砾，很多藏书流落散失了，重建后找回来许多，但仍有少量的藏于别处和民间。我们先参观东亚藏书室，所藏中国图书最多，古籍古本也很多，有好大几间屋子。我想到在近二百年中，中国有一些古籍流藏在外国图书馆，第二天就对张玉芝女士说，如果馆里有中国、湖南尚未珍藏的图书，请告诉我们，我的话立即引起了她的重视，记得在第三天就给我送来了她觉得湖南图书馆可能没有的书目。还给我找出了几种《红楼梦》古本，我想从中发现我国尚未发现的曹雪芹写的后四十回的手本。

看过东亚藏书，Obi女士让我们从藏书室推出她早就准备好的三书架约二百多本瑶族手本，每本都用特

制的黑色书盒珍存。据她介绍，图书馆所藏瑶族手本有2077件，目前仅编目867件。这批馆藏手本系上世纪80、90年代从英国古董商处买来，并非民族学者的收藏或捐献。这位古董商又是从曼谷的一位泰国古董商处买得。对这批手本的出处，几乎是一无所知。但可以判断，有部分手本在泰国时，即已在不同的古董商间易手过。从几批相当不同来源与日期的手本，却附有与手本内容并无相关的相同说明（如加上几个纳西象形文做标题）即可见端倪。这种做法，被认为是古董商企图模仿在1970及1980年代风靡泰国古董市场的瑶族书卷外貌，以抬高这些手抄本价值。除了在某些手本上提供的时间和极少来源地讯息外，手本的外貌、装订形式与纸张也提供了一些对于手本来源的判断。大部分较老的手本来自中国（部分来自越南）而较新的则来自寮国或泰国。但至今还未发现任何在湖南的手本。这么多手本，包括我在内，是在别处从未见过也很难得见的，我们立即翻阅，也根据自己的研究课题和感兴趣的部分抄录。我除了阅读和抄录，也与同行们商讨手本中的内容是在哪些仪式或活动中使用，以及它的研究价值。大家都恨不得多翻阅一些，抄录得多一些，连吃饭都不外出，从商店买来快餐，在Obi女士的办公室里随便吃一些。

在图书馆的8天中，三国专家学者就我们所见的馆藏瑶族手本的内容和价值，召开了二次学术讨论交流会。大家认为：这批手本的内容十分丰富，宗教性质的手本有经文、仪礼文本、表奏、秘语、小法等，仪礼文本又包含醮、斋、度戒等众多内容。非宗教性质的手本有道德教化类的书，语言教科书及辞典，神话史诗类文本及歌本，占卜文本，纪录文件，医疗性文本等等。这些都是研究瑶族传统文化的重要材料。二是手本中所记录的最早日期为1740年（乾隆五年），近代的手本则在二十世纪80年代初期，约有三分之二源自于十九世纪。因为瑶族文化受汉文化的影响很广很深，一些在汉族民俗文化中早已失落的元素，尚能在这批手本中看到，这对研究汉族民间道教及民俗文化很有价值。三是手本保存了一些地方文化尤其是闾山教、梅山教的信息，这是瑶族迁徙流转四方，受周围地域文化影响所致，对研究地域特色文化有价值。四是手本保存了灵物崇拜、图腾崇拜、祖先崇拜等原始文化信息，这是因瑶族经济文化较后进有关，对人类文化学研究很有价值。在学术会上，我感

2010年3月26日于长沙陋室

触最深的是，日本和德国学者对瑶族文化尤其是精神信仰文化的研究有相当的深度和广度，此外，他们除母语，还精通二至三国外语，讨论中，时而讲英语，时而讲汉语，时而讲日语，时而讲德语，交流得十分充分、风趣和幽默，不时发出阵阵笑声，而我却只能依靠翻译了。这又不能不让我记恨“文革的读书无用论”使我们这一代人失去了学外语的最佳时期。

在慕尼黑，除了每天从宾馆到图书馆来回乘坐地铁，除了整日呆在图书馆里工作，我们唯一一次集体外出，是参观离图书馆不远的德国国立民族博物馆（Staatliches Museum für Völkerkunde München），看了这个馆里珍藏的瑶族宗教绘画，其绘作的档次之高令我惊叹，我在国内好像从未见过。听说是从古董商那里得到的，每张画出自中国瑶族的何地何时并不确知，于是我们帮助辨认和鉴定大约的地区和时期，但仍有些只能说个大概。在我们去的人中，尽管大多数是第一次到欧州，第一次去德国，但他们连去商店光顾一次的时间都舍不得占用，待20日登机回国前，在慕尼黑机场的商店里草草地买了些东西。这就是教授，这就是专家学者，这就是事业。亲爱的读者朋友们，您不觉得他们是另一类人吗，你理解他们吗？

我回来后，有好些朋友问我，日本有瑶族吗？德国瑶族吗？我告诉他们：德国、日本、英国都没有瑶族，但他们的图书馆里也收藏瑶族手本和宗教绘画，也有瑶族文化研究所？为什么会这样呢？我想原因是多方面的，这里用得上我们常说的一句话“越是民族的越是世界的”。世界各族人们应当增进相互了解，相互学习、共同和平发展和繁荣，虔诚於人类文化的民族学、民俗学和人类文化学的专家学者可以帮助架起文化交流的桥梁。还有大学和文化研究单位，他们要扩大眼界，要提高理论、学术的水平和档次，要获得发言权等，当要尽可能地扩展学术研究的领域，我认为理论、学术也是一个国家重要的软实力。我的这个回答当是不完全的，望朋友们比我想得更多。

我是第二次去欧洲，我看到的慕尼黑是在二战后重建的城市，所有的房子和建筑都是民族化的，而且几乎没有雷同、各具特色。德国人说他们不认同喜欢他们的法兰克福城市，因为那里有很多的高楼大厦，被认为是美国式的城市。慕尼黑的房屋坚实得好象还可以住上几百年，大街小巷清洁得任何时候都见不着烟蒂纸屑……，但我回到长沙，看到市区几乎是一色的火柴盒式的高楼大厦，街道上可见废弃物。我也就更多明白我们为何要珍重我们的传统文化，要实现文化的多元化、多样性，要学习别国好的文化和习俗了。

「掛三燈」の儀礼

筑波大学図書館情報メディア研究科教授

ヤオ族文化研究所客員教授

松本 浩一

はじめに

2008年の度戒儀礼では「掛三燈」は12月2日に行われた。この儀礼は、受戒者を浄化し保護した後、解厄・強化することを主目的とする前半と、歩罡などの方法を伝授する後半とに分かれるが、ここでは燈による生命力の強化、北斗による解厄など、北部台湾の道士や、南部台湾の法師が行う補運の儀礼に共通する要素が見出せる前半部分について、その儀礼の過程と特色をたどってみることにしたい。しかしテキストの校訂作業や、儀礼の過程と儀礼に用いるテキストとの対応関係など、まだ調査に不十分なところがあり、あくまで中間報告にすぎないことをお断りしておく(1)。

1. 浄化

今回の「掛三燈」儀礼に参加するのは四人の会首である。始めに、主醮師は師父18人の名前を唱えながら酒を注ぐ。そして儀式の中で用いる米・布・銭・橙(櫂・椅子)を、水と剣によって浄化する。米・布は箱の中に入っている。まず浄化に用いる水を変化させる。

此水不是非凡之水、天上敢來□□之水、地下去來九龍之水、山中敢來楊柳之水、江中敢來長流之水、井中去來養人之(水)、壩中敢來養魚之水、田中敢來養米之水、中取來一變化為洒淨之水、二變此水化為觀音楊柳之水、三變此水為真武之水、四變此水化為五雷殿上之水、五變此水化為八大金剛之水、六變此水化為三壇之水、連連化為雲霧之水、邪鬼自滅、吾奉太上老君急急如令勅

この水は非凡の水ではない。天上から敢えて来た□□の水であり、地下に去来する九龍の水であり、山中から敢えて来た楊柳の水であり、(長)江から敢えて来た長流の水であり、井戸の中に去来する人を養う水であり、城(堀の意であろうか)中から敢えて来た魚を養う水であり、田中から敢えて来た米を養う水である。中から取り来て一度変化させて撒いて浄める水とする。二度この水を変化させて観音楊柳の水とする。三度この水を変化させて真武の水とする。四度この水を変化させて五雷殿上の水とする。五度この水を変化させて八大金剛の水とする。六度この水を変化させて三壇の水とする。連なって雲霧の水となり、邪鬼は自滅する。私は太上老君の(命を)奉じて命ずる。急いで令・勅のように行え。

「この水は非凡の水」というのは、道士が水を用いて道場を浄化する際に唱える呪文の常套句であるが(2)、ここでは始めの句は「非凡の水ではない」となっているが、もともとは普通の水を、霊力ある特別の水に変化させ、それによって邪鬼を駆逐するという意味担っているように見える。変化させた水の形容には、観音や八大金剛など、仏教に由来すると思われる表現や、真武や五雷など道教に由来すると思われる表現が見え、ヤオの宗教者が用いるテキストの中には、様々な伝統が混合していることが見て取れる。最後の文句は、やはり道教の呪文の常套句である、「急急如律令(律令にあるように急いで行え)」の変化形と考えられるが、太上老君はテキストにも、主醮師の解説にもしばしば登場し、道教の強い影響下にあることを暗示している。

次にこの水を用いて米を変化させる。

此米不是非凡之米、米是化為天星養人之米、吾師將來化為千兵万馬、拋散速上壇前、將來拋把師男、速變速化、速速變化、吾奉太上老君急急如令勅

この米は非凡の米ではない。米は変化して天星が人を養う米となり、吾が師はやって来て千の兵と万の馬に変化させ、投げ散じて速く壇の前に上らせる。まさに投げ打って会首たちに与える。速く変化せよ。

次に布を変化させる。

此布不是非凡之布、布是化為三尺六寸、白布化為青竹、蛇化為金橋、吾師將來、拋把師男速變速化、吾奉太上老君急急如令勅

この布は非凡の布ではない。布は変化して三尺六寸となり、白布は化して青竹となり、蛇は化して金橋となる。吾が師はやって来て、投げ打って会首たちに与える。速く変化せよ。

次に銭を変化させる。

此銭不是非凡之銭、銭是三十六文銅銭、化為三十六名雄兵、吾師將來、拋把師男、速變速化、吾奉太上老君急急如令勅

この銭は非凡の銭ではない。銭は三十六文の銅銭である。それが変化して三十六名の勇ましい兵となる。吾が師はやって来て、投げ打って会首たちに与える。速く変化せよ。

次に椅子を変化させる。

此橙不是非凡之橙、化為老君之橙、化金鑾寶殿、吾師將來、拋把師男、速變速化、吾奉太上老君急急如令勅

この椅子は非凡の椅子ではない。変化して(太上)老君の椅子となり、変化して鑾寶殿となる。吾が師はやって来て、投げ打って会首たちに与える。速く変化せよ。

このテキストでも、最後はすべて「私は太上老君を奉じているから、(その) 令勅のように急いで行え」という句で終わっている。次のところで主醮師が唱える「太上老君の軌道を歩き……」という句に対応しているのであろう。

2. 収煞

そして法服・法冠を載せた椅子を、座壇師・証盟師の二人が入り口に向かって運ぶが、この時には棒を椅子に差し込み、直接に触れないようにする。そして次のような句を唱える。

一打橙頭立獅子	一に椅子の先頭を打って獅子を立たせ
二打橙尾立麒麟	二に椅子の後尾を打って麒麟を立たせる
麒麟獅子兩邊立	麒麟と獅子とが両辺に立ち
叫你傷鬼莫傷行	傷鬼があなたを傷つけないようにする

そして主醮師は、外に向かって「太上老君の軌道を歩き、太上老君の橙(櫂・いす)に座り、太上老君の飯を食べ、太上老君の衣を着る」という内容の句を唱えるが、これは口頭で伝えられているという。そして天神・七星北斗・四府功曹・本方土地を招き証明してもらう。

座壇師・証盟師は椅子を持って祭壇に拝礼したあと、椅子を並べる。会首たちは法服に着替え、頭に布を巻き法冠を戴して椅子に座る。そしてテキストには「収伏断」とあるが、これは「収煞」すなわち煞鬼を収め服従させることを意味するという。「収煞」に唱える文句は口頭で伝えられており、下の呪文とは異なる。主醮師らは紙銭を丸めて外に向かって投げる。これによって天煞・地煞・本命煞・破棺煞など、合わせて124種類の煞を収めるのだという。

次の呪文は、その後会首たちを保護することを意味しているように見える。

橙頭立條殺鬼劍	椅子の先頭に殺鬼の矛を立て
橙尾立條殺鬼槍	椅子の後尾には殺鬼の槍を立てる
師男坐落金磚内	師男（会首）は金の瓦の中に座り
強如江水一舡長	強いことは長江に浮かぶ船長のようなものである
吾奉太上老君急急如令勅	

3. 藏身

そして藏身を行う。藏身は会首たちの身を邪神から隠すという意味であり、座談師・証盟師が一人一人の会首の周りを回って、両手で包むような動作を行う。

次の呪文は、会首たちがターバン・法冠を着けるときのものであろうと思われる。

師男頭戴金冠頂	師男は頭に金冠頂を戴し
吾師來到立香門	吾が師は来たり到って香門（？）に立つ
師男口唵老君法	師男は口に老君の法を念じ
口唵老君法使行	口で老君の法を念じ行わせる
左手執老君妙訣	左手に老君の妙訣を結び
右手執得接香門（印入香門）	右手に印を執って香門に入る
左脚又踏蓮花朵	左脚でまた蓮花の一房を踏み
右脚踏到蓮花磚	右脚で蓮花の瓦を踏む
今日當壇來學法	今日当壇に来たって法を学び
後代子孫命有縁	後代の子孫に命じて縁があるようにする
吾奉太上老君急急如令勅	
又在青雲頭上立	また青雲の頭の上に立ち
又在紫雲脚下安	また紫雲の脚の下に安んずる
橙頭立條殺鬼劍	椅子の先頭に殺鬼の劍を立て
橙尾立條殺鬼鎗	椅子の後尾には殺鬼の鎗を立てる
師男坐在金磚内	師男（会首）は金の瓦の中に在り
壽如江水一般長	寿命は長江と同じように長い

そして次の「天師變身用」と名付けられた文章が藏身のためのものである。

尾口左耳化為左太山、右耳化為右太山、左眼化為星、右眼化為月、左鼻化為左鐵鋒、右鼻化為右鋒、口中化為大石巖・小石巖、上齒化為大鐵柱、下齒化為小鐵柱、舌子化為老君鉄葉、左手化為麒麟、右手化為獅子、肚腸化為大南蛇、左脚化為龍、右脚化為虎、畫龍成龍、畫虎成虎
吾奉太上老君急急如令勅

□□左耳は化して左の太山となり、右耳は化して右の太山となり、左眼は化して星となり、右眼は化して月となり、左鼻は化して左の鉄鋒となり、右鼻は化して右の鋒に、口の中は化して大石巖・小石巖に、上の齒は化して大鉄柱となり、下の齒は化して小鉄柱になり、下は化して老君の鉄葉となり、左手は化して麒麟となり、右手は化して獅子となり、肚腸は化して大南蛇となり、左脚は化して龍となり、右脚は化して虎となり、龍を画けば龍となり、虎を画けば虎となる。

次の呪文は「天師大變身」と題されている。

謹請天師變吾身 謹んで天師に請うて吾が身を変身させる

行罡作歩轉天庭	歩罡を行って天の庭に転ずる
現出毫光千萬丈	放たれた光線が千万丈におよび
脚踏洪波紫色雲	脚は大波・紫色の雲を踏む
金甲飛衣發院火	金甲・飛衣を着て院火を発し
鐵城裡内好藏身	鉄の城の中に好く身を蔵する
謹請三元變吾身	謹んで三元に請うて吾が身を変身させる
飛袍金甲鎮乾坤	飛袍・金甲を着て乾坤を鎮める
現出毫光千萬丈	放たれた光線が千万丈におよび
萬鬼千邪不可門	万の鬼・千の邪は門に（入る）ことができない
吾師藏唵無踪跡	吾が師は蔵し念じて跡形なく
鐵城裡内好藏身	鉄の城の中に好く身を蔵する

4. 昇燈

油を入れた燈盞を十二個用意して、それぞれに火をつけ、座壇師・証盟師がお盆に載せて門口にもっていき、外に向かう。次に二人は東と（座壇師）西と（証盟師）から神画に向かう。天神、本方地主、北斗などの神々に、誰が三種類の燈を掛燈したか証明してもらい意味だという。

ここで受戒者の前の地面に燈を置くための竹の燈架を指していく。さらにそれぞれの燈架に三つの燈を置いていく。この時に唱える言葉は口頭で伝えられているもので、受戒者を保護してくれるようにという意味であるという。この三つの燈は、第一番目が祖宗すなわち祖先の燈を表す。儀礼のテキストには「李十六盞灯」とある。

第一盞明灯李十六盞灯	第一の盞明灯は李十六盞燈
李十六盞明灯常念頭	李十六盞明灯は常に頭に念ずる
師男受得師父李十六盞灯	師男は師父の李十六盞燈を受け得て
了強如月出山頭	了に強きこと月が山頭にでたようである

第二番目は本身もしくは本命の燈を表し、テキストでは「李十二盞明灯」となっている。

第二盞明灯李十二盞明灯	第二の盞明灯は李十二盞明灯
李十二盞明灯常念長	李十二盞明灯は常に長く念ずる
師男受得師父李十二盞明灯	師男は師父の李十二盞燈を受け得て
了強江水一舡長	了に強きこと長江にうかぶ船長のようである

第三番目は師父の燈を表し、テキストでは「李十一盞明灯」となっている。

第三盞明灯李十一盞明灯	第三の盞明灯は李十一盞明灯
李十一盞明灯常唵經	李十一盞明灯は常に經を念ずる
師男受得師父李十一盞明灯	師男は師父の李十一盞燈を受け得て
了強如水一舡青	了に強きこと水にうかぶ船の青さのようである

5. 解厄

そして座壇師・証盟師は会首たち一人一人に向かって手訣を結び、さらに鈴を振り牙簡を持って、会首を右回りに回り次のテキストを読みながら解厄を行っていく。

太上三通嶺	太上は三たび嶺に通じ、
齊道救八難	道を齊えて八難を救う。

人名得安康（人明得安樂） 人は明らかに安康を得て、
 保人得長生 人を保って長生を得させる。

次に挙げるのは解厄のテキストである。

解厄 能解太歳厄
 能解太陽厄 太星北斗七元君
 解厄 能解喪門厄
 能解三災厄 太星北斗七元君
 解厄 能解四煞厄
 能解五刑厄 太星北斗七元君
 解厄 能解六害厄
 能解七星厄 太星北斗七元君
 解厄 能解八難厄
 能解九星厄 太星北斗七元君
 解厄 能解十惡厄
 能解夫妻厄 太星北斗七元君
 解厄 能解男女厄
 能解生産厄 太星北斗七元君
 解厄 能解疾病厄
 能解疾痢厄 太星北斗七元君
 解厄 能解精邪厄
 能解虎狼厄 太星北斗七元君
 解厄 能解毒邪厄
 能解脚踏厄 太星北斗七元君
 解厄 能解横木厄
 能解呪咀厄 太星北斗七元君
 解厄 能解天羅厄
 能解地網厄 太星北斗七元君
 解厄 能解刀兵厄
 能解金木厄 太星北斗七元君
 解厄 能解火水土厄
 能解無果太無位厄 太星北斗七元君

以上の解厄の呪文は道教経典である『北斗経』に基づいている。『北斗経』は正式の名称を『太上玄靈北斗本命延生真経』といい、道蔵の洞神部・本文類に収められている。だいたい唐末から宋初にかけてのころに成立したと考えられているが(3)、人々が輪廻の中にあって、欲に振り回され罪を作って苦しみ、正道を知らず悟りを得ることがないのを、太上老君が憐れみ、ここに成道の道を示すのだとして、初代の張天師である張道陵に授けたことになっている。現在でも道士が行う醮や礼斗法会などの儀礼や、また台湾各地で行われている補運の儀礼の中でも誦読されることが多い。この経の中では、「大聖北斗七元真君」の名号を念ずることによって、罪業が消え、災いや衰えが洗い流されて、福寿が与えられ、善果が至るという功德が説かれているが、その中で、大聖北斗の解厄の靈験について、「大聖北斗七元君、能解三災厄」という句が、厄の名前を変えて繰り返されている。その厄の名前については、「三災」に続いて、

四殺、五行、六害、七傷、八難、九星、夫妻、男女、産生、復連、疫癘、疾病、精邪、虎狼、蟲蛇、劫賊、枷棒、横死、呪誓、天羅、地網、刀兵、水火

が挙げられている。このテキストに挙げられている厄に、ほぼ対応していることが明らかに見て取れよう。解厄が終わったところでポエを投げ、無事にことが成し遂げられたかを確かめることは他の部分と共通している。そして次のテキストは厄を解き終わって祝福を与える内容になっている。

即今解過榮發位	即ち今（厄を）解きおわって榮えて位を發し
榮華位上万年	榮華の位にあること万年
当堂解過榮發位	この場で（厄を）解きおわって榮えて位を發し
人丁興旺万年	人丁が興り盛んであること万年

これが終わると、燈盞を降ろして燈架を片付ける。「退燈」と呼ばれる部分で、ここでは次の文が唱えられる。

一退貪狼反文曲	一番に貪狼星を退け文曲星に戻る
文曲水中出宝珠	文曲星の水中に宝珠を出だす
壇前宝法后祿有	壇前には宝法、後に祿が有り
法主青青門下寄	法主は青青として門下に寄る
二退六存反五曲	二番に六存（祿存）星を退け五曲（武曲）に戻る
五曲水中出宝珠	五曲星の水中に宝珠を出だす
師男橋上來听法	師男は橋の上で来たって法を聞く
法主青青門下寄	法主は青青として門下に寄る
退了盞一（二盞）晋一盞	二つの盞を退けて一盞を進め
重晋一盞照師男	重ねて一盞を進めて師男を照らす
若有十方人相請	もし十方の人が相請うことあれば
靈兵去救十方人	靈兵が行って十方の人を救う

6. 補橋

以下の部分は、会首たちに対して呪術において使役する兵が与えられ、呪術の基本的技法の伝授が行われる部分であるが、この内容に関しては別に詳論されるので、ここでは儀礼テキストと概要のみ紹介しておく。はじめに会首の膝に布が広げられる。これが兵が渡ってくる橋を象徴する。

仙人補起陰橋路	仙人は陰の橋の路を修築し
白鶴合香掛起來	白鶴は香を合わせて掛け始め
白鶴合香掛玉帝	白鶴は香を合わせて玉帝に掛ける
掛帝合香掛老君	掛（玉）帝は香を合わせて老君に掛ける
老君合香掛王母	老君は香を合わせて王母に掛ける
王母合香掛天師	王母は香を合わせて天師に掛ける
天師合香掛地師	天師は香を合わせて地師に掛ける
地師合香掛祖師	地師は香を合わせて祖師に掛ける
祖師合香掛本師	祖師は香を合わせて本師に掛ける
本師合香掛吾師	本師は香を合わせて吾師に掛ける
吾師合香掛師男	吾師は香を合わせて師男に掛ける
若有十方人相請	もし十方の人が相請うことがあれば
靈兵去救十方人	靈兵が行って十方の人を救う
自古一世傳一世	古より一世より一世に伝え
自古一人傳一人	古より一人より一人に伝える

子孫代代接香門

子孫は代々香門に接する

7. 分兵

次に米と銭を鈴に入れて会首たちの布に入れていく。これは兵が会首たちに与えられることを意味する。

白布源來有己尺	白布は原来一（己）尺ある
何人抛把小師男	誰がこの師男に投げ与えるのか
白米源來有己斗	白米は原来一斗ある
何人抛把小師男	誰がこの師男に投げ与えるのか
銅錢源來有己十	銅錢は原来十ある
何人抛把小師男	誰がこの師男に投げ与えるのか
白米源來把升量	白米は原来升で量る
量得三斗共三升	三斗と三升を量り得た
白布源來三尺六	白布は原来三尺と六ある
当堂抛把小師男	この場でこの師男に投げ与える
白米源來三斗六	白米は原来三斗と六ある
当堂抛把小師男	この場でこの師男に投げ与える
銅錢源來三十六	銅錢は原来三十六ある
当壇抛把小師男	この壇でこの師男に投げ与える
白布当堂抛把你	白布はこの場でお前に投げ与える
安在虎内做龍衣	どうして虎の中で龍の衣を作るだろうか
白米当壇抛把你	白米はこの壇でお前に投げ与える
安在龍内做虎？	どうして龍の中で虎の服を作るだろうか
銅錢当堂抛把你	銅錢はこの場でお前に投げ与える
安在龍内做虎隣	どうして龍の中で虎の隣となるだろうか
好師男 師男好	好い師男よ、好い師男よ
開你認師不認師	お前は師を認めるか師を認めないか聞く
認師便把橋上坐	師を認めるなら橋の上に座り
師父橋上好抛兵	師父は橋の上で好く兵を与える
左手抛兵掛弟子	左手で兵を投げて弟子に掛け
右手抛兵掛小師	右手で兵を投げて小師に掛ける
若有十方人相請	もし十方の人が相請えば
靈兵去救十方人	靈兵は行って十方の人を救う
自古一世傳一世	古より一世より一世に伝え
自古一人傳一人	古より一人より一人に伝える
香壇裡内來教你	香壇の中に来てお前に教える
子孫代代接香門	子孫代々香門に接する

そして師父が牙簡に置いた米を会首の口に入れる。この「吹付定米」は、この儀式のことを忘れないようにするためという。

当壇吹把口中入	この壇で口の中に吹き入れる
此米源來撰法米	この米は原来選んだ法米である
当壇吹把小師男	この壇で小師男に吹き与える
千年万歳在心中	千年・万歳心の中にあるように

そして7枚の小銭を投げ表裏を見る。これを「定陰陽」という。人はそれぞれ三分の陰と四分の陽とを持っているという、そこで一人一人小銭の三枚が陰（銭の模様が入っている側）、四枚が陽のように出るようにする。そのあと脚の下に置いていた碗をはずす。これを「退蓮花」という。

左脚又退蓮花朵	左脚もまた蓮花の一房を退け
右脚又退蓮花磚	右脚もまた蓮花の瓦を退ける
今日今時掛三召	今日・今時に三召(?)を掛け
屋宰明灯完滿了	屋宰の明灯は完満する
子孫代代接香門	子孫代々香門に接する

以下会首に香炉を嗅がせる「接香炉」に続いて、ドラや牛角、鈴などを扱う技法を伝授していく。

手把香炉共水碗	手に香炉と共に水碗を持ち
当壇抛把小師前	この壇で小師の前に投げ与える
水碗不断千年水	水碗は千年の水を断たず
香炉不断万年烟	香炉は万年の煙を断たない
手把銅鑼共面鼓	手には銅鑼と面鼓を持ち
香門行旺万千年	香門は万年・千年にわたって栄える
若有十方人相請	もし十方の人が相請うことがあれば
鑼声古响付歌堂	銅鑼の音・鼓の響が歌とともに堂(を満たす)
手把牛角共師棍	手には牛角と師棍を持ち
当堂抛把小師男	この場で小師の前に投げ与える
若有十方人相請	もし十方の人が相請うことがあれば
口頭落地定陰陽	口頭は地に落ちて陰陽を定める
手把銅鈴並筭簡	手には銅鈴と筭簡(牙簡?)を持ち
当壇抛把小師男	この壇で小師の前に投げ与える
今日投師学法完滿了	今日師に投じて法を学ぶことは完了し
行罡脚步轉分分	脚は歩罡を行って秩序を持って転ずる

ここで師父たちは杖を持って一人一人会首を両側からはさみ、彼らを立たせていく。主醮師は次のテキストを唱える。これを「抬轎」という。これは祝賀の意味であるということだが、以下のテキストにはそのことがはっきりと示されている。

門前水 門前江水轉穹穹	門前の水、門前の江水が転ずることぐるぐると
門前江水穹穹轉	門前の江水はぐるぐると転ずる
抬起新掛師男做大官	新しい師男を擡げ起こして大官とする
門前水 門前江水轉滾滾	門前の水、門前の江水は転ずること滾滾と
門前江水滾滾轉	門前の江水は滾滾と転ずる
抬起新掛師男做秀才	新しい師男を擡げ起こして秀才とする
門前水 門前江水轉翁翁	門前の水、門前の江水は転ずること翁翁と
門前江水翁翁轉	門前の江水は翁翁と転ずる
抬起新掛師男做師公	新しい師男を擡げ起こして師公とする

ここで会首たちは歩罡の方法を学ぶことになる。以下のテキストは座壇師・主醮師によって唱えられる。これは会首たちに正道を行くように教えるものであるという。

請師教 請師教
 不教師男教何人
 撥兵撥法完滿了
 我代師男條破神
 我代師男條破鬼
 師男学法救人民
 要教便教香壇内
 我教師男在壇中
 教你会 教你会
 教你撥兵撥法救人民
 救得男安女也安
 師父有名我有声
 正師教 正師教
 正師教子教師男
 師男学法隨師轉
 行罡学法救人民
 有名入得法壇内
 邪魔小鬼不敢入壇前
 一心一意來教你
 不教師男到巳時
 十字路口頭掛大榜
 正是師男学法師
 正心正意來教你
 問你有心有□心
 你若有心我有意
 香壇撥法教師男
 三十六兵撥把你
 有行天下救人民
 有錢請我我也去
 無錢請我我也去
 □山請我我也去
 □海請我我也去
 若有十方人相請
 時時勇付付師男
 師男藏身去救病
 救得男安女也安
 小鬼不見師男面
 邪師不見師男身
 天兵得見好名字
 師男名字掛天門
 不圖香花圖□貴
 且圖名字大普傳
 宗祖家先魏魏坐
 下壇兵馬做証盟
 撥兵撥法完滿了

師に教えを請う、師に教えを請う
 師男に教えなかつたら誰に教えるのか
 兵を撥（おさ）め法を撥めて完了し
 私は師男に代わって神を條破（？）し
 私は師男に代わって鬼を條破する
 師男は法を学んで人民を救う
 教えることが必要なら香壇の中で教え
 私は師男に壇の中で教える
 お前ができるように教える、お前ができるように教える
 お前に教えて兵を撥め法を撥めさせ人民を救う
 救って男は安らかに女も安らかに
 師父は名があり私は声がある
 正しい師が教える、正しい師が教える
 正しい師が子に教え師男に教える
 師男は法を学んで師に随って転じ
 罡を行い法を学んで人民を救う
 名があれば法壇の内に入ることができる
 邪魔・小鬼は敢えて壇前に入らず
 一心一意に來たってお前に教える
 師男を教えずに巳む時に到れば
 十字路口頭に大榜を掛ける
 正にこれは師男が法師に学び
 正心正意來たってお前に教える
 お前に問う心があるか□心があるか
 お前がもし心があれば私には意がある
 香壇に法を撥めて師男に教え
 三十六兵はお前に撥め与える
 天下を行（めぐ）って人民を救う
 錢がある者が私を請えば私も行き
 錢がない者が私を請えば私も行く
 □山が私を請えば私も行き
 □海が私を請えば私も行く
 もし十方の人が相請うことがあれば
 時々勇んで付し師男に付す
 師男は藏身して行き病を救い
 救って男も安らかに女も安らかに
 小鬼は師男の面を見ず
 邪師は師男の身をみない
 天兵はよい名字を見ることを得て
 師男の名字は天門に掛かる
 香花を図らず□貴を図り
 且つ名字の大いに普く伝わることを図る
 宗祖・祖先は巍巍として座し
 下壇の兵馬は証盟をなす
 兵を撥め法を撥めることは完了し

時時有法付師男	時々法があれば師男に付す
日裡又發千兵馬	日のうちにまた千の兵馬を發し
夜裡又法万兵行	夜のうちにまた法によって万兵を行かせる
問在今朝人相請	今朝に人が相請えば
千兵万馬付師男	千の兵と万の馬を師男に付す
請師教 請師教	師に教えを請う、師に教えを請う
正師教男教好人	正しい師が男に教え好き人に教える
正男是好教好子	正しい男は好く好き子に教える
師男不教教何兒	師男が教えないならどんな兒に教えるのか
請師教 請師教	師に教えを請う、師に教えを請う
正是好男教好兒	まさにこれは好き男が好き兒に教える
正是好兒教好子	正にこれは好き兒が好き子に教える
師男不教教何人	師男が教えなければどんな人に教えるのか
師男多代新掛師男條破鬼	師男は多く新しい師男に代わって鬼を條破し
流郷過界救人民	故郷を流れ出て界を過ぎ人民を救う
師父多代新掛師男條破神	師父は多く新しい師男に代わって神を條破し
流郷過界救人丁	故郷を流れ出て界を過ぎ人丁を救う
行罡轉步去番番	罡を行い歩を転じて勇ましく行き
代兵去救十方人	兵に代わり十方の人を救いに行く

すなわちここでは、呪術において使役する兵を与え、呪術の基本である銅鑼や牛角や鈴などの叩き方、あるいは歩罡のやり方などを学んでいく。具体的な方法についてはここでは論じないが、牛角や鈴などは台湾の法師が行う呪術でも、必要な道具となっており、神々を招請したり祈願の内容を述べたりする呪文を唱える際には、先が三鈷のような形をした鐘を鳴らしながら唱え、区切れの時には牛角を吹く。そのため法師を養成する課程でも、これらの教授は基本的な部分となっている。上のテキストでは、新しく宗教者となる会首たちに、これらを正しく用いて人々を救うようにと教える内容が、繰り返し現れていることが分かる。

おわりに

この掛三燈儀礼の前半では、(1) はじめに伝授にあたって用いる椅子・衣・米・銭などを聖化する。(2) 煞鬼すなわち災いをなす 124 種類の煞を収める。これには次の蔵身とともに伝授を受ける会首たちを災いをなす煞鬼から保護する意味があり、また前世からのしがらみから解放し生まれ変わらせる意味もあるのであろう。台湾の法師たちの行う補運や、道士・法師の行う祭解でも、外部から災いをもたらす煞神にお引取りを願う部分が見られる。(3) そして蔵身では会首の身を変化させ、また鉄の城の中において保護する。イニシエーションの準備に相当するのであろう。(4) 次にこの儀礼の名前になっている三つの燈を設置する。これはそれぞれ祖先の燈、本命（自分自身）の燈、師父の燈を代表すると説明されているが、祖先は代々受け継がれてきた血の系統とまた宗教者としての系統とを、そして師父は伝授者を代表し、やはり中心になるのは自分自身の燈ということであろう。台湾の法師や道士の儀礼でも燈は自身の生命力の象徴とされる⁽⁴⁾。(5) 解厄は煞鬼を祓ったのと同様、過去からの厄すなわち悪い星の巡り合わせからの解放という意味で、台湾の法師・道士の補運でも、最後に必ず北斗経が誦誦される⁽⁵⁾。このようにして生まれ変わった会首たちに、宗教者としての基本的な功が伝授される、という順序になっているように見える。

後半の呪術の基本功の伝授については、ここでは儀礼テキストを紹介するに止めたが、テキストの内容からもこの伝授を受けた人たちが、どのような役割を果たすことを期待されていたかを察することができるように思われる。

註

- (1) 張勁松『藍山県瑶族伝統文化田野調査』第四章「度戒」には、「掛三燈」の簡単な記述が見られる。これについては『瑶族文化研究所通訊』第 1 号 p.29 から p.80 に日本語訳があり、「掛三燈」は p.56 - 57 に見られる。

- (2) たとえば台南の道士が行う禁壇の儀礼（儀礼が行われる壇を浄化・結界するために行われる）などにこの表現が登場する。（大淵忍爾『中国人の道教儀礼』道教篇、風響社、2005）p.126。
- (3) 『道藏提要』（中国社会科学出版社、1991）p.449。
- (4) 松本浩一「台南林法師の補運儀礼：紅頭法師の儀礼と文献の伝統」（『図書館情報大学研究報告』第18巻1号、1999）p.14、松本浩一「台湾北部紅頭道士の補運」（『アジア文化の思想と儀礼』、春秋社、2005）p.505 - 506。
- (5) 同上「台南林法師の補運儀礼」p.23、同上「台湾北部紅頭道士の補運」p.510 - 512。

ユーミエンの儀礼の研究における課題： 儀礼の意味と伝承、不易と変差

東京学芸大学教育学部教授 ヤオ族文化研究所客員教授

吉野 晃

ユーミエンの分布

ユーミエンは、中国南部、ベトナム、ラオス、タイに主に分布する。この広い分布は、焼畑耕作に伴う移住によってもたらされた。タイに在住するユーミエンの家主は祖先の墓の位置を漢字で記録した文書を所持する。その文書を〈祖圖〉tsou touといい、ある人の〈祖圖〉を見ると、彼の九世代にわたる祖先の墓は世代が下るにつれ、広西、雲南、ラオスの各地へと場所を変えてきた。夫婦であっても同じ村に墓がある例は僅かで、大半の祖先の墓は異なる村にある。ユーミエンの祖先がいかに頻りに移住を繰り返してきたかが、窺われる。この文書を見れば、祖先の移住の大まかな経路がこの文書によって分かるのである。筆者はかつて、タイのある村の全世帯の世帯主たちの移住歴を調査した。それによれば、焼畑耕作に伴う移住の頻度は、個人によってかなりの幅があり、一概に何年に一度移住すると言えるものではなかった。一つの村にいる時間が短い人では5年ほどから長い人では40年にも及んだ。一生の間に数回居住地を替えた人もいたのである。

このような、広い分布を持つユーミエンであるが、その儀礼の大枠は湖南省藍山県でもタイ北部の山地でも同様である。ユーミエンの宗教儀礼体系は度戒だけでなく他の様々な儀礼が含まれており、複雑を極める。このような膨大な知識がタイでも、藍山県でも、長年にわたって伝承されてきた。特に、実質的な儀礼期間だけでも十日ある度戒儀礼においては、膨大な量の経文を読誦し、無数の儀礼文書を用意する。儀礼の詳細な次第を心得ていることは当然であるが、儀礼中の祭司の所作も甚だ多様である。このような儀礼知識の量は想像を超える大きさになる。しかもそれを伝えてきたのは、専門家としての宗教職能者ではない。普段は農業などに従事しながら、必要に応じて祭司としての職能を果たす兼業宗教職能者である。この体制は、中国でもタイでも同様である。日々の仕事の傍らで儀礼知識を学ぶことによって、道教的な宗教儀礼知識の総体を、ユーミエンは広い地域にわたり維持・伝承してきた。その複雑にして大量の宗教儀礼知識は、人類の文化財の一つとも言っても過言ではない。まず、このような膨大な宗教儀礼知識の総体を、経典、文書、言説、儀礼実践について明らかにしてゆくことが、我々の第一の課題である。そして、その豊富な儀礼知識が日々の生活の中でどのように伝承さ

れてきたかの詳細についても探究する必要がある。

ユーミエンは正一派系統の道教を受容し、それをユーミエン独自の形に変え、藍山県でもタイでも現在まで伝承してきた。道教研究からみれば、道教は決して漢族だけのものではなく、広く少数民族も巻き込んだ宗教運動でもあった。その一部が、他の社会では滅多に見られない規模と独自の形式を以てユーミエンに伝承されてきたことは、道教研究の上でも貴重な資料となる。

不易

さらに注目すべきは、中国のユーミエンとタイのユーミエンとがそれぞれ持っている儀礼知識が、相当程度相同であることである。これは、一つには、漢字経典がある故に、読誦するテキストが保持されやすいことによる。私は、タイで1996年に度戒の一部を観る機会を得、「過勒床」「上刀山」「遊郷」「合歡飯」に相当する部分を観た。その時の記憶でいえば、タイと藍山県の度戒儀礼の大枠は相同であった。何よりも、「三清」を首座とした、玉皇や聖主、海嶺などの神々の画像「大堂画」を儀礼場に掛け、これらの神々を儀礼の場に勧請する形式は同じである。また、榜文の書き方もほぼ同じであった。刀の梯子を登る「上刀山」も、同じ形の設備で、ほぼ同じ儀礼が行われていた。すなわち、神の画像として伝わってきたものや、文書に規定されて伝わってきたものは、遠く藍山県とタイと離れていても、同じ形で伝承されているわけである。

儀礼実践の変差

一方、儀礼所作などの身体表現に関わる事項は、それが口頭コミュニケーションや身体コミュニケーションによって伝承されるため、変差を生じやすいようである。例えば、「過勒床」儀礼には、死と再生というモチーフがあるが、その表現の仕方は藍山県とタイとでは大きく違う。藍山県では受礼者一人一人がトランスに入り、そこから覚醒することで再生を果たす。一方、タイでは「神頭」(仮面)をかぶり集団で横臥することで、死を擬していた。このように、「どのようにおこなうか」という儀礼の実践においては、違いが見られる。儀礼の細かい程序や具体的な所作の型は、口頭コミュニケーションや身体コミュニケーションによって伝承される知識であって、日々の儀礼活動そのものによつての

み伝承保持されるものである。このレベルにおいては、広い地域に分布するユーミエンの間で相違が見られる。口頭・身体コミュニケーションによって伝承される知識は、個人の解釈や記憶の変容など、変差を生じる要因を多く伴っているからである。

儀礼名命名ルールの変差

儀礼の構成と規定について言えば、「師男」・「会首」が得る儀礼名についても明確な差がある。タイでも藍山県でも、男性が「掛燈」という儀礼を経ると、当該男性は「姓+法+個人字」（例：馮法連）、その妻は「姓+氏者」（例：趙氏者）という儀礼名を得る。男の儀礼名を「法名」faat bua、女の儀礼名を「氏者名」si-tsia bua という。しかし、その後が異なる。タイでは、「度戒」tou sai と、その次の「加職」jaa-tsaeq の二つの儀礼をまとめて行う。それ故にこの「度戒」「加職」をまとめて「度戒」と言及することが多い。厳密に言えば、「度戒」だけ受礼したのでは、新たな儀礼名は得られない。「加職」も併せて受礼することで、男性は「姓+個人字+番号+郎」（例：鄧貴三郎）、その妻は「姓+氏+番号+娘」（盤氏四娘）という儀礼名を得る。この男の儀礼名を「郎名」long bua、女の儀礼名を「娘名」nyang bua と総称する。タイでは、加職を受礼することで、夫婦ともに新たな儀礼名を得るのであるが、藍山県では、事情が異なる。すなわち、女性は盤氏四娘といった娘名を得られるが、男子は掛燈の時に得た法名のままである。経緯を推論すれば、タイに見られる対称的な命名ルールであったものが、何らかの要因で、男子の命名に関するルールが欠落し、娘名のみ命名する非対称的ルールに変化したと考えるのが、蓋然性が高い。なぜこうした非対称的な命名ルールが生じたかの原因はにわかには断じがたいが、隣接地域における比較検討で明らかにして行けよう。

「加職」の位置づけの変差

また、「加職」は、タイでは生きている受礼者が通過する儀礼であり、受礼社自身の儀礼ランクが上がる。しかし、藍山県では、加職は「補充」と並んで祖先のランクを上げるための儀礼であり、度戒の時に併行される。この場合、生きている受礼者が行うのはあくまでも度戒だけである。祖先の儀礼ランクを上げる儀礼は、タイにおいてもあるが、加職とは別の儀礼で「加太」jaa-thai という。加太では、祖先の儀礼ランクが加職よりも上に上がり、儀礼名は「太+個人字+番号+郎」という、郎名の姓の部分に「太」に替えたものが命名される（例：太龍一郎）。逆に姓の名乗りはなくなる。このように、同じ「加職」という名称の儀礼を伝承しながら、一方は生者のための儀礼、もう一方は祖

先のための儀礼と、位置づけが大きく異なっているのである。こうした違いがどのようにして発生したかも大きな課題である。このためには、「加職」関係の文献、文書を詳細に検討する作業が必要であろう。

儀礼組織の変差

儀礼の組織について言えば、タイでは同姓の父系親族が集団で度戒を受ける「師男」となるのに対して、藍山県では、同じ村の異なった姓の人たちが度戒を受ける「会首」となっていた。タイの度戒では、父系親族で度戒を受けるため、かなり年少の子供でも同じ父系親族として儀礼に参加していた。すなわち、タイでは親族組織が儀礼を主催するのに対し、藍山県では地縁組織が儀礼を主催している。藍山県の「度戒」では、12組の会首夫婦が受礼していたが、タイの「度戒」「加職」は、50名以上の師男がいた。既婚者の妻も含めれば、70～80名は受礼していたことになる。タイの場合、この数十名の男子はすべて父系親族である。

この儀礼組織上の差異がどこから生じたかは、まだ詳らかにできないが、日常生活における親族組織と地縁組織のあり方の違いが影響しているのではないかと推測される。

このように、経典等の文書で規定されていない、口頭コミュニケーションと身体コミュニケーションによって伝承されてきた部分においては、儀礼の実践、儀礼の組織、祭司の服装など、多くの差異が観察されるのである。藍山県のユーミエンの祖先と、タイのユーミエンの祖先が異なる移動先へ遷徙して長い時間が経っている。その中で、このような変差が生じるのは当然であるとしても、一方で、先に述べたように、変わらない不易の部分も見られる。度戒に限らず、他の儀礼についても同様な不易と差異とが観察できらるであろう。度戒を含むユーミエンの儀礼の地域間比較を行うことで、これらの儀礼における不易と変差の両側面とそれを生じさせた要因を明らかにすることが、我々の研究のもう一つの課題である。

（2009年8月6日、第1回湖南省伝統文化研討会〔中国湖南省長沙市〕における発表内容を基にして、大幅な削除・加筆修正を施した）

湖南省藍山県ヤオ族传统文化の諸相

— 馮榮軍氏からの聞き取り内容 —

筑波大学人文社会科学研究科教授 ヤオ族文化研究所客員教授

丸山 宏

2009年8月5日から8月11日まで、中国湖南省長沙市韶山北路の省委招待所において、藍山県の馮榮軍氏から聞き取りを行うことができた。本稿はその際の内容を提示するものである。馮榮軍氏は、2008年11月26日から12月9日まで藍山県で行われた度戒儀礼において書表師をつとめたことから分かるように、ヤオ族の传统文化に詳しい人である。この聞き取りにおいては、馮榮軍氏から本人のライフヒストリーや先祖のこと、さらに儀礼や文書に関するさまざまな事柄を中心に語っていただいた。この聞き取りで初めて詳しく判明することもかなり含まれており、データとして非常に貴重であると考えられる。

聞き取りは、最初の2日間ほどは、丸山宏、松本浩一氏、森由利亜氏の3人によって行われたが、その後は松本浩一氏が儀礼程序の聞き取りグループに参加されたので、主に丸山と森由利亜氏の2人によって行われた。用いられた言語は中国語（普通話）であった。この記録は、丸山の筆記から、必ずしも直訳ではないが、しかしできる限り意味を変えずに和訳した。また相互に関係ある内容は、聞き取りの際の実際の時系列に従わず、まとめて読めるように統合し整理する操作を加えている。検索の便を考慮して内容にしたがって適宜に番号と見出し項目名を付した。今後の研究、特に儀礼および文書の整理・分析にとって基礎データの部分的な提供となることを期している。語っていた内容の把握が不十分なところもあるが、継続して調べて訂正し充実させていきたいと考えており、そのためのたたき台としたい。

(1) 馮榮軍氏本人および家族について

馮榮軍氏は、湘蘭村で1951年7月9日に生まれた。58歳（2009年8月において）である。兎年である。馮榮軍氏本人は1989年に度戒を受けた。

父は馮天昌（法名は法壇）といい、庚申の年（1920年）12月生まれ。父は馮榮軍氏が11歳の時に亡くなった。母は趙伍妹（趙氏伍娘）という。祖父は、馮明清（法名は法有）といい、祖母は盤氏一娘である。

父と母に7人の子があり、今は3人が生き残っている。本人の他に、兄、62歳、馮榮勝という名前であり、1989年に度戒した。また姐があり、66歳である。1人の兄が5歳以前に亡くなった。2人の妹が2、3歳で亡くなった。

昔は条件が悪くて、草藁くらいしかなかった。1人の妹が、13歳の時に洪水で流されて亡くなった。

家は水稻耕作をしていた。50年代に中農に分類された。海拔は400メートルくらいで、2期作ができる。1980年代頃までは焼き畑のやり方での耕作もできたという。

2008年12月の度戒において兄の馮榮勝は証明師を担当した。1989年の度戒の時には、父も陰平度した。

自分の3代前のこととして、祖父の父（曾祖父）は、馮進興（法名は法保）といい、この人は法師であって、書表師もできた。曾祖父が持っていた経書や神画は失伝してしまった。家には鉄の剣が残っているだけである。曾祖父は人柄のよい人で、他人が遠くから歩いているいろいろなものを持って来てくれるような人であり、この代に20畝から30畝の土地を得ることになった。父は大団源（湘蘭村の地名）から、今の住所に引っ越して来た。それは1958年か1959年頃、高級合作社の時であった。

馮榮軍氏本人のことについて、70年代、1977年頃に永州師範学院の専科で3年間学んだ。数学が得意で、中学の数学の教師をしたことがあるが、自宅から遠くて通えずに、村の小学校にもどった。つまり匯源の小学に勤めた。自分の息子は馮秀海（法名は法雲）という。

(2) 家族の遷徙および家先単の書き方について

自分の家は現地の村に13代前に来たと言われている。

知っているところでは、この地域に広東の樂昌府から遷って来たという伝説がある。宋代に広東の樂昌から移動して、まず寧遠県・新田県の境界辺りに遷り、そこには貴堂宝寨（立派な家と村）があって、そこからさらにまた寧遠県・藍山県に来たという。

家先単（祖先の名簿、家譜）は、最低限4代前まで書いてあり、しかも本名ではなくて法名で記してありさえすれば、（度戒儀礼で使うには）十分に役に立つ。何十代も書いたものを持っている人はおらず、大房（長男の家系）ならば少し長く書くことがある。

(3) 法名の取り方と郎号について

法名は、卦（ポエにあたる）を3回する。まず人が先に陰、陽、聖のどれを出したいと祈ってから、卦を投げて同じものが出ればよい。1回ずつ別の卦でもいい。とにか

く3回、思った通りに卦が出たらよい。これは神の前で同意を得ることを意味する。法名は、三清が同意する必要がある。法名は、度戒に限らず、結婚の時や還願（掛三灯がある）の時などにも取ることができる。よって、法名だけでは、その人の経た儀礼が何だったのかは分らない。

同一の家戸の中で法名の下の一文字が同じであってはならない。別の家戸とならば同じでもよい。

法名には法某というのがあるが、某郎という言い方は湘蘭村では聞いたことがない。問神の時に、某郎という言い方で人を呼んだり、人を特定したりする例はある。

（4）度戒の仕組みと基本費用について

普通は本人が度戒（平度）すると、父は加職し、祖父は補充する。しかし、本人が度戒（平度）する際に、父がもしまだ度戒（平度）していなければ、ここで初めて父も平度（父が亡くなっていれば陰平度）する。本人が平度、父が（陰）平度の場合ならば、祖父はすぐに補充（補職）することはせず、祖父は加職するのが普通である。

本人の度戒の費用は2万人民元（以下、元と略す）くらいかかると、父の分は1万円くらいであるから、これだけで全部で3万円かかる。

兄弟は別々の家庭だから別々に度戒できる。兄は度戒をしたい、父の分もお金を出すというので、一緒に行った（1989年度戒儀礼に際して、馮榮軍氏本人は平度したが、一方で兄の平度、兄の経費負担による父の陰平度も同時に行われた）。

陰平度だけ1人分の費用であれば、200元（ママ）くらいである。これは師父の費用・食費に充当する程度である。夫を陰平度して、その陽妻（存命している妻）がいる場合には、2万円ではなくて1万円くらいでよい。しかし妻が亡くなっていて、男性の方、つまり夫が生きていて、夫が会首になる場合には、そのままの2万円の費用になる。（本項目は、下文（31）の項目と関連が深いので参照されたい）

（5）榜文などに表記される地方神の廟について

本部というのは当地のことである。

盤王廟は、春夏秋冬に祭祀があり、神を祀ると瘟来不染（流行病が来たとしても罹らない）という。瘟は陽州（揚州）に送り返す。盤王廟は、8歳の頃、つまり1959年か1960年頃には共産主義のために湘源の学校になっていたのを、1967年に破壊してしまった。盤王の像は自分の記憶にない。盤王廟は、おそらく明清の頃には大きかったであろう。門の奥に2列の殿（前殿、後殿）があった。

紫雲というのは知らない。

烏鴉廟は、伝説では、今の郷の小学校の教室のところ

に天上からカラスの形をした石が降って来た。これを小さな木の祠に祀り、毎月の初一、十五に祀ると、とても靈験があった。特にトウモロコシに対するカラスの被害がなくなった。しかし、この石は1968年に道路工事に使ってしまったという。

六郎廟は、3カ所ある。総廟は金（荊）竹坪の1つの廟、あと本村に2つの廟がある。四季に3つの廟の範囲ごとに六郎神を祀り、家々を1軒ずつ練り歩き、家ごとに家先（祖先）に知らせる。これは送瘟神（瘟神を送り出す活動）である。大団源の六郎廟でも行っていた。茶、鍋底の灰（火炉の灰）、鶏の羽根などを入れた船を造るし、草龍もある。戸ごとに1人を派遣して瘟神送りを行う。124種類の傷神（いろいろな非常死をした者たち）を船に乗せて陽州（揚州）に送り出すという目的である。これは春と冬に今でも行っている。趙金仔氏（2008年の度戒儀礼で主醮師をつとめた）の家の前、500メートルくらいのところ、丸い石をご神体にした小さい廟がある。ここには大きな樹もある。戸ごとに20元ほど集金して、6つの村で回り番で瘟神送りを行っている。ただし、近年できなかつたこともある。当番の人たちがやらない場合が出て来たのである。この小廟は、明末からあるという。

（6）度戒儀礼を行うことの困難について

馮榮軍氏は、還家願の儀礼を行ったことがあるが、これは自分で決めて自分で行った。しかし度戒というのは、このようにはできず、やりにくいものである。最近、人づてに聞いたところでは、（2008年の度戒の際の）引度師（盤庚華氏）に依頼をして、（藍山県のとなりの）寧遠県では、常設の儀礼場を作って、そこで度戒できるようにしたいという計画の話が持ち上がっているという。

（7）馮榮軍氏の儀礼知識に対する学習過程と「大道場」について

馮榮軍氏は、法師（師公ともいう）になるための基礎を、伯父（父の兄）である馮天富から学習した。小学校卒業の頃（12歳とすれば1962年頃）からである。この伯父は、自分自身は度戒をしていないが、師公の伝統を習うべきであると自分に勧めた。この伯父の法剣はまだ自宅に持っている。趙金仔氏も、彼の伯父にあたる趙子鳳（法名は法靈）という人に師公を学んだ。馮榮軍氏は、1960年代に、17歳から18歳で村の中で学校を出た人物として優秀だった。伯父からは、時代のせいもあり、ひそかに隠れながら、法師のことを学んだ。その一方で、文革の時（1968年）には、村においてリーダー的な役割もさせられたけれども、法師のことも同時にやっていたので、かえって人から信用された。

特に学んだのは「大道場」の儀礼であり、これは度戒を受けた人のための死者儀礼である。この「大道場」以外に、度戒していない人の場合の葬送儀礼があり、「下界道場」という言葉がある。馮栄軍氏は、「大道場」を実際に10回くらいは経験している。「大道場」の儀礼で使う文書は、人のためのものを含めて50回くらいは書いたことがある。「大道場」においても度戒のように掛吊（十行八句）があり、東南中西北に（対聯などを）かける。

「大道場」においては度戒の時の印（太上老君の印）と陽據（度戒で焚いた陰據と対になっている文書）を使用する。すなわちこれらを死者の胸の上ののせるのである。

（8）道場疏表について

馮栄軍氏は、何も見ずに次のような「大道場」に用いる疏表を書き出した。これは、度戒を受けた人にとって人生最後の文書であるという。

1. 請聖大疏 2. 司命文牒 3. 収屍文牒 4. 度亡文牒 5. 修路文牒 6. 超度行程文牒 7. 超度行程文引 8. 地頭文牒 9. 地頭文引 10. 地契文牒 11. 早晨文牒 12. 早晨文引（11と12は、安葬の後に早朝において路上で家族が焚くものである） 13. 血湖文牒（女性のみ使用）

以上の他に、銭関と赦文がある。赦文は非常に長文である。

法事場には、黄旛、白旛、黄榜、欄門白榜、十行八句（掛吊用）がある。死者儀礼の法場の対聯には、「水流東海難回頭、日落西山容易転」（水は東の海に流れ去り、振り返るのはむつかしく、日は西の山に沈み、時の経つのは速い）というのがある。

（9）馮栄軍氏のヤオ族伝統文化研究への参与と梅山教調査について

馮栄軍氏は、1989年に度戒したが、その後、1991年の6月21日に車の事故に遭って、肋骨を全部骨折し、頭にも傷を負った。2005年までの14年間、仕事ができずに療養していた時期があった。こうした中で、自分のヤオ族伝統文化研究への参与は、張勁松先生との関係が1つの契機になった。つまり張先生を手伝って、道場儀礼と梅山儀礼の部分を原稿として作成した（最終的な成果は、張勁松・趙群・馮栄軍 2002『藍山県瑶族伝統文化田野調査』岳麓書社、第五章「道場科儀」259-382頁、第六章「焼尸巫術」372-382頁、第七章「狩獵法術」383-405頁）。その当時は、寧遠県まで杖をつきながら歩いて経書を見せてもらったり借りたりしに行った。当時、趙群氏も張先生を手伝ったが、彼は過山瑶ではなくて平山瑶なので、充実した資料を集めるのに比較的困難だった。自分自身は、よく

調べることができたとし、多くの人々から協力を得ることもできた。

1995年から1996年頃に、非常に苦勞して梅山教を調べたことがある。梅山壇のことは、この儀礼を行うことのできる法師たちが教えてくれないので、とても工夫が必要だった。法師たちに、（梅山壇の儀礼を）できないし、知らないならば、あなたたちは人を騙しているような者ではないかと主張したら、後から、たった1人だけ秘密を公開してくれたのである。

（10）法師の一般的な学習階梯について

一般論として、法師になるために、還家願などの機会に、徒弟として舞踏を学習する。徒弟には童子と師童がある。（何度も行われる）請聖の儀礼では、経書テキストが仮にないとしても、行うことはほぼ毎回同じことである。学ぶ階梯は、1. 舞踏。童子がかならず行うことである。2. 経書。経文はやオ音で読み、音の変化などを学ぶ。文書は、ヤオ語の音でなく当地の漢語の音で読む。3. 路。この路というのは、儀礼の順序を意味する。もし路が分らないと儀礼をすることができないが、路が分っていれば大丈夫である。3年から5年で出師する（一人前になり独立できる）。

（11）陰陽二師について

陰陽二師というのは、陰師と陽師のことであり、度戒の時の老師を指す。

（12）馮栄軍氏による灯の儀礼および試練の儀礼の意味づけについて

ヤオ族の宗教では光が重要である。上光とか賞光という言葉もある。結婚では灯を使う。男と女が同じ油量（茶油を使う）で同じ光の強さにし、灯に36拝する。

家を代々つなぐために、三台灯をする。これは接宗であり、光で代々を伝える。祖先の力とか生命の力を光によってあらわす。十二灯は族類全体のことである。三灯と十二灯はかならず行わなければならない。

度水槽、上刀山、過勒床をなぜするのかは、ヤオ族の経歴、遷移と関係するという。過勒床で、陰橋を棍で衝くのは、神に知らせるためであり、師父が会首を跨ぐのは、跨ぐ時に、臥している弟子に師の全ての知識や体験を伝える意味がある。

（13）盤古について

漢族は盤古について天地を開くことと関連づけ、龍とも関連させるが、ヤオ族は犬、3人の帝、部落と結びつける。公主が、待ちきれなくて、49日を経る前に、方筒をあけると、

犬はまだ全部人に変わっておらず、耳だけは犬のままだったので、それを隠すためにヤオ族男性は頭巾を捲いているという伝説がある。ヤオ族には12姓があり、それに1つ加えて鄭姓があるという。

(14) 戦前・戦間期における日本人と藍山県について

日本軍が藍山県の付近を通ったことについて、荆竹郷、大橋郷の方の中学で聞いたのは、当時、皆が避難して逃げたのに、武術のできる人は逃げなかったという説がある。実際にこの地域に与えた影響については知らない。また1930年代から1940年代に日本人が来て茶油、茶餅を生産して、日本に売ったという。

(15) 過去の儀礼と現在の儀礼の比較、依頼者と法師の関係および文書作成の苦労について

2008年の度戒の儀礼は、20年前の度戒では会首の方が儀礼を法師に依頼してきたのに、法師の側が村の人に会首になるように依頼する状況があった。また馮榮軍氏は、度戒の文書を、2008年の時には初めて作ったので、非常に苦労した。寒さもあり、人々は自分を書類を書く機械のように考えていた（書類作成を要求するが作成に協力できる人が現われない状況）ようで、慶陽疏はすぐに探せず見つけるのに時間がかかったし、青詞籠に入れる文書の完成には1晩2日もかかった。馮榮軍氏は、2008年12月の度戒儀礼のために、同年7月中旬から文書の準備を始めた。作成したのは全部で300件ほどになった。なお、2008年12月の度戒儀礼の際に、何人かの会首から道場で使う文書の作成を依頼されたが、作成したにもかかわらず熱心に引き取りに来なかったのが不満に感じている。

(16) 現在まで伝承されなかった儀礼、火に関する儀礼について

例えば、昔は火の犁を口にくわえ、また火の靴をはく儀礼があった。なお、昔の法師は、葬礼において屍を焼いても、棺は焼けないというような術も持っており、見たことがある。

(17) 翻刀山について

翻刀山のやり方について、皆分っていなかったのが、(翻って行く人を) ささえなかったために、1989年の度戒では、馮榮軍氏は、(落下して) 頭を切って怪我をして出血してしまった。また、翻刀山の儀礼で4時間も覚醒しない人が出て、しばらくして死んでしまった。この人自身は法師でもあったが、(こうなってしまった理由としては) 結局、(この人の) 男女関係に問題があったという。

(18) 過勤床について

馮榮軍氏は、(1989年に) 自分が過勤床した際に、銅鑼の音で眠ってしまう、とても眠くて、歩けなく、立てなくなるという。(過勤床の際に昏睡した人を) 覚醒させる時には、口から体温ぐらいの暖かさを茶を体にたくさん注ぎ込む。法師が陰橋を棍で突くのは神に知らせることを意味する。法師が(昏睡している会首の体の) 上を跨ぎこえるのは伝度すること、跨ぐことで法師の知っていることを、師の光を、弟子にわたす意味がある。

(19) 賀星の儀礼の意味について

賀星の儀礼には、夫婦の登記をする意味がある。この時に賄賂を法師に払って、別の人の妻を自分とともに登記することがあり、このようにすると、その別人は妻を失うことになるといわれる。過去においてこのような行為は多くあったという。

(20) 開齋について

1989年の度戒の時は、会首が鶏を1羽まるごと食べた。主厨(儀礼の間の食事準備・調理の責任者)が、鶏の各部位の意味を説明してくれた。当時は経済状態もよくなかったし、本当に腹が減っていた。

(21) 度戒儀礼に用いる文書の程序について

(この内容は、2009年8月の調査において書表師の馮榮軍さんから説明を受けるべき最重要課題の1つであった。森由利亜教授と丸山による馮榮軍氏からの聞き取り内容をもとに作成した文書程序の一覧表は、この聞き取り資料とは別に提示する。(下記の平度籠、加職籠、補充籠のそれぞれ9種、4種、2種の文書について、名称等は当該一覧表を参照)

(22) 第一会首の青詞籠に入れるべき文書の例とその説明について

会首本人は陽平度、兄は陰平度、父は陰平度を行う。父はまだ平度されていなかったのが、いきなり加職することはできず、陰平度を行うことになる。一番近い先祖で加職できるのは祖父、補充できるのは曾祖父になるというケースである。

第一に、会首本人は以下の(1)(2)(3)の文書が必要である。

(1) 会首本人を陽中平度する9種の文書(9種、12件)を作る。そこには会首の伝度新承弟子男陰陽二據(陰據1件と陽據1件)および妻の伝度新承弟子女陰陽

二據（陰據 1 件と陽據 1 件）を含む。会首本人の平度籠である。

(2) 祖父を陰中加職する 4 種の文書（4 種、7 件）を作る。そこには祖父の男加職陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）および祖母の女加職陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）を含む。会首本人が祖父の世代のために作る加職籠である。

(3) 曾祖父を陰中補充する 2 種（2 種、3 件）の文書を作る。そこには曾祖父の男補充誥文（誥文は陰據 1 件と陽據 1 件からなる）および曾祖母の女補充誥文（誥文は陰據 1 件と陽據 1 件からなる）を含む。会首本人が曾祖父の世代のために作る補充籠である。

第二に、会首の兄を陰平度する文書としては以下の (4)(5)(6) が必要である。なお (5)(6) は、会首本人とは別に、兄自身が先祖のために作る文書の意味がある。

(4) 兄を陰中平度する 9 種の文書（9 種、12 件）を作る。そこには兄の伝度新承弟子男陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）および兄の妻の伝度新承弟子女陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）を含む。兄の平度籠である。

(5) 兄の名義で上記の (2) と同じ文書を全て作る。兄が祖父の世代のために作る加職籠である。

(6) 兄の名義で上記の (3) と同じ文書を全て作る。兄が曾祖父の世代のために作る補充籠である。

第三に、会首の父を陰平度するため以下の (7)(8)(9) が必要である。父としてはまだ平度されていなかったもので、今回は会首である息子の平度と同時に、息子によって陰中平度をされることになるが、この陰中平度において祖父（父にとっていえば自分の父に当たる）を加職し、曾祖父（父にとっていえば自分の祖父に当たる）を補充する必要がある。

(7) 父を陰中平度する 9 種の文書（9 種、12 件）を作る。そこには父の伝度新承弟子男陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）および母の伝度新承弟子女陰陽二據（陰據 1 件と陽據 1 件）を含む。父の平度籠である。

(8) 父の名義で上記の (2) と同じ文書を全て作る。父が祖父の世代のために作る加職籠である。

(9) 父の名義で上記の (3) と同じ文書を全て作る。父が曾祖父の世代のために作る補充籠である。

なお、この事例では会首の兄の陰平度の費用 300 元は、会首本人ではなく、会首の姪子（兄の子）が負担している。

（2 3）印の押し方と朱筆の施し方について

合同印は、印を左に斜めにして、印の角を（印を押すべき文字の上に）合わせて、（折った紙の両側に印影が出

るように）割り印になるように押す。すなわち（文書の文面の）「合同」という文字が書いてあるところに押印する。

また印は「蓋州不蓋県（某州の某字のところに押印し、某県の某字のところに押印しない）」、「蓋年不蓋月（某年の某字のところに押印し、某月の某字のところに押印しない）」という規則がある。

すでに亡くなっている陰中の人の名前、たとえば陰平度する人の名前は朱色の枠で囲む。一方、陽中の人の名前は、左側に丸く円形の点を打つ。また文書の中の「奉真」という字が書かれるが、その「奉」字を朱筆で丸く囲む。

（2 4）2008 年 12 月の度戒儀礼における加職の人がすでに平度を受けたか否かの経歴について

第一会首の場合（補充、加職、平度の順に男性側の姓、法名、会首から見た続柄を列記してから、馮榮軍氏による平度経歴の確認内容を付記する。以下同じ）

補充 馮法G（曾祖父） 加職 馮法L（祖父） 陰平度 馮法W（父） 陰平度 馮法L（兄、経費は姪子が負担） 陽平度 馮法Y（会首本人）

父は平度していなかったもので、今回、会首である息子と同時に陰平度される。

第二会首の場合

補充 趙法B（祖父） 加職 趙法T（父） 陽平度 趙法Y（会首本人）

すでに 1995 年に会首の姐が度戒して、会首の父は陰平度され、祖父も加職された経歴がある。

第三会首の場合

補充 李法L（祖父） 加職 李法X（父） 陽平度 李法C（会首本人）

会首は入り婿であり、この父は妻の父であり、すでに 1995 年に陰平度を受けた経歴がある。

第四会首の場合

補充 趙法M（祖父） 加職 趙法C（父） 陽平度 趙法W（会首本人）

父は早い時期に陽平度した経歴がある。

第五会首の場合

補充 趙法T（大曾祖父） 加職 趙法W（曾祖父） 陰平度 趙法G（祖父） 陰平度 趙法Y（父） 陽平度 趙法Y（会首本人）

祖父、父とも平度しておらず、今回、陰平度する。母（父の妻）は存命中であり、いわゆる陽妻であって、父の硃詞旗を家に持ち帰る。この父の硃詞旗および父の火牌は、数年したら火化する。

第六会首の場合

補充 趙法G（曾祖父） 加職 趙法Y（祖父） 陰平

度 趙法X (父) 陽平度 趙法G (会首本人)

父は平度していなかったため、加職でなく陰平度である。

第七会首の場合

補充 盤法T (祖父) 加職 盤法G (父) 陽平度
盤法T (会首本人)

馮榮軍氏は会首の父が何時平度したのか不詳である。

第八会首の場合

補充 馮法B (祖父) 加職 馮法Y (父) 陽平度
馮法Q (会首本人)

会首の父は1989年に度戒(平度)している。なお会首の母は存命中であり、いわゆる陽妻である。

第九会首の場合

補充 馮法F (大會祖父) 加職 馮法Y (曾祖父)
陰平度 馮法Q (祖父) 陰平度 馮法L (父) 陽平度
馮法W (会首本人)

会首の母、父の妻は、存命中であり、いわゆる陽妻である。

第十会首の場合

補充 盤法M (祖父) 加職 盤法S (父) 陽平度
盤法L (会首本人)

会首の父が何時平度したか不詳。会首には陰妻と陽妻がある。陰妻の陰陽二據は両方とも焼く。陰妻には儀礼で硃詞旗を使うが、上刀山などはさせず、印は焼いてしまう。

第十一会首の場合

補充 趙法Z (祖父) 加職 趙法X (父) 陽平度
趙法B (会首本人)

会首の父は1995年にすでに陰平度している。すなわち会首の兄が陽平度した時に、父を陰平度した経歴がある。

第十二会首の場合

補充 盤法X (大會祖父) 加職 盤SG (曾祖父)
陰平度 趙法Y (祖父) 陰平度 趙法B (父) 陽平度
趙法Q (会首本人)

会首の父はもと盤姓であり荆竹坪の出身で婿入りして来た人であるという。この第十二会首の家族構成や経歴は複雑でさらに検討を要する。

陽中にせよ、陰中にせよ、必ず平度、加職、補充の順で、しかも前の世代を超えることはない。

(25) 三戒法師について

三戒法師の三戒には、上、中、下がある。下戒は人が生まれて下界に来て、父母が与えた戒律であり、これには儀式はない。内容は、喧嘩するなかれ、などである。中戒は掛三灯の際に法師が弟子に与えるものである。宗教的な内容があるが、三灯が終わったら口述で行う。発角(角笛を吹いて神に知らせること)はしない。上戒は度戒において掛十二灯をすませて、最後に主醮師の宣読戒文があ

る。机のこちら側で主醮師が戒文を宣読し、引度師が発角する。そして机の反対側で会首が跪座する。三十六戒や七十二戒がある。為人、食事、草木を伐ることなどについての戒律も多い。1つの戒を宣すると、牛角を鳴らし、会首がおごそかに叩頭する。これは1989年の度戒では口述で行った。主醮師が玉皇の代理で戒を読むので、1つ読むたびに牛角の音で玉皇にきちんと知らせることになっている。

(26) 硃詞旗および不在の人をあらわす道具立てについて

硃詞旗というのは、硃詞を作ってあげる人の分の旗である。もし、陽中の人でも儀礼に来られない人、または儀礼の途中から参加できなくなった人があれば、杖に帽子と法師衣を引っ掛けて、その人の代わりにする。例えば、1989年の翻刀山で倒れた人があったが、倒れた後は、このやり方で行った。

死者儀礼(いわゆる道場)の引魂旗は、硃詞旗と似ているが、文句が別である。赤色の旗で、死者の生庚(誕生の八字)を入れる他、「昨天見真容、今日成古人」(昨日は生きている姿を見たが、今日は昔の人になってしまった)という。

(27) 書表書について

馮榮軍氏は書表書(神に発出する文書の例文集)を持っている人を寧遠県まで歩いて訪ね、探した経験がある。1991年から2005年まで、交通事故の後で療養中に、特に1992年から1993年頃に、まだ杖をついていた時である。張勁松先生、趙群氏、自分の3人であちらこちらに経書を探していた。度戒の本を何とか得たいと思っていた。今回2008年の度戒儀礼で引度師をつとめた盤庚発氏の父である盤日古氏のところに行って、そこで度戒の書表書を見せてもらい、ペンで縦書きにして写すことができた(E-1)。これは自分が1晩で夜明けまでに写し終る勢いで写したのであった。また趙群さんが盤喜古氏(総壇師)の本を、ペンで横書きに写した(E-2)。升職位の部分(どの省のどの府の官という職位の一覧)がなくて困っていたが、盤喜古氏の持っている本の中に見つけた(A-15)。今回2008年の度戒では、主にペン書きの上記2つの本を参照している。上本(A-5)は趙金仔氏の持っている本であり、下本(A-15)というのは、盤喜古氏の持っている本である。(A-3)は盤法銀氏の本であり、今回は参照していない。(A-4)は、馮榮軍氏の表哥の趙土生氏から譲ってもらったもので、この人は法師になるための学習をしており、本をたくさん持っているけれども、儀礼をしていない人であり、寧遠県の人

である。

1989年の度戒において座壇師をつとめた趙喬生氏という人がいる。この人の岳父は馮榮軍氏の三舅に当たる人である。この趙喬生氏は法師であるが、「仮伝一本書、真伝一句話」（本で伝えるのはウソで、言葉で伝えるのこそ本当のことである）といい、死ぬまで拝師父（先生の教えをあおぐ）しなければならないと強調していた。

（28）家族関係と儀礼について

家族の中の誰が誰に平度してやることができるのかについて、兄が弟の陰平度をすることができる。もし弟に子もなく未婚だったら、兄は1人多く丁を生み、兄弟に与えてしまうということはよくあることである。ある人に妻がなくても、陰平度できるし、実の子がなくても陰平度できる。ただし、父母が子のために平度するということはあり得ない。

1つの特殊な事例として、曾祖父と曾祖母があり、彼等の子として祖父と祖母の兄がいた。祖父の兄は、父の世代から見れば父にとっての伯父である。父の伯父が20歳で死んでしまい、子もいない。だが、祖父の子、すなわち父には父を含め男性兄弟が3人いる。この場合、この男性兄弟3人（つまり父を含む父の兄弟3人）が、そのまま彼等の父の兄である伯父を父と見なして祀ることができる。父たちがもし彼等の伯父に祀り手がないという問題をうまく処理していないと、血財（家畜・財産など）や家丁（家族成員、特に成人男性）に不幸が起る。だから、香火を継承することをしてあげる。この問題は、問神（シャマンにあの世のことをたずねる）をしてもらうと分る。こうした場合には、家先単にもきちんと入れてあげる。たいいてい長男の家の家先単が一番長い。

（29）平常死と非常死の場合の儀礼について

平常死でも、非常死でも、その人の陰平度、加職、補充は、全く同じにする。なお非常死（聾啞だった人や女性の出産による死亡などを含む）では、法師による配慮が必要で、火葬することになる。

（30）奏青詞に準備する米について

奏青詞の際に引き出しに入れた米がならべてあったが、これは本来、条盤（長方形のお盆のようなもの）に入れるべきところを、引き出しで代用している。米の分量は、陽平度は1斗2升（1升は1.5斤なので18斤にあたる）、陰平度は6升、加職は3升、補充は3升である。これらすべては儀礼の後で書表師がもらうことになっている。2008年12月の度戒の時は、馮榮軍氏が400斤をもらい、持って帰った。これは元で700元に相当する。

（31）2008年度戒儀礼の経費について

馮榮軍氏の概算では、2008年12月の度戒儀礼に16万円かかった。これには購入した物品や水道電気代などを含む額である。

本来、陽平度は会首1人につき2万円、陰平度は1人につき500円の追加料金であり、加職と補充には殆ど経費はかからない。加職と補充の場合に準備する米も少なくていい。以上が基本相場である。

しかし2008年の場合は、12人の会首がいて、会首1人につき（本来、2万円のところを）1万3000元にした。ただし、実際の会首1人あたりの支出の平均の額は、7000元から1万円ほどであったと思う。

（32）法師たちの報酬について

度戒儀礼における法師たちの1日の報酬の相場は、平均80元である。ただし、2008年の度戒では、80元でなく60元で行った。1日当りの全体的計算は以下のようである。

法師 12人 1日あたり60元 法師の弟子 12人 1日あたり40元 紙縁師 1人 1日あたり40元 書表師の弟子 1人 1日あたり40元 厨師 7人 1日あたり60元。

以上の定額のほかに、次の科目を行えば、1回あたり36元を加算する習慣である。すなわち、撥兵、奏青詞、開天門、送庫、分兵、上刀山、度水槽、過勒床である。たとえば、開天門は1回36元で、さらに1斗2升の米と1丈2尺の白布を出す。

総壇師、座壇師、保拳師、鼓笛師の4人には、請聖の科目における舞いの役割があったので、この4人には800元を4人で分けるようにと与えた（1人平均200元）。茶酒師、紙縁師、鼓笛師には特に余計にはあげなかった。

なお、游郷の際に簽名画押の字を書く時、1元、2元の入った紅包を師にさしあげる習慣があるという。

（33）上元二聖について

送庫の際に用いる銭関という文書に上元二聖がでてくるが、この神は兵頭を持っているので、これで守らせるのである。請聖書（A-11）に上元二聖の由来譚があり、この神はもともと強盗が三清に身を寄せて弟子入りしたものである。

以上

榜文の翻刻と現代和訳の一例

—約束榜—

早稲田大学文学学術院教授 ヤオ族文化研究所客員教授

森 由利亚

本稿は、2008年11月26日から12月9日にかけて湖南省藍山県匯源郷湘藍村にて行われたヤオ族の度戒儀礼において使用された榜文のひとつ、「約束榜」の試験的な翻刻と現代日本語の仮訳である。底本としては、度戒儀礼において書表師である馮榮軍氏が実際に製作されたもの(B1本)を用いる。校勘には、書表師が所有する二種類の異本を用いた。一種は、「藍山県人民政府稿紙」という赤字のレター・ヘッドを有する政府の原稿用紙にペン(黒インク)で書かれた例文集。その4頁から6頁に「伝度約束榜」が収められる。これを本稿では便宜的に「稿紙本」と称する(¥廣田フォト1127・儀礼文献A ¥IMG_0606-IMG_0608)。もう一種は、最後の丁に「民国三十四年五月中旬託友代…」と記されている毛筆で書写された線装本の例文集。その12丁表から14丁表までに「約束榜」がある。「A2本」と称する(¥廣田フォト1127・儀礼文献A ¥IMG_0606-IMG_0608)。これらの異本そのものについての考察はここでは行わない。また、榜の内容に関する考察も後の報告に委ねることとしたい。現段階では、あくまで調査チーム内で文書をどのように翻刻し和訳するかを検討するためのたたき台として示すに過ぎない。

北極驅邪院醮壇給出眾姓授戒弟子約束榜一道⁽²⁾
中華湖南省藍山縣匯源郷湘藍村小地名冲處⁽³⁾，立壇
傳度，奉⁽⁴⁾
真鳴楊傳度完燈三戒奏名保安醮主，馮法有、趙法右、
李法財、趙法維、趙法余、趙法官、盤法壇、馮法清、
馮法維、盤法緣、趙法寶、趙法旗第⁽⁶⁾，謹啓冒干⁽⁷⁾
聖造。言念⁽⁸⁾，意者，投誠伏惟⁽⁹⁾，眾姓弟子，請師入
壇⁽¹⁰⁾，修設啟建⁽¹¹⁾

- (1)「壇」下A2本有「内」字。
(2)「道」下A2有「今據」二字。
(3)「冲」下A2應當有「口」字。
(4)「鳴楊」，與「冥陽」同音。
(5)「完」，稿紙本作「圓」。
(6)「第」，A2本、稿紙本共作「等」。
(7)「謹啟」下稿紙本有「丹誠」二字。
(8)「惟」，稿紙本作「爲」。
(9)「請」，A2本作「命」。
(10)「眾姓弟子請師入壇」，稿紙本無。
(11)「修設啟建」，稿紙本作「啟建修設」。

太上閻梅鳴楊傳度完燈三戒奏名保安清醮道場，七
晝七夜。先於初四日，門外聲動火鼓⁽¹²⁾⁽¹³⁾，雲雷鼓樂。
一日三時，朝度風翫⁽¹⁴⁾。入夜，敦舒黃道⁽¹⁵⁾，迓迎
三清大道、拾極高真、四府群仙法眾⁽¹⁶⁾，降赴道場，
爲凡作證盟。

須至約束榜者。右，伏以
神通廣大，法寶無窮⁽¹⁷⁾，能移拔樹之功⁽¹⁸⁾，有吸風雨之
勢⁽¹⁹⁾。老君聞教曲⁽²⁰⁾，運以常存⁽²¹⁾，蕩驅邪輔正⁽²²⁾，魔潛除。
是夜移星斗轉⁽²³⁾，燈點焚香⁽²⁴⁾，專伸朝天⁽²⁵⁾，鳴楊傳度，
完燈三戒⁽²⁶⁾，奏名謝恩。大道有活人之心德⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾。經年傳
度，累歲興陰⁽²⁹⁾，歌遊鼓樂。道場魍魎鬼神⁽³⁰⁾，聽法拱手⁽³¹⁾，
各要皈依正道⁽³²⁾，低頭瞻仰尊神⁽³³⁾，依玉帝合行⁽³⁴⁾，威受
三戒⁽³⁵⁾，須爾諦聽⁽³⁶⁾。謹榜。右伏以，
趙法明師人七日師非法教⁽³⁷⁾，謹奉清詞⁽³⁸⁾，尊日尊是至尊⁽³⁹⁾，

- (12)「火」，A2本猶作「大」字。
(13)「火鼓」，稿紙本作「大大鼓」三字。
(14)「風」，稿紙本作「玩」的異體字。
(15)「敦」，A2本、稿紙本共作「敷」。
(16)「法」，稿紙本無。
(17)「移」下A2本、稿紙本共有「山」字。
(18)「吸風雨」，稿紙本作「吸雨吹風」。
(19)「聞」，稿紙本作「聞」。
(20)「曲」，稿紙本作「典」。
(21)「魔」字下稿紙本有「鬼」字。
(22)「潛除」，稿紙本作「清消」。
(23)「移星」，稿紙本作「星移」。
(24)「伸」字下A2本改行，以「朝」字擡寫。
(25)「完」，稿紙本作「圓」。
(26)「活」，稿紙本作「法」。
(27)「歲興」，原本把一行割爲兩行把兩字放在左右：興。
(28)「陰」，按，張勁松氏《藍山縣瑶族傳統文化田野調查》湖南岳
麓書社2002,144頁所引〈約束榜〉作「蔭」字，或是也。
(29)「神」字下稿紙本有「依」字。
(30)「合」，稿紙本作「令」。
(31)「威」，A2本、稿紙本共作「咸」。
(32)「三戒」，稿紙本作「戒言」。
(33)「師人」，A2本、稿紙本共作「人師」。
(34)「非」，文義不通。按，張勁松氏2002,144頁所引〈約束榜〉作「本」
字，或是乎。
(35)「清」，稿紙本作「青」。
(36)「至」，稿紙本無。

(37) 鼓樂角法嚮之馨，啓請恭迎御駕之群仙，(38) 靦睹鶴鬣
(39) 之光，輝映作羽之舞。教車馬雲屯於鐵騎，旌旗雷
(41) 掣於金蛇，(42) 魔聞知即心警膽碎，眾聖聞知，悉皆雲
(43) 集。爐薰散萬里之烟霞，燈彩燦一天之星斗。(44) 城隍
(45) ，誠恐鞠躬，(46) 筵迓寫舉，端肅嚴潔，(47) 稽首恭迎於鶴，
(48) 親覲玉皇之香案，觀瞻金闕仙班。

伏願，

天官、地官、水官列之像，伏道寶經寶師，(49) 歸依三
寶之威儀，(50) 繳焚四府之，(51)(52) 總計數仟百分，隨開上達，
會集神壇，(53) 證盟約束。榜。

中華公元二零零八年戊子歲，十一月初四日，奉真
鳴楊傳度圓燈三戒奏名新承弟子馮法有、趙法佑、
李法財、趙法維、趙法余、趙法官、盤法壇、馮法清、
馮法維、盤法緣、趙法寶、趙法旗等百拜謹榜。

太上奉行北極驅邪院，(54) 川通閩梅二教三戒主醮師趙
法明職位陞在四川省成都市正印花職爲號

北極驅邪院に属する醮壇において給付される、
多姓からなる授戒弟子たちによる、鬼神を拘束する榜

中華人民共和国湖南省藍山県匯源郷湘藍村の沖口とい
う土地で、壇を立てて度戒を行い、[大道の]真を奉じて、
冥陽伝度完灯三戒奏名保安醮を建てる醮主であるところ
の、馮法有、趙法右、李法財、趙法維、趙法余、趙法官、
盤法壇、馮法清、馮法維、盤法緣、趙法寶、趙法旗等は、
謹んで丹誠(まごころ)を表して、[畏れ多くも]聖なる造
物者(55) [である大道]を冒して、ここに(56) [以下のように]念ずる。
思うに、[私どもが]誠を捧げ伏して思うには、[以下のこ

(37) 「樂」，稿紙本無。

(38) 「靦睹」，稿紙本作「睹視」。

(39) 「之」，A2 本稿紙本共作「知」。

(40) 「雷」，稿紙本作「霓」。

(41) 「蛇」字下 A2 本有「邪」字。

(42) 「警」，A2 本、稿紙本共作「驚」。

(43) 「薰」，當作「薰」。

(44) 「城隍」，與「誠惶」同音。

(45) 「筵」，稿紙本作「遙」。

(46) 「寫」，稿紙本作「鸞」。

(47) 「於」，稿紙本無。

(48) 「闕」字下 A2 本有「之」字。

(49) 「師」字下稿紙本有「寶」字。

(50) 「之」字下 A2 本有「錢」字。

(51) 「數」，A2 本作「幾」。

(52) 「仟」字下 A2 本有「幾」字。

(53) 「束」字下 A2 本有「故」字。

(54) 「川」，與「串」同音。

(55) 「聖なる造物者」 原文は「聖造」。

(56) 「ここに」 原文は「言」。発語の辞として解す。

とく行わんことを期するのである。すなわち、]種々の姓を
もつ弟子たちは、師に請うて壇に入ってもらい、太上閩梅
冥陽伝度完灯三戒奏名保安清醮道場を7昼7夜にわたつ
て修設開建してもらう。まず、[11月]初4日(西暦12月
1日)には、門の外で大鼓を鳴動させ、雲雷のように激し
く鼓楽を奏でる。1日のうち[初夜・中夜・末夜の]三時
をもうけ、[大道に]朝礼し伝度にあずかる[ごとに、楽を
奏でて]賞翫に供する。夜になると、[神々が通る]黄道
を敷き陳べて、三清大道・十極高真・四府の群仙(57)たちが
道場へと降り趣き、凡夫のために証盟を行えるようにする。
については、必ず「約束榜」を出すことになっている。

以上のことについて、謹んで考えてみれば、[このような
醮に招かれる神明の]神通は広大で、[道法・経法・師
法という三宝のなかでも万物の根源である]道法には無尽
のはたらきがあり、山を動かし樹を抜くほどの作用を發揮し、
雨を降らせ風を吹かせる作用がある。[三清の一尊、太上
(58)]老君は、教の規範を開き、[その教を]運らせて、常に
[この世に]ましまして、邪悪を駆逐し正義を輔佐し、この
ため魔鬼たちは姿を隠し除かれる。この夜、[私たちは、]
星を動かし北斗を転じて、[七星銀灯や大羅十二曜星灯な
どを]点灯し、香を焚いて、もっぱら[願いを]述べて天
に朝礼し、冥界と陽界に伝度を行い、三戒(60) [の灯火]を円
満に灯し[て度戒を完了し]、[みずからの]名を奏上し、
恩恵を感謝する。大道には人の心の徳を生かすはたらきが
ある。[その徳にもとづいて、私たちは]長年にわたり伝度
し、長年にわたり恩恵を確かなものとして、歌い巡って鼓
楽を奏す。道場にいる魑魅魍魎や鬼神たちは、法を聴い
て拱手し、必ずそれぞれ正道に帰依し、頭を垂れて尊神
(61) を仰ぎ見よ。玉帝の令の通りに行動し、悉く戒言を受けよ。
必ず、よく理解して聴くように。[以上のことを]謹んで榜と
して発行する。

以上のことについて、謹んで考えてみると、趙法明は人
(57) 「四府の群仙」 「北極驅邪院醮壇内給出錢関文」 「廣田フォト
0226」に「天府一行聖衆、地府一行聖衆、水府一行聖衆、陽
府一行聖衆」とあるのを参照。
(58) 「教の規範を開き」 原文はテキストごとに錯綜している。こ
こでは、稿紙本の「老君開教典」に従って解釈する。
(59) 「星を動かし北斗を転じて」 各醮主たちを注照している星君
たちにより運命づけられている災厄を除くことを指すのであ
ろう。
(60) 「三戒」 馮米軍師によれば、三戒とは子供の時に父母などか
ら自然におそわる諸戒(初戒)、掛三灯、そして十二灯(大戒文)
である。しかしまた、三代にわたる戒を行うが故に三戒とい
われるという可能性も否定できないのではあるまいか。
(61) 「悉く戒言を受ける」 原文は「感受三戒」。稿紙本が「感受
戒言」に作るのに従う。
(62) 「趙法名」 A4 本では「ム」とされる。

⁽⁶³⁾の師として[つとめること]七日、[そのあいだ、]師は法
 教を文飾して、⁽⁶⁴⁾謹んで青詞を奉じ、[醮が行われる]その
 日を尊び、[醮に奉請される]⁽⁶⁵⁾これらの最高の尊神たちを
 尊び、鼓楽を奏して法楽の響きをたがいに競い、乗り物に
 乗る群仙たちを恭しく迎え、鶴や亀の[長寿の]光を目の
 当たりにし、登仙の舞を輝くような美しさで演じる。[軍神た
 ちの]車馬を鉄騎のなかに雲集駐屯させ、旗を立てて金
 蛇[のようないなづま]のなかにいかづちを轟かせる。魔
 鬼たちは、これを聞き知れば、すぐに心に警戒して肝をつ
 ぶし、多くの聖人たちは雲のように集まってくる。爐に香を
 焚けば万里へと香のけむりを散らし、灯明をともせば、一
 天の星辰や北斗を色とりどりに輝かせる。まことにおののき、
 まことに恐れ、身を屈して[神々の乗物である]鸞が飛ぶ
 のを迎え、威儀を正し厳粛にし、稽首して恭しく[神々の
 乗る]鶴を迎え、親しく玉皇の机下にお目通りし、金闕に
 いならぶ仙人の列を見ることになる。伏して願わくは、天官・
 地官・水官の像を列し、道宝・経宝・師法に伏して、三
 宝の威儀に帰依し、四府のための紙銭総計数千数百分を
 焚化することを求め、銭闕とともに[天界に]伝達し、[神々
 が]神壇に集まって鬼神の拘束を証盟してくださいますよう
 に。[以上のように]榜を発する。

時に、中華公元 2008 年 8 月 戊子の歳、11 月 4 日、奉
 真冥陽傳度円灯三戒奏名新承弟子馮法有・趙法佑・李
 法財・趙法維・趙法余・趙法官・盤法壇・馮法清・馮法維・
 盤法縁・趙法寶・趙法旗等が百拜して謹んで榜を発する。

太上が奉行する北極驅邪院に属し閻梅二教を申通する
 三戒主醮師である趙法明、その職位は四川省成都府の正
 印官の花職に昇進していることをもって号とする者。

[以上]

(63)「人の師として」原文は「師人」。A4 本および稿紙本が「人
 師」に作るのに従う。

(64)「法教を文飾して」原文は「非法教」。ここでは「非」を「斐」
 の仮借と見て解釈する。

(65)「法楽の響き」原文「法禱之響」。稿紙本が「法響之声」に作
 るのに従う。

度戒をめぐる人的関係網

神奈川大学経営学部准教授
 ヤオ族文化研究所研究員
 泉水 英計

はじめに

度戒はどのような人々によっておこなわれるのだろうか。タイからの報告では、父系出自集団の成員が法師に依頼して儀礼をおこなっているようであるが、匯源で度戒を受けた者たちがそのような範疇に属さないことは明らかであった。実際に度戒を受けた者と授けた者は誰であり、彼らはどのような関係によって結びついているのか。以下の報告は、この問いを念頭に主な参加者の同定を試みたものである。今のところ、どの程度まで一般化できるのか判断できないが、度戒が数年に一度しかおこなわれず、観察の機会が極めて限られていることに鑑み、ここでは参加者を具体的に明らかにすることに力点を置いた。概容についての説明を集めるよりも、個別的事例であっても確実な材料を提供することのほうが将来の検討に資すると考えたからである。

主要な参加者のうち、度戒を授ける者は法師、師父、巫師などと呼ばれ、12の役職が予め定められている。一方で、度戒を受ける者は会首、師男などと呼ばれ、確認できた限りでは人数は10人から15人であった。

人的関係網の地理的範囲

匯源郷近辺の地勢



地図 九疑山地の瑶族郷（『湖南省地図集』湖南省地図出版社、2000年、208頁より）

度戒の祭場となった匯源郷の周囲には幾つかの瑶族郷があり、儀礼参加者の縁故はそのうちの3つにほぼ集中している。まずは、この地勢についてみておこう。

広東省から西北へ南嶺を越えると湖南省に入るが、省境を過ぎて次に控える山なみが九疑山（地）である。上記の地図にみるように、最高峰の畚箕窩（標高 1959m）から北東に延びた尾根が藍山県と寧遠県を分ける。県境がこの分水嶺から寧遠側へ離れはじめる所に位置するのが匯源郷である。したがって、郷内の水流は寧遠県城へと繋がる冷江の支流となっている。一方で、藍山県城からの接近は分水嶺がつくる峠を越えねばならないが、地図中の太線で示された舗装道路が通じており、毎日往復一便に過ぎないがバスが定期運行している。

周辺には、北へ向かってひと山越えた同じような立地に犁頭郷がある。また、藍山県城から南へと舜水を遡ると所城を経て紫良郷へと至る。度戒参加者の縁故を尋ねている時に、これらの地名を耳にすることが多かった。しかし、明らかにそれを凌いでいたのは九疑郷への言及である。所属県は違えども、同一水系に属して隣接し、徒歩ならば、寧ろ峠を越えて藍山県城方面へ向かうよりも移動が容易だからであろう。

表 匯源郷および周囲の瑶族居住地の区分

県	郷	村	組		
藍山	匯源郷	湘蘭村	動脚嶺	黄竹坪	冲口
			黄竹埂	大団源	過路山
			芭焦田		
		荊竹村	五瓜龍	荊竹坪	上桐古坪
			寒鷗冲	下桐古坪	鷄仔冲
		大源村	半嶺		
		源峰村	老鴉山	牛塘冲	黄竹围
		湘源村	正東方		
	所城鎮	高良頭村			
		団源村			
		幼江村	楓樹冲	李家	
	犁頭郷	山背村	七伙	大婆冲	
		犁頭村	張家	斑竹冲	
		五指村			
塔峰鎮	両江村	老婆洞			
総市郷	界頭村	秀花冲			
寧遠	九疑郷	茶羅村	大屋地	新屋地	樟木冲
			小屋地	黄花园	
		牛頭江村			
		大地坪村	天鵝壙		
		紫荊村			
大坳岑村					

地理単位としての郷の下には村があり、村内には複数の組がある。上記の表は網羅的なものではなく、度戒参加者の居住地として言及された地名を整理したものである。九疑郷ではこれらの組名の他に連番が付された組名も並行して用いられていることが明らかであったが、十分に確認できなかったため割愛した。

1990年の統計によれば、藍山の各郷の人口は、北から南へ、犁頭郷 891人、匯源郷 1411人、所城鎮 1547人、紫良郷 2478人であり、これより人口の多い荊竹郷（荊竹村とは無関係）や、大橋郷は更に南部の省境付近にある（『藍山県志』、中国社会科学出版社、1995年、679頁）。ここからは、瑶族と漢族の居住地の境界という匯源郷の位置が確認できよう。

度戒参加者の住所

次に、度戒参加者がこの地域にどのように分布しているのかをみてみたい。2008年の度戒のほか、参加者を把握できたのは1989年と1995年のものである。これらの過去の度戒も匯源郷湘蘭村内に祭場がもうけられている。

前者については張勁松・F栄軍らの記録（『藍山県瑶族伝統文化田野調査』、岳麓書社出版、2002年、133-134頁）がある。これをもとに次世代の家主と住所を追記したものが下の表である。上段が法師たち、下段が会首たちであるが、とくに会首には湘蘭村民が多いものの、度戒を受けに九疑から来る者もいたことがわかる。

表 1989 年 度戒参加者

役柄	名前	法名	村	組
主醮	P 老二	法念	幼江	楓樹沖
引渡	Z 子風	法灵	湘蘭	黄竹埂
書表	P 日古	法香	茶羅	四組
紙縁	P 冬生	法林	黒沖	不明
証明	P 苟仔	法玉	荊竹	上桐古坪
保举	P 孝古	法富	茶羅	八組
総壇	P 喜古	法良	団源	不明
同壇	Z 乔古	法現	大坳岑	不明
執香	Z 日保	法才	湘蘭	芭焦田
茶酒	Z 喜古	法天	荊竹	五瓜龍
鼓鑼	F 友古	法財	湘蘭	大団源
吹笛	Z 生貴	法財	湘蘭	芭焦田

大	Z 天貴	法官	湘蘭	黄竹埂
二	F 富金	法銀	湘蘭	大団源
三	F 富貴	法安	湘蘭	大団源
四	Z 天龍	法都	湘蘭	黄竹埂
五	P 庚癸	法盛	茶羅	四組
六	F 榮勝	法天	湘蘭	動脚嶺
七	Z 子華	法琳	湘蘭	黄竹埂
八	Z 子成	法喜	湘蘭	黄竹埂
九	F 榮飛	法龍	湘蘭	沖口
十	F 榮軍	法龍	湘蘭	動脚嶺
十一	F 見仔	法香	湘蘭	沖口
十二	P 二保	法添	大地坪	天鵝塘
十三	Z 興貴	法升	高良頭	不明
十四	P 金林	法林	黒沖	不明
十五	P 紅保	法延	茶羅	新屋地

次に 1995 年の度戒について、聞き書きにより同様の情報を集めてみたところ、やはり湘蘭村民が少なくはなかったが、九疑郷内をはじめ他村からの参加は 1989 年よりも多かった。

表 1995 年 度戒参加者

役柄	名前	法名	村	組
主醮	Z 子風	法灵	湘蘭	黄竹埂
引渡	P 苟崽	法玉	荊竹	荊竹坪
書表	P 庚癸	法盛	茶羅	四組
紙縁	P 九古	法靈	荊竹	桐古坪
証明	Z 孝古	法富	茶羅	八組
保举	H 興貴	法升	(所城鎮)	不明
総壇	P 喜古	法良	団源	不明
座壇	Z 喬生	法現	茶羅	不明
執香	Z 福玉	法財	湘蘭	芭焦田
茶酒	Z 新貴	不明	湘源	正東方
鼓鑼	Z 庚古	不明	犁頭	張家
吹笛	Z 福生	法明	犁頭	斑竹沖
磨刀	Z 富強	不明	湘蘭	沖口

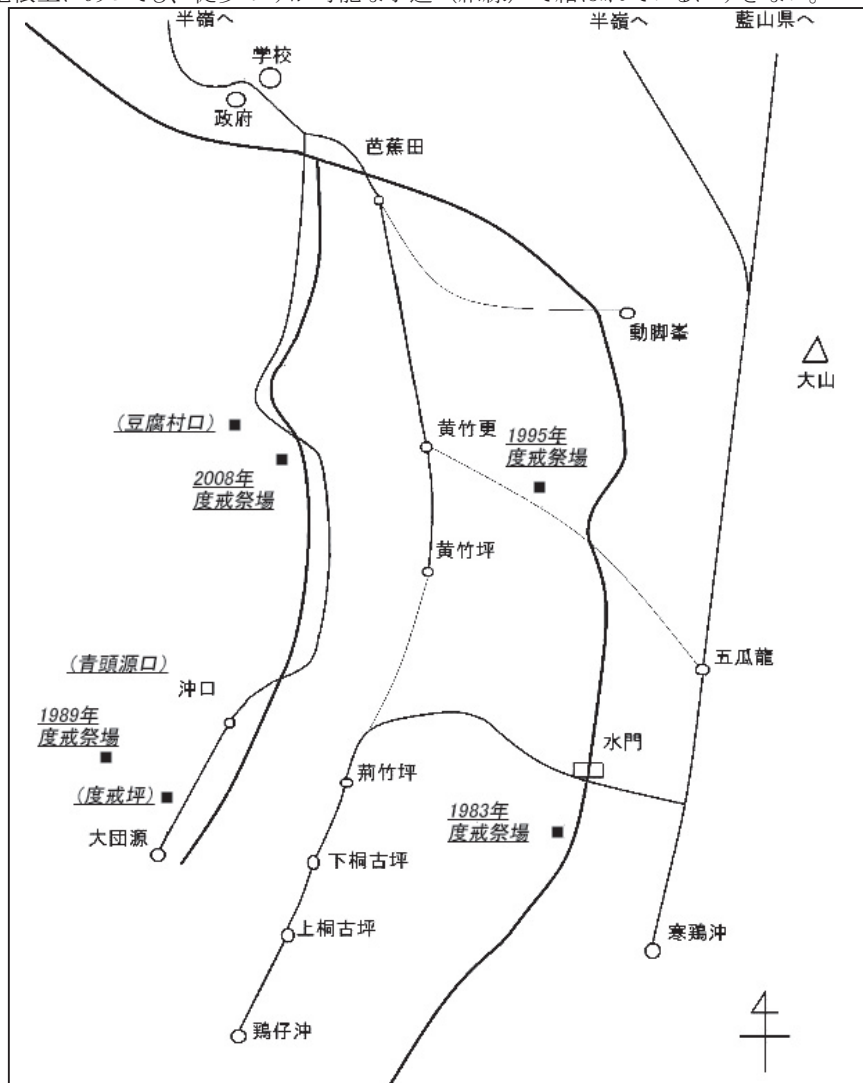
大	Z 金仔	法明	湘蘭	黄竹埂
二	L 卯古	法維	湘蘭	黄竹埂
三	F 伍生	法学	湘蘭	大団源
四	Z 貴生	法光	湘蘭	黄竹坪
五	P 伍仔	法勝	両江	老婆洞
六	P 林保	不明	界頭	秀花沖
七	F 良書	法金	源峰	老鴉山
八	P 福仔	不明	茶羅	小屋地
九	Z 紅仔	法龍	荊竹	寒鷄沖
十	P 進保	法佐	茶羅	小屋地
十一	Z 正清	不明	山背	七伙

上記の2つの表中で着色したセルは、2008年の度戒参加者を示す。これらを含む参加者の住所については昨年度の報告書（『通訊』第1号、6-9頁）を参照していただきたい。2008年の度戒は人選の範囲が相対的に狭かった。会首は12名であったが、全員が匯源郷居住者であり、荊竹村3名、源峰村1名の他はすべてが湘蘭村から出ていた。また、主要な法師の半数以上が湘蘭村居住者であった。

湘蘭村内に祭場がもうけられたから村民の参加が目立つのは当然かもしれない。しかし、九疑側では長らく度戒がおこなわれていないようであり、周囲の瑶族郷の文化的な中核として湘蘭が位置づけられる可能性も検討する必要がある。

過去の度戒祭場

過去の度戒祭場であった湘蘭および隣接する荊竹の地理について更に詳しくみると、両村域は大小2つの水流がつくる3筋の尾根に広がっている。それぞれの村内にある組は自動車あるいは単車が通れる道路で結ばれているのに対し、両村の組同士は、同じ尾根上にあっても、徒歩のみが可能な小道（細線）で結ばれているにすぎない。



地図 湘蘭および荊竹の組と度戒祭場の位置

上記の地図で下線により示したのは祭場に関する事項である。2008年の度戒がおこなわれた地点は沖口組域であった。学校から祭場に向かう途中の左岸に豆腐村口という地点があり、遠い過去にここで度戒がおこなわれたことが記憶されている。この道路を辿り沖口組を過ぎて大田源に至る手前に度戒坪と呼ばれる地点がある。元来の地名がなく、祭場であったことがそのまま地名になった。一度は神霊の集った場所であり、必要もなく立ち寄るべきではない忌避すべき土地だという。

1989年の度戒祭場となったのは、この度戒坪から左岸の尾根に登った地点であった。小さな水流に沿っているようで、そこから僅かに登ると、青頭源口と呼ばれる水源に突き当たるといふ。

1995年の度戒祭場は、尾根の反対側、今ひとつの水流に向かって下る斜面にあった。往来には黄竹更組から五瓜龍組に繋がる小道しかなく、祭場を建築する木材の運搬に困難が多かったという。この上流には水門があり、近くを荊竹村内を結

ぶ道路が通っている。そこからやや上手の川筋でも過去に度戒がおこなわれた。記録はないが、当時学童であった見物者の記憶では1983年のことであったという。

儀礼参加者の相互関係

法師

初めに触れたように法師には予め定められた12の役職がある。下の写真のように、祭場内で確認できる一覧には個々に多少の相違があるが、明らかに一定の序列がある。

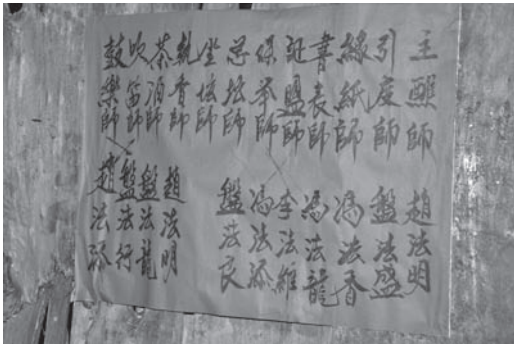


写真 法師一覧（場内）

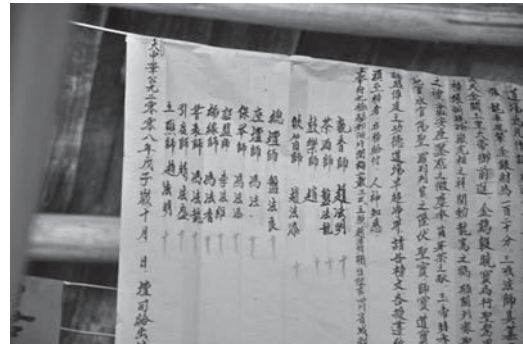


写真 法師一覧（黄榜）

上位から、主醮師と引度師、書表師と紙縁師、証明師と保挙師、総壇師と坐壇師の4組が必ずこの順番で並ぶ。主醮・引度と証明・保挙はそれぞれの組の中の順序が入れ替わることもない。首席である主醮師が筆頭にくるのは当然だろうが、証明師と保挙師の序列も明確に存在することがわかる。坐壇師については、1989年の度戒の記録では「同壇師」という名称になっているが、他地域の記録には総壇師の代わりにこの名称が認められる例もある。下位にくるのは、吹笛師と鼓楽師、および執香師と茶酒師の2組で、双方は序列が入れ替わることがあるが、前者は組のなかの序列が入れ替わることはない。

これらのうち上位の6つの役職は、度戒を既に受けた者から選ばなければならない。2008年の人選は、Z金仔（主醮）、P庚発（引度）、F栄軍（書表）、F見仔（紙縁）、F栄勝（証明）、L卯古（保挙）であり、金仔と卯古は1995年に、他の4名は1989年に度戒を受けている。度戒を受けることは、法師となる資格を与えることであることから、このような役職者を「做師人」というが、直近の2回の度戒で形成された人的関係網が做師人の再生産において持続していることがうかがえよう。

しかし、上位の役職者が必ずしも知識の豊富な法師ではない。たとえば、総壇師のP喜古は直近2回の度戒でも同職を務め、2008年には他の法師たちに指示を与えている場面が多く観察された。同様に、執香師のZ福生は1995年の度戒では吹笛師であった。法師のなかで明らかに年長者で経験も豊かな彼らが下位の役職にまわったのは、彼らが度戒を受けていないためであったとみてよいであろう。做師人の資格をもつ「大法師」に対して、このような法師を「小法師」というが、大小の区別は実際の知識や経験を基準としたものではない点に注意が必要である。

実態と形式のズレはまた「徒弟」という名称にも認められる。徒弟と呼ばれるのは、法師個人の弟子に相当する者と、度戒における役職の補助者に相当する者である。前者は若年者が多く、度戒以外の儀礼でも法師に随行して師を手伝いつつ知識を習得する。一方、後者は法師よりも年長者である場合があり、日常的な子弟関係が成立しているとは考えがたい。極端な例は、書表師の徒弟を務めたL民古が初等学校時代のF栄軍の教師であった。栄軍は「自分は自分の徒弟の徒弟だ」と冗談めかして述べていたが、形式上は2つの徒弟は区別されない。

さらに、法師の経験が浅い場合には、徒弟が実質的に做師人の役割を担うことになる。証明師の徒弟であったP富良や、保挙師の徒弟であったP林古にこのような逆転が認められた。富良は掛燈まで、林古は掛燈すら受けていないが、祭場では本来の做師人以上に様々な儀礼を取り仕切っていた。同様の現象は、坐壇師と保挙師の役割の一部を手伝ったP珍旺についても認められた。儀礼程序をみる時には、このような代行行為を考慮しなければならないだろう。ただし、開天門の角笛を吹くなど要所要所では本来の做師人が不慣れな所作でこれをおこなったことから、代行できない部分が明らかに存在するようである。

人的関係網

徒弟を含めた2008年の主な度戒参加者には、別掲の図「参加者の相互関係」に示したように4つの関係網をみることが

できる。明らかに、出自によって定義されるような範疇ではなく、3世代ほどの深さまでのキョウダイおよび夫婦関係を辿ることで結びついたものである。対面的な認知を超えた上位世代は、家先単に直系祖先の法名が記録されているものの、一般的には関心が抱かれず、認識は薄れやすい。

儀礼参加者としての家先

平度

度戒を経ることで会首は法師の資格を得るのであるが、父に先んじて子が度戒を受けてはならないという禁忌が守られている。このため、度戒を受けないまま故人となった父は子と同時に度戒を受けることになる。これを平度といい、故人であることを強調して陰平度あるいは単に陰度ともいわれる。

子の度戒と同様に儀礼文書が作成されるばかりではなく、下の写真のような人を模った旗が会首とともに祭場に出され、陰度者の参加を代表する。

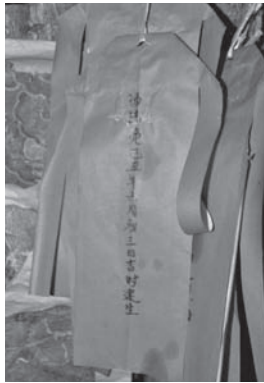
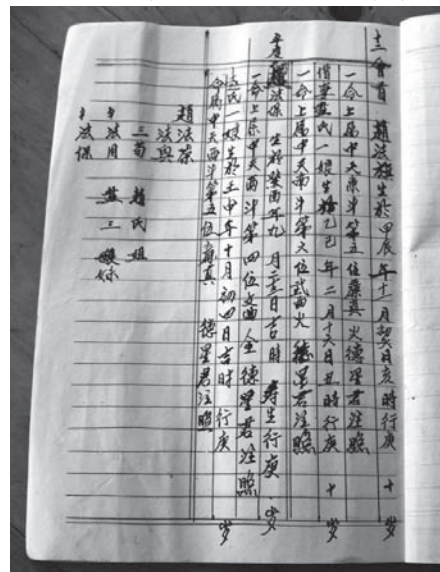
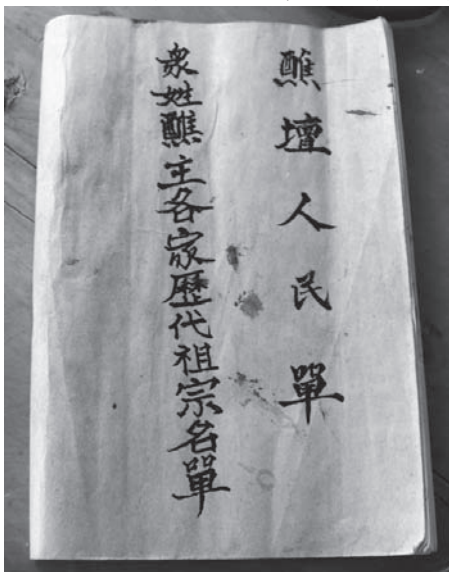


写真 陰平度者の形代。第五会首が2人分、第六会首が1人分の平度をしている。

一般の度戒と同様に平度の場合においても、夫の度戒と同時に妻も度戒を受ける。12名の会首のうち、第五会首と第九会首の母は未亡人であり、息子の嫁と同様に儀礼に参加した。あまり普及した言い方ではないが、陽平度ということになる。

『醮壇人民単』

平度を含め度戒を受けた者を確認できる資料に『醮壇人民単』がある。祭場(醮壇)に出る者つまり会首の名簿であるが、衆姓醮主各家歴代祖宗名單とも表記されるように、会首の祖先を含んでいる。体裁は、一種の「家譜」である家先単に準じ、上位世代は夫婦を上下に列記していくが、度戒を受ける世代を初めに別記して生年月日および出生時間を附記してある。



写真『醮壇人民単』表紙と十二会首の頁

12人の会首それぞれについて、『醮壇人民単』の内容情報を次頁に書き出して置く。

一会首	馮法有	乙未 (1955)	11月25日
妻	趙氏四娘	己亥 (1959)	10月11日
平度	法旺	辛亥 (1911)	10月07日
妻	趙氏二娘	甲寅 (1914)	06月26日
平度	法亮	己丑 (1949)	06月03日
妻	馮氏四娘	己丑 (1949)	07月29日
	馮法靈	馮氏四娘	
	法罡	趙氏二娘	
	法祿	趙氏二娘	

二会首	趙法佑	乙酉 (1945)	12月05日
妻	盤氏一娘	丙戌 (1946)	06月18日
	趙法用	趙氏一娘	
	法行	馮氏二娘	
	法奧	趙氏一娘	
	法靈	盤氏二娘	
	法左	趙氏一娘	
	法保	成氏一娘	
	法天	盤氏三娘	

三会首	李法財	甲午 (1954)	10月12日
妻	李氏一娘	己亥 (1959)	09月25日
	李法明	葛氏滿妹	
	法貴	鄭氏壇妹	
	法旗	趙氏一娘	
	法祿	趙氏二娘	
	法盛	盤氏七娘	
	法生	馮氏一娘	
	法良	李氏二娘	

四会首	趙法維	壬午 (1942)	04月27日
妻	盤氏二娘	甲申 (1944)	06月12日
	趙法奧	趙氏一娘	
	法罡	趙氏二娘	
	法冪	盤氏一娘	
	法金	盤氏一娘	
	法壇	黃氏三娘	
	法明	趙氏一娘	
	法財	盤氏二娘	

五会首	趙法余	壬寅 (1962)	12月25日
妻	趙氏二娘	丙午 (1966)	01月11日
平度	趙法貴	己巳 (1917)	吉月吉日
妻	趙氏一娘		
平度	趙法雲	辛巳 (1941)	08月15日
妻	趙氏一娘	辛巳 (1941)	02月28日
	法添	趙氏一娘	
	法財	盤氏三娘	
	法堂	李氏七娘	
	法旺	趙氏三娘	

六会首	趙法官	己亥 (1959)	10月29日
妻	無記名		
偕妻	盤氏一娘	癸卯 (1963)	03月13日
平度	趙法秀	辛巳 (1941)	01月03日
偕妻	黃氏一娘	己卯 (1939)	07月17日
	法都	盤氏一娘	
		盤氏二娘	
	法台	盤氏二娘	
	法貴	趙氏二娘	
	法言	趙氏一娘	

七会首	盤法壇	己卯 (1939)	02月17日
妻	盤氏三娘	癸酉 (1933)	09月06日
	法旗	趙氏三娘	
	法堂	盤氏三娘	
	法添	盤新娘	
	法広	盤氏一娘	

八会首	馮法音	甲辰 (1964)	05月10日
妻	趙氏一娘	甲辰 (1964)	12月04日

九会首	馮法維	癸卯 (1963)	08月14日
妻	盤氏一娘	癸卯 (1963)	04月09日
平度	趙法音	己卯 (1915)	09月13日
妻	馮氏一娘	甲寅 (1914)	08月03日
平度	馮法祿	癸未 (1943)	08月05日
陽妻	馮氏三娘	壬午 (1942)	11月17日

	馮法金	盤氏姐	
	法元	李氏四娘	
	法安	鄭氏三娘	
	法成	趙氏二娘	
	法言	盤氏五娘	
	法貴	趙氏二娘	
	法財	盤氏四娘	
	法界	李氏七娘	
	法亮	趙氏一娘	
	法明	趙氏四娘	
	法旺	盤氏五娘	
	法古		
	馮二妹		
	盤法言	趙氏八娘	
	趙法傳	黃氏二娘	
		盤氏二娘	

十会首	盤法祿	丁亥 (1947)	02月21日
妻	盤氏一娘	丁亥 (1947)	06月26日
	趙氏一娘	辛卯 (1951)	12月28日
	法用	盤氏一娘	
	法明	盤氏一娘	
	法順	趙氏三娘	

十一会首	趙法宝	辛卯 (1951)	10月18日
偕妻	趙氏一娘	辛卯 (1951)	10月09日

五会首	趙法余	壬寅 (1962)	12月25日
妻	盤氏二娘	丙午 (1966)	01月11日
平度	趙法貴	丁巳 (1917)	吉月吉日
妻	盤氏一娘		
平度	趙法雲	辛巳 (1941)	08月15日
妻	趙氏一娘	辛巳 (1941)	02月28日
	法添	趙氏一娘	
	法財	盤氏三娘	
	法堂	李氏七娘	
	法旺	趙氏三娘	

十二会首	趙法旗	甲辰 (1964)	11月06日
偕妻	盤氏一娘	乙巳 (1965)	02月16日
平度	盤法保	癸酉 (1933)	09月23日
	趙氏一娘	壬申 (1932)	10月04日
	趙法榮		
	法興		
	三苟	趙氏姐	
平	法用	盤三妹	
平	法保		

「伝度対象者一覧」

子が度戒を受ける時までに既に度戒が済んでいた父は更に一段階上位の霊位を与えられる。これを加職という。加職まで済んでいれば最高位に上るための補充がおこなわれる。これらには形代などは無く、文書のなかだけの所作である。結局、ある人が度戒を受けた時には、その人の直系上位世代が度戒、加職そして補充という順番で並ぶことになる。

加職や補充の対象者が誰であったかは、書表師が作成する書類によって確認することができるが、ここで「伝度対象者一覧」と呼ぶものは、彼が書類作成時の参照用に記したメモ書きである。度戒および平度については、『醮壇人民単』の別記と情報が重複するが、加職および補充の対象者名をこの一覧から簡便に知ることができる。



写真「伝度対象者一覧」

表「伝度対象者一覧」

一	加職 補充	法禄	平度	法旺	趙氏二娘
		法罡		法有	趙氏四娘
				法亮	馮氏四娘
二	加職 補充	法天		法右	盤氏一娘
三	加職 補充	法興		法財	李氏一娘
四	加職 補充	法良		法維	盤氏二娘
五	加職 補充	法財	平度	法余	盤氏二娘
		法明		法貴	趙氏一娘
				法堂	趙氏一娘
六	加職 補充	法言	平度	法官	盤氏一娘
		法貴		法秀	黃氏一娘
七	加職 補充	法広		法壇	盤氏三娘
八	加職 補充	法銀		法青	趙氏一娘
九	加職 補充	法言		法維	盤氏一娘
		法傳		法青	馮氏一娘
				法禄	馮氏三娘
十	加職 補充	法順		法禄	盤氏一娘
		法明			趙氏一娘
十一	加職 補充			法宝	趙氏一娘
十二	加職 補充	三荀		法旗	盤氏一娘
		法興		法用	盤氏一娘
				法保	趙氏一娘

法名と掛燈

「伝度対象者一覧」の記名は法名であり、霊界での地位を表すといわれている。男性の場合は、姓、「法」の字、任意の1字という組み合わせの三字名であり、女性の場合は、姓、「氏」の字、同性の出生順を表す数字、「娘」の字という組み合わせの四字名である。他の地域からの報告によれば、加職を経た男性は郎名、すなわち、姓、任意の1字、同性の出生順を表す数字、「郎」の字という四字名に改名するようであるが、匯源郷近辺では法名がそのまま継続する。対照的に、女性の娘名は夫の加職に伴うものであり、それ以前は、姓、「氏」の字、「者」の字という三字名が用いられているというが、匯源では初めから娘名が用いられる。



写真 掛燈の三燈火（左）と度戒の十二燈火（右）

法名を獲得する機会として言及されることが多いのは掛燈という儀礼である。儀礼の核となる献燈は度戒にもみられるが、上の写真にみられるように、度戒では12の燈火が捧げられるのに対し、掛燈では燈火が3つであるため掛三燈とも呼ばれる。掛燈を経ずに度戒は受けられないとされているため、12人の会首のうち度戒までその機会を持たなかった4名が祭場で掛燈を受けた。ただし、法名はそれ以前に獲得していたことが明らかであった。他の1名を含め5名は結婚式の拜堂で法名を獲得している。一方、結婚式と無関係に法名を獲得したことが確認できた他の4名は、還家願儀礼などが機会であった。したがって、厳密に言えば、法名は掛燈までに獲得されるのであって、掛燈において獲得されるのではないようである。

上位世代が掛燈を受けていない場合でも特別な配慮を必要とせずに平度され、さらには加職や補充の対象者となる。

各会首の家族関係

家先

「伝度対象者一覧」に記された平度あるいは加職や補充を受ける者が会首の家先であることは間違いないが、両者の関係は一様ではない。『醮壇人民単』からは各会首の家族関係をある程度うかがうことができるが、やはり上位世代は法名のみが記録されているため、会首との個別的な関係は特定できない。聞き書きにより欠落を補うと直ぐに明らかになるのは、頻繁に認められる入婿によって会首と家先の関係が複雑化していることである。

また、『醮壇人民単』は直系家族に絞って各世代の夫婦を記したものであり、傍系についての情報は原則として含まれていない。しかし、通婚圏が、冒頭に言及した地理的範囲にはほぼ限定される状況で参加者が相互に関係を結ぶ接点として兄弟姉妹とその配偶者は重要な意味をもっている。

以下では、各会首の家族関係について聞き書きで得られた情報をメモしておく。上記の2つの資料と、後に続く家系図を適時あわせて参照していただきたい。

第四会首

第四会首の法維はZ子清、妻のP氏二娘はP貴秀。法財が加職され、法明が補充されている。法財は子清の父のZ貴生、法明はその父である（家系図①）。

貴生は子清が4歳の時すなわち1945年に度戒を受けたという。一方、兄の子風は既に他界しているが、生前に度戒を受けていたと子清はいう。であれば、貴生はこの機会に加職されていたはずであり、2008年の加職と矛盾する。

子清には1男1女がある。新古には男子2名あり、満英には2男2女がある。娘の夫である生古は入婿である。息子家族が健在であるのになぜ入婿が求められたのか確認する必要がある。

第十一会首

第十一会首の法宝はZ天星、妻のZ氏一娘はZ新秀。加職・補充に記名が無く、『醮壇人民単』にも上位世代の記載がないことから、対象者がいなかったようである（家系図②）。

しかし、父の基古は生前に度戒を受けていなかったと天星はいう。天星には紅仔という兄があり、1995年の第九会首であつ

た。この機会に基古は平度されたと考えられる。であれば、2008年には加職の対象者となるはずであるが、なぜ加職覧が空白なのかは不明。

第五会首

第五会首の法余（魚）はZ仁古、妻のP氏二娘はP運香。「伝度対象者一覧」下段の法雲が仁古の父のZ発古、中段の法貴は発古の父である。両者とも度戒を受けずに他界したため、仁古と同時に度戒を受けた。先に触れた平度である。ただし、発古の妻であるZ氏一娘すなわちZ運紅は存命中で、度戒儀礼に参列している（家系図③）。

加職された法旺、補充された法堂は、『醮壇人民単』の記載から推察されるように、仁古の曾祖父と高祖父である。直近上位2世代が度戒レベルにとどまったため、加職・補充が繰り上がったことになる。

発古が家主であった時代のZ家の構成は、仁古が携帯してきた木箱（机の引出）に記載がある。これを生年板という。

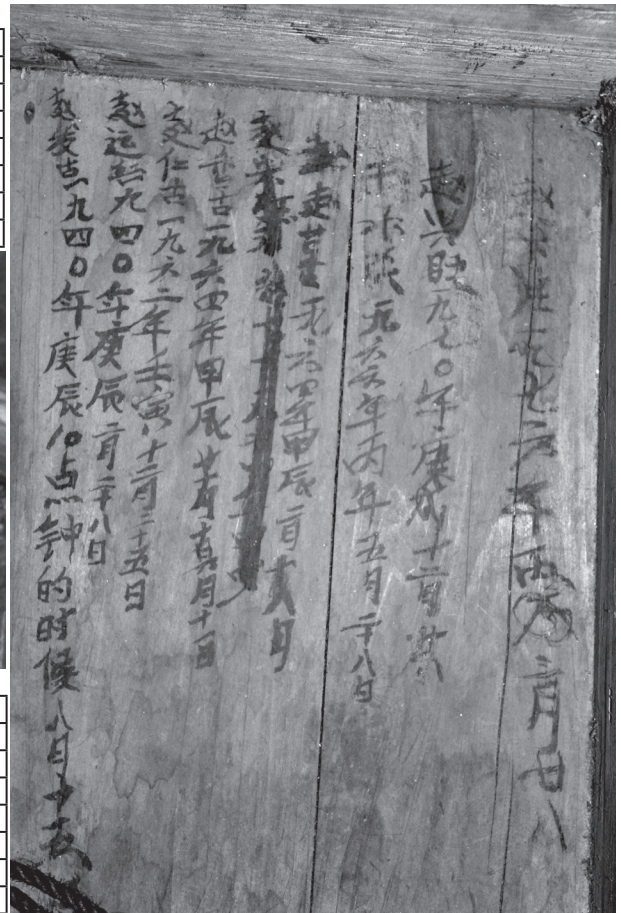
(左) 第五会首の生年板 (A)

当家人	老大	趙發古	原命生	於辛巳年	八月十五日
發古妻	老二	趙運紅	原命生	於辛巳年	二月廿六日
兒子	大老	趙壬古	原命生	於壬寅年	十二月廿五日
	老二	趙喜古	原命生	於甲辰年	十月十五日
	大女子	趙水英	原命生	於丁未年	五月廿日
	老四	趙興旺	原命生	七〇年	十二月初八日
	老五	趙福參	原命生	七六年	二月初九日
[枠外]		趙炳秀	一九八七年	?命	十一月廿八日



(右) 第五会首の生年板 (B)

趙??	一九七六年	丙辰	二月廿八
趙興旺	一九七〇年	庚戌	十二月??
趙水英	一九六六年	丙午	五月二十八日
趙??	一九六四年	甲辰	二月十八日
趙?古	一九六四年	甲辰	??月十一日
趙仁古	一九六二年	壬寅	十二月二十五日
趙運紅	一九四〇年	庚辰	二月二十八日
趙發古	一九四〇年	庚辰	10点鐘的時候八月十五日



第二会首

第二会首の法右（佑）はZ生財、妻のP氏一娘はP火秀。加職された法天（添）は生財の父の八生。度戒は生前に受けていた。補充された法保は八生の父である（家系図④）。

生財は掛三燈を済ませていなかったため、度戒儀礼の最中にこれを受けている。法名は婚礼時の拝堂で得ていたという。

生財には春秀という姉がいるが、その夫の貴生は養老郎であるという。

第八会首

第八会首の法青（音）はF基華、妻のZ氏一娘はZ克妹。法銀が加職され、法保が補充されているが、『醮壇人民単』には上位世代の記名がない。書表師と同一家系であるため、備忘する必要がなかったからであろうか（家系図⑤）。

法銀は基華の父のF富金（生古）、1989年の第二会首である。法保はその父だが、Z姓なのは彼が入婿であったためである。

法保は独息子（子?）であったためF家に「帶來香火」つまり家先を持ち込んだ。F氏一娘との間にできた子供はF富金のみであったことから、この世代ではZ姓は潜在し、次世代になって基華の弟の富古が顕在化させた。Z姓の継承に必要であつ

たので、分家の際に兄に先んじて掛燈したという。一方、基華は度戒まで掛燈の機会がなかった。兄弟の「分家」ではなく、弟が「分出」したということのようである。

富金の長女は入婿をとっている。基華によれば、理由は、彼女が結婚した時、基華も富古も幼かったため、夭折時に備えたのだという。基華によれば、これは養老郎であったが、やがて、この姉夫婦は夫の実家に転居した。すなわち做郎轉した。結局、その家の貧しい暮らしに嫌気がさして離婚し、その後再婚している。

Z富古の分家は1991年であった。それまでは兄弟は同居していたが、家屋に向かって左手が兄の家族、右手が弟の家族という棲み分けであった。その意味は、兄の家族が本来の台所を使うことになるのだという。基華は2006年の動脚嶺組のF家(書表師・証明師)の還家願儀礼において厨房長を担当していたが、彼が左手にある台所で「菜」を準備したのに対し、右手の台所では当家の女性が「飯」を炊いていた。前者が兄(証明師)家族の使う本来の台所であり、後者は弟(書表師)家族が使う増設された台所であったのだという。

富古の分家後もその家屋は基華の家と傾斜地の上下に隣接し、父の食事は兄、母の食事は弟の家で賄った。この富古の屋敷は、書表師や証明師の父であるF天昌の屋敷跡である。売買であったが、両者が同一系統であったことも関係しているようである。すなわち、基華の祖母であるF氏一娘は天昌の姉妹にあたる。入婿のZ法保は一時期、天昌と同居していたであろう。1950年代末になって、天昌が子供たちを連れて動脚嶺組に転居したのであった(家系図⑥および「度戒参加者の相互関係」参照)。この家族は2006年の還家願で分家しているが、その際には栄勝の子である秀輝と、栄軍の子である秀海の掛燈がおこなわれた(廣田律子「ヤオ族還家願儀礼調査ノート」吉田敦彦・栗原成郎ほか(編)『神話・象徴・文化Ⅱ』、楽浪書院、2006年、213-246頁)。

第七会首

第七会首の法壇はP清発、妻のP氏三娘はP五妹。法広が加職され、法添が補充されている。法広(官)は清発の父のZ老二。生前に度戒を受けていた。Z姓なのは入婿であったため。法添は清発の祖父であろうが、老二の父か、P克妹の父かは未確認(家系図⑦)。

源峰のP家は、五妹を通じて九疑山郷茶羅村のP家と縁戚関係にある。度戒儀礼終了後に第七会首宅の祝宴で、引度師や坐壇師徒弟の寛いだ姿が見られた。

庚華は儀礼に関する知識を父の日古から継承した。その前は祖父の法清、そして曾祖父の法都と連なる4代にわたる法師だという。本来は運保が継承すべきであったが早世したため、オイの珍旺に伝授している最中という。

第一会首(大会首)

第一会首は「伝度対象者一覧」の中段の法有で、F万古である。妻のZ氏四娘はZ満妹。『醮壇人民単』には「陰平度 F法旺 F法亮」という追記がある。法旺は万古の父の栄富、法亮は万古の兄の才友である(家系図⑧)。

万古の兄弟はみな肺結核で早世している。才友は最近亡くなった。その息子の戦華は自身の度戒とともに父の平度を希望していたが、万古・戦華のオジオイ夫婦が家を空けると、度戒後の祝宴の準備ができなくなるという理由で、万古が戦華の代わりに法亮を平度することになったという。ただし平度の費用を負担したのは戦華である。兄弟が平度の対象となりうるこがわかる例である。

加職された法禄は万古の祖父、補充された法罡は曾祖父である。

第三会首

第三会首の法財は日古、妻のL氏一娘は見妹。法興が加職され、法良が補充されている。日古は入婿であり、法興は見妹の父のL子輝、したがって法良は妻の祖父である(家系図⑨)。

保挙師のL卯古は見妹の弟である。1995年の第二会首であり、この時に父の子輝を平度している。つまり、子輝は実子に度戒され、養子に加職されたことになる。『醮壇人民単』にはこの世代が抜けているが、これは妻のP金秀が存命中であり、この夫婦が家先単に記載されていないためであるという。金秀は祭場に現れなかったが、存命中に加職されたことになる。

第十会首

第十会首の法禄はP求保、Z氏一娘は現妻のZ石秀、P氏一女は先妻。法順が加職され、法明が補充されている。法順

は求保の実父のP進雲である。法明はその父であろう。ただし、現在、求保は黄竹更に妻方居住している。F基華（八会首）によれば、加職・補充を生家の祖先におこなったことは一種の做郎轉であるという（家系図⑩）。

Z石秀は仙女（qie fen ci mei）である。夢を介して神霊と直接交信するという。師伝がなく、多くは女性であるが、荊竹に1人男性がいる。類似のカテゴリーに卦婆（o bo guan）があり、師伝があり全て女性である。巫婆ともいう。

石秀の父の子風は1989年には引度師を、1995年には主醮師を務めた有力な法師であった。子風は母方オジに育てられたため、幼少期には「P」子風と名乗っていた。H興妹の養老郎となるが、H家の親が亡くなると黄竹更に戻ってZ姓に服した。子風の1男3女はすべてZ姓であるが、彼には実父のZ姓のほかに養父のP姓と入婿先のH姓が潜在的にある。子どもたちに適当に分有させるべきであるが、還家願をしていないので、まだ別けていない（家系図⑪）。

石秀を含めて女子は全て入婿を迎えている。長男の生亮が病弱なことも一因のようだが、彼は結婚して子供もいる。

石秀は黄竹更のZ家に属し、主醮師の金仔のイトコにあたる。儀礼に関する金仔の知識は大部分がオジの子風から伝わったものである。

金仔には3人の弟と1人の妹がいる。うち弟2人は妻方居住している。養老郎だが、金仔が健在であるので、恐らくは黄竹更に戻ってはこないだろうという（家系図⑫）。

第六会首

第六会首の法官はZ子華、妻のP氏一娘はP桂英。ただし、『醮壇人民単』の記載からは、無記名ながらも先妻があったことがわかる。法秀を平度し、法言を加職し、法貴を補充している。法秀は父のZ天得である。法言は祖父、法貴は曾祖父であろう（家系図⑬）。

子華は未だ掛三燈をしていなかったのので、2008年の度戒儀礼中にこれを受けている。その父の天得も生前に掛三燈をしていなかった。平度を受けるにあたり、掛燈が必要とされたのか、子華の掛燈中に父の掛燈も含まれたのかは未確認。

子華の息子の貴仔は体が不自由だが、3万円の婚資で雲南省より漢族の妻を迎えた。

一方、娘はP堂仔を養老郎に迎えている。堂仔には3人の姉妹がいるが、うち2人は入婿をとっている。つまり、このP家は男子を婿に出して、女子に婿を迎えていることになる。

第九会首

第九会首の法維はF貴友、妻のP氏一娘はP月英。「伝度対象者一覧」の法禄は貴友の父のF林保、法青（音）は祖父のZ天財である。後者がZ姓なのは母方の祖父だからである（家系図⑭）。

天財は、ひとり娘であったF寸妹に入婿し、1男3女をもうけた。長女と次女は婚出し、三女の基妹がF家を継いだ。彼女たちの弟の庚古が父のZ姓を継いでいる。

加職された法言と、補充された法傳は、順当に考えるならば、寸妹の上位2世代であるが、『醮壇人民単』の記載は両者の世代順が逆転している。

貴友は「家先単」を祭場に携帯しており、これが『醮壇人民単』に転写されたと考えられる。次頁の（A）と（B）を確認できたが、やはり世代順は逆転している。加えて、「P」法言、「Z」法傳というように、この2世代もF姓ではないことがわかる。

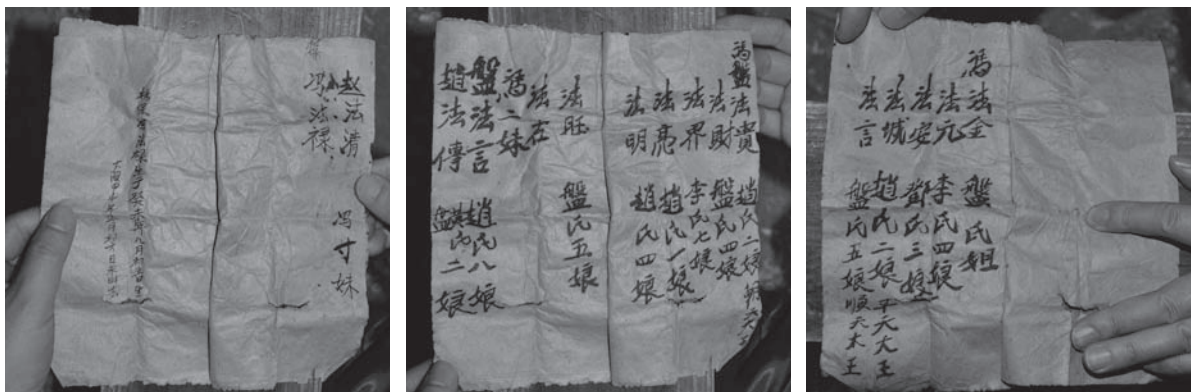


写真 九会首の家先単（A）

第九会首家先単 (A)		第九会首家先単 (B)	
馮法金	盤氏姐		
法元	李氏四娘		
法安	鄭氏三娘		
法城	趙氏二娘	平天大王	「娘」追記
法言	盤氏五娘	順天大王	
馮法貴	趙氏二娘	朝天大王	
法財	盤氏四娘		「?? 大将」
法界	李氏七娘		
法亮	趙氏一娘		
法明	趙氏四娘		
法旺	盤氏五娘		
法右			「法右紅」
馮二妹			ペン「女」追記
盤法言	趙氏八娘		「趙氏娘」
趙法傳	黃氏二娘		
趙法清	馮寸妹		ペン「盤氏二娘」
馮法祿			
			「趙姓」追記
林保馮法祿生? 癸未年八月初五日生			
大? 甲申年正月初六日未明去			

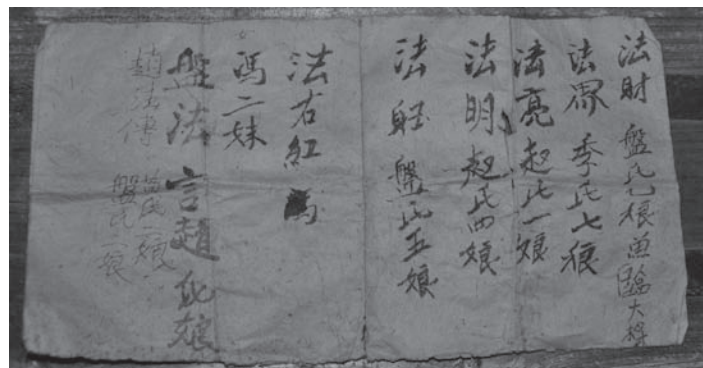


写真 九会首の家先単 (B)

第十二会首

第十二会首の法旗はP保古、妻のP氏一娘はP木秀。『醮壇人民単』には「Z」法旗とあるが、誤記だという。法保と法用が平度されている。法保は父のP運貴、法用は祖父のP老大である（家系図⑬）。

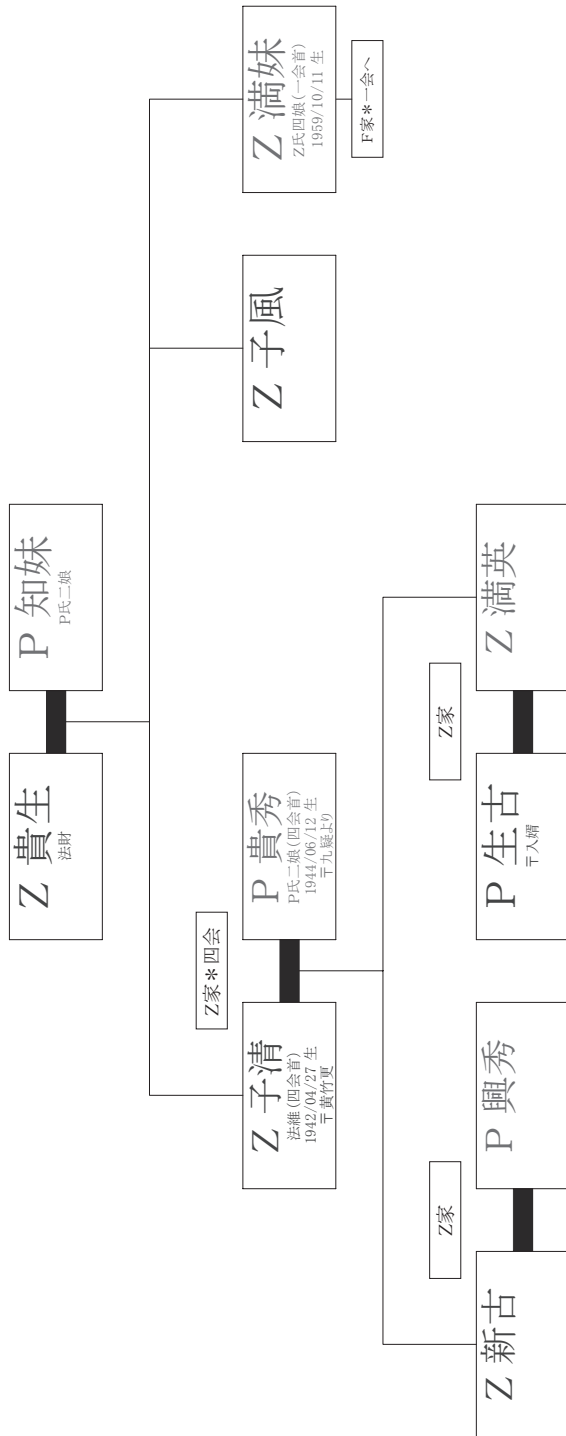
「伝度対象者一覧」によれば、三苟が加職され、法興が補充されている。三苟は明らかに法名ではなく、既婚であるが、拝堂や掛燈などの機会をもたなかったと考えられる。法興はその上位世代であろうが、『醮壇人民単』には妻の記載がない。また、これらのZ姓がP姓の誤記かどうかは不明である。

おわりに

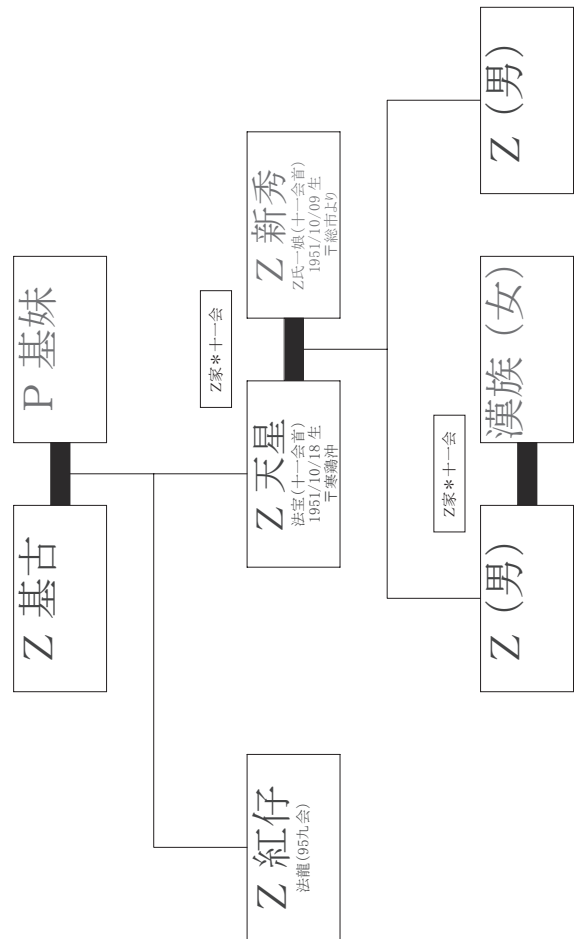
主な儀礼参加者の同定を重ねることで度戒をめぐる人的関係網の存在が浮かび上がる。それが出自にもとづいた関係でないのは勿論であるが、一方で、地縁に関する明確な基準が存在するわけではない。むしろ明瞭にみてとれるのは、一定の地理的範囲のなかに展開したものではあるが、兄弟姉妹と婚姻によって水平的に延びる関係の連鎖であった。

このような関係を理解するうえで重要なのは婚姻後の居住形態である。夫方居住が理想とされているが、妻方居住の例が予想外に多く認められる。このような多様性は他地域の瑶族の研究において夙に関心をひいてきた。この報告では「入婿」という曖昧な概念を用いざるを得なかったが、以下の4点を指摘しておく。(1) 兄弟が家先と姓を継承していても姉妹に入婿が迎えられることが少なくない。(2) このような場合に入婿を迎えるのは妹よりも姉が多い。(3) 兄弟が入婿に出てしまい、姉妹が入婿を迎えて家先を継承することもある。(4) 夫婦に子供がいない場合には養取がおこなわれるが、男子よりも女子が好まれる。これらの現象の説明は出自観念とは別の次元に求められなければならないことは明らかである。これまでの研究が着目してきたように、居住形態の多様性を生む要因は婚資の支払いと世帯労働力の確保との駆け引きにあると予想される。

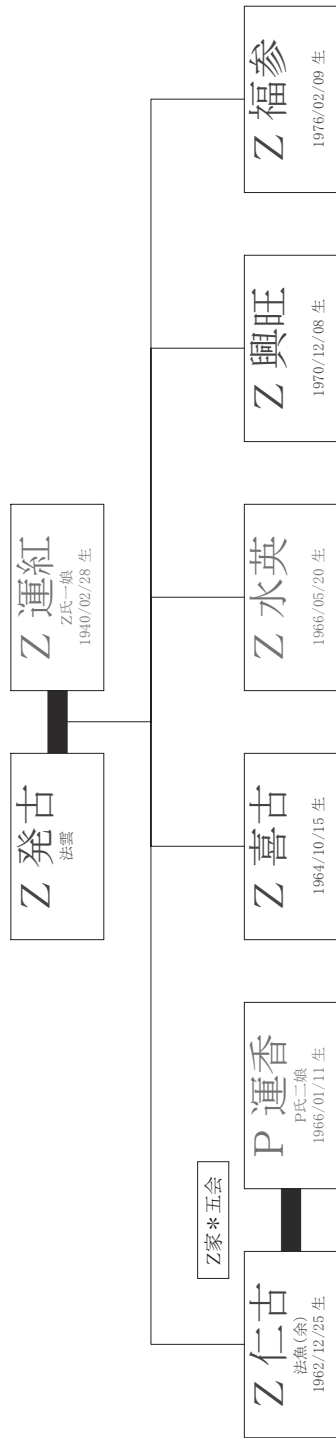
分母が定まらないのに特定の現象の多少を評価することにはそもそも無理があるが、世帯調査が許されない現状においては祭場での聞き書きを提示することも全く無意味ではないと考えて以上を記した。上記の点を中心に今後の調査で明らかにしていきたい。



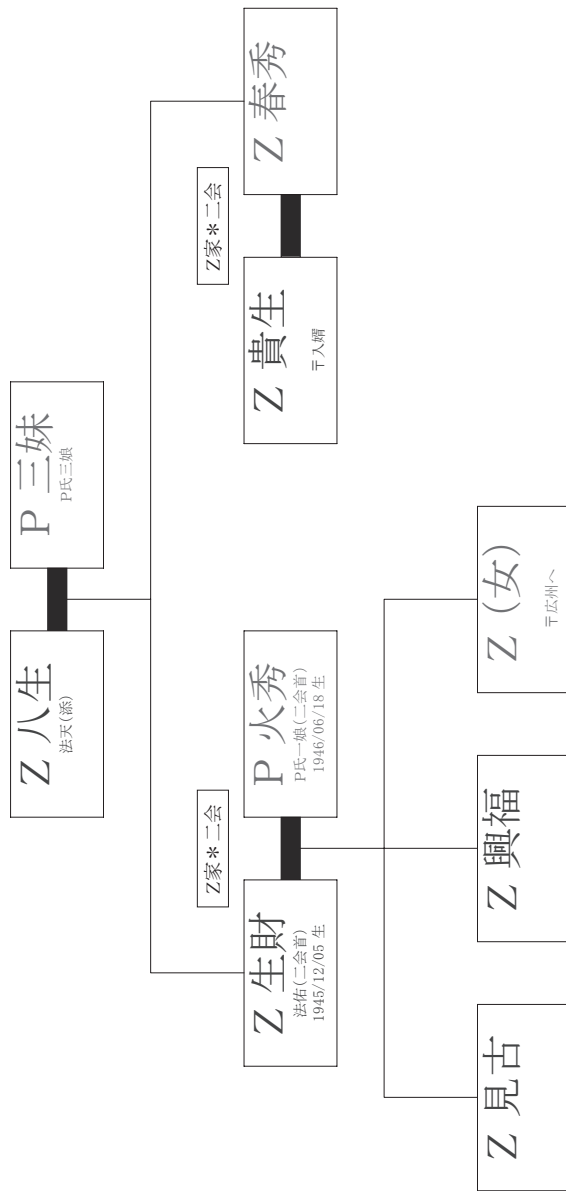
家系図① 第四会首の家族



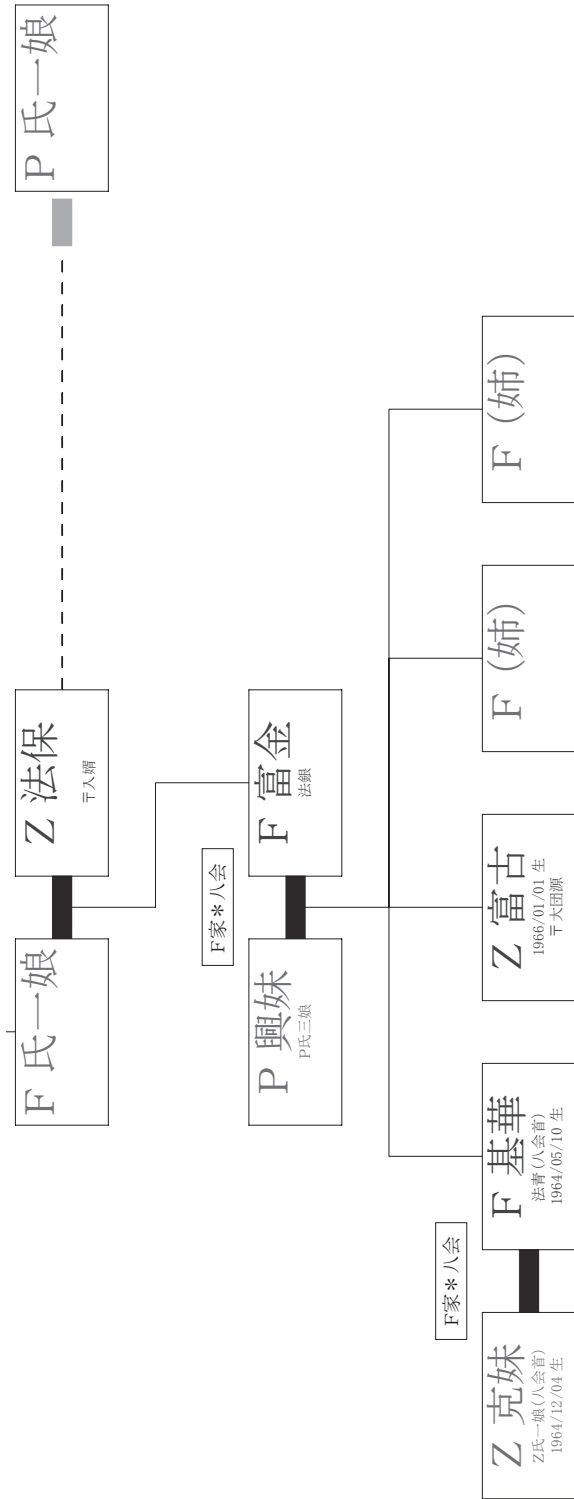
家系図② 第十一会首の家族



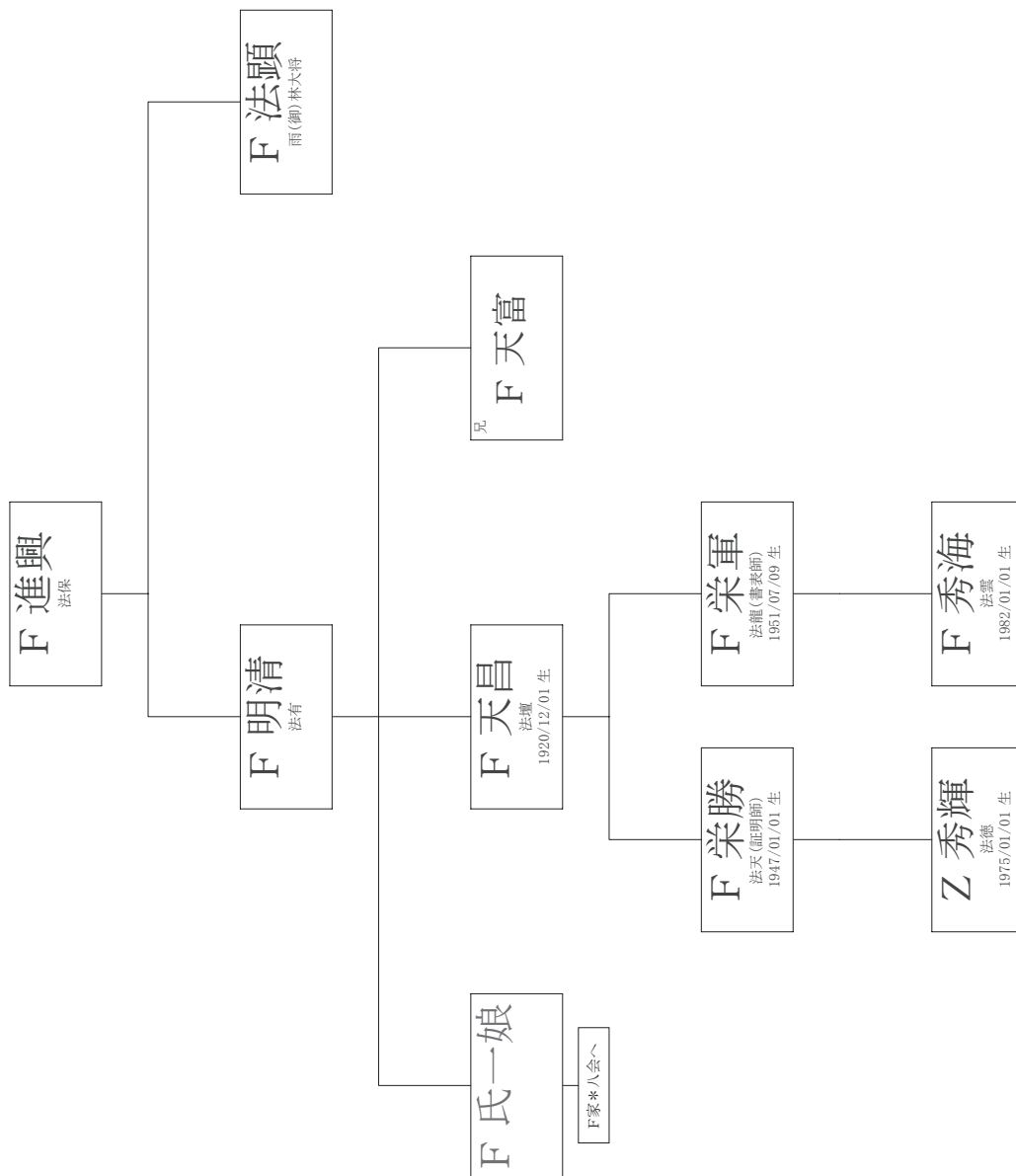
家系図③ 第五会首の家族



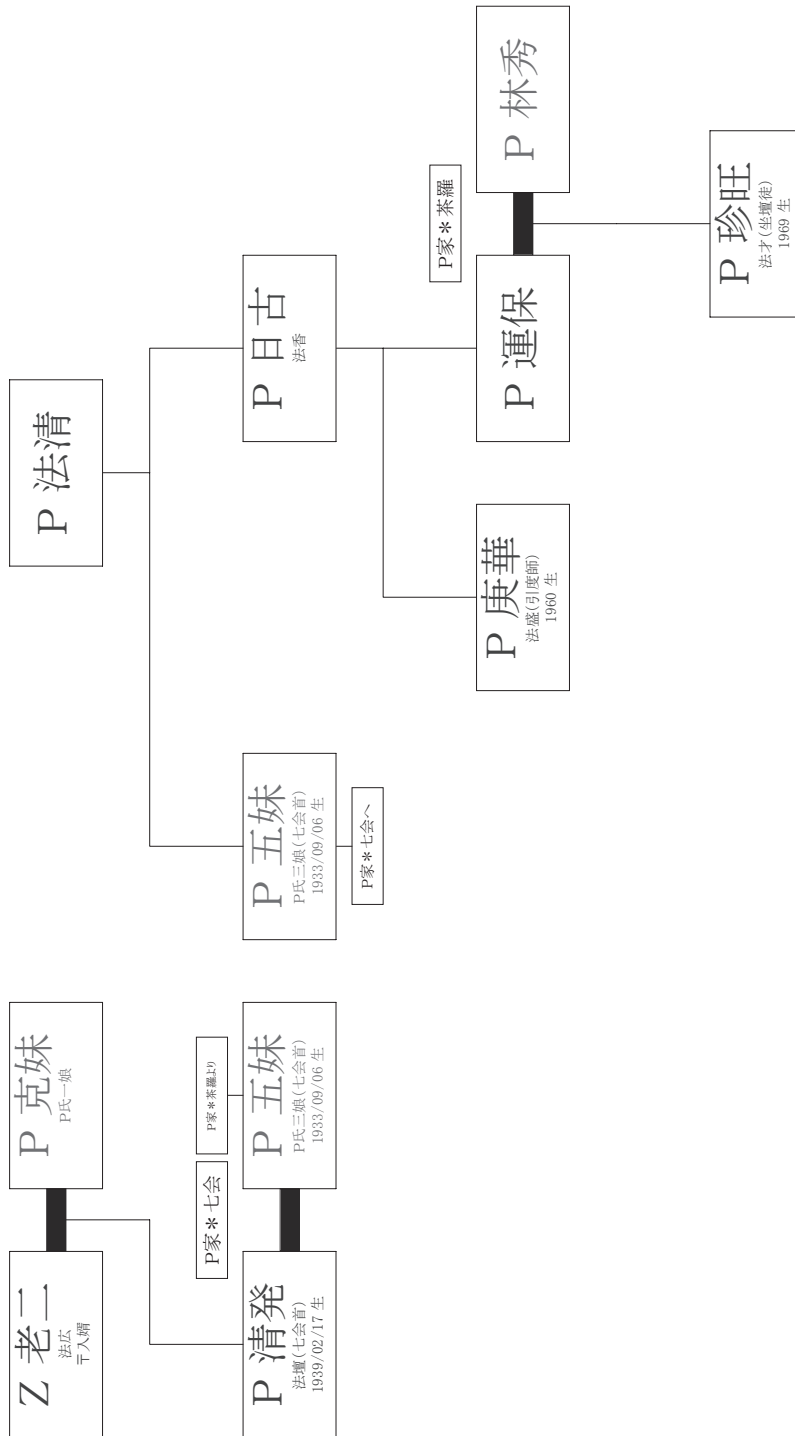
家系図④ 第二会首の家族



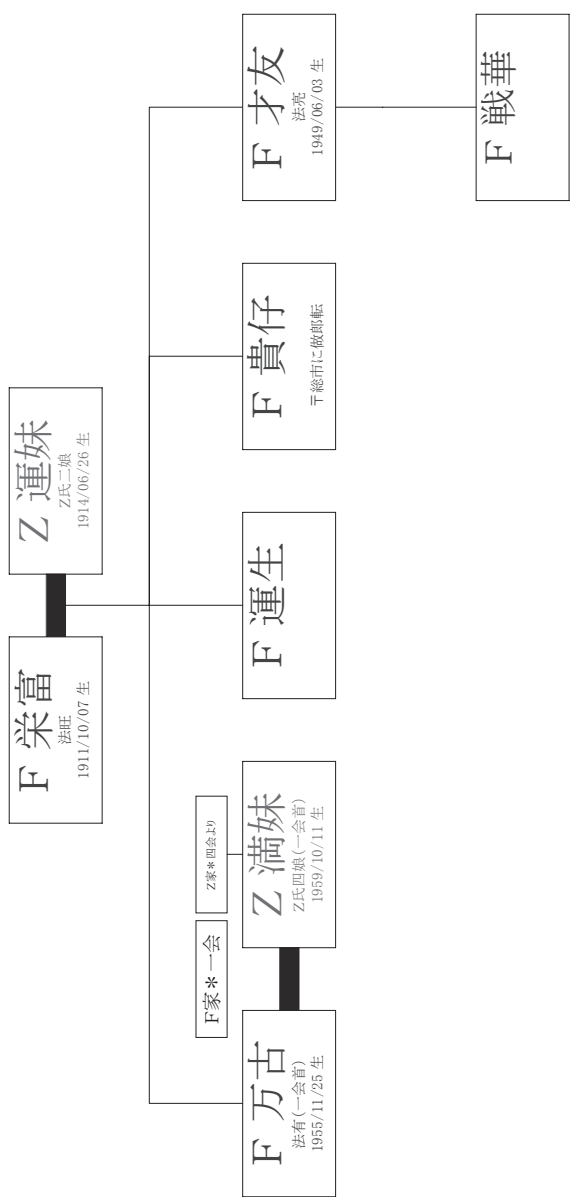
家系图⑤ 第八会首の家族



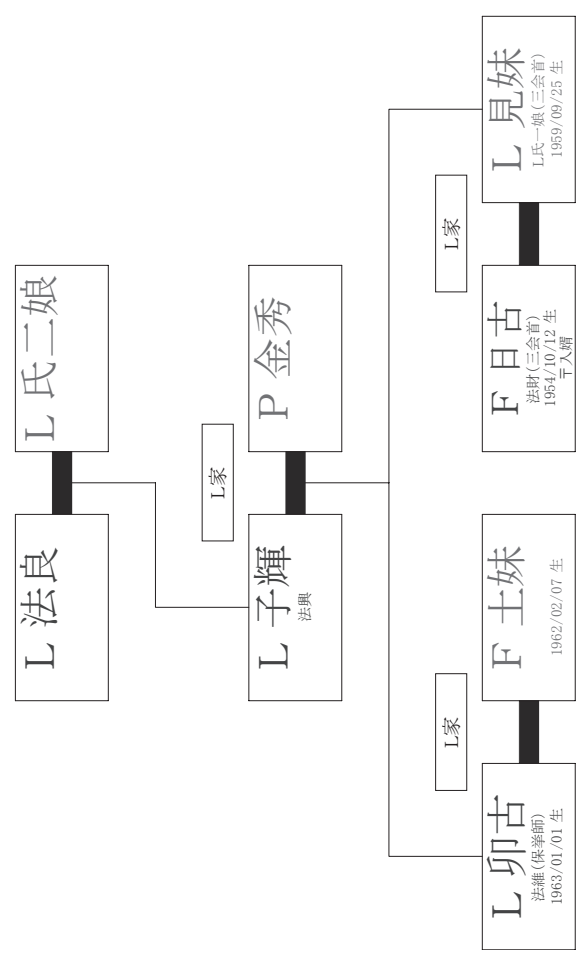
家系図⑥ 動脚嶺のF家



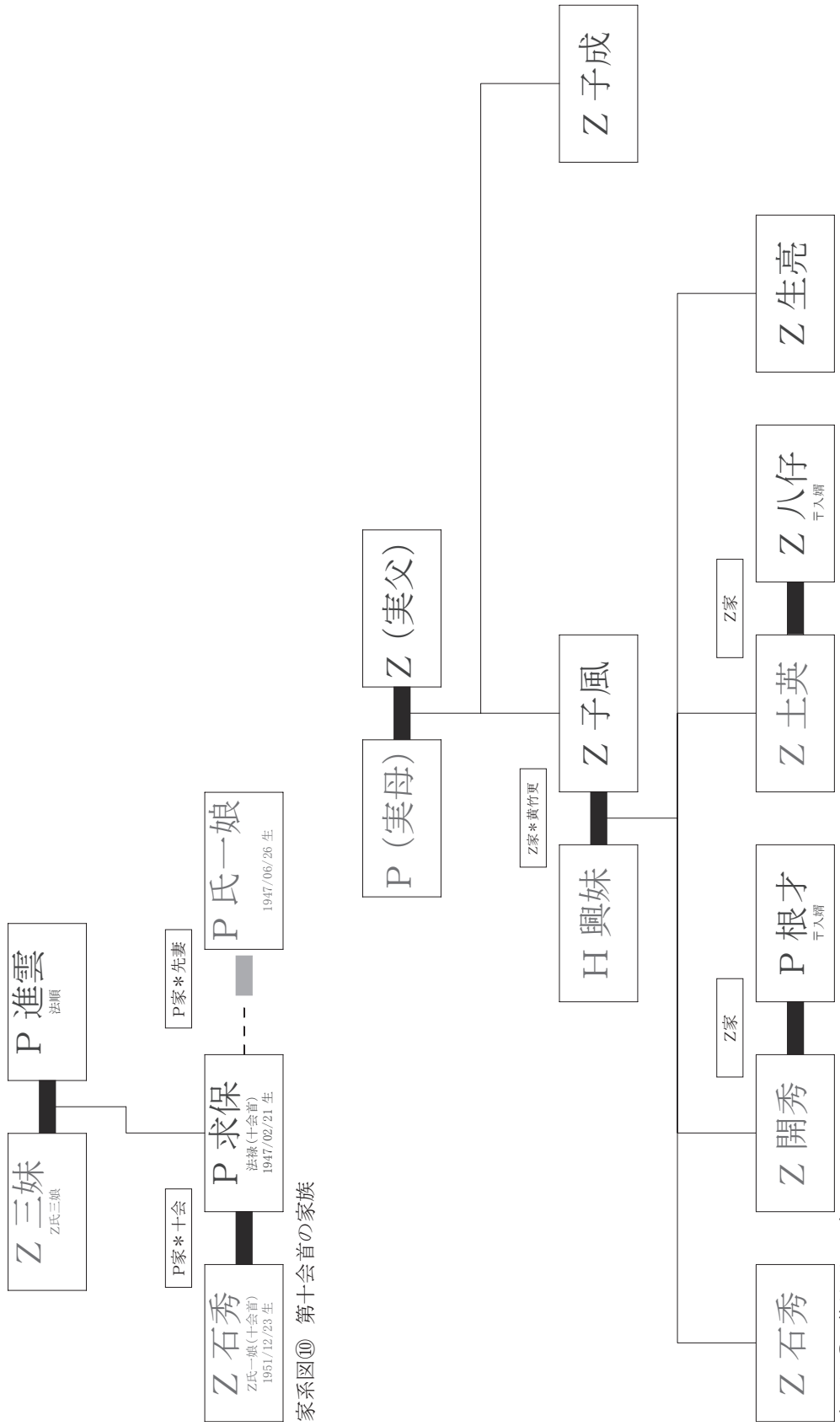
家系図⑦ 第七会首および引度師の家族

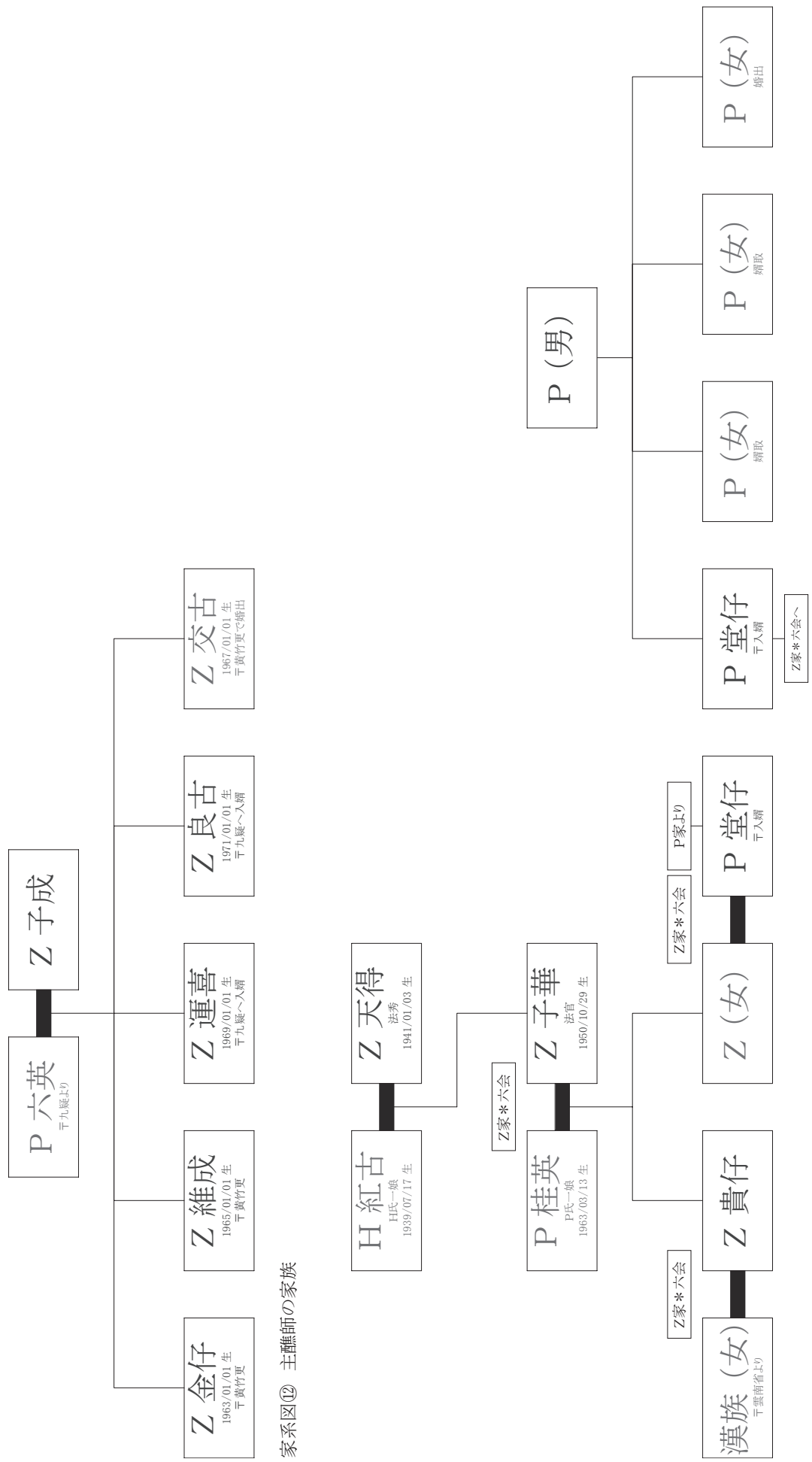


家系図⑧ 第一会首の家族



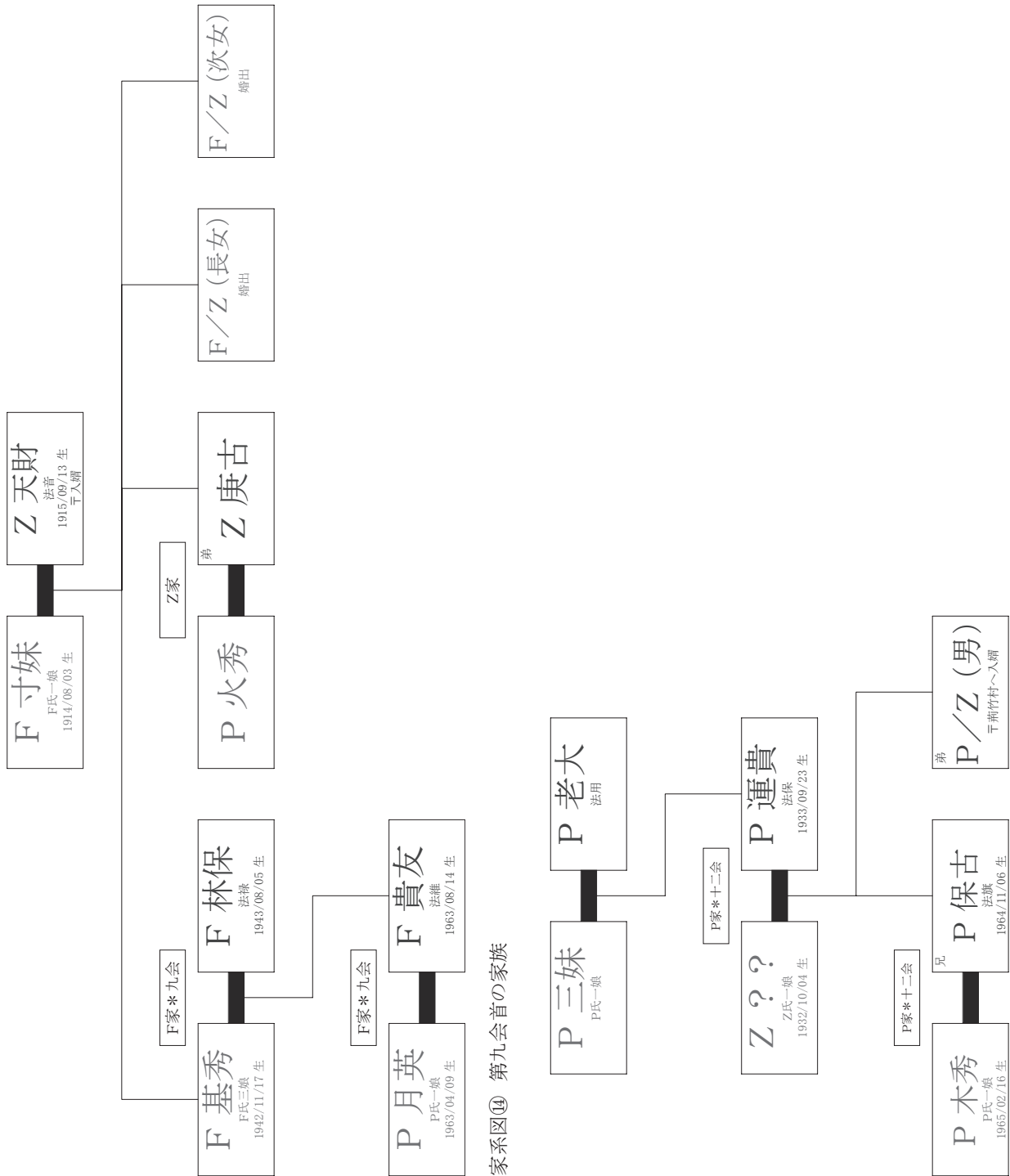
家系図⑨ 第三会首の家族





家系図⑫ 主 嚮 師 的 家 族

家系図⑬ 第 六 会 首 的 家 族



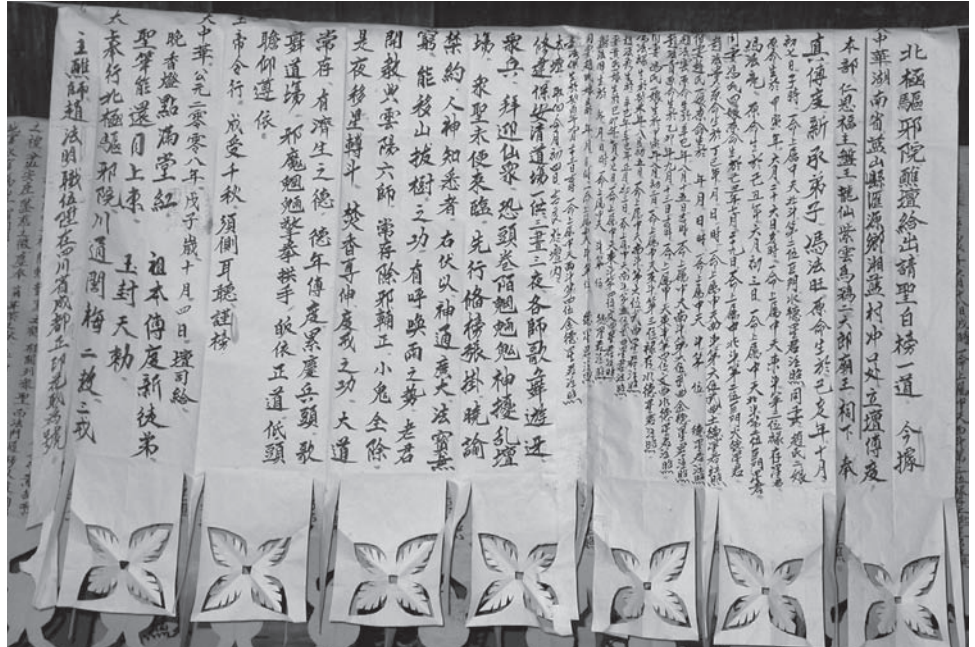
家系図⑭ 第九会首の家族

家系図⑮ 第十二会首の家族

文献に見る盤王伝承

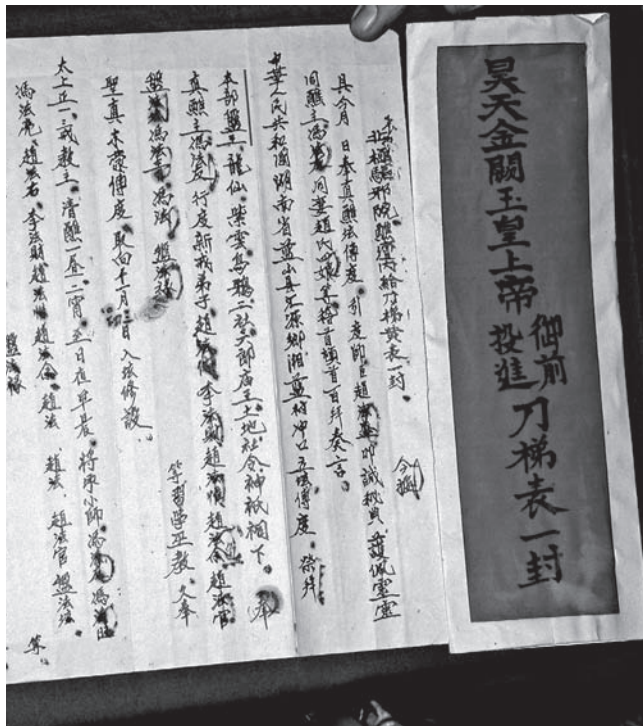
神奈川県経営学部教授
ヤオ族文化研究所所長
廣田 律子

盤王とはという問いに⁽¹⁾、小学校の元教員で法事を行なうこともできる盤金幸は「盤護(瓠)は盤古の一つの名である」と答えている。宗教者であり知識人である盤金幸は創世神話の盤古と龍犬盤瓠(槃瓠)を同一のものとして解釈しようとしていることが分かる。今回調査で収集した文書及びテキストから、盤古、槃瓠さらに第三の盤王の事例を加えて考えてみたい。盤王は祖先神であり先祖の移動経路を表わすかのように西天福江の地に生まれたとされ生業と結び付きが深いと理解されている事例が見出せたのである。

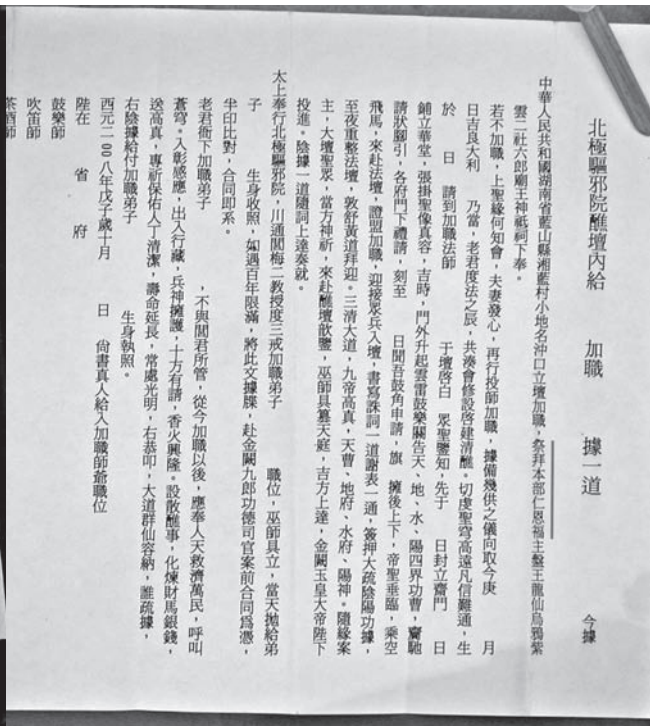


図① 白榜

まず度戒儀式で使用されるテキスト及び文書の中に現われる盤王を拾い上げてみる。テキストは儀礼の中で読誦され、神々の素性、儀礼の内容、呪術的な文言等が綴られている。文書は儀礼の目的、内容、受礼者、祭司等が綴られ儀礼の中で神々に向かって発行され、多くは燃やされ、榜・表・引・疏・據・牒・硃詞等に分類されるものである。



図② 刀梯表



図③ 加職據

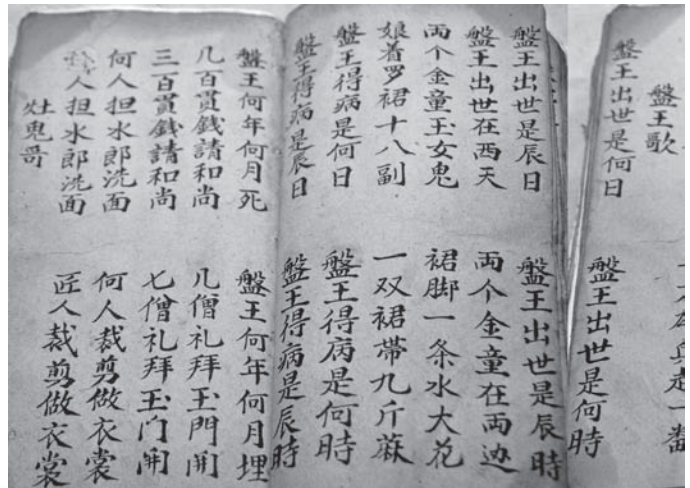
(1) 鄭長天『瑶族坐歌堂的結構与功能』p.214

文書の中で白榜・刀梯表・加職據（図①②③参照）の最初の部分に「祭拜仁恩福主 本部 盤王 龍仙 紫雲 烏鴉 二社 六郎廟王 社令土地神祇祠下奉」とある。儀礼を行なうにあたって当地の重要な廟の神々に儀礼の目的や内容や参加者について報告するのである。最初に盤王の名が見える。文革前までは村に盤王廟があったことが聞き書きの中でも確かめられている。

上光儀礼の中で使用されるテキストには「盤王歌」が載せられており、祭壇前で宗教者の弟子達が右手に鈴、左手に笏と杯をもって居並ぶ中、宗教者はテキストをフシを付け読誦する。「盤王歌」を二種のテキストで示す。

「盤王歌」(図④参照)

盤王出世是何日	盤王出世是何時
盤王出世是辰日	盤王出世是辰時
盤王出世在西天	两个金童在兩邊
两个金童玉女鬼	裙脚一条水大花
娘着羅裙十八副	一双裙帶九斤麻
盤王得病是何日	盤王得病是何時
盤王得病是辰日	盤王得病是辰時
盤王何年何月死	盤王何年何月埋
几百貫錢請和尚	几僧禮拜玉門開
三百貫錢請和尚	七僧禮拜玉門開
何人担水郎洗面	何人裁剪做衣裳

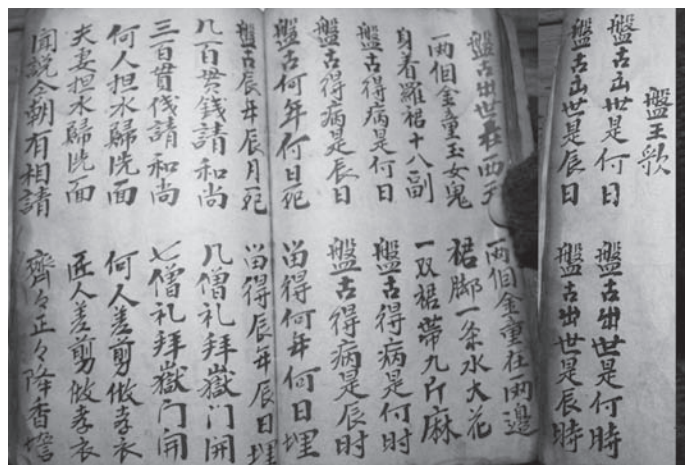


図④ 盤王歌

盤王は何日に生まれたのか	盤王は何時に生まれたのか
盤王は辰の日に生まれた	盤王は辰の時刻に生まれた
盤王は西天に生まれた	二人の金童が両側に控える
二人の金童玉女鬼だ	スカートの裾に水が流れ花が咲く
娘は絹のスカートを一八重ねて着る	一枚のスカートは九斤の麻
盤王は何日に病気になったのか	盤王は何時に病気になったのか
盤王は辰日に病になり	盤王は辰の刻に病になった
盤王は何年何月に死んだのか	盤王は何年何月に埋葬されたのか
何百貫の錢で和尚を頼んだのか	何人の僧が玉門を開くように拜んだのか
三百貫で和尚を頼み	七人の僧が玉門を開くように祈った
誰が顔を洗う水を汲んで来るのか	誰が布を裁ち服を作るのか

「盤王歌」(図⑤参照)

盤古出世是何日	盤古出世是何時
盤古出世是辰日	盤古出世是辰時
盤古出世在西天	兩個金童在兩邊
兩個金童玉女鬼	裙脚一条水大花
身着羅裙十八副	一双裙帶九斤麻
盤古得病是何日	盤古得病是何時
盤古得病是辰日	盤古得病是辰時
盤古何年何日死	盘得何年何日埋
盤古辰年辰月死	盘得辰年辰日埋
几百貫錢請和尚	几僧禮拜嶽門開
三百貫錫請和尚	七僧禮拜嶽門開
何人担水歸洗面	何人差剪做孝衣



図⑤ 盤王歌

夫妻担水歸洗面
聞説今朝有相請

匠人差剪做孝衣
齊々正々降香壇

盤古は何日に生まれたのか
盤古は辰の日に生まれた
盤古は西天に生まれた
二人の金童玉女鬼だ
娘は絹のスカートを一八重ねて着る
盤古は何日に病気になったのか
盤古は辰日に病になり
盤古は何年何日に死んだのか
盤古は辰年辰月に死に
何百貫の銭で和尚を頼んだのか
三百貫で和尚を頼み
誰が顔を洗う水を汲んで来るのか
夫妻が顔を洗う水を汲み
今朝招請を聞き

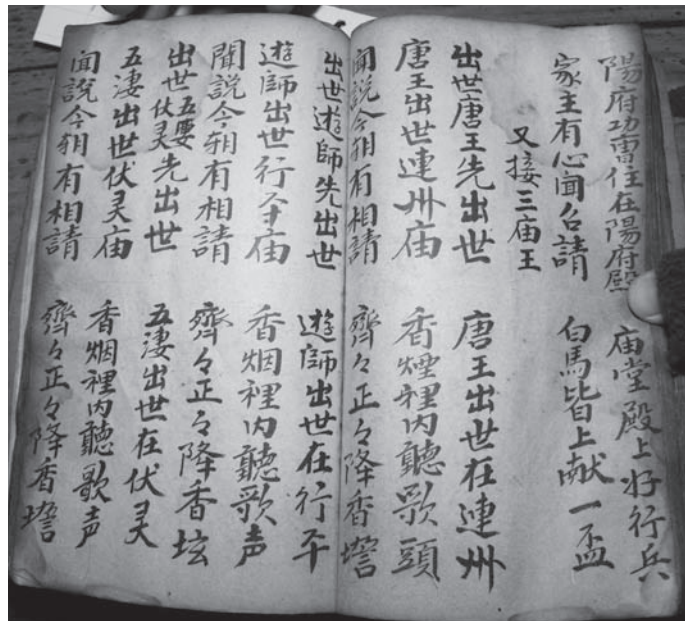
盤古は何時に生まれたのか
盤古は辰の時刻に生まれた
二人の金童が両側に控える
スカートの裾に水が流れ花が咲く
一枚のスカートは九斤の麻
盤古は何時に病気になったのか
盤王は辰の刻に病になった
盤古は何年何日に埋葬されたのか
辰年辰日に埋葬された
何人の僧が嶽門を開くように拝んだのか
七人の僧が嶽門を開くように祈った
誰が布を裁ち喪服を作るのか
職人が喪服を作る
整然と祭壇に集まれ

先の方は盤王、次の方は盤古としており、盤王と盤古は混同されている。盤王は、生まれ日時、病気になった日時、死んだ日時及び埋葬された日時が全て辰の日・時とされ、西の方向と結び付けられている。

その他のテキストに収められた盤王の記述を挙げる。

「又接三廟王」(図⑥参照)

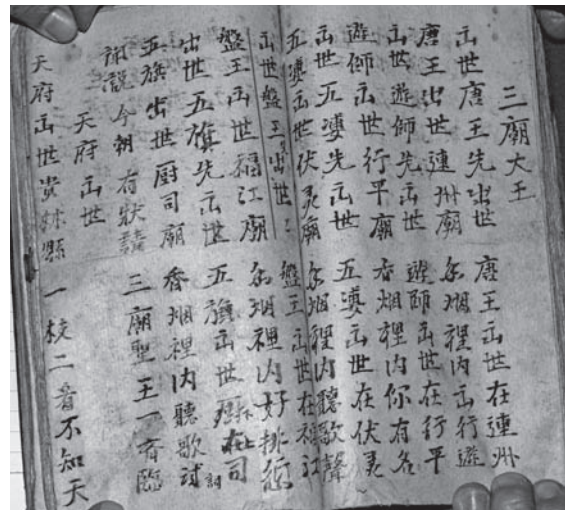
出世唐王先出世	唐王出世在連州
唐王出世連州廟	香煙裡内聽歌頭
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世遊師先出世	遊師出世在行平
遊師出世行平廟	香烟裡内聽歌声
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世五婆(伏靈)先出世	五婆出世在伏靈
五婆出世伏靈廟	香烟裡内聽歌声
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世盤王先出世	盤王出世在福江
盤王出世福江廟	香烟裡内听歌堂
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世五旗先出世	五旗出世厨司
五厨出世厨司廟	香烟裡内听歌其
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇



図⑥ 又接三廟王

唐王がまず生まれる	唐王は連州に生まれる
唐王は連州廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
遊師がまず生まれ	遊師は行平に生まれる
遊師は行平廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる

今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
五婆伏霊がまず生まれ	五婆は伏霊に生まれる
五婆は伏霊廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
盤王がまず生まれ	盤王は福江に生まれる
盤王は福江廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
五旗がまず生まれ	五旗は厨司に生まれる
五旗は厨司廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する



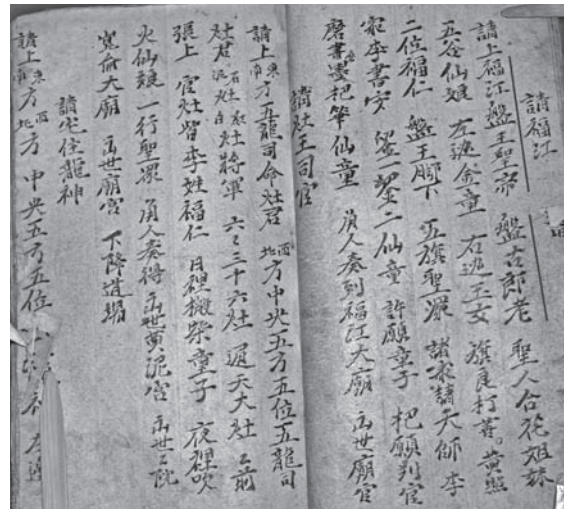
図⑦ 三廟王

盤王は唐王・遊師・五婆・五旗と共に廟王として並び、唐王は連州、遊師は行平、五婆は伏霊、五旗は厨司、盤王は福江にそれぞれ地名と結び付けられている。

「三廟大王」にも唐王が連州に、遊師が行平に、五婆は伏霊に、そして盤王は福江に、五旗は厨司に生まれるとされ、「又接三廟王」と内容を一つにしており、盤王部分は「出世盤王先出世 盤王出世在福江 盤王出世福江廟 香烟裡内好排口」と記述されている（図⑦参照）。

さらに「請福江」では（図⑧参照）、

請上福江盤王聖帝 盤古郎老 聖人合花姐妹 五谷仙娘 左辺玉女 旗良打口 黄照二位福仁 盤王脚下 五旗聖口 諸家諸天師 李口李書安●（劉ーりっとう）一●（劉ーりっとう）二仙童 許願童子 把願判官 磨書墨把筆仙童 口人奏到福江大廟 出世廟官



図⑧ 請福江

とあり、神々の名が並べ立てられ招へいされる中、最初に福江盤王聖帝と盤古郎老が見える。ここでは盤王と盤古は別の神ではあるが近い神として扱われている。

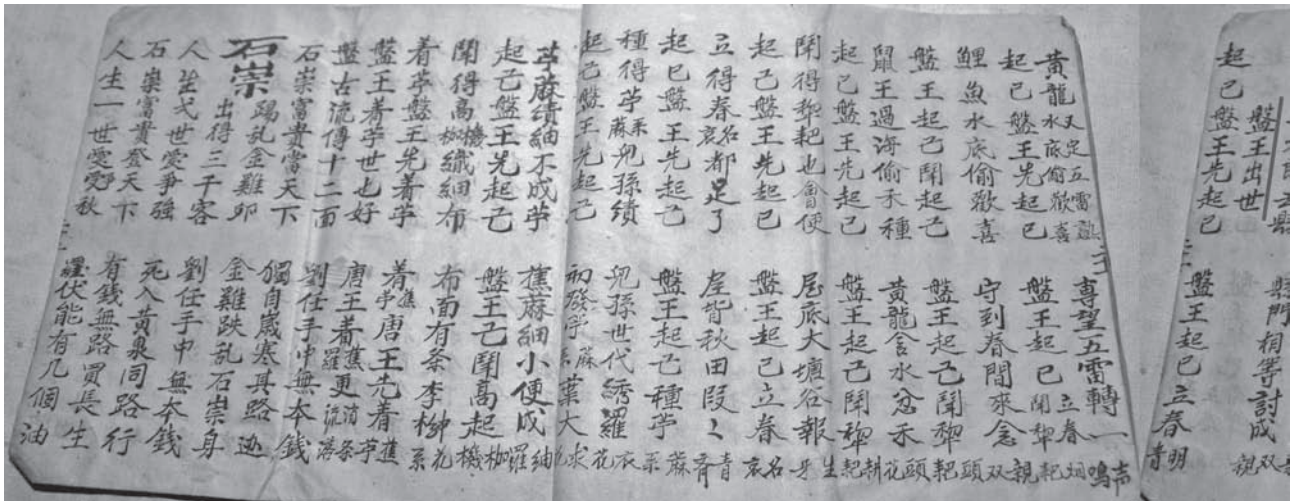
さらに「盤王大歌」の中の盤王出世部分を取り上げる（図⑨参照）。

この「盤王大歌」は度戒儀礼では読誦されず、宗教者としての資格授与及び願ほどこき及盤王への感謝を目的として家単位で実施される還家愿儀礼において、還盤王愿部分で宗教者達によってフシを付け読誦される⁽²⁾。

「盤王出世」	
起已盤王先起已	盤王起已立春明（青）
黄龍又定五雷熟（水底偷歡喜）	專望五雷轉一声（鳴）
起已盤王先起已	盤王起已立春烟（開犁耙）
鯉魚水底偷歡喜	守到春間来念親（双）
盤王起已開起已	盤王起已開犁頭（耙）
鼠王過海偷禾種	黄龍含水瓮禾頭（花）
起已盤王先起已	盤王起已開犁耕（耙）
開得犁耙也會使	屋底大塘谷報生（牙）
起已盤王先起已	盤王起已立春名（哀）
立得春名（哀）都是了	屋背秋田段々青（齊）

(2) 度戒儀礼と同じく湖南省藍山県湘藍村で2006年1月に馮家（度戒儀礼で書表師及証盟師をつとめる）で実施された。報告は「中国湖南省のヤオ族の儀礼に見出す道教の影響—馮家実施の還家愿儀礼調査から—」『東方宗教』110号 2007年 pp.57-81で行なった。

起已盤王先起已	盤王起已種苧麻（系）
種得苧系（麻）兒孫績	兒孫世代綉羅衣（花）
起已盤王先起已	初發苧麻（系）葉大求（花）
苧麻績紬不成苧	蕉麻細小便成紬（羅）
起已盤王先起已	盤王已開高起枷（機）
開得高機（枷）織細布	布面有条樹神花（花系）
着苧盤王先着苧	着蕉（苧）唐王先着蕉（苧）
盤王着苧世也好	唐王着蕉（羅）更消条（流落）
盤古流傳十二面	劉任手中無本錢



図⑨ 盤王出世

盤王がこの世に現われる

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王がこの世に現われたのは明るい立春だった。

黄竜がじつとして、五雷が熱くなる。五雷がもつぱら一声出すのを望む。

黄竜が水底で密かに嬉しくなって、五雷がもつぱら一度轟くのを望む。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王がこの世に現われた頃に、立春の煙が立つ。

鯉が水底で密かに嬉しくなって、春までじつとこもった後に、親しい者に会いたくなる。

この世に現われる盤王は、漸くこの世に現われた。この世に現われた盤王は鋤を作った。

鼠王は海を渡って稲の種を盗んだ。黄竜は水を含んで稲の先にかけて。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王はこの世に現われてから、鋤で田を耕した。

鋤で田を耕すことが良くて、家の側の大きな池の畔に穀物が生えてきた。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王が現われたのは立春の頃だった。

立春になってから、何でも整った。どの家にも、秋に収穫する田は一面青々とした。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王はこの世に現われてから麻を植えた。

植えられた麻は息子や孫によって紡績された。息子や孫は代々薄い麻布の着物に刺繍をした。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。初めて伸びた麻の葉が大きくなった。

麻で麻布を紡績して、細い麻で薄い麻布を作った。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王は高機織機を作った。

作られた高機織機で目の細かい麻布を紡績することができた。麻布の表に花模様の筋がある。

麻布の着物を着る盤王は先に麻布の着物を着た。蕉の布の着物を着る唐王は先に蕉の布の着物を着た。

盤王は麻布の着物を着て、世の中が太平になった。唐王は蕉の布の着物を着て、零落した。

盤古は十二の面に伝えられた。劉任は手に元金がない。

ここでは盤王は立春の日に生まれ、盤王は鋤を作り、田を耕し、穀物が実り、さらに盤王は麻を植え、織機を作り、麻布が作られるようになり、麻布の着物を着て太平となったとされる。盤王は、生業神としての性格をもっていることが分かる。

以上の文書・テキストからは、盤王の神格は創世神盤古や龍犬槃瓠と同一視することはできない。むしろ盤王は西天福江に生まれ、辰つまり水と結び付けられ、生業にとって重要な役割を果たした祖先神と考えられている。祖先が移動した経路が唐王の連州、遊師の行平、五婆の伏靈、盤王の福江、五旗の厨司として伝承されているのではないだろうか。

さらに湖南省の別の地域のテキストから事例を挙げてみる。藍山県の東北に位置する資興市の宗教者の所有するテキストに収められた「盤王歌」「大堂歌書」「献酒用」「請盤王聖帝」「接四廟王歌」の内容を見ると、「盤王歌」には「盤王出世在西天」とあり、乾隆四十年の記年のある「大堂歌書」には「盤王出世在西天福江」とあり、「献酒用」には「盤王出世西天廟」「盤王出世在福江」とあり、「請盤王聖帝」には「福江盤王聖帝・盤古聖人」とあり、「接四廟王歌」には「盤王出世在伏江」「伏江盤王聖帝・盤古大王都招接」とある。藍山県のテキストと同様に、盤王は福江（伏江）西天に生まれたとされ、龍城と結び付いた高王、連州と結び付いた唐王、行平と結び付いた遊師、伏靈と結び付いた五婆、草司と結び付いた五旗と並び記述されている。廟王の名や地名は多少の入れ替えがある他、文字の違いが見える。

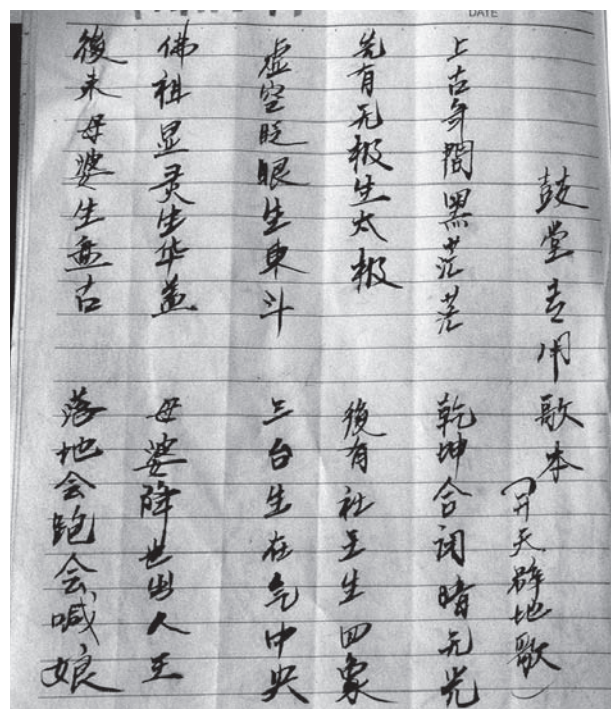
さらに藍山県の西北に位置する新寧県の「跳鼓壇（大打古堂）」の儀式では、祭場に多肢で角を生やし突舌する盤古像を中心に五人の盤王（蛮王）（蛇星蛮王、獐星蛮王、董盤王、憲盤王、杖星蛮王）の像が生業に関わる道具を手にし五方に並び、さらに竹王の像が盤古の背後に置かれる。祭場には、評王券牒號が布に書かれ張り出される。

儀式の目的や内容を表明し、貼り出された文書の傍には「為慶賀盤王大打古堂事」とあり盤王を慶賀することを目的として営まれる儀式である。さらに六回盤王を祭祀すると記述されている。盤古、槃瓠、盤王が混然として存在し、全て慶賀の対象として祭祀が行なわれるのである。

さらにテキストから見てみると、「請聖」には「開天劈地盤古大王」とあり、「開天關地歌」には

「開天關地歌」（図⑩参照）

上古年間黒茫茫	乾坤合閉暗開光
先有無極生太極	五有社王生四象
虚空乏眼生東斗	三台生在气中央
佛祖頭靈生華盖	母婆後世出人王
後來母婆生陝古	落地会跑会喊娘
混沌年間天地暗	無天無地無陰陽
昼夜不明難文辨	母婆見了好心傷
制出銀鍾金鑿子	交給陝王戰洪荒
陝王領了母婆令	開天辟地尽承当
上○一声嘩啦响	天高三丈往上漲
下○一声霹雷炸	地寬三丈坦坪洋
陝往爺爺踏雲霧	開天辟地定三光
開出日頭有十箇	開出月亮有四双
照得人間無昼夜	晒得大地泥土煇
開天母婆叫陝古	拜請令公來帮忙
手拿開天辟地前	頂着日月射太陽
芒○之箭風飄散	鉄弓之箭日燒煇
脚下汚泥做弓箭	只○○○○○
射落九個日頭七个月	留下兩箇照人環
日月兩箇輪流転	月是陰來日是陽
母婆制山又制水	制山制嶺制米糧
丙午年間天大○	早得世上断米糧
害得世上無種種	朝廷兵馬開糧荒
万歳將軍喫泥土	鬧得世間不安康



図⑩ 開天關地歌

跑遍九州無米売	人間万衆餓断腸
母婆見了心生計	駕起祥雲到上巷
九王聖母頭上探到一根禾	撒在百家門干做種種
一份五谷十份得	一落地滿倉糧拇
○は不明	

とあり大意は、母婆が盤古を生む。世界は暗く混沌とし、天地の別もなかった。そこで盤古が母婆の命によって、天と地を分けた。一声で天は三丈高くなり、もう一声で地は三丈広がった。日・月・星を定めたが、太陽は十、月は四あり、昼夜の別が無く、大地は溶けるようだった。そこで母婆の命で盤古が日・月を射落とし夜と昼を分けた。母婆は山・水・食料を創造した。その後天災で食料が無くなり人々が飢えた。母婆は穀物を人々に与え救った、である。

このテキストの文面からは、一見創世神話の盤古が見えるものの、盤古よりも母婆の存在の方が強調されており、漢族の伝承とは差異が生じている。祭場に貼り出された評王券牒號は、龍犬盤獲（槃瓠）はヤオ族の始祖であり、功を立てた為、評王の帝女を妻として、ヤオ族十二姓を生じ、それぞれ子孫に対して山での生活権を認め、官職を授与するということを正忠（理宗）の御世に新たに確認して評王券牒號を与えるという内容である⁽³⁾。祭祀の対象として創世神盤古、龍犬槃瓠に加え、生業神として道具を手にする盤王（蛮王）達も登場する。

さらに広西民族学院が1980年に翻印しているガリ版刷りの『盤王歌』の資料はどの地域のヤオ族の伝承か定かではないことが残念であるが、その内容は湖南省藍山県の「盤王大歌」にほぼ一致する。つまり盤王は福江に生まれ生業に関わる一祖先神として他の廟神と共に並び記述されている。

最後に祭場に掲げられる衆神図の中に盤王を探すと、中央に多肢で角を生やす神が見える（図⑩参照）。宗教者に尋ねても神名を明らかにできない状態であるので推測に過ぎないが、多肢と角をもつ造形は跳鼓壇の祭場の盤古に一致する。

以上複数の地域のヤオ族の祭祀で使用されるテキスト・文書を検討したが、ヤオ族にとって盤王とは、創世神話の盤古と龍犬槃瓠に加え、生まれ地を西天福江とする生業との結び付きの強い祖先神盤王が存在することだけは確かであろう。

三種の伝承が重層して存在することが確認でき、混同されたり分離されたりしながら、祭祀の場に矛盾なく存在しているのである。このことはヤオ族の柔軟性を示しているといえよう。



図⑩ 神画（盤古）

(3) 全文は廣田律子「祭祀儀礼の中の神話」『神話・象徴・文化』楽浪書院 2005年 pp.233～262で紹介した。2004年の儀礼実施に合わせ地元の知識人によって編集された内容である。

2010年3月バイエルン州立図書館所蔵ヤオ族写本調査報告

筑波大学人文社会科学部研究科教授

ヤオ族文化研究所客員教授

丸山 宏

去る2010年3月13日から3月20日（帰国日時は3月21日）までドイツのミュンヘンに赴き、バイエルン州立図書館（Bayerische Staatsbibliothek 以下、図書館と記す）においてその所蔵するヤオ族写本の一部を閲覧調査する機会を得た。経費は神奈川大学の廣田律子先生を研究代表者とする平成21年度科学研究費補助金基盤研究(B)「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」によるものである。

日本からの参加者は、順不同であるが、神奈川大学の廣田律子先生、神奈川大学の泉水英計先生、神奈川大学大学院生の三村宜敬氏、東京学芸大学の吉野晃先生（3月13日から3月16日まで）、東京学芸大学の蔡文高先生、國學院大学の浅野春二先生（3月13日から3月19日まで）、早稲田大学の森由利亜先生、筑波大学の丸山宏、筑波大学の蘇素卿であった。北京から湖南省民間文芸家協会主席の張勁松先生、夫人の曹秋英氏が合流し共同で閲覧調査を実施した。

事前には図書館の副館長である Klaus Ceynowa 博士が招待状を出してくださり、我々の訪問を歓迎してくださった。特に近東・遠東部門の図書館員であり、図書館のヤオ族写本の全貌を知悉されている Lucia Obi 女史と事前に何度も連絡を取り、この訪問がスムーズに成功するようにご配慮いただき、実際に到着してからは、まことに周到な配慮のもとにわれわれの閲覧調査に対して絶大なる便宜をはかっていただき、また休憩時の食事（ウサギのチョコレートなども含む）の配慮もいただき、とても筆舌に尽くせないほどの親切な接待をしていただいた。貴重書（マニユスクリプト）閲覧室、修復部門の方にもお世話になり、また近東・遠東部門の張玉芝女史にも親切なご配慮をいただいた。

今回の調査の主な目的は、2008年冬に行った中国湖南省藍山県ヤオ族の度戒儀礼（イニシエーション儀礼の一種）において得た知見をもとに、特にその儀礼調査の時に撮影して既に分析を開始した儀礼文献について、世界最多を誇る図書館のヤオ族写本コレクションの中から、直接間接に関連する文献を探し出して、比較検討することにより、藍山の儀礼文献の個性と普遍性について広い視野から確実な理解を獲得しようとするものであった。事前に、Obi 女史がその編纂に大きく貢献されたヤオ族写本目録（Höllmann, T. O. hrsg. 2004 Handschriften der Yao Teil 1 Bestände der Bayerischer Staatsbibliothek München Cod.

Sin.147 bis Cod.Sin.1045, Stuttgart : Franz Steiner Verlag）には図書館所蔵の2776件のヤオ族写本のうち867件を目録化しており、これによりいわゆる勉（Mien）系ヤオ族の度戒や掛灯などのイニシエーション（入門儀礼）ないしオーディネーション（法師になる叙任儀礼）に関する写本、フォーミュラと言われる各種の儀礼に用いる文書類、盤王書や盤王歌などの盤王崇拜に関する写本、神々の呪を多く含む開壇書などの写本、また藍靛（Landian）系ヤオ族の道公および師公の受戒儀礼などのイニシエーションないしオーディネーションに関する写本、家先単といった祖先崇拜関係の写本、占いや暦に関する写本などを中心に約170件を閲覧希望し、また到着後にも30件ほど新たに閲覧請求を行い、総数でおよそ200件の閲覧調査を行うことができた。

これほど多数の写本をわれわれの閲覧のために準備してくださったことに本当に大きな驚きと深い感謝の念を抱くものである。もちろん時間の制約と個人の力に限界があったが、参加者11人は各人の関心範囲において非常に多くの写本を調査することができた。なお、重要な写本の部分的な撮影も許可していただいた。簡略に活動日程の記録を示せば、以下のようである。

3月13日（土）夕刻、羽田発北京経由でミュンヘン到着。

Obi 女史の出迎えを受ける。ホテルに到着。

3月14日（日）日曜にもかかわらず、図書館にて午前9時より午後7時まで閲覧調査。

3月15日（月）図書館にて午前8時過ぎから午後5時まで閲覧調査。その間、午後2時から1時間半ほど、閲覧室にてObi 女史を招いて小会議を開催。主に2010年11月に開催予定のヤオ族伝統文書国際シンポジウムの計画、今後のヤオ族研究における協力のあり方と抱負、各参加者の閲覧範囲の重点についての紹介と所感などが活発に発言された。

3月16日（火）図書館にて午前8時過ぎから12時まで閲覧調査。その間、10時に副館長 Klaus Ceynowa 博士と面会、副館長から歓迎の言葉をいただき、また図書館の紹介をうかがう。この場を借りてヤオ族写本の重要性を

研究者の立場から伝えることもできた。この日午後2時から4時まで、市内のミュンヘン民族学博物館（Staatliches Museum für Völkerkunde München）を訪問。Claudius Müller 館長の歓迎を受け、ヤオ族の儀礼に用いる神画コレクションを参観。祖先図などについて討論。きわめて質の高い精美な神画であった。その後また図書館に戻り、午後6時過ぎまで閲覧調査。

3月17日（水）図書館にて午前8時過ぎから午後6時まで閲覧調査。

3月18日（木）図書館にて午前8時過ぎから午後6時半まで閲覧調査。

3月19日（金）図書館にて午前8時過ぎから午後6時過ぎまで閲覧調査。夕刻に自由活動。夜は中華料理（実はベトナム料理か）を囲んでささやかな謝礼の宴を開く。

3月20日（土）図書館にて午前9時前から午後1時頃まで閲覧調査。午後2時過ぎにホテル近くのバス停から空港へ向かい帰りの便に乗る。

この度のヤオ族写本閲覧調査の主要な成果としては次のことが言えると思われる。まずフィールドワーク地点である湖南省藍山のヤオ族儀礼文献と、それ以外の地点（不明の場合も多いが、湖南と明示するものは閲覧写本には含まれていない）の文献を比較するための予備的調査ができたこと、特に勉系の度戒のフォーミュラ（文書に当たるジャンル）は比較の材料を得られなかったけれども、大戒文に相当する文献などを得られて、普遍性を検証できる見通しを得られたことは大きい。またわれわれにとっては未知であった藍靛系の受戒に関しては多くの写本を閲覧できた。同じヤオ族の中の大きな偏差については今後の研究の基礎を確立できると言える。盤王歌、開壇書などについても、頁数の長大な写本のヴァリエーションを多く閲覧し、比較して本文の異同を研究することが可能となったことは大きな成果であった。さらに数は多くはないが、家先単や過山榜などについても貴重な実物を閲覧できたことは特筆できる。

この度、大きな意義があったことの一つには、参加者各人がそれぞれに多様な課題を立て自己の重点的な閲覧対象を設けて閲覧調査ができたことであり、そのこと自体がヤオ写本の内容の豊かさを示すものと思われる。それはたとえば、本稿の筆者が、閲覧調査中に各先生との対話から理解し得た限りで言えば、以下のようなものである。順不同であるが、廣田律子先生は盤王歌と開壇書について、泉水英計先生は祖先崇拜やヤオ族社会に関する内容を持つ写本、三村宜敬氏は占いや暦などに関する写本、吉野晃先

生は度戒儀礼、家先単、過山榜、ヤオ族社会に関する内容を持つ写本、蔡文高先生は墓地、葬送、小さい日常的法事に関する写本、浅野春二先生は招魂儀礼に関する写本、森由利亜先生は度戒と受戒、および藍靛系の写本全般について、丸山宏は各種儀礼に用いる文書、張勁松先生は写本全般に目を配られていたが、特に度戒、受戒、梅山法に関する写本などには時間をかけておられた。非常に多くの写本を見ながら、特に問題意識を刺激された点については、すぐにその箇所を他の参加者とともに見ながら討論する場面も多くあり、非常に裨益されることが多かったことも今回の調査の成果である。

以上の成果を挙げることができたのも Obi 女史をはじめとする図書館各位のご配慮によるものであり、末尾ではあるが深甚の謝意を表して報告の結びとしたい。

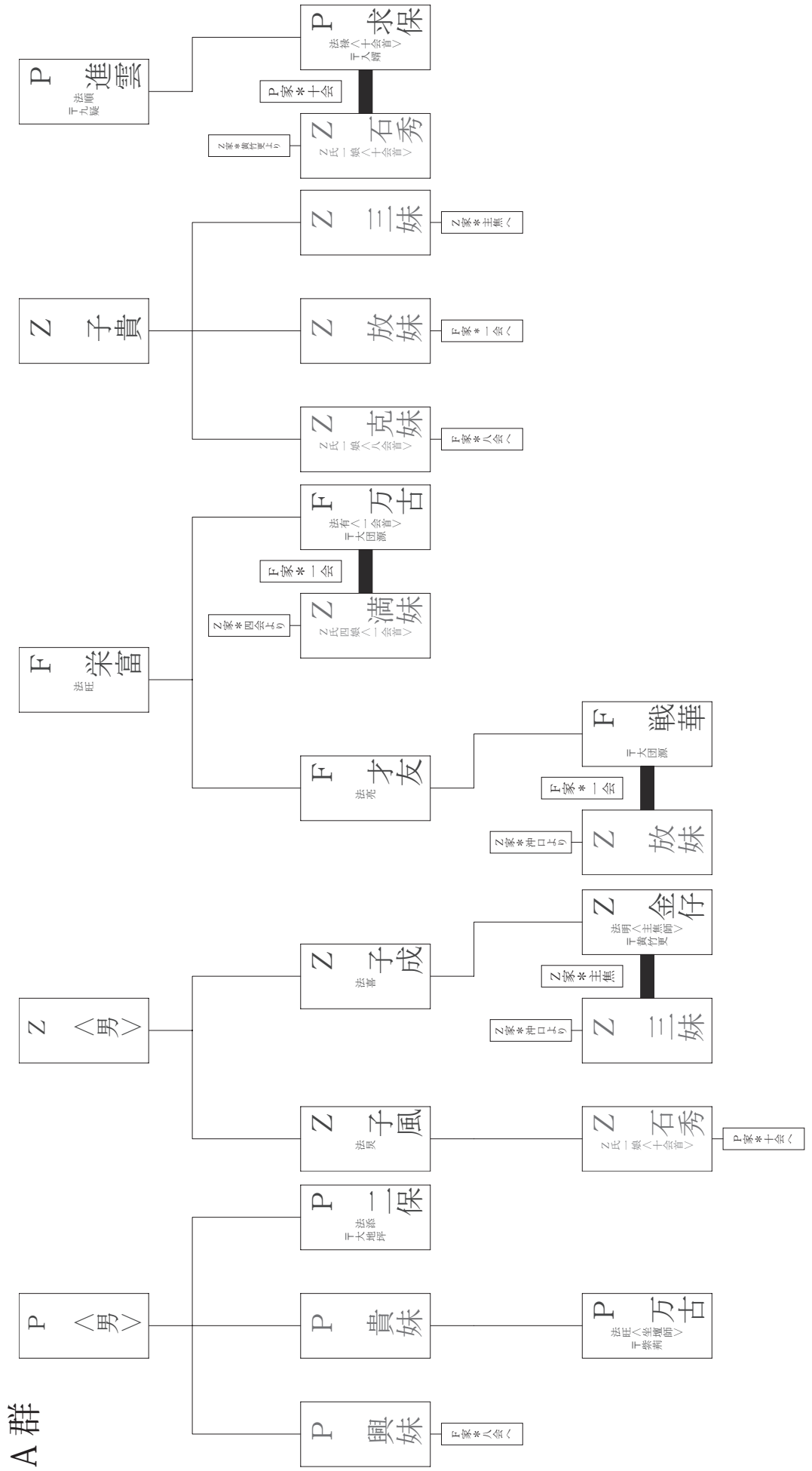
IV. 資料

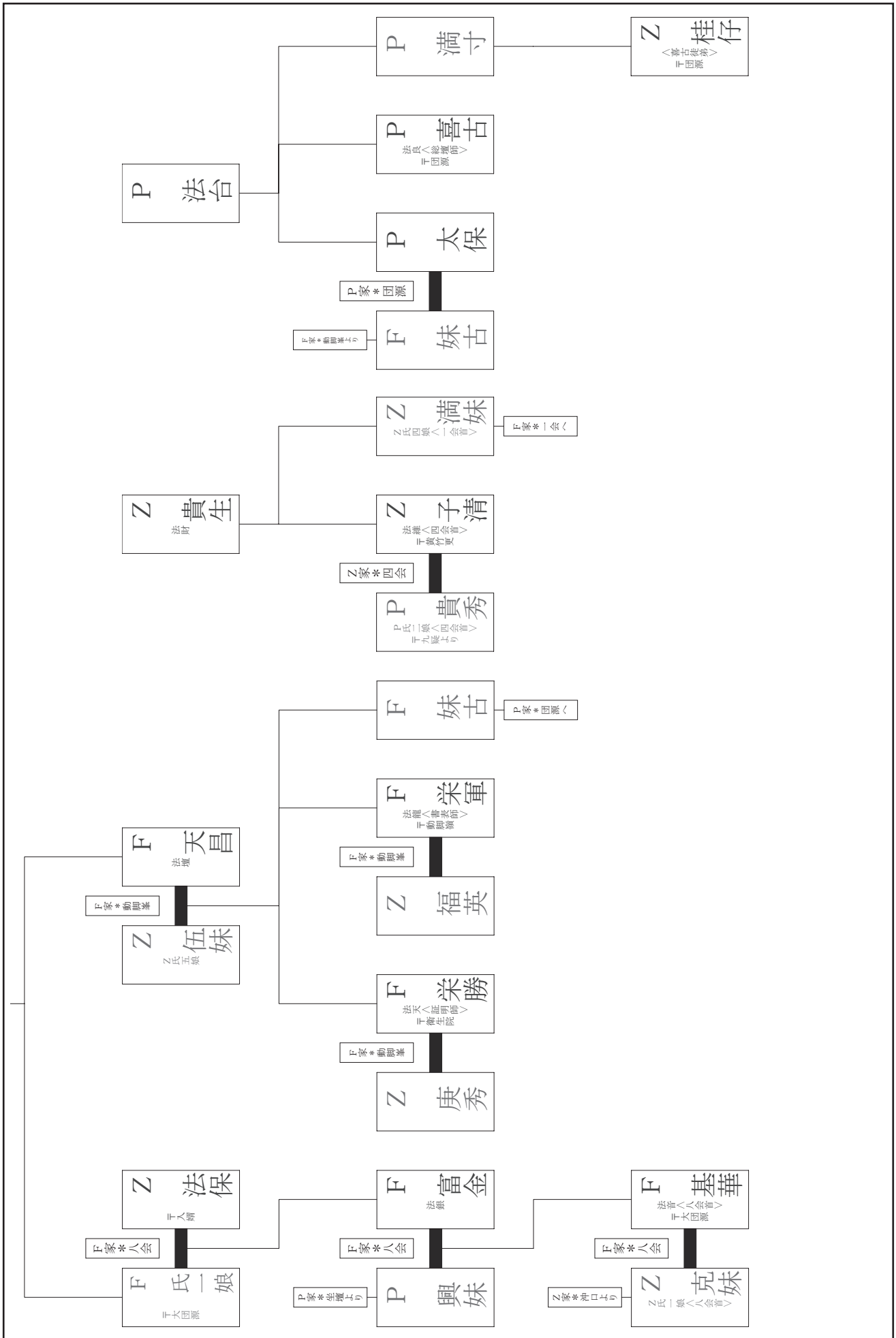


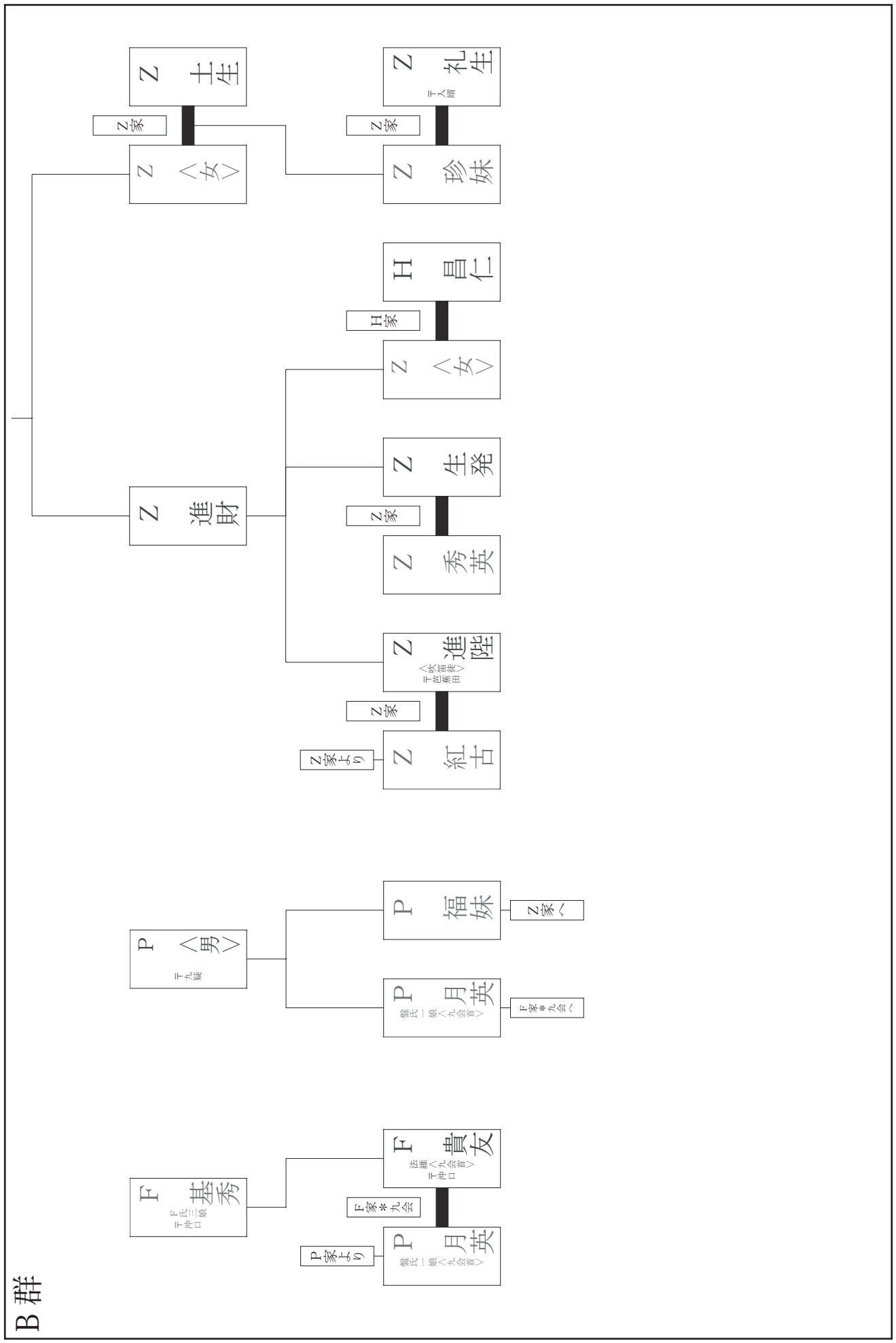
2010/03/11 泉水英計作成

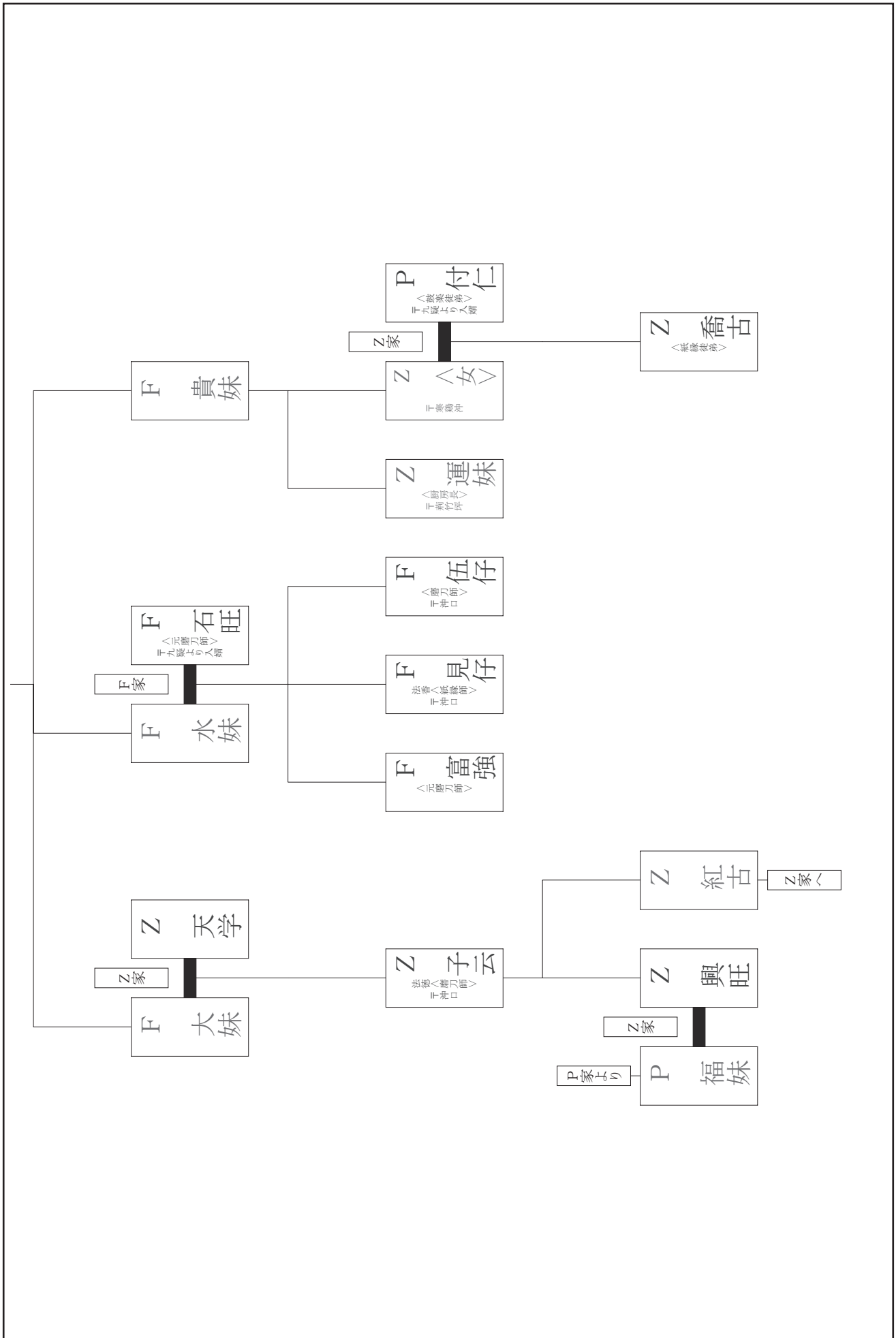
2008年の度戒参加者の相互関係

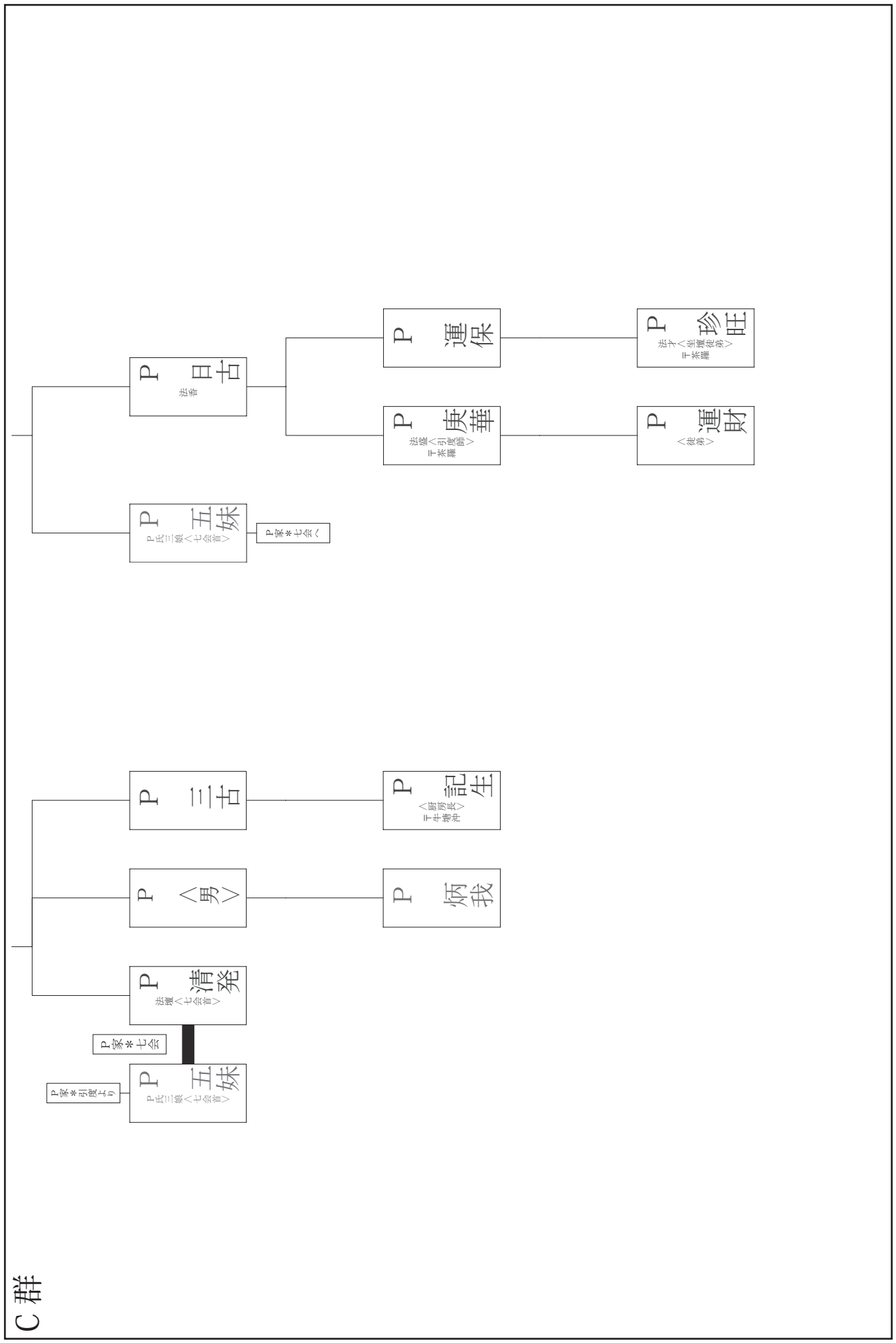
4つのまとまりがあり、それぞれをA群・B群・C群・D群とする。各図の水平軸は世代を表わしている。



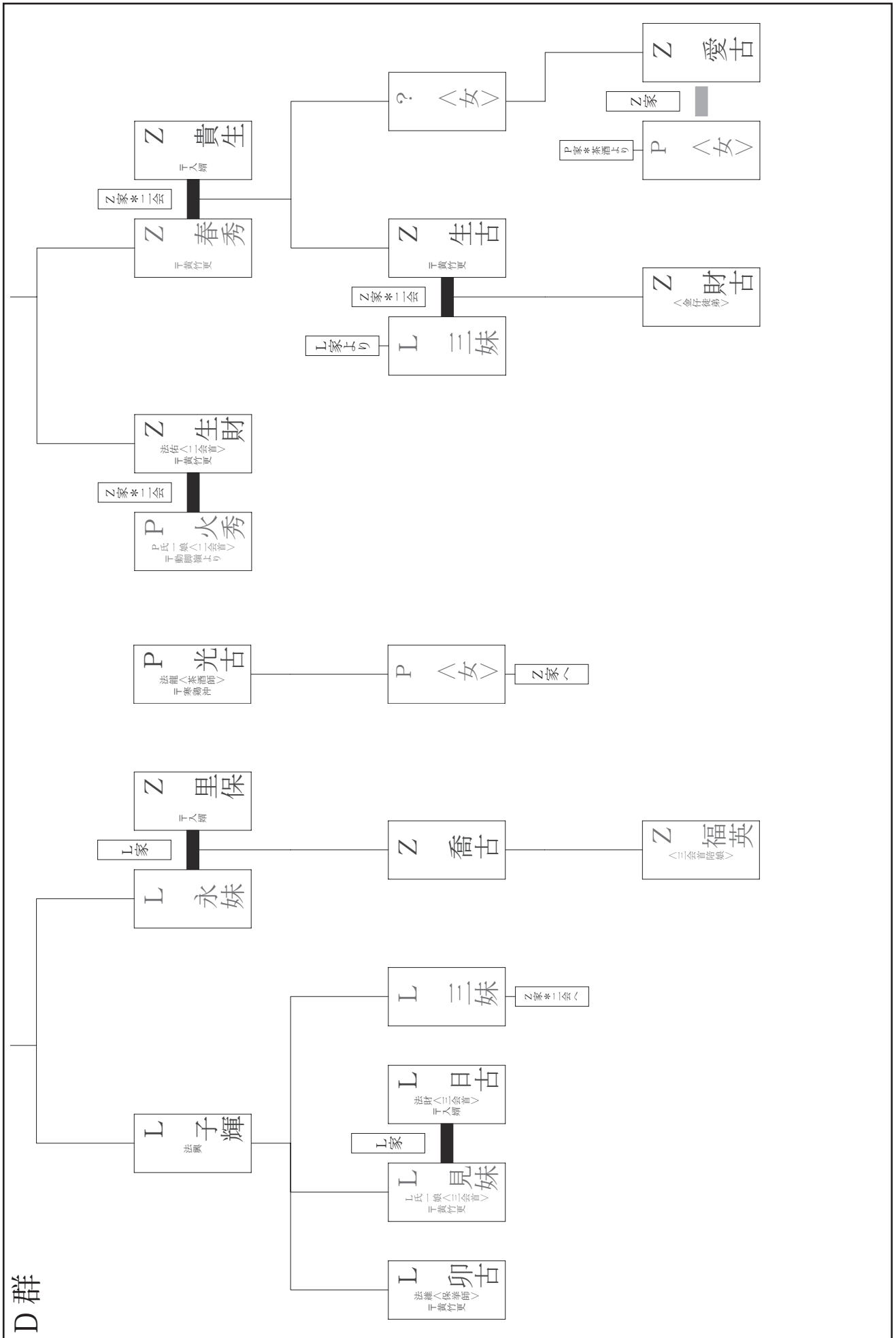








C群



中国湖南省藍山瑶族度戒科儀的書表執行程序

本表は、今回の儀礼（2008年11月26日～12月9日、藍山県で举行された度戒儀礼）で使われる諸文書を、書表師馮榮軍氏への聞き取りを通じて儀礼の順序に沿って並べたものである。更にインタビューに際して気づいたこと、特に重要な点として印象深い事柄を備考に添えた。研究チーム内での便宜に供する目的から、画像ファイル（内部資料）との対象を付す。書表師に対する聞き取り調査の全貌については、本報告中の丸山宏氏「湖南省藍山県ヤオ族伝統文化の諸相 — 馮榮軍氏からの聞き取り内容 —」を参照のこと。（文責：森）

科目名 / 次第名	細目 / 分類目	文書番号	使用文書	焚化時間 / 地点	発出者	備考・疑問	画像資料	
封小齋		1	封小齋黄表	開天門で焚化。	主醮師	女性会首はまだ来ていない。	森フォト儀礼文書 2877-2878、2880-2881 は外封。	
		2	封小齋文引	開天門で焚化。	主醮師		森フォト儀礼文書 2882-2883	
封大齋		3	封大齋疏	開天門で焚化。	主醮師	女性が加わり、男女ともに吃齋に入る。血湖に渉る部分あり	「封齋疏文」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2978-2980。「封齋疏文」森フォト儀礼文書 3176-3180、3431-3432。	
		4	封大齋（黄）表	開天門で焚化。	主醮師	引はあるか？	「封齋表 女人黄表」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2972-2973。「封齋表」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2978。妻にも言及するので封大齋か。同脚引も並記。「封齋表」森フォト儀礼文書は 3181、3201-3205（外皮は解齋になっているが誤りであろう）、3433。	
掛吊（莊嚴法壇【書表師】）	陽中	5	傳度請聖黄榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2677-2686 (B2)、3387-3390。書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2984-2986。	
		6	傳度約束榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2606-2676 (B1)、3378、3617。	
		7	曉諭白榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2715-2725 (B11)、3612-3615、書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2983-2984。	
		8	補充黄榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2727-2732 (B12)	
		9	加職黄榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2733-2737 (B13)、3394-3395	
		10	茶榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2709-2710 (B9)	
		11	酒榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2706-2707 (B8)、3391。	
		12	湯花榜	送庫で焚化。			湯榜：森フォト儀礼文書 2693 (B4)	
		13	井露榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2704 (B7)	
		14	堂花榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書	
		15	門扇榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2712-2714 (B10)、3393。	
		16	醮花榜	送庫で焚化。			醮榜：森フォト儀礼文書 2699 (B5)	
		陰中	17	請聖白榜	送庫で焚化。			森フォト儀礼文書 2687-2691 (B3)、6308-6309、書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2988。
		掛天橋	18	黄旛	送庫で焚化。			
		掛陰橋	19	白旛	送庫で焚化。			
			20	十六神位牌	送庫で焚化。			
		21	十二宮門拋牒函状	送庫で焚化。		神位牌を挿す時、十二宮袋に同時に入れる。封皮を用いず。	「拋牒函状」森フォト儀礼文書 3252。	
		22	十四花牌	送庫で焚化。				
	初夜道場	安壇落馬	23	賀駕表	—	—		「賀駕黄表」森フォト儀礼文書 3161。

初夜道場	下禁壇	24	落禁疏	掘り出した後、家先衆壇前で焚く? 程序 12/9:815f 参照。	主醮師	下禁壇で埋める。解禁壇で掘り出す。他地域のテキストを 09 年 8 月 5 日 廣田先生入手。	森 フォト 儀 礼 文 書 2786 (C-2-16)、3240。
	初夜請聖直前	25	慶陽疏	竈側で焚化。	総壇師	酒浄法壇時の解穢の意義あり。A-5、51b に「初夜用慶陽疏酒浄讀」とある。	「慶陽傳度疏意」森フォト儀礼文書 3229-3233。
	請初夜聖	26	初夜黄表	単独で開天門して焚く。	引度師	程序 15:52 参照。	書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2962。森フォト儀礼文書 3168 (3168 は本当に黄表なのか?)、3170、3199。
		27	初夜黄表引	同上。	同上。	同上。	
	発功曹	28	巫師入壇啓建修設謹状	—	引度師	初夜発奏四府請状などは「初夜」とあるも実際は末夜の回功曹で文書を出す。この発功曹では発牛角のみ行い、文書は出さない。趙金仔氏の説明。	森フォト儀礼文書 3248。
中夜道場	請中夜聖	29	請聖大疏(大堂大疏、傳度大疏とも)	送庫の時に焚化。	書表師が読誦		森フォト儀礼文書 3301-3313。「傳大疏」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2973-2975。
		30	中夜補職黄表	開天門の時に文臺で焚化。	保挙師		森フォト儀礼文書 3252-5253。
	還四府願	31	還四府願大疏	その場で、もしくは送庫の際に焚化する。(今回はしばらく花楼中に置かれる)	—	大疏であるが、紙銭のリストが加わる。A2-41a 参照。12 月 4 日に科目行われる。但し文書は廣田フォト 12 月 5 日その 2 によれば、依然として花楼中に置かれている。	「傳度加・補職還願四府大疏」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2965-2967。
		賀星拝斗	32	賀星表	開天門の時に焚化。	證盟師	書表師は花楼前で念経。12 月 4 日に科目行われる。但し文書は廣田フォト 12 月 5 日その 2 によれば、依然として花楼中に置かれている。
	33		賀星疏	開天門の時に焚化。	證盟師	12 月 4 日に科目行われる。但し文書は廣田フォト 12 月 5 日その 2 によれば、依然として花楼中に置かれている。	「賀星疏意」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2963。森フォト儀礼文書 3206、3236-3239。
	34		大位星辰牌	送庫の時に焚化。		会首に跪拝させる。	
	35	小位星辰牌				男性会首に渡し、家に持ち帰らせる。	
末夜道場		36	代替表	—	—	末夜は大夜、丹夜とも。	書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2972。森フォト儀礼文書 3173。
		37	傳度赦文	—	—		書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2987-2988。森フォト儀礼文書 3163-3166。
	回功曹	38	—	—	—	文書はあるのか? A2-50a 「丹夜道場、用四府續關」とある。また程序 12/5/10:53 処理文書に「四府功曹請状・四府統關」とある。	
		39	初夜発奏四府請状	一 場所 は 文臺? 程序 12/5/10:53	引度師		「初夜発奏 天府請状」の書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2960。「天府請状」森フォト儀礼文書 3171-3172。
		40	初夜発奏四府請状文引	同上	同上		「四府功曹小引」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2960。「四府功曹文引」森フォト儀礼文書は 3174-3175、3257-3259。
		41	四府統關	—	引度師		書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2962。森フォト儀礼文書は 3190。
		42	四府脚引	—	引度師		「功曹脚引」地府功曹脚引は森フォト儀礼文書 3162。天府功曹脚引は 3167。「發功曹脚引」は森フォト儀礼文書 3200、3249。
	掛十二燈(掛大羅明燈)	43	傳度完燈星辰大疏	開天門の時に焚化。	主醮師	毎会首に一通あり。たとえば「馮法魚 傳度星辰大疏一通」とある。	森フォト儀礼文書 2767、2768、2797-2798 (書表師鈔本)
	過水槽後(上刀山)	44	謝駕黄表	—	—	テキストによる。	森フォト儀礼文書 3182 には「謝駕表」が「刀山或迎兵或初夜或謝駕表」という兼用文献として示される。
		45	謝駕黄表引	—	—	廣田フォト 12 月 3 日その 2 に「賀駕刀山文引」の箋あり。	「謝駕刀山迎兵初夜四表引」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2969。
上刀山(上刀梯)	46	刀山黄表(刀梯黄表)	開天門で上奏焚化。	證盟師		「刀山表文」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2968。「刀梯黄表」は森フォト儀礼文書 3183-3184。	

末夜道場	上 刀 山 (上刀梯)	47	刀山文引	同上	證盟師		「初夜満散迎兵刀山四表引」書表師鈔本は森フォト儀礼文書2964。	
		48	刀山符	焚化せず。持ち帰る？	書表師	十二段。左右の柱。法師・会首の頭上に貼る。		
	游兵游将 (分兵の前)	49	游兵表				テキスト A-15、68b「醜壇把中」によれば、含犁火磚の後、吃老君飯の前に行う。ただし、書表師によれば分兵の前。今、後者に従う。	
		50	日里午迎兵黄表	(程序 12/7 によれば、回兵前の開天門で焚主祭場前広場で焚かれるが如し。)	(程 序 12/7 によれば、證盟師・保拳師・茶酒師)		傳度迎眞表および加職補充迎眞表あり。ただし、趙金仔氏によれば迎眞表と迎兵表は同じ。	「加職補充迎眞表」は森フォト儀礼文書 2788 (C-2-18)。また「迎眞表」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2968。「迎眞表」森フォト儀礼文書は 3191-3192、「迎兵黄表」森フォト儀礼文書 3251。
		51	迎兵表引					
	升老君位	52	“升職黄色紙条”	焚化せず。神画に添付し、そのまま。	主醜師	陽中・陰中全会首必要。		
	游郷	53	大道牌	送庫の時に焚化。			三清の名を記す。関所の案卓に貼る。	
		54	木牌 (2つ)	—			ふたりの将軍が持す。	
		55	火牌 (大)	送庫の時に焚化。				「遊樂衆兵火牌」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2986。
		56	髯牌 (回家火牌、師男女牌)				男性会首が持ち帰り、死去の際には葬式でブラカードに用いて葬列を引率し、道場送庫にて焚化。	森フォト儀礼文書 2766。
	奏青詞	57	奏青詞函状墨表	開天門時、文臺で焚化。	主醜師		青詞籠には入れない。黒い紙に書くが、今回は白紙。	
		58	送九帝表	開天門時、文臺で焚化。	主醜師			
		59	入師爺職位硃詞引	開天門時、文臺で焚化。	主醜師			
		60	伴詞引	開天門時、文臺で焚化。	主醜師			森フォト儀礼文書 2776 (C-2-7)、2790 (C-2-20)。
	平度 (陽も陰も含む)	61	(傳度) 硃詞	文臺上で会首も参加して焼く。	法師は多い程良い。	平度籠、加職籠、補充籠の三籠あり。陽平度の場合、平度籠の中で陰陽二據だけは男女を分けて作る。その他の八種は、男性会首ごとに一通作り妻の分を別に作ることはしない。加職・補充の書類は必ず作らねばならず、直前の世代が平度を受けていない場合には、最も近い平度を受けた世代に対して加職の書類を作らねばならない。補充も最も近い加職を受けた世代に対して作らねばならない。更に、平度を受けていない世代に対しては陰平度を行う必要があり、その際には陽平度の場合と同じように加職・補充の書類を作る必要がある。したがって、平度は陰陽を問わず、全く同一の加職・補充の書類を整える必要があることになる。未度戒の亡父に陰平度を行う場合、平度籠の九種の書類をすべて作る。(生前死後を通じて一度も受けていない書類があれば、それは必ず平度から段階的に受け発行する。) 陽平度の場合、陰據を焚化し陽據を持ち帰る。陰平度の場合、陰陽二據をとともに焚化する。夫が陰で妻が陽平度の場合、妻の陽だけ持ち帰る。妻の陰據、夫の陰陽両據は焚化する。加職・補充は陰中の人でも陽中の人でも行える。但し、前の段階をスキップすることはできない。文書のほか、毛筆・条墨・扇子が籠に入れられる。	森フォト儀礼文書 2771、3216、3254-3255。「傳度硃詞」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2968。	
		62	(傳度) 硃詞引			会首にひとつあればよい。妻の分を別に作る必要はない。	森フォト儀礼文書 2777 (C-2-8)、2782 (C-2-13)、3234。2783 (C-2-14) は加職硃詞引。書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2969。	

末夜道場	平度 (陽も陰も含む)	64	入壇詞意(投壇詞)			会首にひとつあればよい。妻の分を別に作る必要はない。	森フォト儀礼文書 2770、2791 (C-2-21)	
		65	關糧文牒			会首にひとつあればよい。妻の分を別に作る必要はない。	森フォト儀礼文書 2795 (C-2-25)	
		66	男女陰陽二據			男女を選ぶ。男性陽中の場合は「傳度新承弟子陰陽據」ともいう。(廣田フォト12月7日その2文書)	森フォト儀礼文書 2778 (C-2-9) (新承弟子陰據)、2792 (C-2-22)、「傳度師男陰陽二據」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2964-2965。「傳度信女陰陽二據」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2967。	
		65	九帝函状				森フォト儀礼文書 2779 (C-2-10)	
		66	傳度黄表			男女区別なし。	(森フォト儀礼文書 2785 (C-2-16) と 2787 (C-2-17) は傳度撥水槽弟子の黄表だが?)	
		85	傳度硃詞請功函状			投進疏籠(庫籠)。毎会首にあり。「請功函」が青詞籠に入っている写真があり疑問。(廣田フォト12月8日その2:第1会首硃詞の束。)	森フォト儀礼文書 2773 (C-2-5)、2789 (C-2-19)	
			56	(傳度)末夜硃詞表	開天門時、文臺で焚化。	主醮師	会首ごとに一枚作り青詞籠の中に収められている写真あり。廣田フォト12月4日その2参照。	森フォト儀礼文書 2784 (C-2-15)。
	加職		67	加職陰陽二據			A-15、42aに「陰加職用」文書あり。女性の場合「加職廂女陰陽據」という。(廣田フォト12月7日その2文書)	森フォト儀礼文書 2774-2775 (C-2-6) は末頼記の加職陰據のよう。同 2780-2781 (C-2-12) は加職廂女陰據。2793 (C-2-23) は男性用加職陰據。2794 (C-2-24) は信女陽據。「加職陰陽功據」(男人用)書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2982。
			68	加職黄表				森フォト儀礼文書 3186。
			69	加職硃詞			A-15、29aに「加職硃詞補充硃詞同」とある。A-15、30aに「総請牒文」に言及。「総請牒」はA-15、32a以下にあり。靈宝大法司より給出される。橙色の紙に書く。	森フォト儀礼文書 2771 (平度補充加職硃詞)、2772 (平度補充加職硃詞。2771とは別)。
			70	加職硃詞文引				
	補充		71	補充硃詞黄表			硃詞と黄表を分けないのか? 「補充硃詞」の語はA-15、29aにあり。加職硃詞と同じという。	
			72	補充誥文			男女に分かれる。老君詔曰…で始まる。補充誥文は、割符を押すことになっており(合同文)、陰陽二據と同じ形式。	森フォト儀礼文書 2796 (C-2-26)、「補充告文」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2981。
	開齋		73	開齋疏	程序によれば家先衆壇前	程序によれば證盟師	程序 12/8/21:35-51によれば、削罪疏・満散疏とともに処理する。	森フォト儀礼文書 3217-3220。
			74	開齋黄表	—	—		森フォト儀礼文書 3256。書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2970-2971。
			76	傳度完満解齋還願疏文	開天門しない。送庫で焚化?	—		「解齋還願疏」森フォト儀礼文書 3222-3228。
	送庫		81	錢關			没有念。只放在庫籠里。	「傳度錢關」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2969-2970。
			82	功德満散化財關文			庫籠に入れて焚化。	森フォト儀礼文書 3193-3198。
			83	削罪黄表			削罪 / 謝罪 / 赦罪は同じ。庫籠に入れて焚化。	森フォト儀礼文書 3261。
			84	削罪黄表引				
			77	謝聖黄表			放在庫籠里	森フォト儀礼文書 3247、3250。
			78	謝聖黄表引			放在庫籠里	
			79	満散表			放在庫籠里	「満散黄表」書表師鈔本は森フォト儀礼文書 2975。又、森フォト儀礼文書 3185。
			80	満散表引				

2008年ヤオ族度戒儀礼程序

本表は作成過程にあり、特に疑問のある部分には「*」を付けた。

日付	時間	時間 (予備)	大儀礼名	小儀礼名	場所 (大項目)	場所 (小項目)	行動主	行動	読誦・念誦している テキスト	如理(燃やす・ 書けるなど)した 文書	記録者	備考
11/26	13:00		安壇	收兵	主祭場	家先衆壇前	主醮師・書表師	家先衆壇前で念誦、「衆姓弟子履代家先之神位」が書かれた赤紙の裏に鶏の血を撒いて、家先衆壇の壁に貼る。神位の前に3枚の黄札を置く、唱えごと、焼紙銭、筥。会首の兵を呼ぶ。上壇(度戒した兵馬)下壇(掛灯下兵馬)の壇神を呼ぶ。	A32a 「請上壇兵」「請下壇兵」…「家先」		李	7枚の紙銭を並べる。七種とする米・1枚の生豚肉・丸鶏・5杯の酒・鈴笏・1碗の水・ヤカンがある。
11/26	記述無し		安壇		主祭場	家先衆壇前	主醮師	献酒			李	
11/26	午後		安壇	落兵	主祭場	家先衆壇前	主醮師・引度師・書表師	祭司の兵を呼ぶ。	A15a 参照。		李	
11/26	17:00		【作業】					戸口に禁止事項貼る。			廣田	
11/26	17:24		【作業】					孔子位を作る。			吉野・李	元々書表師の役だが、主醮師が代行。
11/26	17:35		供奉	請孔子	書表師作業場	書表師作業場	主醮師	孔子位前卓上に五酒盞・一水碗。	A1 請賜符呪語		吉野	
11/26	17:50		供奉		主祭場		主醮師	主壇に置いた3つの箱に米を入れている。			吉野	
11/26	18:07		供奉		書表師作業場	書表師作業場	主醮師・書表師	孔子・習った老師・把筆童子・立牌郎君・刺符童子・造符郎君を請する。醮師念誦、紙銭を焼く、筥、名簿よむ。			吉野・李・廣田	※上の段に1枚の生豚肉、丸鶏を祀る。卓上に置いたもの：硯・筆具・米の上に1個の紅包を置く箱・5杯の酒・1碗の水・ヤカン。
11/26	19:27頃		【作業】		紙録師作業場		紙録師他	做紙馬			吉野	この紙馬は、11.8cm × 39cmの紙に途中まで切れ込みが5つ入っている。6托。もう1枚の紙に馬を捺印し、切れ込みのある紙と重ねてゆく。
11/26	19:50～		安壇	撥三清兵	主祭場	中央机	主醮師	長い机に米を入れている3つの箱を置く。箱の中に白布・線香・紅包を置く。箱前に4つの酒盞・1つの水碗・碗の中にある生豚肉を並べる。	テキスト無し念誦。		李・廣田	中央机とは主祭場中央に置かれた机のこと、またその場所の意。 上壇兵馬・下壇兵馬・福江盤王聖帝・五輔司命社君・住宅龍神・会首家先・神王神将・仙姑妹妹・師父帯米兵馬・方地地主・本部廟王・把界地主・師父を請聘する。
11/26			安壇	撥疏表兵		中央机	書表師		テキスト無し念誦。			
11/26			安壇	撥橋		中央机	引度師		テキスト無し念誦。			
11/26	20:08		安壇		主祭場	中央机	主醮師・引度師・書表師	会首名単を讀誦。			吉野・李	
11/26	21:20						会首	出て来て正装。				



11/26 22:09	安壇	撥橋	中央机	主醮師・引度師・書表師・会首 12名	唱えごと、箱の中に白布を開いて、地面まで、会首 12名は跪いて、管。	李	敬前輩祖神？*(廣田)
11/26 22:07	安壇	撥橋	中央机	主醮師・引度師・書表師・会首 12名	唱えごと、開いた白布を戻し、焼紙銭。会首 12名は立ち上がる。	李	
11/26 22:40	封小齋	求師	家先衆壇前	主醮師・引度師・書表師	黄表を読み上げる。「封小齋黄表」→天香で焼く。この前に1通、天香で焼いた。何かは未確認。残りは、「封齋文引」→地面に置いた紙銭の上で焼く。	吉野	
11/26 23:11	封小齋	封小齋開天門	主祭場前広場 文台	主醮師	唱えごと、疏篋(紙銭・紙馬・疏文・線香)を燃やす、管、牛角を吹く、剣。	李	封小齋表・封齋文引・その他一通
11/26 終日				会首	作疏篋・腰掛・儀礼用竹・杉・ヤカン・蓋などの準備。	李	
11/27 終日	【作業】			書表師	疏表を書く。	李・吉野	
11/27 終日	【作業】		紙縁師作業場	紙縁師・他2名	紙銭作り、作法師馬印、銭。	李・廣田	古い馬板を使用して、今回作つたものは使ってなかったらしい。
11/27 記述無し	【作業】				家先衆壇・主祭場入口に対聯を貼る。	李	
11/28 12:00	【作業】		主祭場		主祭場で花菱らしきものを作り始める。	吉野	
11/28 11:34	【状況】					吉野	今日から豆腐料理が増える。
11/28 終日	【作業】		紙縁師作業場		紙馬作りは相変わらず続いている。法師馬印を捺している。	吉野	
11/28 15:00	【作業】		雲台		午後、雲台作り始まる。	吉野	
11/29 10:30 頃	【作業】		主祭場	書表師	木を削りたる棒に「大上王姥朝天玉簡勅賜波浪水樽一面勅床一座大上王姥準此急急如律令」という文字を朱字で書き入れていた。	吉野・李	杉木を削りたる棒(約180cm)全部で12本ある(玉簡)。
11/29 記述無し	【状況】		雲台			吉野	雲台の作業は特になし。
11/29 記述無し	【状況】		主祭場			吉野	雲台のところまで、祭場から田の東側に道ができていた。
11/29 終日	【作業】			会首	十二灯台作成。	吉野	
11/29 終日	【作業】		主祭場	執香師・他1名	花楼作成。	吉野・廣田	
11/30 11:00 過ぎ	【作業】		主祭場		主祭場の正面の欄の裏に壁を作る。杉皮を用い、壁を作っていく。	吉野	
11/30 落兵			主祭場	総壇師・座壇師・引度師(証盟師の代理)	神画を包んだ布包みをもって家先衆壇前で拝礼。念誦	吉野	
11/30 午後あたり	【状況】					吉野	午後あたりから来客増え、新たな祭司達来る。
11/30 13:00 過ぎ	【状況】					吉野	続々と祭司・信男・信女・その他見物人などが集まり、一気にごった返してきた。
11/30 14:43 ~ 15:43	喝落脚酒		紙縁師作業場		円卓を設置。	吉野	
11/30 喝落脚酒			紙縁師作業場	祭司達	円座、蓋を交わし、仕事始めの宴。	吉野	
11/30 喝落脚酒			紙縁師作業場	主醮師	色々と講話。	吉野	講話はミエン話。
11/30 記述無し	【作業】		主祭場	主醮師	十二宮門を作り始める。	李	

11/30	記述無	【作業】						12個の酒甕を後ろに置く。			李	李	〈封大齋〉puang`tom`tsai` 長い机の上に米を入れた2つの箱がある。 箱の中に白布、線香、紅包を置く。 各箱の前に4蓋の酒・1碗の水・ヤカン・碗の中にある五目品(揚げ豆腐・木耳・春雨・黄花草・昆布)を並べる。 いつ何を行つか度戒の全行程を述べる。“封大齋疏文”をよむ。
11/30 20:08		封大齋						封大齋始まる。			吉野	吉野	
11/30 20:15		封大齋	主祭場	規縁師*・茶酒師				神位に線香を上げ、水酒を並べ、ドラを3回打つ。			李	李	
11/30 20:45		封大齋	主祭場	請師父封 齋	保拳師・証盟師 保拳師II・証盟師II			保拳師証盟師が米入り箱の置かれた祭壇前に座る。保拳師弟子及証盟師弟子も加わる。会首の名簿を見る。			廣田・李	廣田・李	
11/30 21:45		封大齋	主祭場		主醮師	家先衆壇前		唱えごと、盆もち礼。			廣田	廣田	
11/30 21:45		封大齋	主祭場		証盟師・保拳師			弟子2人は唱えごと、管、酒つぐ、会首名簿よむ、紙銭を積む。			廣田	廣田	
11/30 22:00		封大齋	主祭場		証盟師・保拳師			盆を証盟師、保拳師かわるがわるもち、礼、酒を飲み、豆腐を食べる。			廣田	廣田	
11/30 22:05		封大齋	主祭場	出排盞	茶酒師・保拳師・証盟師・執香師			巫師は盆を受け取り、祭壇に礼、酒を飲んで、豆腐を食べる。これを“傾席”と称す。“傾席”後に饗礼を行う。			李	李	
11/30 22:10		封大齋	主祭場		主醮師	家先衆壇前		会首の名簿唱え、紙銭を重ねる、管。			廣田	廣田	
11/30 22:20		封大齋	主祭場	撥橋	会首達			白布を箱上に広げ、地面まで垂らす。念誦			廣田	廣田	
11/30 22:20		封大齋	主祭場		主醮師	家先衆壇前		主祭場に青詞旗もち集まる。			廣田	廣田	
11/30 22:21		封大齋	主祭場		主醮師	家先衆壇前		碗水、剣もち、唱えごと、罡歩、管。	テギオ無い		廣田	廣田	
11/30 22:23		封大齋	主祭場		会首達			円く跪く。			廣田	廣田	
11/30 22:24		封大齋	主祭場	撥加職兵 撥補充兵	保拳師II・証盟師II			会首名簿よみ、白布の上に管、白布を祭壇に戻す。紙銭を燃やす、酒つぐ、唱えごと、管。	テギオ無し。A32a 上壇兵に聞わるよう唱えごと。		廣田	廣田	父：加職 祖父：補充
11/30 22:35		封大齋	主祭場		夫人達			集まる、円くしゃがみ、主醮師の渡した碗の水を回し飲む。			廣田	廣田	
11/30 22:42		封大齋			主醮師	家先衆壇前		赤いベストを着ける、頭に神像を付け、背中に白布、唱えごと。			廣田	廣田	
11/30 22:45		封大齋			主醮師			外の文台に移動。開天門			廣田	廣田	
11/30 22:46		封大齋		封大齋開 天門	主醮師	文台		唱えごと、疏箋(紙錢・紙馬・疏文・線香)を燃やす、管、吹牛角。			李	李	「封齋表」「封齋疏」を燃やす。
11/30 23:36		封大齋		謝師	主醮師	家先衆壇前		唱えごと、赤い上着脱ぐ、紙銭燃やす、管。			廣田	廣田	
11/30 23:43		【作業】			執香師			祭壇上に白布並べる。			廣田	廣田	
11/30 23:00頃 〜? * (廣田)		【作業】						正面の棚の奥に、杉皮で壁を作る?* (廣田)			吉野	吉野	*
12/01 23:53		認三清	主祭場		主醮師・会首			神画を出す、ABCとマークし所有者をあらわす。			廣田	廣田	
12/01 00:07		認三清						神画を正面・左・右に裏返し掛ける。			廣田	廣田	
12/01 00:11		認三清						白布を出す、正面神画前の机の上に置く。			廣田	廣田	白布：長さ1尺2寸?*
12/01 00:14 ~		認三清	主祭場	鋪床	夫人			床の敷物の上に布団を敷く。			廣田・李	廣田・李	
12/01 00:19 ~		認三清	主祭場真		夫人			酒甕の前に並んで立つ。			廣田	廣田	甕には少量の酒。
12/01 00:20 ~		認三清		引睡	主醮師・引度師・ 会首			布団に入る、靴脱ぐ、頭が外、足祭壇。			廣田・李	廣田・李	

12/01 00:22	認三清								真っ暗にし、いびきをかき寝ている様子にする(会首)。		廣田	
12/01 00:23 ~	認三清								コケッコーと笛(漢族のソナーナと同じ)で11回鳴らす。3回鳴く→チャッチャッチャとシンパルで羽根が鳴る音→4回鳴く→羽根の音→4回鳴く→起床。		廣田・広川	本来は10回。
12/01 00:28 ~ 00:34	認三清	起早							起き出す、靴履く。		廣田・李	
12/01 00:29	認三清	封酒壇							裏の夫人に壁を越え白布の端をこちらに残し反対の端をわたす。		廣田	夫婦のユニフォームを明確にする。
12/01 00:29	認三清	巧婦						夫人	白布を受け取り布の端を酒甕の上にとたんでおく。		廣田・李	
12/01 09:09	【作業】		祭壇前広場					会首・夫人	疏表を入れる為、靴の箱に黄紙を貼る。		廣田	
12/01 09:30	【作業】		書表師作業場					書表師	対聯をかくA-4の儀札マキスト「第十二花牌白紙」の前を写す。		廣田	
12/01 09:45 ~	【作業】		紙縁師作業場						総壇師のノートを見ながら紙縁師・他1名と相談。		廣田	
12/01 09:54	【作業】		主祭場					主醮師・引度師・座壇師	儀札マキスト見ながら相談。		廣田	
12/01 09:59	【作業】		紙縁師作業場					紙縁師	「奏清財馬」(A-15)部分を示しながら相談。		廣田	
12/01 10:20 過 ぎ	出排盞		主祭場					祭司達・書表師・座壇師・証盟師・総壇師・執香師	壇に向かって拝礼。供物の盆(油揚げ・酒)が運ばれ、法師達も口にする。		吉野・李・ 廣田	(出排盞) li`sin`
12/01 10:45	【作業】		紙縁師作業場					紙縁師	紙銭を作る。		廣田	
12/01 11:00 過 ぎ	【作業】		主祭場						主祭場の正面の棚の奥に壁を作る。杉皮を用い、壁を作つてゆく。		吉野	
12/01 11:23	【作業】		書表師作業場					主醮師	天上につるす対聯に切り紙をする。		廣田	
12/01 11:40	【作業】		裏広場					法師・会首	竹細工を行う、開天門使用かがり火の台及び天橋の台。		廣田	(分掛吊) pung kwaa- diou_
12/01 11:46	【作業】	做十二宮門 做十二宮對	主祭場					証明師弟子・保拳師II等	正面祭壇作る。対聯も作る。			
12/01 12:00 頃	上掛吊		主祭場						対聯・票・牒・榜文を天井に張りわたす。		廣田・吉野	(分掛吊) pung kwaa- diou_
12/01 12:10 頃	上掛吊		書表師作業場					主醮師	文榜と花牌の端を凶案(切り絵)にする。凶案は、蜘蛛・団魚(スッポン)・鯉・蜈蚣(ムカデ)・雄鶏の尾羽。		李	
12/01 13:00	上掛吊		主祭場・祭壇前広場						天橋を造る。		廣田	
12/01 14:40 頃	上天橋								天橋を架ける。		吉野	(天橋) tin`ciou`
12/01 14:55	上天橋								一番目の天橋完成。		吉野	
12/01 15:44 ~	上天橋		主祭場						祭壇を設える。		廣田	(対聯・【火+完】灯・神像等)
12/01 15:45 頃	上陰橋								陰橋を造る。しかし、いったん外して、大道橋を付け直す。		吉野	向かって左側、布の天橋には、大道橋が乗っている。付け直した理由は大道橋の方が短い為。
12/01 16:15	上陰橋		主祭場						陰橋を張る。		廣田	
12/01 16:20	上陰橋								陰橋完成。		吉野	

12/01															図1 参照	吉野	
12/01	17:15～17:30		主祭場			祭司達		神牌位＝五色花牌を置いて円く。主祭場の中心に置かれた食卓につく、酒、豆腐。							図2 参照	廣田・吉野	
12/01	17:16	喝落脚酒			書表師			煙草を配る。								吉野	
12/01	17:17	喝落脚酒			主齋師			念誦							儀式の内容を念誦。	吉野・廣田	
12/01	17:30	喝落脚酒						箸を酒に付けて散酒。							陰陽の師父が共食。	吉野・廣田	
12/01	17:31	喝落脚酒			主齋師			念誦終わり。							この式目は du`su`lai`chua`ti	吉野	
12/01	17:35							花楼を中央に移す。								吉野	
12/01	17:38							花楼の中の笛とシンバルを下におろす。								吉野	
12/01	17:40頃	求師						爆竹を鳴らす。								吉野	
12/01	17:40頃	求師		花楼前	主齋師			念誦打管。								吉野	
12/01	17:40	求師	主祭場		法師達			神画を表に向ける。								廣田	
12/01	17:45～	求師		花楼前	主齋師			中央の花楼前で念誦。			会首の祖先、祭司の兵馬、祭司の師父を招請する。ナキスト無し。					廣田	
12/01	17:50頃	求師		家先壇前	引度師			念誦								吉野	いずれも小声。
12/01	17:58	求師		家先壇前	引度師			家先壇に紙馬を供す。								吉野	
12/01	18:00	求師		家先壇前	引度師			了								吉野	
12/01	18:32				執香師			壇の上に4組設える。								吉野	
12/01	18:20頃	勸鐘鼓			主齋師			ドラに勸水、牛角に勸水、符・罡歩・管。								吉野・廣田	勸変羅鼓の罡歩。
12/01	18:20	【準備】	主祭場		祭司・会首等			法服に着替える。								廣田	
12/01	18:27	【準備】	主祭場		師男			正装して花楼前に並ぶ。								吉野	
12/01	18:30	拜五方昇羅鼓	主祭場		主齋師等 祭司・会首・楽隊			主齋師を先頭として列をなし、花楼の周りを巡る。その後、主祭場を出て、雲台へ行き、雲台の周りを巡り、主祭場へ戻り、また花楼の周りを巡る。ドラ・太鼓・シンバル・笛。							此を串壇といふ。 (串壇) tsong` tong` 昇羅鼓は通天門五方にしらせ る。	吉野・廣田	
12/01	18:37	拜五方昇羅鼓	雲台		祭司・会首・楽隊			雲台をぐるぐる回る。走団魚文台と内壇前を五方五位で回る。								廣田・李	走団魚 tsun du
12/01	18:45	拜黄幡・拜白幡	主祭場前広場		祭司・会首・楽隊			雲台から戻り陰と陽の天桶を回る。								廣田	
12/01	18:47		主祭場		祭司・会首・楽隊			祭壇に礼。								廣田	
12/01	18:48	跑堂		花楼前	祭司・会首・楽隊			花楼の周りを回る。 主齋師と会首達は主祭場の各神壇へ拜礼する。功曹壇へも。								廣田	亀形に回る。亀を縛り、背中に背負い、家にもつて帰り繩を解き、食べ、排泄し団圓の内容を表現する。
12/01	18:57	跑堂		花楼前	祭司・会首・楽隊			花楼前で礼、2人で背中合わせになる、花楼五方でしゃがんで礼。								廣田	
12/01	19:01	跑堂		四府功曹	祭司・会首・楽隊			四府功曹前で礼、法服脱ぐ。								廣田	
12/01	19:05～19:14	跑堂		花楼前	主齋師			紙銭燃やす、管。								廣田	
12/01	21:08	請初夜聖	主祭場	出排盞	執香師			ドラを打ち鳴らす。								吉野・廣田	
12/01	21:25	請初夜聖	主祭場		規縁師*・茶酒師 糸酒師・引度師・ 紙縁師・証明師・ 庶壇師・執香師・ 吹笛師			神位に緞香を上げ、水酒を並び、ドラを3回打つ。								李	吉野・李で調査必要。
12/01	記述無し	請初夜聖						“傾席”後に儀礼を行う。								李	*

12/01	記述無し	請初夜聖				保拳師・保拳師II 証盟師・証盟師II	弟子は保拳師に代わって法服を着る。 弟子は証盟師に代わって法服を着る。				李	*
12/01	記述無し	請初夜聖				保拳師・保拳師II 証盟師・証盟師II	会首達の名簿を唱え、焼紙銭、管。				李	*
12/01	21:25	請初夜聖				総壇師・座壇師	念誦				吉野	*
12/01		請初夜聖				引度師	念誦				吉野	*
12/01	21:33	請初夜聖				執香師・証盟師 吹笛師・打鞞師					吉野	*
12/01	21:42	請初夜聖					ドラが打ち鳴らされる。(請聖)の(起根)(開始)。				吉野	(請聖) tshing sing (起根) kiou kwoen 吉野・李で調査必要。
12/01	21:47	請初夜聖		主祭場		茶酒師	酒が振る舞われる。				廣田	
12/01	21:49	請初夜聖					ドラ・鉦鳴。				吉野	
12/01		請初夜聖		主祭場		証盟師・座壇師・ 保拳師・座壇師II・ 紙縁師	正装する→火のついた線香をもち壇前で拝礼。				吉野	正装(紅服・神冠)。 主醮師・書表師・総壇師は正装せず。
12/01		請初夜聖				証盟師・座壇師・ 保拳師・座壇師II	線香と牙筒と鈴をもち、拝礼・回舞。立礼と跪礼を繰り返す。拝礼の1セットごとに線香を新しい物に替える。①正面壇と花楼②正門へ向かって③再度正門に向かって④東方へ向かって(孔子牌か?)⑤正面壇へ向かって⑥線香はもたず、正面壇へ向かって、西方へ向かって、正面壇へ向かって。				吉野	
12/01		請初夜聖				主醮師	証盟師らが拝礼・回舞を行っている間、家先壇前で念誦。				吉野	
12/01	22:05	請初夜聖				引度師・証盟師・ 座壇師・保拳師・ 座壇師II・紙縁師	法服に着替える。				廣田	
12/01	22:10	請初夜聖		主祭場		総壇師	功曹祭壇に四府の面掛ける。				廣田	
12/01	22:13 ~	請初夜聖		主祭場		証盟師・座壇師・ 保拳師・座壇師II	正面祭壇に向かつて線香・牙筒・剣・鈴をもち舞う。				廣田	
12/01	22:17 ~	請初夜聖		主祭場		引度師・紙縁師	功曹祭壇に向かつて線香・牙筒・剣・鈴をもち舞う。				吉野・廣田	神前に跪くところには紙が敷いてあった。昇香舞
12/01	22:28 ~ 23頃まで	請初夜聖		主祭場		証盟師・保拳師・ 座壇師・座壇師II	右上花楼に向かつて牙筒・剣・鈴をもち礼、舞う。				廣田	
12/01	22:20 ~	請初夜聖		主祭場		主醮師	家先衆壇に向かい唱えごと、管、酒つぐ。				廣田	
12/01	22:55 ~ 23:30まで	請初夜聖				総壇師	会首の名簿よむ。念誦。				廣田	
12/01	22:55 ~ 23:30まで	請初夜聖				4人	壇前の4人、花楼に拝礼。				吉野	
12/01	22:31	請初夜聖					正面に向かつて拝礼、線香は四府功曹壇と太歳壇へ供える。				吉野	
12/01	22:35	儀礼名は? *				孔子神位	孔子神位へ向かい、拝礼。線香は孔子神位へ供える。				吉野	
12/01	22:37	儀礼名は? *				正面祭壇前	再び、主壇に向かい、拝礼。				吉野	拝礼時に線香無し。

12/01 22:37	発功曹				四府功曹壇前	2人	主壇に向かい拝礼している間、四府功曹壇前の2人は揺鈴を続ける。				吉野・廣田	排香舞・昇香舞。
12/01 22:46	請初夜聖		花楼		花楼		花楼へ向かって拝礼。				吉野	拝礼時に線香無し。
12/01 22:47	請初夜聖		正門		正門		正門に向かって拝礼。				吉野	
12/01 22:49	請初夜聖		正面祭壇前		正面祭壇前		再度壇前に向かって拝礼。終了				吉野	四府功曹壇前は未だ終了せず。卓上の米の上に「表」あり。
12/01	【作業】					総壇師・引度師	総壇師来たりて引度師と相談。				吉野	
12/01 22:59	請初夜聖		下禁壇		家先壇	主齋師	気がつくど、家先壇前でしゃがんで読誦。地面を掘っている。				吉野	
12/01	請初夜聖		過馬槽	ここに入るか？*		引度師	吃斎等を会首達に指導 初夜聖の中で行えばよい。				廣田	
12/01	請初夜聖		請聖		家先壇	総壇師	主齋師の横で別の念誦。				吉野	*
12/01 23:00	発功曹				四府功曹壇前	引度師	引度師の念誦終わらず。				吉野	四府功曹壇には4通の表あり*
12/01 23:51	発功曹				四府功曹壇前	引度師	読誦		発功曹のテキスト		吉野・廣田	経文の各頁の冒頭部分「北極紫微大帝…」「天府一界…」「有禮無礼…」「地府人殿…」*
12/02 00:00 過ぎ	請初夜聖				家先壇	総壇師	念誦終わらず。				吉野・廣田	*
12/02						引度師					吉野	*
12/02 00:15 頃まで	請初夜聖					総壇師	「伝度白榜」を読誦。				吉野	*
12/02 00:20	発功曹					引度師	発角				吉野・廣田	伝陰放陽を通知*。
12/02 00:30	請初夜聖					主齋師	引度師とは別の経文を読誦。				吉野	*
12/02 00:40	請初夜聖					引度師・紙縁師	読誦終了。正装脱ぐ。				吉野・廣田	*
12/02						主齋師	紙銭を燃やす。				吉野	*
12/02							夜食				吉野	*
12/02	請初夜聖				正面祭壇前	執香師	正面祭壇に笹を供える。				廣田	*
12/02 02:32 頃	請初夜聖						再開				吉野	*
12/02	請初夜聖		下禁壇		家先壇	主齋師	「請聖書」を読誦。 紙銭丸める、管、家先壇前地面に何か埋める、その上に紙銭積む、燃やす、念誦、テキストよむ。		請聖書		吉野・廣田	“下禁壇疏文”を念誦。邪教をおさめる*。
12/02	請初夜聖					執香師	主齋師の読誦の間、灯明を整える。				吉野	*
12/02	請初夜聖		清浄花角		花楼	証盟師II	花楼で念誦。師男達の家先車を読み上げている。酒つぐ、紙銭積む、テキストよむ、水碗と剣をもちよむ、呪符、念誦、管、東西南北に散水、念誦。				吉野・廣田	*
12/02 03:45 ~ 03:47	請初夜聖		解饌		孔子壇	総壇師	慶疏疏に勅。厨房の籠で燃やす。				吉野・廣田	*
12/02	請初夜聖		清浄花角		花楼	証盟師II	門口で散水、入り口の左右に呪符をかく、正面祭壇に向かつても散水、念誦、発角。				廣田	*
12/02	請初夜聖		清浄花角 七声鳴角		正面祭壇前	座壇師	テキスト読誦。		A32a 楊柳枝〜第三請前まで。		廣田	*
12/02 04:12 頃	円満跑堂				花楼	会首達	会首達が主齋師の先導で花楼の周りを回る。→四府功曹、刀山先師、→各神位を押し、花楼の周りに集まり終了。				吉野	*
12/02	請聖				祭壇正面	供奉師II	テキスト読誦。		テキストは撮影した者の中にはない。		廣田	

12/02 10:10		上光		主祭場		執香師	線香あげる。				廣田・広川	この段階で家先堂前に埋め跡あり(午前九時撮影の写真あり)。後に主師が掘り出す位置からしても既に落禁壇が行われたものと考えられる。
12/02 10:13		上光					ドラを鼓す。				吉野	卓上の表紙 「請聖大疏」 「請聖請状一函文引」 「呈進師人壇啓建修設講状」 「保安新承弟子…」 主祭場中央に花楼。
12/02 10:20頃		【記述】									吉野	
12/02 10:22		上光	出排蓋	主祭場		書表師II	盆供える(3回)。				吉野・廣田	
12/02 10:29		上光	出排蓋	書表師作業場			白幡帯作る。				廣田	
12/02 10:35～11:20		上光					ドラを鼓す。					
12/02 10:30		上光	求師		花楼	証盟師	花楼で念誦。家先車を誦んでいる。				廣田	
12/02 10:30		上光	求師	主祭場	花楼前	証盟師II	礼、唱えごと、紙銭置く、酒つぐ。会首名簿よむ。				廣田・吉野	
12/02 10:35		上光		主祭場	花楼前	吹笛師・執香師・茶酒師・鼓師	法服を着る。				廣田	4人は引光童子。
12/02 10:35～11:20		上光		主祭場	花楼前	吹笛師・執香師・茶酒師・鼓師	4人の祭司が花楼前に整列。牙筒もち、鈴鳴らす、紙銭置く、礼拝、会首の名簿よむ。拝師舞・上光舞・羅帯舞・神頭舞。				廣田・吉野	
12/02 10:35～11:20頃		上光		主祭場	主壇前	総壇師・座壇師・保孝師II・座壇師II	壇前で、4人が歌を唱す。				吉野・廣田	
12/02 12:21～12:38		上光		主祭場	主壇前・花楼横	座壇師	1杯の酒を外に向かつてかけ、師父に献ずる。				廣田	
12/02 12:58		上光		主祭場	主壇前	笛吹師・執香師・茶酒師・鼓師	分紙、焼紙。				吉野	
12/02 11:16		上光		書表師作業場		書表師II	法服脱ぐ。				廣田	
12/02 11:16		上光				書表師	文書の朱点つけ。				廣田	
12/02 11:20～12:58		上光		主祭場			会首の名簿をつし、星表つめる。				廣田	
12/02 11:20～12:58		上光		主祭場	花楼前	吹笛師・執香師・茶酒師・鼓師	鈴・牙筒もち振る。				廣田	
12/02 11:50～12:38		上光		主祭場	家先衆壇前	座壇師・保孝師II	儀礼ヲキストよむ、会首の名簿よむ、法師の名簿よむ、紙銭つむ、燃やす、筈。				廣田	
12/02 12:07		上光	開壇	主祭場		座壇師	「公王出世」読誦。				吉野・廣田	
12/02 15:08		開壇	安途落馬	主祭場			札にU字型に8つの蓋2組置く。				廣田	
12/02 15:08		開壇		主祭場		主齋師・座壇師等	儀礼ヲキストうたう。執香師、鼓楽師3人鈴振る、勿もつ。				廣田	
12/02 15:42		初夜黄表開天門		主祭場	花楼前	引度師	唱えごと、紙銭積む、会首の名簿よむ、酒つぐ。				廣田	

12/02	初夜黄表 開天門	回兵	家先祭壇前	正面祭壇前	会首	ドラ・シンバル・太鼓・笛鳴らす。	廣田				本来は祭司が行うが代理で行っている。	
12/02 15:48	初夜黄表 開天門	回兵	主祭場	正面祭壇前	会首	兵器のレブリカもち、鈴鳴らし、舞う。回兵舞	廣田					
12/02 15:52	初夜黄表 開天門		主祭場外広場	文台	引度師・証盟師 II	発角、唱えごと、筥、証盟師弟子籠に紙銭入 れる、書表師文書を載せる。引度師テキスト読誦、 太鼓敲き、唱える、文書燃やす、筥、手訣、 発角、剣、礼。	廣田	初夜黄表、文 引	A16 (開天門用テキ スト)		初夜表は陰師父への報告。	
12/02 16:06	初夜黄表 開天門		主祭場	正面祭壇前	祭司 4 人	根もち鐘鳴らす、棍をもち回る。	廣田					
12/02 16:06	初夜黄表 開天門		家先祭壇前	家先祭壇前	法師	うたう、紙銭積む。	廣田					
12/02 16:49	初夜黄表 開天門		主祭場	花楼前	引度師	礼、紙銭燃やす。	廣田					
12/02 17:03	初夜黄表 開天門		主祭場	家先祭壇前		紙銭燃やす。	廣田					
12/02 17:15	初夜黄表 開天門	謝陰師 *	主祭場				廣田					
12/02 17:15	開壇 (安塗 落馬) (合兵 合符)	小運銭			吹笛師・執香師・ 茶酒師・鼓師	揺鈴	廣田					合兵合符でもある。
12/02 17:15	開壇	小運銭		正面祭壇前	座壇師	机の上の酒盞に酒つぐ、唱えごと、会首の名 簿よむ、筥、紙銭燃やし、盞をふせる。	廣田					
12/02 17:17	開壇	修齋		正面祭壇前	執香師・茶酒師・ 吹笛師・鼓樂師	筥、棍もち舞う、師根舞。途中から主醜師吹 笛師に変わる。	廣田	A30a 收齋歌				
12/02 17:17	開壇	脱童			執香師・茶酒師・ 吹笛師・鼓樂師	また 4 人で鈴振る。長衫を脱ぐ。	廣田	A30a 脱童				
12/02 17:17	ペンディング*				主醜師	紙銭置きつつ唱えごと。	廣田					
12/02	ペンディング**				*	会首の名簿をよむ。						
12/02 17:52	回兵			正面祭壇前	座壇師・保拳師 II	兵器のレブリカを東にしたものと鈴をもち舞う。 これを回兵舞 (收兵舞) という。	廣田				黄表の護兵が帰って来る。	
12/02 18:00			書表師作業場		書表師	儀礼テキスト見つつ「陸職位」13 枚作る。	廣田					
12/02 19:50			主祭場			繭香、酒を供える。	廣田					
12/02 20:35 頃	補掛三灯	請師		花楼	主醜師	念誦。	吉野					花楼の位置は図 3 参照
12/02 20:40	補掛三灯	請師		花楼前	主醜師	酒つぎ、唱えごと、会首の名簿をよみ、紙銭 を落とす、テキストよむ。	廣田					師父 18 人 (祖父・おじ・父・ 掛三灯時の 4 人・度戒時の 12 人) の名呼ぶ。
12/02 20:57	補掛三灯				主醜師	「伝灯用変水」を読誦。	吉野					掛灯会首の法名：法青 (8)・ 法右 (2)・法維 (9)・法官 (6)
12/02 21:00	補掛三灯	幼饒		正面祭壇前	主醜師	箱の中の米布及腰掛けを水と剣で聖なるもの に変える (変水のテキスト内容による) ? *	吉野・廣田	A32b 伝灯用			A15b にもあり。	
12/02 21:00	補掛三灯		主祭場	正面祭壇前	座壇師	儀礼テキストよむ。	廣田	A32b				
12/02 21:07	補掛三灯	昇饒		正面祭壇前 → 門	座壇師・証盟師 II	法服・法冠をのせた腰掛けを入り口に向かっ て運ぶ、師棒を椅子に差し込み運ぶ、入り口 付近で外に向かい、礼、2 回、ドラ・シンバル、笛。 油を盞に入れる。	廣田					口の中で念誦。
12/02 21:11	補掛三灯				執香師		廣田					

12/02 21:14	補掛三灯	昇焼	主祭場	正面祭壇前	主醮師	唱えごと、焼とともに。	テキストなし。当日当地でいかなる焼を昇するか？太上老君の焼。太上老君の焼に座り、太上老君の飯を食べ、太上老君の路を歩き、太上老君の衣を着る。	天神・七星北斗・四府功曹・本方地主が来て証盟してくる。	廣田
12/02 21:20	補掛三灯	昇焼	主祭場	正面祭壇前	総壇師	4人の法名の紙をもつ、主醮師とともに。			廣田
12/02 21:16	補掛三灯	昇焼	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	椅子をもちつつ祭壇に向かって拝礼。			廣田
12/02 21:16	補掛三灯	昇焼	主祭場	正面祭壇前	執香師	祭壇に線香供える。			廣田
12/02 21:28	補掛三灯	昇焼	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	焼を並べる。			廣田
12/02 21:28	補掛三灯	穿衣	主祭場	正面祭壇前	座壇師・執香師・紙線師手伝い・会首(2・6・8・9)	法服に着替える、ターバン・法冠着ける。			廣田
12/02 21:30	補掛三灯		主祭場	正面祭壇前	紙線師	灯明に点火。			
12/02 21:34~22:00	補掛三灯	踏蓮花	主祭場	正面祭壇前	会首	焼に座る、靴の下に碗。			廣田
12/02 21:39	補掛三灯	収祭	主祭場	正面祭壇前	主醮師・総壇師・証盟師II・座壇師	紙銭をもって丸めつつ唱えごと、丸めた紙銭を頭越しに外方へ投げる。		天祭と地祭 124種の祭を収める。用紙収祭→丸めて外に捨てる。	廣田
12/02 21:44	補掛三灯	藏身躲隠	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	焼に座った会首の周りを回る。会首の周りを空をなでるように所作し、回る。		時計逆にステップを踏み順に自転しながら、手を広げ閉じつつ。	廣田
12/02 21:44	補掛三灯	昇灯	主祭場	正面祭壇前	総壇師	法名が書かれた紙もつ、「抽灯用」を唱える。	抽灯用 A32b	還家愿と同じ。	廣田
12/02 21:44	補掛三灯	昇灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	念誦。総壇師と主醮師は別のテキストで同様の内容を念誦している。	主醮師：A32b「昇灯」「解厄」	三灯の意味：1祖宗(伝宗接代)、2本身(本命灯)、3師父(保佑灯)。	廣田
12/02 21:52	補掛三灯	昇灯	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	灯明の蓋を盆にのせ、もつ。			
12/02 21:53	補掛三灯	昇灯	主祭場	正面祭壇前 →門→正面祭壇前	座壇師・証盟師II	盆にのせた灯明を門口まで運び、外へ向ける。			廣田
12/02 21:58	補掛三灯	昇灯	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	灯明の盆をもったまま座壇師は東側から、証盟師IIは西側から、各神画を指さし拝礼。掛灯の証盟を願う。		二人が東と西とから各神画の神々に誰がどの灯火(三灯のそれぞれ)を掛灯したかを太上老君に対して証盟してもらうよう拝礼する。	廣田
12/02 21:58	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	唱える			廣田
12/02 22:00	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前		地面に竹の灯架を差す。			廣田
12/02 22:04	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前		灯火を灯架に掛ける。			吉野
12/02 22:12	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	会首に向かって唱えごと。			廣田
12/02 22:13	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	証盟師II・座壇師	会首に向かって手訣。		6会首に対応。 証盟師弟子：8会首に対応。 座壇師：9会首に対応。老君訣	廣田
12/02 22:17	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	座壇師・証盟師II	鈴振り牙籠もち、儀礼テキストをよみつつ右回り「解厄」を唱える、答。		時計回りに。革張リテキスト	廣田・広川
12/02 22:20	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師				廣田
12/02 22:17	補掛三灯	掛灯	主祭場	正面祭壇前	総壇師	会首に向かって儀礼テキストよむ、手訣、答。			廣田
12/02 22:24	退灯	掛灯				終了			吉野・廣田

12/02	22:25	補掛三灯	証盟師	吉野								
12/02	22:26~23:42	補掛三灯	法師	廣田	会首の膝に白布を広げる。							足下には米の箱。 ※唱える内容を暗唱
12/02	22:31	補掛三灯	総壇師	廣田	管							
12/02	22:40	補掛三灯	主齋師・総壇師	廣田	唱えごと	A32b	撥橋用					
12/02	22:40	補掛三灯	証盟師Ⅱ・座壇師 も？*	廣田	それぞれに管。							卦認定。
12/02	22:40	補掛三灯	総壇師・主齋師・ 証盟師Ⅱ・座壇師	廣田	それぞれ唱えごとをしつつ、管。							
12/02	22:55	補掛三灯	証盟師Ⅱ・座壇師	廣田	米と銭を鈴に入れて布に入れる。	A32b	分兵用 この 他、「定陰陽」					陽卦:撥、陰卦:保、聖卦:認。 銭は師父の銭を貰う意。
12/02	22:58	補掛三灯	総壇師・主齋師・ 証盟師Ⅱ・座壇師	廣田	布を切って包む。管							
12/02	23:00	補掛三灯	総壇師・主齋師・ 証盟師Ⅱ・座壇師	廣田	米を牙筒に置く。その米を吹いて会首の口に入れる。							
12/02	23:01	補掛三灯	会首	廣田	師父に吹き入れられた米を飲む。							
12/02	23:03	補掛三灯	会首	廣田	7枚の小銭を鈴に入れ投げ裏表を見る。三陰四陽となるまでやる。9 会首なかなか揃わず。							硬貨の数字が書いてある方が 陽、模様を描いてある面が陰。
12/02	23:12	補掛三灯	祭司	廣田	唱えごと		神明に対して、三 陰四陽が揃うよう願 う。					
12/02	23:20	補掛三灯	祭司	廣田	碗を足から外す。							9 会首から嗅がせる。
12/02	23:21	補掛三灯	座壇師	廣田	釜先柴壇にあつた香炉をもって行って、会首に 嗅がせる。							文献中には接水碗もあり。
12/02	23:22	補掛三灯	座壇師	廣田	ドラの叩き方を示し、会首にドラを叩く練習をさ せる。							
12/02	23:24	補掛三灯	主齋師	廣田	根をもち、牛角を鳴ら素練習をさせる。							
12/02	23:25	補掛三灯	主齋師	廣田	打管の練習をさせる。							
12/02	23:26	補掛三灯	会首	廣田	牙筒をもち、鈴を鳴らす練習。							白布は橋布であり、布を以て 橋の代わりとする。
12/02	23:26	補掛三灯	主齋師	廣田	儀礼アキオ詠誦。	A32b	p.20					
12/02	23:28	補掛三灯	主齋師・証盟師・ 総壇師・座壇師	廣田	主齋師唱えごと、師棒もち会首の両脇をばさみ 2人ずつ立たせる。							
12/02	23:31	補掛三灯	会首	廣田	「七星星」を学ぶ。布の上の7枚の小銭を踏 み昇歩の練習。							
12/02	23:33	補掛三灯	会首	廣田	鈴と牙筒をもち振る。							
12/02	23:34	補掛三灯	会首	廣田	謝神舞を舞う。							
12/02	23:34	補掛三灯	座壇師・主齋師	廣田	儀礼アキオを詠誦。	A32b						「良いことをせよ」 といった内容の歌。
12/02	23:42	補掛三灯		吉野・廣田	終了【総壇師・証盟師・主齋師がそれぞれ に…】。会首は正装脱ぐ。							
12/03	09:05	出排蓋	主齋師	廣田	盆供える。							
12/03	09:10頃	請中夜聖	証盟師Ⅱ・弟子*・ 保孝師Ⅱ・茶酒師	吉野	4人の師哥が長杉法服を着る。							総壇師・座壇師は普段着のま ま。

12/03 09:19								総壇師・座壇師・ 証盟師Ⅱ・引度師	読誦。総壇師は会首名簿を読誦。 香を供える。							吉野
12/03					主祭場	主祭場	主祭場	正面祭壇	4人師哥	右手に牙筒をもち、播鈴。						吉野・廣田
12/03 09:19					主祭場	主祭場	主祭場	花楼前	主齋師	唱えごと、紙銭積む、管、燃やす。						廣田
12/03 09:20					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	主齋師	唱えごと、紙銭積む、管、燃やす。						廣田
12/03					主祭場	主祭場	主祭場	正面祭壇前	書表師	正面祭壇に疏文供える。						廣田
12/03 09:25					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	総壇師・座壇師・ 証盟師Ⅱ・引度師	また念誦。	A20「請聖書」最 初から読誦。					吉野・廣田
12/03					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	主齋師	念誦に加わる。						廣田
12/03					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	会首	正装して正面祭壇前に弧形に並び跪く。						廣田
12/03 09:29					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	書表師	「請聖大疏」を読誦。						吉野
12/03					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	会首	会首立ち上がり、解散。						廣田
12/03 09:30									証盟師Ⅱ	また念誦。						吉野・廣田
12/03 頃? *									証盟師Ⅱ	また念誦。						吉野・廣田
12/03 09:31								花楼	主齋師	花楼で昨日(分紙)(紙銭を供える)した紙扛 を焼く。						吉野・廣田
12/03 09:32					書表師作業場	書表師作業場	書表師作業場	書表師作業場	吹笛師	会首の名簿を見ながら文書作成。						廣田
12/03 10:06					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	主齋師	太上老君印を彫る。						廣田
12/03 09:44					主祭場	主祭場	主祭場	主祭場	書表師	右端の机で管作る。						廣田
12/03 09:35 頃									書表師	3通の疏表文を壇上の米の入った碗に立てる。						吉野・廣田
12/03 09:38									引度師	退く。						吉野・廣田
12/03 09:40									証盟師Ⅱ	総壇師の代わりに念誦。						吉野・廣田
12/03 09:43									証盟師Ⅱ	(奏角)(角笛を吹く)						吉野・廣田
12/03 09:43									総壇師	壇向かって右で念誦。手には家先単。						吉野・廣田
12/03 09:43									執香師	(分香)(香を供える)						吉野・廣田
12/03 09:51									総壇師	念誦了。						吉野・廣田
12/03 09:55									座壇師・引度師・ 証盟師	同所において再び念誦。						吉野・廣田
12/03									座壇師・引度師・ 証盟師	念誦終わり、雑談中。						吉野・廣田
12/03 10:03									座壇師・引度師・ 証盟師	念誦再開。						吉野・廣田
12/03 10:04									総壇師	向かって右端の師哥(座壇師弟子?)に経 本を渡し、代読誦を依頼。						吉野・廣田
12/03 10:04									座壇師Ⅱ・証盟師 Ⅱ	座壇師弟子、その隣の証盟師弟子?*に家 先単を渡し、2人で並行読誦。						吉野・廣田
12/03 10:16									座壇師	念誦了。						吉野・廣田
12/03 10:20									座壇師・引度師・ 証盟師	念誦了。雑談						吉野・廣田
12/03 10:29									保拳師Ⅱ	また念誦了。						吉野・廣田
12/03 10:29									総壇師	来る						吉野・廣田
12/03 10:35									証盟師	念誦再開。						吉野・廣田
12/03 10:36									座壇師・引度師	少し遅れてまた念誦再開。						吉野・廣田
12/03									保拳師Ⅱ	また家先単を読誦。						吉野・廣田

12/03 10:56	請中夜聖	請聖			座壇師・引度師・ 記盟師	念誦終了。			吉野・廣田	
12/03 10:58	請中夜聖	請聖	主祭場	正面祭壇前	保琴師Ⅱ	家先単の読誦終了。			吉野・廣田	
12/03 11:00	請中夜聖	請聖			4人	正面祭壇に向かつて並ぶ。			廣田	
12/03 11:03	請中夜聖	請聖			主醮師	念誦打管、唱えごと。			吉野・廣田	
12/03	請中夜聖	請聖			師哥	主醮師の念誦打管に併せて立ち上がり、揺鈴。			吉野・廣田	
12/03 11:13	請中夜聖	請聖			会首	小休止			吉野・廣田	
12/03 11:15	請中夜聖	奏疏文	主祭場	正面祭壇前	主醮師	正面祭壇に向かつて並ぶ。			廣田	
12/03 11:16	請中夜聖	奏疏文			会首達	「請聖大疏」をもつ。			吉野	
12/03 11:17	請中夜聖	奏疏文			会首	ミエンの正装をして登場。			吉野	
12/03 11:20	請中夜聖	奏疏文			書表師	跪座			吉野・李	
12/03 11:21	請中夜聖	奏疏文			主醮師・書表師	登壇			吉野	
12/03 11:22	請中夜聖	奏疏文			主醮師	「請聖大疏」の前半部分を読み上げる。その のち、書表師に代わる。			吉野	
12/03 11:22	請中夜聖	奏疏文			書表師	別の経文を読誦。			吉野	
12/03 11:49	請中夜聖	奏疏文			書表師	疏中の各会首の俗名、法名、生年月日時など を読み上げる。			吉野	
12/03 11:49	請中夜聖	奏疏文			書表師	大疏をもって、書表師作業場へ移動。			吉野	
12/03 11:49	請中夜聖	奏疏文	書表師作業場	花楼	書表師	花楼→主祭場中央に移動。			吉野	
12/03 11:51	請中夜聖	跑堂			会首	「大疏」の修正作業（朱字で）。			吉野	
12/03 11:53	請中夜聖	跑堂				正装して揃う。			吉野	
12/03 11:55	請中夜聖	跑堂	主祭場	花楼の周り	主醮師・座壇師Ⅱ・ 弟子*・保琴師Ⅱ・ 茶酒師	奏楽			吉野・廣田	帽子・神頭・赤いチョッキを着 て、手にはシンバルをもつ。
12/03 11:55	請中夜聖	跑堂	主祭場	花楼の周り	会首達	主醮師に続き回る。			廣田	
12/03 11:59	請中夜聖	跑堂				列は花楼を離れ、各神位前で一々拝礼→刀 山先師位まで、→花楼前に戻る。			吉野	
12/03	請中夜聖	跑堂			書表師	列が花楼を離れ、拝礼し、また戻って来る間、 書表師は「大疏」を再度壇上に戻す。			吉野	
12/03	磨刀	出排蓋				盆を供える。			廣田	
12/03 13:43	磨刀				主醮師・引度師・ 吹笛師・磨刀師(2 人)	礼、7本と6本の刀をそれぞれ束にして白布で 包む。			李	
12/03 13:58	磨刀	磨刀舞	主祭場	主祭場	主醮師・引度師	拝礼			李	主醮師と引度師、赤い短上着・ 背中に白布・帽子・法冠。
12/03 14:00	磨刀	磨刀舞	主祭場	正面祭壇	主醮師・引度師	祭壇に向かい、剣もち鈴を右手で鳴らし、回りつ つ2人からむ。刀を背中に担ぐ。太鼓・笛。			廣田・李	
12/03 14:11	磨刀	磨刀舞	主祭場外広場	主祭場外広場		外に運び磨刀師にわたす。			廣田	
12/03 14:11	磨刀				磨刀師	刀の入った白い布を担いで川沿いの小道を 下ってゆく。雲台の先にある丸太橋を渡って本 道に上がる。道のカーブ辺りで、弟子らしき人 と落ち合う(後追い終了)。オートバイで上流 へ行った。			廣田	封刀・閉刀ではA21の呪言を 唱え、怪我をしないようにする。
12/03 14:12	磨刀			正面祭壇前	主醮師	正面に戻り唱えごと、筥。			廣田	
12/03	記述無 し				執香師	打ドラ			吉野	*
12/03	記述無 し				執香師	酒つぐ。			李	*
12/03	中夜道場黄 表開天門		主祭場外広場			爆竹鳴らす。			李	*

12/03 15:10	中夜道場黄表開天門		花楼(四府功曹壇前北向)	証盟師II・証盟師	会首の名簿よむ、唱えごと、紙銭。		廣田	ヲキストA15aによれば、本来保拳師が行うものである。
12/03	主祭場	主祭場	家先衆壇前	主齋師	A-21 よむ。		廣田・李	2回
12/03 15:22	【作業】	書表師/作業場	家先衆壇前	書表師	文書(賀刀山文引)の朱点、印押し。		廣田	
12/03 15:27	【作業】	書表師/作業場	家先衆壇前	書表師	「謝賀表引」を見つつ、総壇師と相談。		廣田	
12/03 15:34 ~ 17:00 前	中夜道場黄表開天門	祭場前広場	祭場前広場	証盟師・証盟師II	開天門、証盟師は牛角・棒・剣もつ。証盟師II 開天門のヲキストA16を誦している。師父の名を書いた紅紙。	A16 開天門を行うときにはいづれもこのヲキストを用いる(主齋師)。	廣田	中夜道場黄表 = 中夜補充加職黄表。引もある。
12/03 15:38		主祭場	家先衆壇前	主齋師	唱えごと、会首の名簿よむ、管、紙銭積む。		廣田	
12/03 15:53		書表師/作業場	家先衆壇前	書表師	文書の封筒の上に赤紙貼り訂正。		廣田	
12/03 16:07 頃	中夜道場黄表開天門	衆位家先壇前	衆位家先壇前	主齋師	念誦。(家先単)を使っていた。		吉野	
12/03 16:15	中夜道場黄表開天門	衆位家先壇前	衆位家先壇前	主齋師	献酒		吉野	
12/03 16:30 頃	中夜道場黄表開天門	祭場前広場	祭場前広場	保拳師・証盟師・座壇師・引度師			吉野	
12/03 16:40	謝師父	花楼前	花楼前	証盟師	開天門終了。		吉野	
12/03 19:20 (19:35)*	【作業】	主祭場	主祭場	証盟師II	牛角・棒・剣もち、礼。		廣田	*
12/03 19:35	求師	主祭場	主祭場	主齋師? *	紙銭を供え終わる。		廣田	ヲキストなし*。
12/03 19:59	昇刀	昇刀舞	花楼(祭場中)	執香師	線香を祭壇に供える、酒も。		吉野	
12/03 20:00	昇刀	昇刀	花楼(祭場中)	証盟師	花楼中央へ移動。		吉野	
12/03 20:07	昇刀	昇刀	花楼(祭場中)	証盟師II	添酒して求師。		廣田	
12/03 20:12	昇刀	昇刀	花楼(祭場中)	主齋師・引度師	主齋師と引度師交互に花楼の周りを交叉した2本の剣をもち片足跳びしつづつ回る。左回りに自転しながら、左回りに公転。		廣田	四府功曹に守られるように片足跳びする。
12/03 20:27	翻刀山	昇刀	主祭場	祭司・主齋師・その他の人々	笛・ドラ・太鼓・シンバル鳴る。		廣田	
12/03 20:53	翻刀山	昇刀	主祭場	会首	刀をクロスさせ並べる。		廣田	
12/03 20:56	撥刀山	昇刀	主祭場	書表師	刀上に赤で十二支の呪符をかく。		廣田	十二支の刀山図。
12/03 21:00	撥刀山	昇刀	家先衆壇前	祭司・主齋師・その他の人々	人々が手を組み、主齋師からその上を回転させられる、意識失い人々介抱。		廣田	
12/03 21:05	求師	昇刀	家先衆壇前	会首	順に続く。		廣田	
12/03 21:09	求師	昇刀	家先衆壇前	主齋師	花楼、主祭場西南角へ移動。		廣田	
12/03 21:16 ~ 21:34	dou 刀山	dou 刀梯舞	花楼	主齋師	祭壇に向かって祖霊の旗もち円く並ぶ。		廣田	「刀山を渡す」という意味。
12/03 21:22	dou 刀梯舞	dou 刀梯舞	家先衆壇前	主齋師	唱えごと(神と聖と師父に証盟してもらう)。管。		廣田	
12/03 21:24	dou 刀梯舞	dou 刀梯舞	家先衆壇前	主齋師	刀を家先衆壇下に運び、刀を布でくるむ。		廣田	dou 刀山に際して、師父に庇護を求めらる。
12/03 21:25			花楼	主齋師	紙銭置く、唱えごと、管。		廣田	
12/03 21:34	dou 刀山	dou 刀梯舞	正面祭壇前	主齋師・引度師	刀を担ぎ、鈴と右手にもち舞う。誦唱		廣田・吉野	刀を組んで梯子にする舞。同内容の歌。
12/03 21:22	dou 刀梯舞	dou 刀梯舞	正面祭壇前	主齋師・引度師	足に向かって研ぐような動作(磨刀の経過を表している:主齋師)。	ヲキストなし。	廣田	師父達に dou 刀山を証盟してもらう。
12/03 21:24	dou 刀梯舞	dou 刀梯舞	正面祭壇前	主齋師・引度師・磨刀師	外に刀を運び磨刀師にわたす。		廣田	
12/03 21:25			主祭場	主齋師・引度師	着替える。		廣田	

12/03 21:28	謝師父	主祭場	花楼前	主醮師	花楼前の紙銭燃やす。(師父へ)		廣田	傳陰放陽がうまくいったことを感謝する。
12/03 21:30	謝功曹	主祭場	功曹祭壇前	引度師	紙銭燃やす。		廣田	
12/04 07:51 ~ 08:31	試刀梯	雲台		主醮師・引度師・磨刀師・証盟師・証盟師Ⅱ・保拳師・紙縁師			廣田	
12/04 07:51	試刀梯			磨刀師	刀梯を据える。		廣田	
12/04 07:52	勅変刀梯			主醮師	念誦し、水剣で刀梯を勅変する。念誦。答(登つて良いかどうか認定する)。	A21「変梯法」	廣田	
12/04 07:54	試刀梯			主醮師	登り具合を確かめ、登る。		廣田	
12/04 07:58	試刀梯			磨刀師	梯を外し長さの調整をし、また梯を掛ける。		廣田	
12/04 07:59	試刀梯				白布で刀梯を覆う。			
12/04 08:14	試刀梯	見輩			盆供物を供える。刀梯を設定した人に肉を振るまう。		廣田	主祭場からもって来る。
12/04 08:22	接刀	主祭場			奏楽		吉野	主祭場から楽隊演奏しながら雲台へ行く。
12/04	接刀	主祭場→雲台			楽隊到着。本来は、12会首も接刀に來なけれなければならないが、來なかつた(主醮師)。		吉野	
12/04 08:31	接刀	主祭場正面入り口			梯を外し、祭場に運び入り口上部に置く。		廣田・吉野	奏楽・爆竹。
12/04 08:31		主祭場			「伝度白梯」を吊しなおす。外に飛んでいた白梯を掛け直した。		吉野	
12/04 10:15		主祭場	家先祭壇前	主醮師・引度師・総壇師	相談		廣田	
12/04 10:19		書表師作業場		書表師Ⅱ	「北極驅邪院醮壇給出新承弟子遊楽衆郷牌」に記入。		廣田	
12/04 10:24				書表師	竹の上に「吾奉太上老君勅」と朱字記入。		廣田	
12/04 10:54					文書に朱字入れ印押す。		廣田	
12/04 10:50	出排蓋			祭司全員	師父全員打ち揃い(出排蓋)。		吉野	
12/04 10:54	上光	主祭場		主醮師	師哥(祭司の補助で、正装し拜礼を行う役)連に正装するよう促す。		吉野	
12/04 10:56	請師	主祭場	花楼(西南角)前	証盟師Ⅱ	花楼前で念誦、酒つぐ、紙銭、名簿よむ。		吉野・廣田	
12/04 11:04	請師	主祭場	花楼(西南角)前	証盟師Ⅱ	会首名簿を読誦。	会首名簿	吉野	
12/04 11:04 ~ 11:06	上光	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・総壇師・証盟師・座壇師・保拳師らの弟子達 6人	長杉法服を着て2列に整列。	A19	吉野・廣田	12会首の願は12あるので、祭祀1人が2人分の願を受け持って儀礼を行う。A19をよむ。
12/04 11:06 ~ 11:53	上光	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・総壇師・証盟師・座壇師・保拳師らの弟子達 6人	礼拝		廣田	*
12/04 11:07	上光	主祭場	正面祭壇前	主醮師	経文を読誦する。	A19 までよむ。	吉野・廣田	*
12/04 11:07	上光	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・総壇師・証盟師・座壇師・保拳師らの弟子達 6人	牙簡と鈴を手にもつて跪拜礼を繰り返す。座壇師Ⅱ、茶酒師? * 神頭を手にもつて舞う。			*

12/04 11:13	上光	羅帶舞	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 総壇師・証盟師・ 座壇師・保拳師ら の弟子達6人	牙簡と鈴を手にもって跪拝礼を繰り返す。座壇 師Ⅱ、茶酒師？* 羅帯を手にもって舞う。				*
12/04 11:18	上光		主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒 師？*	神頭を着ける。				*
12/04 11:18	上光	跳脚舞	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒 師？*・保拳師Ⅱ	舞う。他の祭司達は正装のまま立っている。ド ラ				保拳師Ⅱは神頭を着けず*。
12/04 11:26	上光		主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 後2人は立ったま ま。	牙簡と鈴をもって拝礼。				*
12/04	上光	謝神舞	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 他1名	舞う				*
12/04 11:30	上光	謝神舞	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 後数人は立ったま ま。	牙簡と盞をもち、揺鈴。				*
12/04	上光	謝神舞	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 他1名	舞う	A19「飛雲走馬入 壇前」まで。		廣田	*
12/04 11:34	上光		主祭場	正面祭壇前	座壇師	紙銭に火をつけ、師父達の間を移動。			吉野	*
12/04 11:35	上光	献酒(献 三清酒)	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 他1名	左手に盞と牙簡右手に鈴、酒つぎ酒捨てる。	A19 献酒 からよ む。		廣田・吉野	*
12/04		謝神舞	主祭場	正面祭壇前	座壇師Ⅱ・茶酒師・ 保拳師Ⅱ・弟子*・ 他1名	舞う。この後献酒と謝神舞を繰り返す。				*
12/04 11:36	上光				座壇師	「接祖師」を誦する。	A19		吉野	
12/04 11:40	上光				座壇師	「接祖師」誦終わり。			吉野	
12/04 11:42	上光		花楼(右)		証盟師Ⅱ・総壇師 (吉野のメセでは証 盟師)*	唱えごと、酒供え、会首の名簿(「法師列名」) を読み上げる。紙銭燃やす。			廣田・吉野	
12/04 11:45	上光				座壇師	念誦(アキスト使わず)			吉野	
12/04 11:51	上光				座壇師・証盟師*	念誦終わり。			吉野	
12/04 11:53?	上光		花楼		書表師	花楼に文書を置く。			廣田	
12/04	上光				主醮師・座壇師・ 証盟師	各々念誦する。			吉野	
12/04 11:57	上光				主醮師	念誦(暗誦)			吉野	
12/04 11:57	上光				座壇師	何らかのアキストを誦す。			吉野	
12/04 11:57	上光				証盟師	「請大堂兵歌」を唱える。			吉野	
12/04	上光				証盟師	「接四府」を誦す。			吉野	
12/04 12:08	上光				証盟師	「接三廟王」を唱える。			吉野	
12/04 12:08	上光				座壇師	「接王歌」を唱える。			吉野・廣田	
12/04 12:17	上光				証盟師	「接三廟王」を唱え終わる。			吉野	
12/04 12:18	上光				座壇師	「請公王歌」を唱える。			吉野	文中に「唐王連州廟」「盤王 福江廟」の文字あり。
12/04 12:22	上光				座壇師	「請公王歌」を唱え終わる。			吉野	

12/04						座壇師Ⅱ・茶酒師・保拳師Ⅱ・弟子*・他1名	献酒(献三清酒)	献酒(献三清酒)終わり。	A19までよむ。		廣田	
12/04 12:42	還四侍願	主祭場	中央				擺大	机に13の箕を並べ、各箕上に茶碗を10個置き並べる。	A19「請上元下台」～「又唱師棍」前まで。		廣田	箕は会首12、衆1の合計13。茶碗は10碗ずつ。
12/04 12:59	還四侍願		正面祭壇前			座壇師Ⅱ・茶酒師*・保拳師Ⅱ		鈴、棍をもって舞う。			廣田	
12/04 13:00	還四侍願					座壇師Ⅱ・茶酒師*・保拳師Ⅱ	謝上元	揺鈴しつつ読誦、その時に神頭を着けた2人が棍をもち舞う。棍をもち祭壇を指す。謝上元舞。保拳師Ⅱ読誦。A19「又唱師棍」～「点鈴」続けて「献神仙」までよむ。		廣田		
12/04 13:04	還四侍願	書表師作業場				引度師		机に「陽名法壇…」と記す。			廣田	
12/04 13:25	還四侍願	主祭場				3人の師哥		机上の箕に笹の葉を縛つたものを2つずつ置く。			廣田・吉野	笹の葉の総肥は酒飲めぬ神の為。
12/04 13:27	還四侍願					3人の師哥		箕に、油揚げ投げ入れる。			吉野	
12/04 13:39	還四侍願					祭司		鈴、棍をもち舞う。謝神棍舞。			廣田	
12/04 13:40頃	還四侍願					祭司	献酒	箕の上の茶碗に酒つぐ。			廣田・吉野	
12/04 13:40頃	還四侍願					座壇師Ⅱ		(家先単)(会首名簿?*)を読誦。			吉野	
12/04 13:48	還四侍願					祭司・主醜師	献酒	酒が入ったヤカンが配られる。主醜師が節を付けて唱えごと、左回りに注いでゆく。献米茲米巴(粽を投げる)。	念誦内容は「為方飲之酒来為献 献上壇兵兵 献上壇会首衆位衆祖家先」 A11「上聖兵馬～保佑」 A11「献神」		三村・廣田*	
12/04	還四侍願					主醜師	献酒	テキストを読誦 祭壇上の蓋に献酒。	A11「上面高棒献了双聖…」～「俎老歌」前まで。		吉野・廣田	
12/04	還四侍願					茶酒師?*	献酒	正面の各神壇にも酒をついでゆく。			吉野	
12/04	還四侍願					座壇師	献酒	念誦	「神に酒を献じる」という内容。		吉野・廣田	念誦を分担。
12/04	還四侍願					保拳師Ⅱ*	献酒	念誦			吉野・廣田	念誦を分担。
12/04	還四侍願					主醜師	献酒	念誦			吉野・廣田	念誦を分担。
12/04 14:01	還四侍願					座壇師	献酒	紙銭を供える。			吉野	
12/04 14:19(14:21*)	還四侍願	主祭場				祭司	献酒	献酒終わる。箕の上の茶碗の酒をヤカンに戻し、看替える(14:21)。			廣田・三村・吉野	
12/04	還四侍願	主祭場				座壇師Ⅱ?*	献酒	会首名簿よむ(14:29に唱え終わる)。			廣田・三村	会首の名簿“衆姓醜主各家歴代宗名単・醜壇人民(ママ)單”
12/04 14:23	還四侍願	主祭場				主醜師	献酒	酒汲み祖先の祭壇に供える。			廣田	
12/04 14:23	還四侍願	主祭場				主祭場	献酒	箕は片付けられる。			廣田	
12/04 16:50	還四侍願	主祭場	中央			祭司達	献酒	卓上に箕が並び、箕の上に茶碗・酒のヤカン・笹・ガンのせらる。			廣田・吉野	
12/04		主祭場	十二宮			執香師		香を供える。打羅				

12/04 17:08	還四府願	獻酒	主祭場	家先衆壇前	主醮師(着帽・赤 チョッキ)	念誦	念誦 会首の名簿念誦、儀礼テキスト唱える。家先壇へ献酒。紙銭をほどき積み上げる。	念誦「請四府回堂」		
12/04 17:11	還四府願	還紙馬 清教	主祭場	家先衆壇前	主醮師(着帽・赤 チョッキ)	主祭場	会首の名が書かれた筒に巻いた紙をちぎり、また包み直す、唱えごと、管。	A11 還願歌	廣田	陽卦:足りた。陰卦:聖卦:不足。
12/04 17:48	還四府願	還紙馬: 陽人酒	主祭場	中央	主醮師等	主祭場	箕の上の碗に酒つぎ、人々に振る舞う。	A11 奉酒歌	廣田	陽問の人間に酒を奉じる。生きた人間同士お互いの還願を証明する。
12/04 17:50	還四府願	献酒: 献 陽人酒	主祭場	中央	祭司達	主祭場	箕の上の碗に酒つぎ、人々に振る舞う。	A11 奉酒歌	廣田	陽問の人間に酒を奉じる。生きた人間同士お互いの還願を証明する。
12/04										
12/04	還四府願	献酒: 献 陽人酒	主祭場	家先衆壇前	主醮師	主祭場	打管 テキスト読誦(節付き)。	A11 還願歌続いて いる。		
12/04 17:55		献酒: 献 陽人酒					紙馬を卓の下に積み上げる。			
12/04 18:00		献酒: 献 陽人酒			座壇師		粽をもち念誦。	A11 「七星名月歌」 (農業暦)		
12/04 18:02	還四府願	献酒: 献 陽人酒	主祭場	中央	祭司達	主祭場	箕の上の笹、油揚げを壇へ向かって投げる。		廣田・吉野	粽は酒を飲めない人の為。
12/04 18:02	還四府願	退碗・退 供卓	主祭場	中央	祭司達	主祭場	碗の酒をヤカンに戻し、紙銭に火をつけ碗を炙りふせる。		廣田	卓公卓母に帰ってもらう。
12/04 18:05	還四府願	賞浪兵頭	主祭場		主醮師・引度師	主祭場	蓋に酒を受け、蓋から蓋に酒を入れ替える所作をしながら、儀礼テキスト読誦、酒を飲みほして、紙銭を燃やす。	A11 「賞浪兵頭」	廣田・吉野	主醮師の陰兵に感謝する。
12/04 18:09	還四府願	焼紙馬			祭司		供えた紙銭の山を燃やす。		吉野	
12/04	還四府願	賞米					米を撒く。		廣田	紙馬の馬の食料。
12/04 18:15		焼紙馬			主醮師		管、念誦。	テキストなし 求保禁		紙馬の馬の食料。管は求保禁を見る*。テキストなし。
12/04 18:22	還四府願	焼紙馬			引度師		念誦 引度師は太鼓を叩きながら念誦。	A32 化財馬用火呪	吉野・廣田	火の来源をうたう。
12/04 18:23	還四府願	大運銭			証盟師II・座壇師		念誦	A11 大運銭歌		
12/04 18:34	還四府願	大運銭			師哥達		棍の両端に紙銭を巻き付け縛る。棍もち、鈴を振る。燃やしている紙馬の周りを左回りに回る。棍を担ぐ所作。		廣田・吉野	棍に紙銭を巻く意味は?* 銭を天秤で担ぐことを象徴。師哥=運銭童子。銭の周りを回るのには長距離運ぶことを意味する。
12/04 18:24	還四府願	大運銭			座壇師		経文読誦		廣田	
12/04	還四府願	大運銭			主醮師		牛角鳴らす。		廣田	
12/04 18:37	還四府願	大運銭			祭司達		主祭場から外へ出る。		廣田	
12/04 18:38	還四府願	大運銭			祭司達		天橋の笹を取り、棍の端に縛り付ける。戸口に戻る。		廣田・吉野	笹は花を意味する。
12/04 18:39	還四府願	大運銭	主祭場・主祭 場外広場		主醮師・座壇師・ 証盟師II等		主祭場内の主醮師と外の座壇師・証盟師弟子等と問答。	運び先の説明について は、A20のテキストにあり。読誦し ているわけではない。	廣田	運銭の運び先についての問答。運び先、天・地・水・陽の説明については、A20のテキストにあり。読誦しているわけではない。
12/04 18:43	還四府願	大運銭	主祭場		祭司達		主祭場内に入り、笹を灰に投げ入れ、灰の周りを左回りに掃納しながら回る。		廣田	
12/04 18:47	還四府願	大運銭			主醮師		経文を読誦。	A11 修齋歌	廣田	A-30 儀礼テキスト
12/04 18:48	還四府願	大運銭: 修齋舞			座壇師II・茶酒 師?*・保拳師・ 他1名		棍をもち灰の周りで激しく左回りに回り、舞う。修齋歌(運銭舞)という。		廣田	

12/04						座壇師Ⅱ・紙録師 弟子		この二人だけ神頭を着けている。			廣田	
12/04 18:50	還四府願	大運銭： 分銭				座壇師Ⅱ・茶酒 師？*・保拳師・ 他1名		時計と逆回転（左回り）に舞う、灰を祭壇に 投げ入れる。			廣田	灰を投げるのは金を分ける意。
12/04 18:52	還四府願	大運銭： 分銭				座壇師Ⅱ・茶酒 師？*・保拳師・ 他1名		上記の修齋舞と分銭を繰り返す→十二宮。				
12/04 18:54	還四府願	賞浪師父				主齋師		賞師歌うたう。	A11 賞師歌			
12/04 18:57	還四府願	賞浪師父				座壇師Ⅱ・茶酒 師？*・保拳師・ 他1名		牙筒をもち、鈴を鳴らす、酒汲み捨てる。	A11	廣田		
12/04 18:55	還四府願	賞浪師父				座壇師		「師父転歌」を誦唱。	A30 祖師転歌（賞 師歌の異テキスト）	廣田・吉野		A30「祖師転歌」（「賞師歌」 の異テキスト）
12/04	還四府願					主齋師		念誦	A11 賞浪師父	廣田・吉野		歌詞に師父の名を入れる。 テキストの山頭以降は還家愿 用を四府愿用に置き換える*。
12/04 18:59	還四府願					座壇師		「脱童」を誦唱。		吉野		
12/04 19:03	還四府願					祭司達		法服脱ぐ。		廣田		
12/04 21:42	上光賀星拜 斗	出排盞	主祭場				盆供物			廣田・李		礼 doubao
12/04 22:18	上光賀星拜 斗		主祭場	花楼前		執香師	米2箱・紅包用意。			廣田・吉野		faau jaang hai fin paai tou
12/04	上光賀星拜 斗						星君の祭壇を作る、酒5、茶7、水1、油灯7 のところ1つのみ、油揚げ、緑香。			廣田・吉野		「天輪宮主奉泰伝度預想星君」 * 各神壇に下げてある紙筒に 文書が入っている。いつ入れ たのか？*
12/04	上光賀星拜 斗											
12/04 22:20	上光賀星拜 斗					祭司達	星君赤紙をめぐり話し合う。			廣田		
12/04 22:45	上光賀星拜 斗	請十二星 君回来	主祭場	星君祭壇前		主齋師	テキストなし。請十二 星君回来。A30b に少しある。			吉野・廣田		12の星君を呼ぶ。12の星君で、 7は良い5は怖い。
12/04 22:50	上光賀星拜 斗	求師	主祭場	花楼前		引度師	正装して念誦。			吉野		
12/04 23:00	上光賀星拜 斗	求師	主祭場	花楼前		引度師	唱えごと、紙銭積む、名簿よむ。			廣田・吉野		花楼に置いてある文書：「賀星 疏意」「賀星奏表」「還四府願」 （これはく還四府願）の時に 用いた物がそのまま置いてある のであろう。
12/04 23:07	上光賀星拜 斗	請十二星 君回来	主祭場	星君祭壇前		主齋師	星君の机前で紙銭を置いていく。			三村		花楼前の引度師と同時進行。
12/04 23:11～ 00:07	上光賀星拜 斗	開天門	主祭場前広場			引度師	合星拜斗表に印。			廣田		儀礼テキスト①*
12/04 23:18	上光賀星拜 斗	出兵	主祭場	正面祭壇前		座壇師・証盟師Ⅱ （あるいは師哥）*	鈴・牙筒・木農具もち舞い、工具を外の太歳 壇の下に置く。これを出兵舞という。			廣田		開天門
12/04	上光賀星拜 斗	出兵	主祭場	正面祭壇前		*	出兵歌					A32a「小旗頭歌」、 「小先鋒歌」（出兵 と回兵とで歌の中 の文句を入れ替え る）。

12/04		23:30	上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	主齋師	会首夫婦に星君牌(赤紙)を授ける。		「賀星斗科」テキストは撮影していない。ヒテオの中にA32a・A19に關連。	廣田	星君牌は星神牌ともいう。
12/04	23:30		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	跪いて星君牌を受け取る。			廣田	12 会首夫妻の星神を合わせる。→死後も夫婦であるという象徴 十二星のうち吉星は北斗の七星のみ。合星できるのは七星である。
12/04	23:30		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	星を拝する。				
12/04	23:30		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	星君牌を返す。				
12/04		23:50	上光賀星 斗	上光賀星 斗	上光賀星	主祭場	花楼前	座壇師・若造・保拳師 II・座壇師 II	鈴・牙筒もち振り、儀礼テキストうたう。		他の上光のテキストと同じ。A19。それにA32a 十二宮星辰歌を付け加えて歌う。	廣田	
12/04	00:11	23:56	上光賀星 斗	上光賀星 斗	上光賀星	主祭場	主祭場	会首	青詞旗もつ。			廣田	
12/05	00:04		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	書表師作業場		書表師	会首・祖先分の星君牌を用意。			廣田	
12/05	00:12		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	主齋師から祖先分の星君牌を受けとる。			廣田	
12/05	00:12		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	星を拝する。				
12/05	00:12		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	会首	祖先分の星君牌を返す。				
12/05	00:21		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	主齋師	星君赤紙燃やす。			廣田	
12/05	00:21		上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	紙縁師	星君の神牌を燃やす。			廣田	
12/05			上光賀星 斗	上光賀星 斗	開天門	主祭場前広場	文台	引度師	テキスト読誦。		做賀星表		
12/05	00:07		上光賀星 斗	上光賀星 斗	開天門	主祭場前広場	文台	引度師	表を焼いたはず*。				
12/05			上光賀星 斗	上光賀星 斗	合星	主祭場	星君祭壇前	引度師					
12/05	00:43		上光賀星 斗	上光賀星 斗	回兵	主祭場	正面祭壇前	座壇師 II・保拳師 II	兵器のレプリカをもち舞う。			廣田	楽隊有。
12/05			上光賀星 斗	上光賀星 斗	回堂	主祭場	花楼前	引度師	念誦、紙銭を供す。角を花楼に置く。		念誦(齋師)(脱童)	廣田	
12/05	00:48		上光賀星 斗	上光賀星 斗	上光賀星	主祭場	花楼前	座壇師・若造	牙筒もち揺鈴、念誦続いていたが終了。				
12/05			上光賀星 斗	上光賀星 斗	上光賀星	主祭場	花楼前	座壇師・若造	脱童				
12/05			上光賀星 斗	上光賀星 斗	出排蓋	主祭場							
12/05	09:55		請末夜聖	請聖	請聖	主祭場	正面祭壇前	総壇師 II・保拳師 II・茶酒師? *・弟子の師哥 *	拝礼			李・吉野	楽隊有。

12/05	10:40	請末夜聖	請 請	主祭場	正面祭壇前	総壇師Ⅱ・保拳師Ⅱ・茶酒師？*・弟子の師哥*	鈴振る。			廣田	
12/05	10:40	請末夜聖	請 請			総壇師	念誦	テキストはない。今までの請聖と同じ。		吉野	
12/05	10:40	請末夜聖		書表師作業場		書表師・書表師Ⅱ	書表師弟子とともに「北極驅邪院醴壇内給出閣糧文牒」「北極驅邪院醴壇給出伝度新承弟子陰據」に朱字を入れ印を押す。			廣田	
12/05	11:00～12:00頃	回功曹		主祭場	功曹祭壇前		祭壇を設け、米、紅包、酒、油揚げ、線香等を供える。			廣田・吉野	儀礼テキスト② * 本来は末夜聖の後にやるが時間がないので同時進行。
12/05	10:53	回功曹		主祭場	功曹祭壇前	引度師・証盟師(紙縁師)*	唱えごと	内容としては請聖と同じ。	「四府功曹請状」「四府統関」	廣田・吉野	壇上に「請聖状一函文引」「地府一界…呈進祈保新承弟子」「天府一界…」「陽間一界…」「水府一界…」
12/05	11:04	請末夜聖			正面祭壇前	総壇師	唱えごと、座る。	請聖(A32aのテキストに相当)		廣田	請聖(A32aのテキストに相当)
12/05	11:17	請末夜聖	回四府	主祭場	正面祭壇前	主醴師	テキスト読誦、途中から念誦。	主醴師読誦はA11。速四府願と同じ。		廣田・吉野	
12/05	11:11	請末夜聖		紙縁師作業場		証盟師等	紙銭を作る。			廣田	*
12/05	11:17	請末夜聖		主祭場	正面祭壇前	祭司達	円く座る。			廣田	寒いから焚き火に当たっている*。
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	座壇師	主醴師の隣で念誦。	A32a「請上壇兵」～「請本主家先」まで三回反復。		廣田・吉野	念誦の原テキストは？*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	証盟師Ⅱ	会首名簿読誦。	会首名簿		吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	総壇師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	証盟師Ⅱ	読誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	主醴師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	座壇師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	主醴師	念誦	請聖続きを分担。		吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	主醴師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	総壇師	念誦	請聖		吉野・廣田	請聖では同じテキストを3回読むのである*。
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	総壇師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	座壇師	テキストを読誦。	読んでいたテキストはA20(内容はA32a「献香歌」～「請聖実満…」の前まで。		吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	保拳師Ⅱ	焼紙			廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前	座壇師	読誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前東側	総壇師	念誦	「三清贊」A13「大道贊」と同じ？*		吉野・廣田	三清贊は末夜聖だけ*。座壇師と入れ替わり？*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前東側	総壇師	念誦終わり。			吉野・廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前東側	保拳師Ⅱ	経文暗誦。			廣田	*
12/05		請末夜聖	請 聖	主祭場	正面祭壇前東側	総壇師Ⅱ	鈴振る。			廣田	*

12/05 12:35	請末夜聖								花楼を主祭場中央へ移動する。				吉野
12/05 12:37	請末夜聖							奏楽(12:58 終了)					吉野
12/05 12:40~12:58	跑堂	主祭場	花楼(中央)	祭司・会首等				中央の花楼を中心に回る、各祭壇に礼拝。					廣田
12/05	賞兵												
12/05 12:35	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場						〈出排盞〉					吉野
12/05 14:48	【作業】	書表師作業場		書表師				「朱詞引」に朱字入れ印押す。					廣田
12/05 14:52	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	花楼(右)前	主醮師				唱えごと、管、紙銭。	テキストなし。大羅明 灯・請師			李・吉野・ 廣田	
12/05 15:11	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 証盟師・保拳師				正装に着替える。				廣田	
12/05 15:10	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 保拳師・証盟師				主醮師・引度師・保拳師・証盟師いずれも赤い長衫を着し、着帽、背中には白布。鈴・牙筒もち、立礼・跪礼で礼拝、舞う。	羅帯出世など上光 テキスト。			廣田・吉野	白布は「老君印」という。老君の弟子であることを示す。
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 保拳師・証盟師				献酒					
12/05 15:16	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	4人*				醮壇前で唱えごと、牙筒・鈴・ドラの音に合わせて踊り。2人1組で揺鈴・打鐘。				佐川・吉野	
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前					唱えごと終わる。→ドラに合わせて踊る。片足を上げて木の棒を投げる。				佐川	*
12/05 15:17	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師				「羅帯出世」を読誦。				廣田・吉野	
12/05 15:18	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 保拳師・証盟師				羅帯舞(羅帯はもっていない)。					
12/05 15:37	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	3人の祭司				盞・牙筒もち鈴振る、盞の酒捨てる(献酒)。	A19 献酒終わりま で			廣田	
12/05 15:39	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	引度師				紙銭一枚燃やし、後ろに捨てる。				佐川	
12/05 15:48	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	会首				機を並べる。1・6・9・12 会首は青詞旗をもっている。				廣田・佐川・ 広川	
12/05 15:59	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	花楼(西南角)の周り	主醮師				水碗もち読誦、管。勅変米変兵、勅変機変太上老君之機、勅変水変楊柳之水。	A32b 伝灯変水用			廣田	
12/05 16:11	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	中央→門口	主醮師・引度師・ 保拳師・証盟師				唱えごと、〈掛灯機〉をまとめる。(掛灯機)もち、門口へゆき、中から外に向かって唱え、一礼。	A32b 打機用			吉野	はじめは打機(椅子を作る)。椅子をもった段階から昇機。昇機は念誦。念誦内容：これは上界の太上老君の機である(掛三灯の時とたいたい同じ。「上界」「大羅明月灯」という語句を入れる)。
12/05 16:18	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	会首				機上の法服を着、神札を頭につけ機に座る。				廣田	
12/05 16:27	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	祭司達				紙銭を丸め外に投げる。A32b 3 回収祭を行う。	回収=収伏断			廣田	管：ちゃんと清められたかどうかを認定する。
12/05 16:27	掛十二盞大 羅明月灯			主醮師・引度師				念誦(身体の祭を清める)。	テキストなし。			廣田	
12/05 16:40~18:18	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師				儀礼テキストもち唱え、12人の前を歩く。後ろは引度師(手に紙銭)。				廣田・佐川	
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師				切り紙が2本ずつ会首に渡される。					踏蓮花・戴帽・藏身。

12/05 16:33	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	会首達	足の下に碗を敷く。	A32b	廣田	
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	祭司達	会首の頭の上方で両手を丸く動かす。	A32b		
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	祭司達	長衫の端をひらさらせる。	A32b 変身用		
12/05 16:43	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前 →門口→正 面祭壇前	主醮師・引度師・ 証盟師・保拳師	灯明の蓋が置かれた箕をもち、唱えごとをし、 外と祭壇に向かう。	A32b	廣田	
12/05 16:50	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師・引度師・ 証盟師・保拳師	大会首から灯明台に灯明を置く。念誦	A32b「一盞…」他、 請聖証盟を請う内 答の念誦	廣田	灯明は12個ずつ。 祭壇に向かつて左から大会首・ 1会首・2会首…12会首と並 んでいる。
12/05 17:10	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	書表師	祖先の分の灯明台を追加する。		廣田	1会首・6会首・9会首・12会首。
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	引度師	12会首からはじめて唱えごとをする、祖靈旗を 確かめつつ、手訣（掛灯訣）。		廣田	祭壇に向かつて左から大会首・ 1会首・2会首…12会首と並 んでいる。
12/05 17:34	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	儀礼ヲキキヲうたう、大会首から唱えごと、答。 A32a「太極分高原謹請上属天…」～「梅山咒」 までよむ。		廣田	
12/05	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	引度師	12会首から「解厄」うたう。	A32b「解厄」	廣田	1人ずつ解厄を唱えているので はなく、会首名簿を読み上げ ている。
12/05 17:51	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	大会首から「淨身呪」等うたう。答（認定）	A32a「淨身呪」	廣田	1人ずつ淨身呪を唱えている わけではない。まとめ。
12/05 17:58	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	灯明を降ろす、片付ける。	A32b「退灯」	廣田	
12/05 17:57	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	儀礼ヲキキヲ唱える。	A32b 退蓮花	廣田	
12/05 18:06	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	祭司達	碗を取ってゆく。			
12/05 18:07	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	祭司・証盟師・保 拳師	前後に立ち、3人ずつ会首を棍で挟んで立た せる。	A32b「門前水」 ～「請師教」前ま で。	廣田	
12/05 18:08	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	会首立ち並び、その前で読誦。	A32b「請師教…」 ～「完了」まで。		
12/05 18:17	掛十二盞大 羅明月灯	主祭場	正面祭壇前	主醮師	牙筒もち鈴鳴らしつつうたう。謝師舞		廣田	
12/05 18:18	開天門	主祭場	花楼前	引度師	唱えごと	求師	廣田	12会首に開天門を教える為の 開天門。
12/05 18:20～ 19:27	開天門	主祭場前広場	文台	会首達		A16	廣田	春や引は無し。紙銭を焼くだ け。
12/05 19:36	開天門	主祭場	花楼前	引度師	唱えごと		廣田	
12/05 19:33	度水槽	主祭場	家先衆壇前	主醮師	名簿よむ、紙銭積む。	A12	廣田	主醮師の後ろに莫蓋あり。莫 蓋の下に7つの伏せた碗あり。 碗は七星。

12/05		度水槽	度水槽	勅変水槽	主祭場	家先衆壇前	主醮師	勅変水、唱えごと、重ねられた莫菴に剣を突き立て勅令マークを書く、テキストは書表師がめくる。	A12 変【草冠+稿】 荐法 変【草冠+稿】 荐用】～「変七星 忌用」前まで。	莫菴は鉄船に変わる。	廣田
12/05		度水槽	度水槽	勅変沙板	主祭場	家先衆壇前	主醮師	沙板を勅変。	A12 「変板法用」	過水槽で使う木の棒は、沙板という。船に変わる。沙板は船の板である。	廣田
12/05		度水槽	度水槽	勅変碗蓋	主祭場	家先衆壇前	主醮師	碗を勅変。	A12 「変盞法」	ヤカンは水に変わる。	廣田
12/05		度水槽	度水槽	勅変水缸	主祭場	家先衆壇前	主醮師	ヤカンを勅変。	A12 「変水缸用」		廣田
12/05		度水槽	度水槽	叩請四府 功曹	主祭場	功曹祭壇前	主醮師	念誦		伝陰放陽	廣田
12/05		度水槽	度水槽		主祭場	家先衆壇前	主醮師	莫菴の下に碗を伏せて置いている。莫菴は13枚、12 会首と引度師分。		7つの碗は北斗七星を意味する。	廣田
12/05		度水槽	度水槽		主祭場	功曹祭壇前	主醮師	念誦、管（四府功曹回来かどうか認定）。	A12 「抛牌伝度…」 ～「下禁壇」の前 まで。		廣田
12/05		度水槽	度水槽		主祭場		楽隊	奏楽ドラ・笛・シンバル。			廣田
12/05	19:33～ 20:30	度水槽	度水槽		主祭場		引度師	牙箭もち鈴鳴らす、引度師気を失う。			廣田
12/05	19:52	度水槽	度水槽		主祭場	功曹祭壇前	引度師			主醮師は位が高いので、引度師が会首達をつれて陰界へ赴く。	廣田
12/05		度水槽	度水槽		主祭場	功曹祭壇前	総壇師	引度師の傍らで唱えごと。	A12 「抛牌伝度…」 ～「下禁壇」の前 まで。		廣田
12/05	19:53	度水槽	度水槽		主祭場	家先衆壇前	引度師	莫菴に運ばれ寝かされる。			廣田
12/05	19:53	度水槽	度水槽		主祭場		主醮師	莫菴に寝かされた引度師の上に木がわたされる。主醮師は棍で天橋を突き、棍をもったまま引度師をまたぐ。頭部と足部にヤカンをもちつ着いる*。		引度師の場合は主醮師だけがまたぐ。 天橋を突き＝伝陰放陽。ヤカンは水を意味し、ヤカンと沙板とで船を意味する。鉄の船である。	
12/05		度水槽	度水槽		主祭場			引度師の体を起こし、正気に戻させる為に陪男が叫び、茶を口にそそぐ。次にこれを12人の会首順に行う。最後に青詞旗を莫菴に置き、その上を法師達がまたぐ。			廣田
12/05	19:59	度水槽	度水槽		主祭場		会首達	次々と引度師と同じようにする。会首の場合は祭司全員がまたぐ。			廣田
12/05	20:42～ 20:46	度水槽	度水槽		主祭場	正面祭壇	会首全員	祭壇に向かつて跪く。			廣田
12/05	20:42～ 20:46	度水槽	度水槽	撥水槽	主祭場		主醮師	念誦、管2回(ちゃん伝承できたかどうか認定)、法服脱ぎ終了。		水槽をわたる能力を会首達に伝承した。	廣田
12/06		供青詞	供青詞			孔子祭壇前	主醮師	青詞を孔子壇に供える。	加職青詞 補充青詞	本当は雄鶏を一羽供儀するはずであったが、やっていたくない。	廣田
12/06	11:15～ 11:25	勅変符	勅変符		書表師作業場	孔子祭壇前	主醮師	米箱・紅紙供え、箕に符を並べる。	テキスト無し。念誦符のテキストはA1。	避邪符・平安符・保身符十二支・左右の区別あり。Dou 刀の時の十二支配置と同じ。頭と体につける符も。	廣田
12/06	11:14	勅変符	勅変符			孔子祭壇前	主醮師	孔子祭壇に向かい唱えごと、紙銭積む、管。			廣田
12/06	11:18	勅変符	勅変符				書表師	濁の血を符に撒く。			廣田

12/06 11:19	勅変符																			廣田	
12/06 11:30	勅変符		祭場裏広場		主醮師				毘虫、符に米撒く、線香で清め、管、唱えごと、紙銭を燃やす。											廣田	
12/06 11:43~12:06	求師	主祭場	花楼(右)前・家先衆壇前	書表師					書表師符を乾かす。											廣田	
12/06 11:43	出排盞	主祭場	家先衆壇前	主醮師・引度師					供物盆											廣田	
12/06 11:46	求師	主祭場	花楼前	総壇師					唱えごと、会首の名簿よむ、管、酒つぐ。											廣田	
12/06 11:52	求師	主祭場	花楼前	座壇師					唱えごと、酒つぐ、紙銭置く。											廣田	
12/06 11:57	求師	主祭場	花楼前	保孝師II					唱えごと											廣田	
12/06 11:57	勅変白鶴	主祭場	花楼前	証盟師II					唱えごと、勅変白鶴水。紙銭置く。碗水に符、管。											廣田	
12/06 12:06	(名称無し)	主祭場	正面祭壇	座壇師					海番・総聖(総壇)の神画を花楼に掛ける。											廣田	
12/06 12:09	(名称無し)	主祭場	花楼	座壇師					海番・総聖(総壇)の神画を花楼に掛ける。											廣田	
12/06 12:10~12:31	求師	主祭場	家先衆壇前	主醮師					法服用、祖霊旗もつ、管沢山もつ、会首名簿よむ、紙銭置く、管、儀礼テキサトふところに入れる。										廣田	会首の名簿“衆姓醮主各家歴代宗名単・醮壇人民(ママ)単”	
12/06 12:26	求師			引度師					法服用、紙銭置く、白布腰に巻き祖霊旗を差す。											廣田	
12/06 12:30	求師		花楼前	保孝師・証盟師					礼											廣田	
12/06 12:31	求師		花楼前	証盟師II					唱えごと、師父の名よむ。											廣田	
12/06	上刀山	祭場前広場	花楼前	座壇師					神画もつ。											廣田	
12/06 12:33	上刀山			楽隆・祭司・会首・夫人等					梯を降ろし雲台へ楽隆・刀梯・神画もつ師父・莫蕨を被った会首・会首夫人等行列。											廣田	
12/06 12:36~13:15	上刀山	雲台							梯を設置。											廣田	
12/06	奏刀梯表開天門	雲台北の文台		保孝師II					雲台の前(北側)で開天門。											三村	奏刀梯表
12/06 12:41	上刀山	雲台							柱の右海番、左総聖掲げる。											廣田	
12/06 12:45	上刀山	雲台	刀梯前	主醮師・引度師・総壇師					符をもち唱えごと。打管											廣田	祭司達は帽・法冠・長上着(主醮師だけはチョッキ)・背中に白布。
12/06 12:43	上刀山	雲台	刀梯前	主醮師					邪師を収める儀礼を行う。											廣田	
12/06 12:42	上刀山	雲台	刀梯前	会首					莫蕨敷き、裸足で座る。											廣田	
12/06	上刀山	雲台	刀梯前	会首夫人					会首の後ろに立つ。											廣田	
12/06 12:47	上刀山	雲台	刀梯前	書表師					梯の上左右に符をはる、主醮師は会首の冠に符を付ける。残り主醮師へ。											廣田	
12/06 12:52	上刀山	雲台	刀梯前	主醮師・引度師					紙を丸め唱えごと、管、丸めた紙を足に押しつけ、管、莫蕨に裸足で座り、互いの足の裏に呪符描く、管。											廣田	A12「又変刀口」のあと「吾奉刀山劍樹・・・」。
12/06 13:00	上刀山	雲台	刀梯前	主醮師					会首の足裏に呪符描く、管。											廣田	テキサト無し。賀刀梯・上刀梯・飛刀梯
12/06 13:02	上刀山	雲台	梯下	座壇師・総壇師					梯の左右に立って師棒と鈴もち回り舞う。念誦											廣田	梯の西側総壇師、東側座壇師。
12/06 13:05	上刀山	雲台	梯下	主醮師					梯下で読誦。											廣田	A12「拜刀梯」の内容の歌、「拜四方天地歌」。
12/06 13:06	上刀山	雲台	梯下	主醮師					梯下で読誦。											三村	A12「上刀梯用」
12/06 13:09	上刀山	雲台	刀梯	主醮師					最初に梯に登る。											三村	
12/06 13:15	上刀山	雲台上	雲台上	主醮師					雲台上で唱えごと、牛角鳴らす、管。											廣田	表・引は燃やさず。紙馬のみ。
12/06 13:10	上刀山			引度師					梯に登る。											廣田	

12/06				天曹開天門				引度師 会首	唱えごと、牛角鳴らす。 次々梯に登る。													
12/06	13:10	上刀山		上刀梯歌	雲台下			総壇師・座壇師 磨刀師	根、鈴もち、「上刀梯歌」うたう。 梯に登る会首を梯の下から見守る。					廣田								
12/06	13:10	上刀山						記盟師	梯に向かい剣で水(白鶴水)を振りかける、水吹きかける。					廣田						白鶴水をかけられると身が軽くなる。		
12/06		上刀山		飛刀梯歌				総壇師・座壇師	全員が登り終わった後、棍、鈴もち、「飛刀梯歌」うたう。					廣田								
12/06	13:22	上刀山		勅印 勅変馬板	雲台上			主醮師 主醮師	印に向かい剣で符を描く、儀礼ヲキスうたう。 馬板を勅変。	A12「勅印用比」 念誦ヲキス無し。				廣田								
12/06		上刀山		天曹開天門				引度師	唱えごと、角笛を吹く。					廣田								
12/06	13:22	上刀山			雲台下			会首	莫慮に戻る。					廣田								
12/06		上刀山			雲台下			夫人達	会首の後ろに並ぶ。					廣田								
12/06	13:40	上刀山			雲台上			主醮師	印を下の夫人に投げる、表でないともう一度。					廣田								
12/06	13:40	上刀山		接老君印	雲台下			会首夫人	主醮師印を投げる。会首夫人、印をエプロンで受け取る、夫婦と祖先の分も。	唱えごと無し。				廣田								
12/06		上刀山			雲台下			紙縁師・座壇師	印を確認。												陽印(印面が上向き)なら受け取る。陰印(印面が下向き)なら戻してもう一度。	
12/06	13:55	上刀山		下刀梯歌	雲台上			主醮師	唱えごと、儀礼ヲキスうたう。	A12「下刀梯唱」				廣田								
12/06		上刀山		関天門	雲台上			引度師	発角、唱えごと。					廣田							紙馬を焼いたのち、関天門。	
12/06	13:57 ~ 14:09	上刀山			雲台下			主醮師	梯を下りる、法服脱ぐ。					廣田								
12/06	13:58	上刀山		拆刀梯	雲台下				梯の布を解く、剣の札がはがされる、爆竹。					廣田								
12/06	14:06	上刀山		拆刀梯	雲台下				刀剣が梯から外される。					廣田								
12/06	14:15 ~ 14:20	上刀山			主祭場			会首・夫人	戻り並ぶ。					廣田							正面祭壇前に円卓2つ。	
12/06		上刀山						主醮師	祭壇外に向かい唱えごと、管。					廣田								
12/06	14:20頃	上刀山		拝師	花楼前			保拳師	唱えごとを始める。					佐川								
12/06	14:20頃	上刀山		機刀梯	衆位家先堂前			引度師	唱えごとを始める。					佐川								
12/06	14:30	上刀山		奏刀梯表開天門	雲台斜めの前の文台			保拳師・保拳師II	鈴鳴らし立つ。唱えごと、疎蕪(紙錢・紙馬・疏文・線香)を燃やす、儀礼ヲキスうたう。管、吹牛角。					李								
12/06	22:09 ?							主醮師	唱えごと					廣田								
12/06	19:40				書表師作業場 主祭場			書表師・書表師II	文書へ記入、朱入れ、押印。					廣田								
12/06	21:05				正面祭壇前				盆供物					廣田								
12/06	22:09			求師	家先衆壇前			主醮師	念誦					廣田								
12/06		度勒床		請師	花楼			総壇師	花楼中央に移動、莫慮歎く。					廣田								
12/06	21:45	度勒床		勅水	家先衆壇前			主醮師	着替え、碗の水を剣ではじく、管。					廣田								
12/06	22:10	度勒床						総壇師	紅布にとげの植物包む、唱えごとを主醮師と引度師に教える。					廣田								
12/06	22:20	度勒床						主醮師	儀礼ヲキス唱える、水を吹く、総壇師からわたされた紅布に剣で呪符をかく、管。	A12「棘床法」				廣田								
12/06	22:17	度勒床		勅棘				主醮師						廣田								

12/06 22:19	度 勸 床	勸 床		主 齋 師	主 齋 師	敷かれた莫蘆に符をかき、水を吹く、筥。	A12 変【草冠＋稿】 荐法 変【草冠＋稿】 荐用	廣 田	
12/06 22:37～	度 勸 床	功 曹 祭 壇 前	功 曹 祭 壇 前	引 度 師 ・ 總 壇 師	引 度 師 ・ 總 壇 師	鈴鳴らし立つ、紅布を会首に背負わせ唱えごと。気絶する。	A12の冒頭から(度水槽と同じ)	廣 田	発功曹を行い陰下去。
12/06 22:37～ 23:12	度 勸 床	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	引 度 師	引 度 師	莫蘆に寝かされる。		廣 田	
12/06 22:37	度 勸 床		家 先 衆 壇 前	主 齋 師	主 齋 師	棍で陰橋を突き、引度師をまたぐ。		廣 田	伝陰放陽・急陰速陽。陰橋を揺らして早く陸界へ赴かせる。
12/06 22:44	度 勸 床			主 齋 師	主 齋 師	引度師を蘇らせる為額に符を描く、水を吹きかけ、顔を撫でる、帽子を直す。		廣 田	
12/06 22:55	度 勸 床		家 先 衆 壇 前			家先衆壇に向かって唱える、紙銭を丸め手に握り唱える、腕を回す、筥。		廣 田	
12/06 23:17	度 勸 床	主 祭 場	功 曹 祭 壇 前	会 首	会 首	鈴鳴らし立つ、祭壇に札、気絶する。		廣 田	12 会首から。
12/06 23:17	度 勸 床			總 壇 師	總 壇 師	紅布を会首に背負わせ唱えごと。		廣 田	
12/06 23:17	度 勸 床			度 壇 師 ・ 保 拳 師 II	度 壇 師 ・ 保 拳 師 II	総壇師のサポート。		廣 田	
12/06 23:20～ 00:16	度 勸 床	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	会 首	会 首	莫蘆に寝かされる。		廣 田	
12/06 23:20	度 勸 床			12 名 祭 司	12 名 祭 司	棍を陰橋に差した後もちつつ次々に、寝ている会首をまたぐ。		廣 田	速く勸床を渡らせるために、またぐのである。
12/06 23:20	度 勸 床			会 首	会 首	介護を受け、意識を取り戻す。		廣 田	
12/06 23:20	度 勸 床			培 男 達	培 男 達	介護する。		廣 田	
12/06 23:27	度 勸 床			会 首	会 首	次々に行う。		廣 田	
12/06	度 勸 床			会 首	会 首	最後は青詞旗を莫蘆に並べ、またぎ花楼に置く。		廣 田	
12/06 00:22	度 勸 床	主 祭 場	正 面 祭 壇 前	主 齋 師 ・ 引 度 師 ・ 会 首	主 齋 師 ・ 引 度 師 ・ 会 首	会首跪き並ぶ。その前で主齋師念誦。	師父を念じて勸床を発し、師父に証盟してもらう。	廣 田	
12/06						花楼を東へ移動。		廣 田	
12/07 00:23				主 齋 師	主 齋 師	唱えごと、筥、法服脱ぐ。		廣 田	
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)	主 祭 場		主 齋 師 ・ 引 度 師	主 齋 師 ・ 引 度 師	正装に着替える、ドラの合図。		廣 田	*
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	主 齋 師	主 齋 師	唱えごと	請師		*
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	主 齋 師	主 齋 師	二十四罡歩 丸い石	A12「又変火磚用」	廣 田	*
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	主 齋 師	主 齋 師	三十六罡歩 塾先	A12「変裂頭法」 ～「押四方未地歌」 前まで。	廣 田	*
12/07 02:26	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)	主 祭 場	家 先 衆 壇 前	主 齋 師	主 齋 師	テキスト読誦。水に剣で雪山水を書き、塩を入れる。	A1「雪山水」	三 村 ・ 廣 田	初めから塩が入っていたのか*。読誦時には既に塩が入っていた*。
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)			主 齋 師	主 齋 師	テキスト読誦しながら歩置する。	テキストあり。七歩罡・八歩罡・二十四歩罡・三十六歩罡のテキスト。		主 齋 師 は テキスト を も っ て い な い 。 総 壇 師 が も っ て い る と い う *。
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)			主 齋 師 ら	主 齋 師 ら	花楼を中央に移動する。			*
12/07	扶 豆 扶 訣 (棒火磚)			主 齋 師	主 齋 師	手を塩水に浸す。			*

12/07	扶正扶訣 (棒火磚)	打火堂				主醮師	口に含んだ水を焚き火に吹きかける。	A12 「又打火堂法 用」	廣田	*
12/07		打火堂				引度師	符を書く。			*
12/07 02:49 ~	扶正扶訣 (棒火磚)	主祭場	花樓前(中 央)の周り			主醮師・会首達・ 書表師	裏蘆で火の中から取り出す、熱く熱した壺先、 右を手にもち走って花楼の周りを時計と逆に1 回~2回回る。主醮師は3回回らなければな らない。	A12 「抽犁頭法」	廣田	会首は順不同。
12/07 02:52	扶正扶訣 (棒火磚)					周りの人々	笑う		廣田	
12/07 03:07 ~ 03:09	扶正扶訣 (棒火磚)	主祭場	正面祭壇前			会首達	跪いて並ぶ。ドラ。		廣田	
12/07 03:09	扶正扶訣 (棒火磚)					主醮師	唱えごと、法服を脱ぐ。		廣田	
12/07 09:45	【作業】	書表師作業場				主醮師	切り紙。		廣田	
12/07 09:48	【作業】						黄紙「太上奉行金闕玉泉門下奉勅弟子(○ 囲み)名(○囲み)縁取位陸在江蘇省南京為 號」に朱を入れる。		廣田	
12/07	遊郷					会首達	正装。長衫・帽子・法冠を着ている。			
12/07 10:04	【作業】					書表師・書表師 II	駝牌に記入、朱を入れ、押印。		廣田	
12/07 11:10	遊郷	発給	正面祭壇前			書表師・主醮師	会首達に駝牌をわたす。		廣田	
12/07 11:12	遊郷					会首達	駝牌を確かめ、跪く。		廣田	
12/07 11:13	遊郷					証盟師 II・座壇師	木農具をまとめて縛る。		廣田	
12/07 11:14 ~ 11:47	遊郷	昇職位	三清神面前			主醮師	鈴もち、会首の黄紙を牙筒にのせ神画に近づ ける、くつつく神画に貼る、うたう。8 会首の職 位を決定する)		廣田	赤紙も夜に貼るが、この儀礼 ではない。会首の近所の人 が厄除けに頼むことがあり、それ が赤紙。
12/07 11:32	遊郷	昇職位	主祭場			保拳師 II	主醮師を手伝う。		廣田	要三清作証
12/07 11:32	遊郷	昇職位	主祭場			座壇師	重ねられた神画から三清図を探す(うまくくつ かない場合)。		廣田	
12/07 11:49 ~ 11:56	遊郷	出兵	正面祭壇前			証盟師 II・保拳師 II	兵器のレブリカの束を担ぎ、鈴振りうたう。鈴置 き舞う、出兵舞。ドラ・シンバル・太鼓。		廣田	
12/07 11:50	遊郷	出兵	正面祭壇前			座壇師	儀礼マキスト唱える。	A32a 小旗頭歌の 終わりの部分を「出 兵」に替える。	廣田	
12/07 11:58	遊郷	出兵	正面祭壇前 →門口→正 面祭壇前			証盟師 II・保拳師 II	各々、道具を1つずつもって祭壇前で一回り してその後、正門のところへもって行き、置く。 全部もって行った後、祭壇に一礼して退く。		吉野	傘を差すのは、麒麟打傘兵と して。麒麟打傘兵は位の高い 兵であるので、最後に出て来 る。
12/07 12:00	遊郷	出兵	正面祭壇前			主醮師	花笠と扇子をもち、念誦しながら舞う。後に傘 だけをもち回して舞う。麒麟打傘舞。		廣田	兵が出て来ないと行列が守ら れない。
12/07 12:04	遊郷					主醮師・引度師	正門外へ出る。	A32a 先峰歌	吉野	

12/07 12:04	遊郷	主祭場	執香師・黒将軍・ 紅将軍・楽隊・ブ ラカード・剣等・ 会首・会首夫人・ 培男・培女	執香師は盆を頭の上にもつ。盆の上には「通 天香」を置く。本当は檀香。盆をもつのは「通 信兵」。皆で主祭場から戸外へパレード。東側 の川に近い道を通って雲台方向へ行く。黒将 軍、紅将軍(この2名は擲路兵)もついて行 く。楽隊は「鑼鼓兵」。ブラカードをもっている のは「旗兵」。武器をもつのは「武官兵」(刀兵、 奔兵)。牛角をもつのは「号兵」。この他に弾 琴兵、工兵、鑼路兵、勤務兵(炊事茶事をす る)騎虎兵、騎龍兵、抬轎兵なども居るはず であるが、実際にいるかどうかは、確認できな い。兵を総称して「遊郷兵」という。傘を差す (清涼打傘)のは金童玉女。	廣田・李	正門前から西側の山側一般道 と主祭場への下り道との分岐点 が②。及びそこから北へ教メー トルのところが①。
12/07 12:15	遊郷	西側の道		①②とも机とベンチを置く。①には掛大羅灯の 時に使った灯架に黄紙の貼り紙「玉清聖境元 始天尊 上清聖境靈寶天尊 太清仙境道德天 尊」と書いたものを貼る。①には書表師、② には紙縁師が座る。		
12/07 12:15～ 13時頃	遊郷	西側の道	書表師・他1名	第一関 会首の通行を止める、問答、夥牌をよ む、夥牌上の会首の名の横に朱入れる、捺印。 紅包・果物(落花生、龍眼など)を受け取る。	廣田・李	
12/07 12:15～ 13:00	遊郷	西側の道	紙縁師	第二関 会首と問答。燃やした紙馬が本物で あったかどうか審問。		
12/07 12:15～ 13:00	遊郷	主祭場前広場	証盟師・保拳師・ 証盟師II・保拳師 II	第三関 会首と問答、夥牌みる、紅包受け取る。	廣田・李	
12/07 12:15～ 13:00	遊郷	主祭場前	総壇師・座壇師	第四関 会首と問答、夥牌みる、紅包受け取る。	廣田・李	
12/07 12:15～ 13:00	遊郷	主祭場	黒将軍・紅将軍	第五関 会首と問答、夥牌みる、紅包受け取る。	廣田・李	
12/07 12:15～ 13:00	遊郷	主祭場	引度師・主齋師	第六関(過関) 会首と問答、夥牌みる、紅包 受け取る。	廣田・李	
12/07 12:50	遊郷	主祭場	会首	道ふさぎ終了後紅包を分ける。脱ぐ。	廣田	
12/07 17:00	大戒文	主祭場	祭司達	アープル囲む、酒、油揚げ。	廣田・李	
12/07 17:05	大戒文	主祭場	会首・夫人	1枚の莫菴に座る(体首座り)、莫菴に前後(前 列夫、後列妻)に座る。	廣田	
12/07 17:10	大戒文	読戒文	主齋師	戒文を誦誦。 *	廣田	テキストは、主齋師が後日筆写し たので、手元にあるという。
12/07 17:39～ 18時頃	老君飯	主祭場	会首・夫人	戒文を聞きながら、餅米のてんこ盛り飯を受け 取り、半分食べる、油揚げを受け取り、食べる、 夫婦の碗を上下に合わせ紅布に包む、莫菴と 紅包もって退出。	廣田	
12/07 18:00	【作業】	書表師作業場	書表師・書表師II	家先衆壇に向かい、唱えごと。	廣田	
12/07 18:00	ペンデュ ング*	主祭場	主齋師	糴の上の布たたむ。	廣田	
12/07 18:30	老君飯	主祭場裏	会首夫人達	三清図に「投拝三清為父李子●(不明)生 于亥年2月26日建生」の紅紙貼り付ける、 紙銭燃やす、筈。	廣田	度戒儀礼の本筋ではない*。
12/07 18:45	(名称無し) 為解災解難	主祭場	主齋師	箱の中に米を入れている。	廣田	*
12/07	【作業】	主祭場	会首		廣田	*

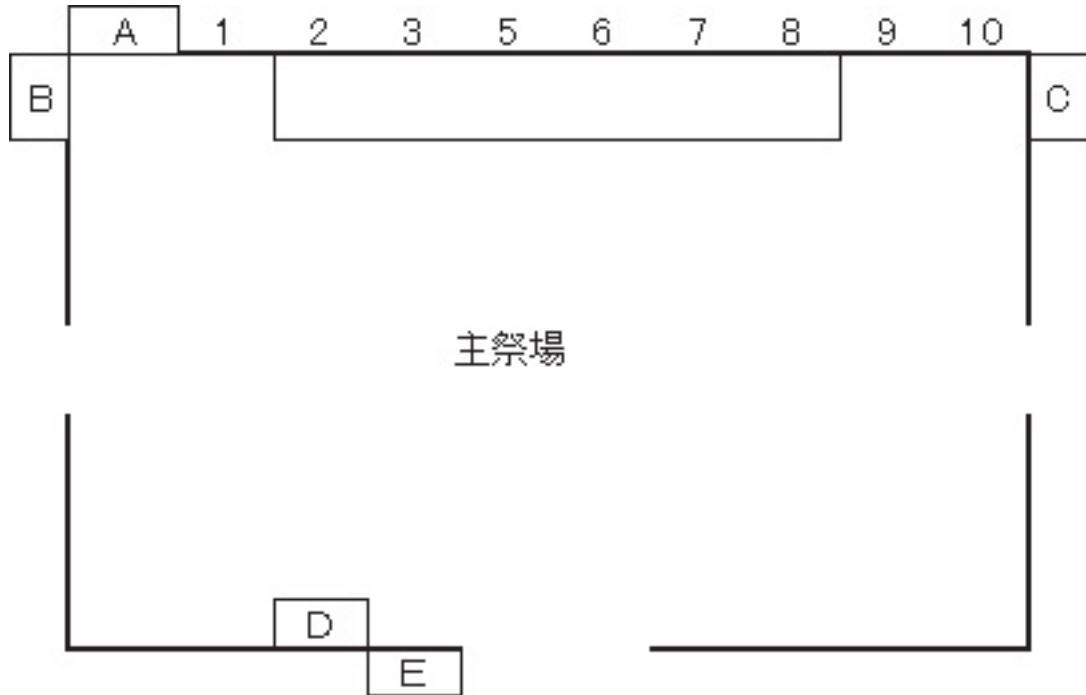
12/07	【作業】			花楼(西南)前	証盟師II	「迎兵表」を作っている。				*
12/07	請師			花楼前	保拳師	礼				廣田
12/07				主祭場	証盟師II	花楼前で念誦。				廣田
12/07				主祭場	会首	米(青詞米)を入れた木箱を文台前の台へ運び出す。				廣田
12/07				主祭場前広場	会首					吉野
12/07	秦迎兵表開天門			主祭場前広場	証盟師II・保拳師II・茶酒師	長衫、帽を着し、発角、念誦。				吉野・廣田
12/07	秦迎兵表開天門			主祭場前広場	証盟師II・保拳師II・茶酒師	打筥、焼書、焼紙、天香。				吉野・廣田
12/07	回兵			主祭場	総壇師・座壇師	農具肩に鈴振る(回兵舞)。総壇師に変わり、保拳師弟子農具肩に舞う、総壇師傘もち舞う。	A32a			廣田
12/07	招兵			主祭場	引度師	白布手に舞う、「上兵舞」、総壇師鈴振る、引度師劍藏る。				廣田
12/07	謝師			主祭場	証盟師II	師父に謝礼。	アキストいつもの			*
12/08 08:30				書表師作業場	書表師・書表師II・主醮師・吹笛師・引度師	文書(朱詞・陰據・陽據・誥文・壇詞・文牒)作成、つけあわせ、対聯かく。				廣田
12/08 12:40	添名押字			主祭場	主醮師・祭司達	主醮師が仕切る。陽抛と陰抛に署名。それぞれすでに11枚は署名してある。このときに1枚に署名する。				
12/08				主祭場	会首夫人達	木箱に米(青詞米)を入れる。				吉野
12/08 14:46	奏青詞			主祭場前広場		45米箱据える、文書記られる。燃やす文書の箱の中に墨と筆も入れる。				廣田
12/08 14:46	奏青詞			主祭場前広場	会首達	文書を確認する(十二会首・米箱5・文書箱9・文書29)。青詞文(平度文、加職文、補充文)陽抛はもって帰る。陰抛は燃やす。				廣田
12/08 16:25	奏青詞	出排盞		主祭場		盆供物。				廣田
12/08	奏青詞	請師		主祭場	主醮師・引度師・証盟師II・保拳師II	奏青詞開天門の為の請師。主醮師：会首1～3、引度師：会首4～6、証盟師II：会首7～9、保拳師：10～12を担当。				廣田
12/08 17:25	【作業】			調理場裏手		調理場の裏で豚を屠る。				三村
12/08 17:47	奏青詞	奏青詞開天門		主祭場前広場	引度師・他祭司達	引度師、主醮師各々発角、念誦、打筥、発角、誦誦。4回発角、開天門。	A16 吉 1208-10 26'頃			陰抛・青詞文・青詞表・引・筆・墨
12/08 17:47	奏青詞	奏青詞開天門		主祭場前広場	会首	青詞龍燃やす。				廣田
12/08	賀青詞			主祭場	総壇師・座壇師	「恭賀三戒弟子門外奏青詞」の文言の入った唱えことを3回念誦する。もしこの儀礼を行わなければ、奏青詞は完了しない。				
12/08 17:52	奏青詞	奏青詞開天門		主祭場前広場	主醮師・引度師・証盟師II・保拳師	唱えごと、牛角吹く、筥、紙銭燃やす。				廣田
12/08 18:06	奏青詞	奏青詞開天門(関天門)		主祭場前広場	引度師	牛角を4回吹く。	念誦テキストはない。			
12/08 18:12～18:15	奏青詞	拝師・謝師		主祭場	主醮師・引度師・証盟師II・保拳師II	唱えごと、礼、法服脱ぐ。				廣田

12/08 21:05	【作業】		正面祭壇前		供物。				廣田・李 吉野	
12/08	【作業】		正面祭壇前		神々の祭壇に灯明を点ける。					
12/08 21:09	分兵		正面祭壇前	主齋師・座壇師・ 証盟師	唱えごと、紙銭積む、会首の名簿よむ。			テキオ無し。	廣田	
12/08 21:18	分兵		供物机前	主齋師・会首	白布たたみ箱上から垂らす。				廣田	
12/08 21:20	分兵		供物机前	会首	切り紙(分兵旗)と青詞旗もち並ぶ。箱の上から地面まで白布を掛ける。				廣田・佐川	分兵旗をもらったら、領兵、帯兵、引兵の機能も可能となる。分兵旗は家にもって帰り、開天門の時に使う。
12/08 21:27～ 21:32	分兵		供物机前	主齋師	唱えごと、会首の名簿よむ、管、米を会首に投げる。布上で管、布たたむ。			A16 「招五穀転兵用」	廣田	七千八百万の兵が分与される。新度兵伝度兵。
12/08 21:28	分兵		供物机前	会首	主齋師の投げた米をエプロンで受け取る。				廣田	
12/08 21:35～ 21:51	開齋	勅開齋水	家先衆壇前	証盟師II	勅変水(開齋水)・鶏(開齋鶏)・豚(開齋猪)を机に置く。				廣田	開齋疏・割罪疏(ママ)・満散疏
12/08	開齋	開齋	正面祭壇前		左の机:豚・12鶏、中央の机:米3箱・3紅包・3白布・6盞酒・線香・あげ。				廣田	豚の上に置いてあるのは家先単。
12/08	開齋	請師	家先衆壇前	総壇師	開齋をすることを告げ、師父を呼ぶ。開齋疏等を読んだか否かは不明。				廣田	
12/08 21:41	開齋	開齋	中央の机の前	総壇師	唱えごと、紙銭置く、会首の口に水を与え、あげと鶏と豚の脂身の匂いを嗅がせる、会話、管。				廣田・佐川	臭いを嗅がせることで開齋する。管:陽卦であれば開催したことを認定する。
12/08 21:41	開齋	開齋	中央の机の前	会首	総壇師から水・豚・鶏・油揚げを与えられる、問答する。「ありがとう」という。師父に礼拝。				廣田	油揚げは青菜(上記)を意味する。
12/08 21:51	開齋	開齋	中央の机の前	総壇師	「五穀豊登」「人丁興旺」「百年無災」「千年無難」「一身警戒」と言祝ぐ。					
12/08 21:56	開齋		主祭壇前広場	会首	米を回収。				廣田	
12/08 21:55	【作業】			引度師	ハイクに乗り、3・4会首の家へ「招新度兵」を実施するために行った。					
12/08 22:00	開齋壇			執香師	ドラを鳴らす、米の机前酒を捨てる。				廣田	
12/08 22:09	開齋壇		家先衆壇前	主齋師	唱えごと、管、酒つぐ、紙銭積む。落禁壇で埋めたものを掘り出す。剣で紙銭の塊を掘り出し、中の丸めた紙を1つ1つほぐく。「疏」も入っていた。紙銭に積み上げる。これらは焼かれる。			A15b 「開齋堂」	廣田	
12/08 22:41	点破宮門		正面祭壇前	総壇師	念誦				廣田	この他、保拳師が点破宮門。
12/08 22:41	点破宮門		正面祭壇前	座壇師・座壇師II	鈴・棍もつ。				廣田	
12/08	点破宮門		正面祭壇前	証盟師II	読誦				廣田	
12/08 22:45	送孤神		主祭壇前広場	総壇師	うたう、紙銭燃やす、唱えごと、管。			A30a 「大旗頭」～ 「十万洪兵走一方」まで A31 「送姑寒」 読誦中アキオと廣田が撮した。	廣田	A30a 及 A31 「啓請今庚しんによう十另」 往鬼」A32a

12/08 22:45	点破宮門・ 拆榜文			主祭場	正面祭壇前	座壇師・座壇師II	榎もち鈴振る。	1.A30a「啓請上元 官第一」～「回来 打破七重神」まで 点破宮門。 2.A30a「大旗頭」 勸破宮門。 3.A32a「起請誦官 上大聖」～「缸尾 師公借桑銘」「玉 皇退了三兄弟」～ 「擇官任任収榜文」 まで拆破宮門。	廣田	3 回舞う。
12/08	謝師	謝師	主祭場	家先祭壇前	主醮師	酒つぐ。 主祭場に居る。榎もち鈴振り舞う。舞う間、ド ラが節をつけて鳴らされている。			廣田	
12/08 22:53	勸破宮門		主祭場	正面祭壇前	座壇師・座壇師II				廣田	
12/08	勸破宮門				総壇師				廣田	
12/08 22:55	勸破宮門				証盟師II			A30a「大旗頭」「雷 動歌」	廣田	A-30 儀礼テキスト
12/08	勸破宮門			正面祭壇前	茶酒師・吹笛師・ 執香師・鼓樂師	4 つ竹筒を背って、回舞。			李	
12/08 23:02	拆破宮門				座壇師・座壇師II	榎もち鈴振る。			廣田	
12/08 23:04	拆破宮門				座壇師・座壇師II	ドラを鳴らすと座壇師ら2人榎もち、榎の先 を天に向けて→花楼に向けて→総壇師の唱え ごとに合わせて鈴鳴らし踊る。			佐川・廣田	
12/08 23:11	拆破宮門				総壇師・座壇師2 人	総壇師の唱えごとに合わせて鈴鳴らし踊る。			佐川	
12/08 23:13	開禁壇	謝師		家先祭壇前	主醮師	紙銭積み、唱えごと、笮、紙銭燃やす、米を撒く。			廣田・佐川	
12/08 23:17 ~ 01:00	拆破宮門				座壇師・座壇師II	榎で祭壇を壊し始める。			廣田	
12/08 23:21	拆破宮門				主醮師	唱えごと、紙銭をくべ燃やす。			廣田	
12/08 23:56	拆破宮門				祭司達	祭壇を壊し、残骸をまとめる、もつこの上に残骸、 花楼を置き、木農具・花傘・肉入り碗・船形 うす等も入れる。			廣田	天橋から壊す。
12/08 23:58 ~ 00:07	拆破宮門			書表師座業場	孔子祭壇前	孔子の祭壇に向かい唱えごと、紙銭を積み、笮、 紙銭とともに孔子神位燃やす。			廣田	
12/08 23:55	送香炉				主醮師	白布に線香立て包んだもの肩に掛ける、鈴振 る、組み合せて舞う、ほどこき中身をもつこに、 祭壇敷す。	A32a「送香炉」		廣田	
12/08 23:58	拆破宮門				茶酒師				廣田	水槽が出てきた。本来、度水 槽の時に、莫慮の頭の部分の 下に敷くものであった。実際に は使っていない。
12/08 00:44	拆破宮門					花楼壊しもつこに載せる。			廣田	
12/09 01:00	送庫				祭司達	もつこを雲台に運び出す。運ぶとき奏楽。			廣田	
12/09	送庫		雲台			刀梯の榎ものこざりて小さくして燃やす。			廣田	
12/09	送庫		雲台		総壇師	紙銭くべる、唱える。			廣田	
12/09	送庫		雲台		主醮師	牛角吹く。			廣田	
12/09	送庫		雲台		座壇師	儀礼テキスト唱える、鈴振り唱える。			廣田	
12/09	送庫		開天門		主醮師	笮。発角、焼紙。			廣田	疏表は無い。
12/09	送庫		雲台		引度師	牛角。			廣田	
12/09 01:20	求師		主祭場	花楼跡	証盟師II	唱えごと、紙銭置く、酒つぐ。			廣田	
12/09 01:20	求師				保拳師II? *	法服・棍・牛角・剣もつ、礼。			廣田	

12/09 01:32	削齋表開天門	主祭場前広場	保拳師・証盟師 II	証盟師 II 誦誦。	従来の開天門と同じ。	削齋表	廣田
12/09 01:44	削齋表開天門		証盟師 II	うたう、紙銭と表硫火にくべる。			廣田
12/09 02:33	謝師	主祭場	保拳師 II ? *	礼拝			廣田
12/09 02:50	謝師	主祭場	座壇師・総壇師・主醮師	蓋に酒を注ぐ。紙銭燃やす、爆竹、唱えごと、管。唱える			廣田・吉野
12/09 02:52	謝師	主祭場	座壇師	唱えごと、紙銭置く、会首の名簿よむ、酒供える。			廣田
12/09 03:32	拆兵・拆将	主祭場	主醮師	榎をもって揺鈴しながら唱えごと、紙銭燃やす。			廣田
12/09 03:37	降香		総壇師	米撒く。			廣田
12/09	收神画		総壇師				米を撒くのは動かす前に米を撒いてしらせる為。米を撒かぬいと動かさない。米を撒かずに動かすと「犯」になる*。
12/09	收神画		座壇師	米撒く。			廣田
12/09 03:54 ~ 04:15	收神画	主祭場	祭司達	神画を片付ける。			廣田
12/09	拆兵・拆将	主祭場	主醮師	唱えごと、管。			廣田
12/09	合婚	主祭場	証盟師・保拳師	男禁房から布団を女禁房へもって行く。			
12/09	合伙	主祭場	総壇師・座壇師 2人	男禁房から鍋を女禁房へもって行く。			三村
12/09	拝師	主祭場	大会首・祭司	祭司に対して謝礼し、報酬を渡す。祭司達飲食。	謝礼の言葉：A15a「又大夜道場」～「謝王散福」まで。		廣田
12/09 06:54	帯新度兵回家	湘藍村小学校付近		村中爆竹鳴らす。			廣田
12/09	帯新度兵回家			村中爆竹鳴らす。			李
12/09	帯新度兵回家		会首	帰宅			廣田
12/09 09:00	帯新度兵回家			7会首宅祝賀会。			廣田
12/09 16:15 ~ 19:00	家でやる儀 謝新度兵礼 開天門		引度師	会首宅へ来る、会首宅での儀礼。			廣田
*	家でやる儀 招五穀神礼 開天門						引度師は3・4・7会首その他は主醮師が行った。
*	家でやる儀 安置兵礼			家の祭壇に新度兵を安置する。家を守る。			
12/13	送船*	雲台の先、北の方の川	主醮師	龍船に孤神や七精八怪を送る。香や使わなかった紙銭も焼く。			
*	求師		主醮師				
*	開天門		主醮師	いつもの開天門とは異なる。			
*			主醮師	魂を殺し、その血を龍船に撒く。			
*			主醮師	最後に焼く。	A15b「造船歌」「発船用」「上船歌」		廣田

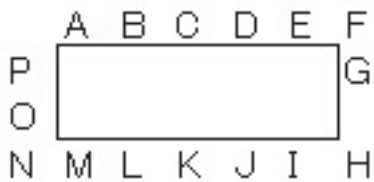
图 1



- A：家奉壇內眾位香火祖宗聖前之位
- B：天地水陽府三元三品三官大帝聖前之位
- C：海龍張趙二郎刀山祖師聖前之位
- D：天地水陽四府功曹使者聖前之位
- E：今庚太歲過往神童神前之位
- 1：昊天金闕至尊玉皇上帝御前之位
- 2：三清聖境大羅元始天尊聖前之位
- 3：上清真境玉震靈寶天尊聖前之位

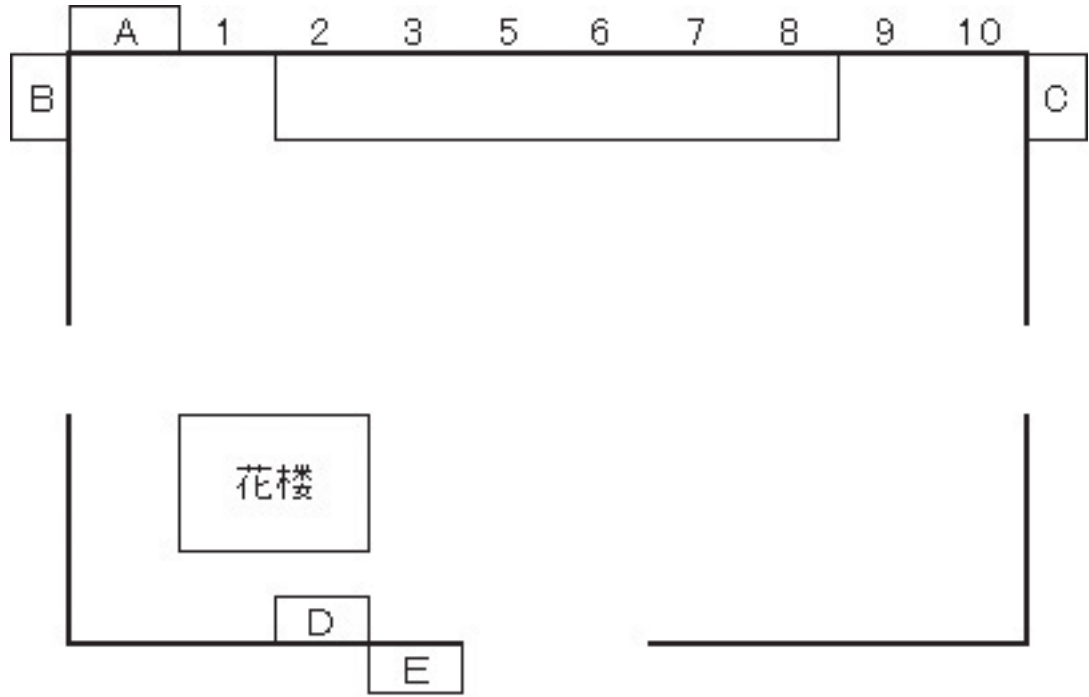
- 4：太清仙境運元道德天尊聖前之位
- 5：中元星主北極紫微長生大帝御前之位
- 6：上穹勾陳十殿承天后化青華長生大帝之位
- 7：上元学法張天大法師官聖前之位
- 8：李天大法師君觀音泗洲上帝之位
- 9：黃道二聖真君龍虎財祿二庫判官之位
- 10：九天東尉監把醮大王之位
- 花樓：隨緣祖本眾師案台之神位

图 2



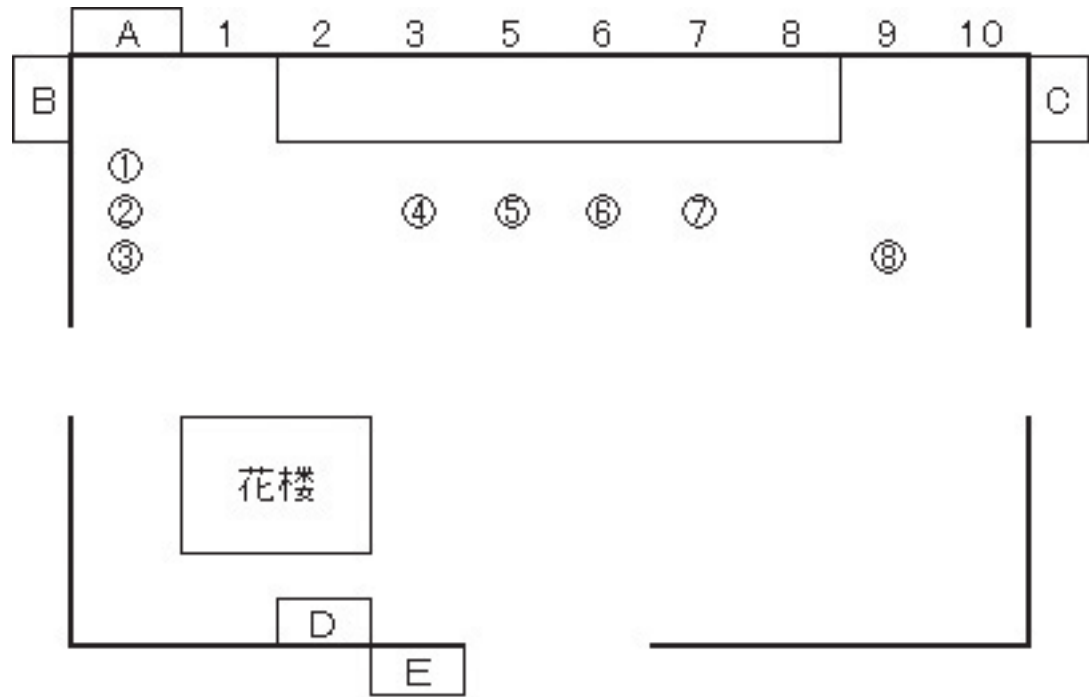
- A：主醮師
- B：引度師
- C：書表師
- D：【証盟師？*】
- E：紙緣師
- F：總壇師
- G：【保拳師？*】
- H：
- I：執香師
- J：吹笛師
- K：
- L：【座壇師？*】
- M：
- N：厨人
- O：打鼓師
- P：

図 3



12月2日 20:33 現在の花楼の位置

図 4

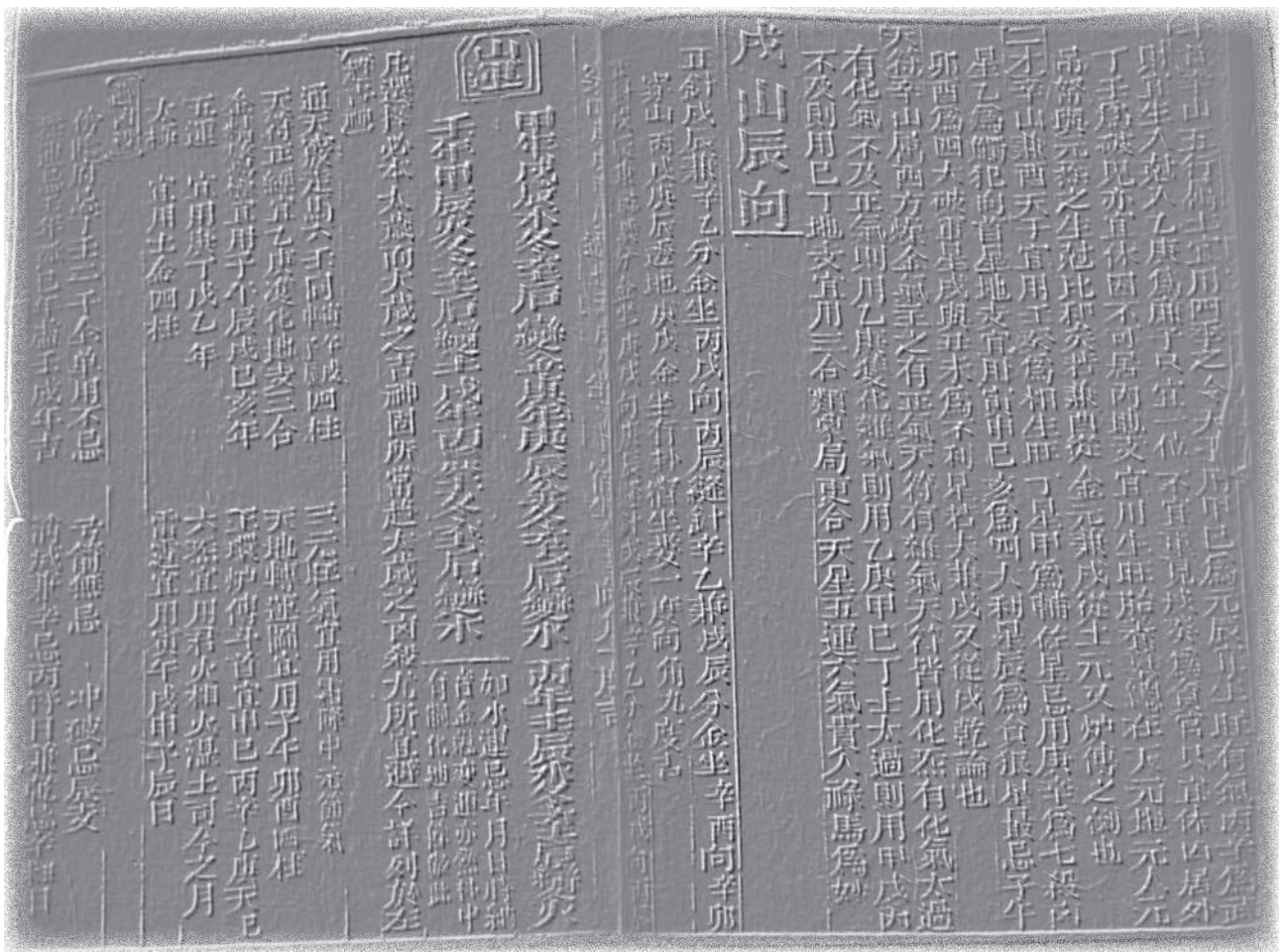


- ①座壇師
- ②引度師
- ③証盟師

- ④不明
- ⑤証盟師弟子
- ⑥不明

- ⑦座壇師
- ⑧総壇師

V. ヤオ族研究文献目録



ヤオ族研究文献目録 吉野晃編 I (アルファベット順)

注記

- 1) 欧米人の著者姓名を和訳・漢訳してある場合は、それぞれの翻訳言語のローマ字表記にしたがって配列した。
- 2) *がついている『民俗』復刊1(3)は通しページが無く、各論文ごとにp.1からページがふってある。
- 3) このリストは今後補充してゆく予定である。

珀内尔 (Purnell, H.C.)	1988「“优勉”瑶民間歌謡的韵律結構」喬健 / 謝劍 / 胡起望 (編)1988, pp.143-170.
Chanthabun Sutthi/ Somkiat Chamlong/Thawit Catuwaraphruek	1990 <i>Ruambotkhwa:mwicha:ka:n- Yao, suan thi: 2</i> , Chiang Mai: Satha:ba:n Wicay Cha:wkhaw. (タイ語, 『ヤオ族研究論文集』第2部, チエンマイ, 山地民研究所)
Chanthabun Sutthi/ Somkiat Chamlong/Thawit Catuwaraphruek	1996 <i>Withi Yao</i> . Chiang Mai: Satha:ban Wicay Cha:wkhaw. (タイ語, 『ヤオの様式』チエンマイ, 山地民研究所)
Chob Kacha-ananda	1976 <i>Etude ethnographique du groupe Yao en Thaïlande nord</i> . Ph.D. dissertation, l'Universite de Paris.
Chob Kacha-ananda	1997 <i>Thailand Yao: past, present, and future</i> . Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
Cushman, R. D.	1970 <i>Rebel haunts and lotus huts: problems in the ethnohistory of the Yao</i> . Ph.D. dissertation, Cornell University.
Downer, K.	1961 Phonology of the word in Highland Yao. <i>Journal of the School of Oriental and African Studies</i> 24 (3), pp.532-541.
廣西民族学院赴泰国考察組 (編)	1992『泰国瑶族考察』南寧: 廣西人民出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1983『廣西瑶族社会歴史調査 第二册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1984『廣西瑶族社会歴史調査 第一册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1985a『廣西瑶族社会歴史調査 第三册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1985b『廣西瑶族社会歴史調査 第八册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1986a『廣西瑶族社会歴史調査 第四册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1986b『廣西瑶族社会歴史調査 第五册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1986c『廣西瑶族社会歴史調査 第七册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1986d『湖南瑶族社会歴史調査』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1987a『廣西瑶族社会歴史調査 第九册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
廣西壮族自治区編輯組(編)	1987b『廣西瑶族社会歴史調査 第六册』(中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)南寧: 廣西民族出版社.
《過山榜》編輯組(編)	1984『瑶族《過山榜》選編』長沙: 湖南人民出版社.
量 博満	1978「經濟生活」白鳥芳郎(編)1978, pp.161-185.
Halpern, J.	1961 The role of the Chinese in Lao society. <i>Journal of the Siam Society</i> 49 (1), pp.21-46.
比嘉 政夫	1978「3 パーレー村における家族構成, 4 婚姻」白鳥(編)1978, pp.243-249.
比嘉 政夫	1984「北部タイのヤオ族の家族構造—事例報告と考察(その1)—」『琉球大学法文学部紀要(社会学篇)』27, pp.67-86.
比嘉 政夫	1986「北部タイのヤオ族の家族構造—事例報告と考察(その2)—」『琉球大学法文学部紀要(社会学篇)』28, pp.1-25.

黄钰(編)	1990『評皇券牒集編』南寧：廣西人民出版社。
黄钰 / 黄方平	1993『國際瑶族概述』南寧：廣西人民出版社。
Hubert, A.	1985 <i>L'alimentation dans un village Yao de Thaïlande du nord: "De l'au-dela au cuisiné"</i> . Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.
胡耐安	1966「説僑」張其均(主編)『邊疆論文集』第一冊, 国防研究院, pp.568-587.(初出: 『国立政治大学報』2, 1960)
胡起望 / 范宏貴	1983『盤村瑶族』北京：民族出版社。
胡起望	1995「法蘭西瑶族(フランスのヤオ族)」『聖徳学園 岐阜教育大学紀要』29, pp.179-205.
岩田慶治	1960「北部ラオスの少数民族—特にヤオ族に関して—」『史林』43(1), pp.70-103.
江應梁	1937a「廣東北江瑶人之今昔觀」『民俗』復刊1(3)*.
江應梁	1937b「廣東北江瑶人之宗教信仰及其呪術」『民俗』復刊1(3)*.
姜哲夫 / 張伋 / 龐新民	1932「拜王—廣東北江瑶人風俗之一—」『中央研究院歷史語言研究所集刊』4(1), pp.89-119.
姜哲夫	1932「記廣東北江瑶山荒洞瑶人之建醮」『中央研究院歷史語言研究所集刊』4(1), pp.83-88.
Jonsson, H.	1996 <i>Shifting social landscape: Mien (Yao) upland communities and histories in state-client settings</i> . Ph. D. dissertation, Cornell University.
Jonsson, H.	1999 Moving house: migration and the place of the household on the Thai periphery. <i>Journal of the Siam Society</i> 87(1&2), pp.99-118.
Jonsson, H.	2001a Does the house hold? : history and the shape of Mien (Yao) society. <i>Ethnohistory</i> 48(4), pp.613-654.
Jonsson, H.	2001b Serious fun: minority cultural dynamics and national integration in Thailand. <i>American Ethnologist</i> 28(1), pp.1512-78.
Jonsson, H.	2003a Encyclopedic Yao in Thailand. <i>Asian Ethnicity</i> 4(2), pp.295-301.
Jonsson, H.	2003b Mien through sports and culture: mobilizing minority identity in Thailand. <i>Ethnos</i> 68(3), pp.317-340.
Jonsson, H.	2004 Mien alter-natives in Thai modernity. <i>Anthropological Quarterly</i> 77(4), 673-704.
Jonsson, H.	2005 <i>Mien relations: mountain people and state control in Thailand</i> . Ithaca: Cornell University Press.
十文字 美信	1987『澄み通った關』東京：春秋社。
Kandre, P.K.	1967 Autonomy and integration of social systems: the Iu Mien ('Yao' or 'Man') mountain population and their neighbors, in Kunstadter P. (ed.) <i>Southeast Asian tribes, minorities and nations</i> , Princeton: Princeton U.P., vol.2, pp.583-638.
Kandre, P.K.	1971 Alternative modes of recruitment of viable household among the Yao of Mae Chan. <i>Southeast Asian Journal of Sociology</i> 4, pp.4352.
Kandre, P.K.	1976 Yao (Iu Mien) supernaturalism, language, and ethnicity. In D.J. Banks (ed.) <i>Changing Ethnicities in Modern Southeast Asia</i> . The Hague: Mouton, pp.171-196.
Kandre, P.K.	1991 The relevancer of ecology and/or economy for the study of Yao religion. In Lemoine et al. (eds.) 1991, pp.251-272.
Kandre, P.K. / Lej Tsan-kwej	1965 Aspects of wealth-accumulation, ancestor worship and household stability among the Iu-Mien-Yao, in <i>Felicitatation volumes of Southeast-Asian studies presented to His Highness Prince Dhanivat Kromamun Bidyalaph Brihayakorn</i> , Bangkok: The Siam Society under Royal Patronage, vol.1, pp.129-148.
Kunstadter, P. / Chapman, E.C.	1978 Problems of shifting cultivation and economic development in northern Thailand. In Kunstadter, P. et al. (eds.) <i>Farmers in the forest: economic development and marginal agriculture in northern Thailand</i> , Honolulu: University Press of Hawaii: 3-23.
雷澤光	1943「廣西北部盤古僑的還願法事」『民俗』(專刊)2(3-4), pp.41-49.
Lemoine, J.	1972 Un curieux point de l'histoire: l'aventure maritime des Miens. In Jacqueline, M.C. et al. (eds.) <i>Langues et techniques nature et société, II: approche ethnologique approche naturaliste</i> . Paris: Edition Klincksieck, pp.53-62.
Lemoine, J.	1982 <i>Yao ceremonial paintings</i> . Bangkok : White Lotus.
Lemoine, J.	1983 Yao religion and society. In J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.) <i>Highlanders of Thailand</i> . Kuala Lumpur: Oxford University Press.
Lemoine, J. / Chiao Chien (eds.)	1991 <i>The Yao of South China: recent international studies</i> . Paris, Pangu, Editions de l'A.F.E.Y.

Leuschner, F.W.	1911 Die Yautse in Südchina. <i>Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens</i> 13, pp.237-285.
梁 釗韜	1943「粵北乳源僑人的宗教信仰」『民俗』復刊 2(1・2), pp.16-23.
劉 偉民	1937「廣東北江瑶人的傳説與歌謠」『民俗』復刊 1(3)*.
Lombard, S.J. (comp.) / Purnell, H.C., Jr. (ed.)	1968 <i>Yao-English dictionary</i> . (Cornell University Southeast Asia Program data paper 69) Ithaca: Cornell University.
羅 比寧	1937「廣東北江瑶人農作概況」『民俗』復刊 1(3)*.
毛 宗武 (編)	1992『漢瑤簡明分類詞典(勉語)』成都: 四川民族出版社.
毛 宗武 / 蒙 朝吉 / 鄭 宗澤 (編)	1982『瑤族語言簡志』北京: 民族出版社.
丸山 宏	1986「ヤオ族と道教—中国における周辺少数民族の道教受容をめぐる—」『史境』12, pp.10-18.
Miles, D.	1969 Shifting cultivation: threats and prospects. In Tribal Research Centre (ed.) <i>Tribesmen and peasant in North Thailand</i> . Chiangmai: Tribal Research Centre: 93-99.
Miles, D.	1972a Yao blide exchange, matrification and adoption. <i>Bljdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde</i> 128, pp.99-117.
Miles, D.	1972b Land, labour and kin groups among Southeast Asian shifting cultivators. <i>Mankind</i> 8, pp.185-197.
Miles, D.	1973a Some demographic implications of regional commerce: the case of North Thailand's Yao minority, in Ho, R. and Chapman, E.C. (eds.) <i>Studies of Contemporary Thailand</i> , Canberra: A.N.U., pp.253-272.
Miles, D.	1973b Prophylactic medicine and kin units among the Yao ancestor worshippers. <i>Mankind</i> 9(2), pp.77-99.
Miles, D.	1974 <i>Marriage, agriculture and ancestor worship among the Pulangka Yao</i> . Ph.D. dissertation, The University of Sydney.
Miles, D.	1976 Prophylactic medicine and kin units among the Yao ancestor worshippers. In Newell (ed.) 1976, pp.309-327.
Miles, D.	1978 Yao spirit mediumship and heredity versus reincarnation and descent in Pulangka. <i>Man</i> (N.S.) 13, pp.428-443.
Miles, D.	1990 Capitalism and the structure of Yao descent units in China and Thailand: a comparison of Youling (1938) and Pulangka (1968). In G. Wijeyewardene (ed.) <i>Ethnic groups across national boundaries in Mainland Southeast Asia</i> . Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp.134-148.
Mongkhon Chantrabumrongs	2004 Reproduction of Yao culture: a case study of Pien Hung shrine at Ban Huey Chang Lod in northern Thailand. 塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態に関する人類学的調査研究』平成 12 ~ 15 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書, 国立民族学博物館, pp.203-218.
Mongkhon Chantrabumrongs	2005 Ban HCL, King-Amphoe Doi Luang, Chiang Rai Province. 吉野晃 (編) 2005, pp.40-51.
Obi, Lucia / Müller, Shing	1997 <i>Religiöse Schriften der Yao: Überblick über den Bestand der Yao-Handschriften in der Bayerischen Staatsbibliothek</i> . Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens. Hamburg: Zeitschrift für Kultur und Geschichte Ost- und Südostasiens 161-162: 39-86.
大崎 正治 / 石橋 誠	1996「ラオス中部, ヤオ族の移住史—聞き書きによる再構築—」『國學院大學紀要』34, pp.43-73.
大崎 正治 / 杉浦 孝昌	1996「ラオス, ヤオ族の生業と共同性」『國學院経済学』44(2), pp.25-54.
大崎 正治 / 杉浦 孝昌 / 石橋 誠	1995「ラオス少数民族の祈りと暮らし」『アーガム』136, pp.186-214.
大崎 正治 / 杉浦 孝昌 / 石橋 誠	1997「ヤオ族の社会構造と宗教儀礼—ラオス中部の事例—」脇本平也ほか (編)『アジアの宗教と精神文化』東京: 新曜社, pp.287-322.
Osaki, Masaharu / Sugiura, Takayoshi / Ishibashi, Makoto	1998 Multi-stable social structure of the Iu-Mien Yao village in Laos.『國學院大學日本文化研究所紀要』81, pp.1-37.
龐 新民	1932a「廣東北江瑤山雜記」『中央研究院歷史語言研究所集刊』2.
龐 新民	1932b「廣西瑤山調查雜記」『中央研究院歷史語言研究所集刊』4.
龐 新民	1935『兩廣瑤山調查』中華書局.
Panh, S. (ed.)	2002 <i>Modern English-Mienh and Mienh-English dictionary</i> . Victoria, Canada: Trafford.
Pouret, J.G.	2002 <i>The Yao: The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand</i> . Bangkok: River Books.

Purnell, H.C.	1991 The metrical structure of Yiu Mien secular songs. In Lemoine <i>et al.</i> (eds.) 1991, pp.369-394.
喬健 / 謝劍 / 胡起望 (編)	1988『瑶族研究論文集』北京：民族出版社。
《乳源瑶族志》編纂小組 (編)	2000『乳源瑶族志』廣州：廣東人民出版社。
白鳥芳郎	1972「評皇券牒にみられる盤護伝説とヤオ族の十八神像」『上智史学』17, pp.23-51.
白鳥芳郎 (編)	1975『僑人文書』東京：講談社。
白鳥芳郎 (編)	1978『東南アジア山地民族誌—ヤオとその隣接諸種族—』東京：講談社。
舒化龍 (編)	1992『現代瑶語研究』南寧：廣西民族出版社。
Somkiat Chamlong	2005 Ban PP, Tambol Phachang Noi, Pong District, Phayao Province. 吉野 (編) 2005, pp.52-71.
Strickmann, M.	1982 The Tao among the Yao. 『歴史における民衆と文化—酒井忠夫先生古稀祝賀論文集—』東京：国書刊行会, pp.23-30.
Stübel, H.	1938 The Yao of the Province of Kuangtung. <i>Monumenta Serica</i> 3, pp.345-384.
杉浦孝昌	1994「ラオス北部山岳地帯のヤオ族—その環境適応と自給体制の強化—」『國學院大學日本文化研究所報』177, pp.5-9.
杉浦孝昌	1999「ラオス・ヤオ族の年末年始祭祀にみる村落社会の柔構造」『國學院大學日本文化研究所紀要』83, pp.1-34.
竹村卓二	1967a「社会的共生のメカニズム (I) —概念規定と問題の所在」『社』1, pp.1-14.
竹村卓二	1967b「社会的共生のメカニズム (II) —大陸東南アジアにおける平地民と山地民との場合」『社』2, pp.14-20.
竹村卓二	1981『ヤオ族の歴史と文化—華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究—』東京：弘文堂。
竹村卓二	1994「ヤオ族の〈家先単〉とその運用—漢族との境界維持の視点から—」竹村卓二 (編)『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相—』東京：風響社, pp.13-50.
Theraphan L. Thongkum (ed.)	1991 <i>Kia sen poan: phrara.chasa.n phracawphinghuang chaypoangkantua samrap ka.ndoe.ntha.ngphu:kha.w chabaptha.won (Guo shan bang: perpetual redaction of the imperial decree of Emperor Ping Huang for protection when travelling in the hills)</i> Bangkok: Linguistics Research Unit, Faculty of Arts, Chulalongkorn University.
常見純一	1978「ヤオ族の住居と付属小屋」白鳥 (編) 1978, pp.192-205.
常見純一	1980「ヤオ族の移住と村落の形成—マーン・ラーン・トン (「国見」) を中心として」山本達郎博士古稀記念論集編集委員会 (編)『東南アジア・インドの社会と文化』東京：山川出版社。
王啓樹	1943「粵北乳源僑人的經濟生活」『民俗』復刊 2(1・2), pp.6-15.
王興端	1937「廣東北江瑶人的經濟社会」『民俗』復刊 1(3)*.
山本達郎	1955「マン族の山関簿—特に古伝説と移住経路について—」『東洋文化研究所紀要』7, pp.191-270.
顔復禮 / 商承祖	1929『廣西凌雲瑶人調查報告』(中央研究院社会科学研究所專刊 2) 南京：国立中央研究院。
楊曉勛	1997『雲南石材村瑶族道教《度戒》儀式音楽研究』香港中文大學音樂學部哲學博士学位論文。
楊成志	1937「廣東北江瑶人的文化現象與體質」『民俗』復刊 1(3)*.
楊成志	1943a「粵北乳源僑入考察導言」『民俗』復刊 2(1・2), p.1.
楊成志	1943b「粵北乳源僑人的人口問題」『民俗』復刊 2(1・2), pp.2-5.
楊成志	1943c「粵北乳源僑語小記」『民俗』復刊 2(1・2), pp.29-36.
吉野晃	1990「祖先への登録—タイ北部におけるミエン・ヤオ族の居住集団に関わる諸觀念と〈添人口〉—」『比較家族史研究』第5号, pp.77-88.
吉野晃	1991「タイ北部, ミエン族の移住—移住による村落形成過程—」『社会人類学年報』17, pp.149-162.
吉野晃	1992「タイ北部, ミエン族の定婚過程と妻方居住婚」『ふいど』5, pp.11-20.
吉野晃	1993「師弟関係にある父子—タイ北部, ミエン族の〈掛燈〉儀礼に見られる父系理念—」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』44, pp.173-187.
吉野晃	1994「ミエン・ヤオ族に関する民族誌の考察 (1) — 20世紀前半, 広東北部におけるミエン・ヤオ族と漢族との共生 (1) —」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』45, pp.135-149.
吉野晃	1994「タイ北部のミエン・ヤオ族の儀礼・総体的祭司制・漢字使用—儀礼に見られるヤオ族の「漢化」の1側面—」竹村卓二 (編)『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相—』東京：風響社, pp.51-77.

吉野 晃	1995a「民族間関係とアイデンティティ—ミエン族の他民族養取—」合田 濤・大塚和夫(編)『民族誌の現在—近代・開発・他者—』東京：弘文堂, pp.53-69.
吉野 晃	1995b「文字へのこだわり—タイのミエン・ヤオ族の『文化復興運動』—(1)『中国民話の会通信』37, pp.2-6.
吉野 晃	1995c「文字へのこだわり—タイのミエン・ヤオ族の『文化復興運動』—(2)『中国民話の会通信』38, pp.2-5.
吉野 晃	1996a「ミエン・ヤオ族の陸稲耕作作業—タイ北部におけるミエン・ヤオ族の焼畑耕作報告(1)—」『東京学芸大学紀要 第三部門 社会科学』47, pp.139-155.
吉野 晃	1996b「ミエン語」(リレー連載 中国の諸言語 4)『しにか』76, pp.82-83.
吉野 晃	1998a「焼畑に伴う移住と祖先の移住—タイのミエン・ヤオ族における移住とエスニシティー—」『東南アジア研究』35(4), pp.153-170.
吉野 晃	1998b「ミエン族の親族組織 再考—居住集団と祖先—」大胡欽一ほか(編)『社会と象徴—人類学的アプローチ—(村武精—教授古稀記念論文集)』東京：岩田書院, pp.221-232.
吉野 晃	1999「焼畑から出稼ぎへ—タイにおけるミエン・ヤオ族の出稼ぎに関する調査の中間報告—」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』50, pp.81-90.
吉野 晃	2001「中国からタイへ—焼畑耕作民ミエン・ヤオ族の移住—」(塚田誠之ほか編『流動する民族—中国南部の移動とエスニシティー—』東京：平凡社, pp.333-353.
吉野 晃	2003a「タイ北部, ミエン族の出稼ぎ—2つの村の比較から—」塚田誠之(編)『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在—』東京：風響社, pp.159-192.
吉野 晃	2003b「タイ北部, ユーミエン・ヤオ族の核家族化現象—中間報告と予備的考察—」『東京学芸大学紀要 第三部門 社会科学』54, pp.117-125.
吉野 晃	2004「タイにおけるユーミエン (Iu Mien) の文化復興運動概況」塚田誠之(編)『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態に関する人類学的調査研究』(平成12~15年度科学研究費補助金[基盤研究(B)]研究成果報告書 国立民族学博物館 塚田誠之), pp.219-234.
吉野 晃	2005a「中国からの連続性とタイにおける示差—タイにおけるユーミエン(ヤオ)の自民族表象—」長谷川清/塚田誠之(編)『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究—』東京：風響社, pp.235-258.
吉野 晃	2005b「中国におけるユーミエンの民族間関係に関する調査覚え書き—広東省北江瑤山におけるユーミエンの事例—」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』56, pp.121-128.
吉野 晃	2005c「中国におけるユーミエンの民族間関係に関する調査報告—広東省北江瑤山と広西壮族自治区金秀大瑤山におけるユーミエンの事例—」山路勝彦(編)『中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究』(平成14年度~16年度科学研究費補助金[基盤研究(B)(1)] 研究報告書 関西学院大学社会学部 山路勝彦), pp.38-55.
吉野 晃	2005d「タイ北部山地民ユーミエンのピャオ(「家」)—居住・生業・祖先祭祀—」『アジア遊学』74(特集 アジアの家社会), pp.95-104.
Yoshino, Akira	1995 Father and son, master and disciple: the patrilineal ideology of the Mien Yao of Northern Thailand. In Suenari Michio, J.S.Eades, & Christian Daniels (eds.) <i>Perspectives on Chinese society: anthropological views from Japan</i> . (CSAC Monograph 10) Kent: Centre for Social Anthropology and Computing, Eliot College, University of Kent, pp.265-273.
吉野 晃(編)	1999『タイ北部における山地民族の出稼ぎの研究—ミエン・ヤオ族の出稼ぎとその社会的影響に関する実態調査—』(平成8年度~10年度科学研究費補助金(国際学術研究・学術調査) 課題番号 08041050 研究成果報告書 東京学芸大学教育学部 吉野晃).
吉野 晃(編)	2005『タイ北部におけるユーミエン(ヤオ)族の核家族化と祭祀・儀礼知識の変化に関する研究』(平成13年度~16年度科学研究費補助金[基盤研究(C)(2)] 研究成果報告書 課題番号 13610355 東京学芸大学教育学部 吉野晃).
張 有隼	1986『瑤族宗教論集』南寧：廣西瑤族研究学会.
張 有隼	1992『瑤族伝統文化変遷論』南寧：廣西民族出版社.

ヤオ族研究文献目録 丸山宏編 I

部分稿（隣接地域の漢族、その他の民族、工具書を含む）

日文 5 件、中文 65 件、欧文 15 件

日文

菊地 秀明	2008 『清代中国南部の社会変容と太平天国』 汲古書院	137-182 頁第二部第三章に 湖南・両広省境におけるヤ オ族社会の変容と反乱
白鳥 芳郎（編）	1975 『僂人文書』 東京：講談社	
白鳥 芳郎	1982 『僂族の祖先墓修復儀礼とその祈祷書“安墳墓書” —僂族の 宗教と中国民間道教の影響—』 白鳥芳郎、山田隆治（編）『伝統 宗教と民間信仰』 南山大学人類学研究所叢書I 名古屋：南山大学 43-82 頁	
竹村 卓二	1981 『ヤオ族の歴史と文化 —華南・東南アジア山地民族の社会 人類学的研究—』 東京：弘文堂	164-172 頁に掛灯の論述
ヤオ族文化研究所（編 集発行）	2009 『瑶族文化研究所 通説』 第1号 神奈川：神奈川大学 湘 南ひらつかキャンパス 廣田律子研究室	
吉野 晃	2001 『ヤオ族と道教』 遊佐昇ほか（編）『講座道教 第6巻 アジ ア諸地域と道教』 東京：雄山閣 68-83 頁	

中文

差博・卡差・阿南達 (Chob.Kacha Ananda) ／謝 兆崇／羅 宗志 (訳)	2006 『泰国瑶人 —過去、現在和未来—』 北京：民族出版社	
陳 玫奴	2003 『從命名談廣西田林盤古瑶人的構成与生命来源』 清華人類 学叢刊 台北：唐山出版社	108 頁と 185 頁に「陰陽據」 を言及
陳 摩人／蕭 亭（搜集 整理）	1984 『瑶族歌堂曲（盤古書）』 広州：花城出版社	広東連山瑶族地区にて 60 年 代に集めたもの
高 其才	2008 『瑶族習慣法』 北京：清華大学出版社	
宮 哲兵	2001 『千家洞運動与瑶族発祥地』 武漢：武漢出版社	
広西壮族自治区編輯組	1984 『广西瑶族社会歴史調査』 第一冊 南寧：広西民族出版社	大瑶山の調査報告
広西壮族自治区編輯組	1983 『广西瑶族社会歴史調査』 第二冊 南寧：広西民族出版社	大瑶山の歌謡と故事
広西壮族自治区編輯組	1986 『广西瑶族社会歴史調査』 第四冊 南寧：広西民族出版社	桂北起義史料、龍勝などの 地区の調査報告
広西壮族自治区編輯組	1987 『广西瑶族社会歴史調査』 第六冊 南寧：広西民族出版社	上思県十万大山の調査報 告、大量の歌謡含む
広西壮族自治区編輯組	1986 『广西瑶族社会歴史調査』 第七冊 南寧：広西民族出版社	すべて歌謡
広西壮族自治区編輯組	1985 『广西瑶族社会歴史調査』 第八冊 南寧：広西民族出版社	89 件の過山榜を収録する
広西壮族自治区編輯組	1987 『广西瑶族社会歴史調査』 第九冊 南寧：広西民族出版社	429-459 頁に疏表あり
広西壮族自治区編輯組	1986 『湖南瑶族社会歴史調査』 南寧：広西民族出版社	
『過山榜』編輯組	1984 『瑶族『過山榜』選編』 長沙：湖南人民出版社	湖南の過山榜を多く収録 主に雲南の藍靛系の論文を 収録
郭 大烈／黄 貴權／李 清毅（編）	1994 『瑶文化研究』 昆明：雲南人民出版社	
海 力波	2008 『道出真我 黒衣壮の人観与認同表徴』 田野人文叢書 北京： 社会科学出版社	壮族の道公の宇宙論、民族 間関係など
胡 起望／範 宏貴	1983 『盤村瑶族 —從游耕到定居的研究—』 北京：民族出版社	広西大瑶山のモノグラフ
胡 起望	2009 『瑶族研究五十年』 北京：中央民族大学出版社	

胡 天成 (主編)	1999 『民間祭祀与儀式戲劇』 貴陽：貴州民族出版社	760-803 頁の第 14 章は請職を記述
黄 朝中／劉 耀荃 (主編)／李 默 (校補)	1984 『広東瑶族歴史資料』 (上冊) 南寧：広西民族出版社	族源、地理、史事、政治類まで
黄 貴權	2009 『瑶族志：香碗 — 雲南瑶族文化与民族認同—』 昆明：雲南大学出版社	藍靛系について 73-216 頁に詳しい儀礼の論述
黄 海／邢 淑芳	2006 『盤王大歌 — 瑶族図騰信仰与祭祀經典研究』 貴陽：貴州人民出版社	
黄 鈺 (輯点)	1993 『瑶族石刻録』 昆明：雲南民族出版社	
江 応樑	1948 序 1978 『西南辺疆民族論叢』 台北：新文豊出版公司	広東瑶人の論文を含む
李 懷菘	2001 『湖南省会同県金龍郷岩溪冲 梅山虎匠科儀本彙編』 王秋桂 (主編) 中国伝統科儀本彙編 (五) 台北：新文豊出版股份有限公司	
李 默	2004 『韶州瑶人 — 粵北瑶族社会發展跟踪調査』 広州：中山大学出版社	
李 祥紅／任 涛 (主編)	2005 『江華瑶族』 北京：民族出版社	
梁 茂春	2008 『跨越族群边界：社会学視野下的大瑶山族群關係』 北京：社会科学文献出版社	
梁 庭望 (主編)	2009 『壮族原生型民間宗教調査研究』 (上冊) (下冊) 北京：宗教文化出版社 321-455 頁に師公教、456-596 頁に壮化道教を論述	
劉 勁峰	2000 「流行於贛湘边界地区的陽平大幡科儀」 同氏 『贛南宗族社会与道教文化研究』 勞格文 (主編) 客家伝統社会叢書 8 香港：国際客家学会 法国遠東学院 海外華人資料研究中心 352 頁 所収 264-321 頁	
Lucia Obi / Shing Müll-ler / 詹 春媚 (訳)	「瑶族之宗教文献：概述巴伐利亚州立図書館之館蔵瑶族手本」 『民俗曲芸』 第 150 期 台北：財団法人施合鄭民俗文化基金会 227-279 頁	
毛 宗武／蒙 朝吉／鄭 宗澤 (編)	1982 『瑶族語言簡志』 北京：民族出版社	
毛 宗武 (編)	1992 『漢瑶簡明分類詞典 (勉語)』 成都：四川民族出版社	
毛 宗武	2004 『瑶族勉語方言研究』 中国少数民族語言方言研究叢書 北京：民族出版社	
龐 紹元	2001 「広西金秀瑶族師公面具探述」 『民俗曲芸』 第 133 期 台北：財団法人施合鄭民俗文化基金会 189-207 頁	
裴 燕生 (主編)	2009 『歴史文書』 (第二版) 北京：中国人民大学出版社	清代の牌などの文書の意味と解説法をしめす箇所あり
彭 兆栄／牟 小磊／劉 朝暉	1997 『文化特例 — 黔南瑶麓社区の人類学研究—』 貴陽：貴州人民出版社	勉系とは異なる青褲瑶のモノグラフ
彭 兆栄	2007 「儀式音楽叙事中の族群歴史記憶 — 広西賀州地区瑶族 “還盤王願” 儀式音楽分析—」 曹本治 (主編) 『中国民間儀式音楽研究 華南卷』 (下) 上海：上海音楽学院出版社 241-327 頁	
蒲 朝軍／過 竹 (主編)	1992 『中国瑶族風土志』 北京：北京大学出版社	
匡 自明 (主編)	2001 『雲南民族村寨調査 瑶族 — 河口瑶山郷水槽村—』 昆明：雲南大学出版社	167-171 頁に「陰陽據」を示す
蘇 德富／劉 玉蓮 (編)	1992 『茶山瑶研究文集』 北京：中央民族学院出版社	
譚 偉倫 (主編)	2002 『樂昌県の伝統経済、宗族与宗教文化』 勞格文 (主編) 客家伝統社会叢書 12 香港：国際客家学会 法国遠東学院 海外華人資料研究中心	

譚偉倫／曾漢祥（主編）	2006『陽山、連山、連南の伝統社会と民俗』（上）（下）勞格文（主編）客家傳統社会叢書 27、28 香港：國際客家学会 法國遠東学院 海外華人資料研究中心	
唐特凡（編）	2009『湖南省常寧市 巫師訣罡密譜彙編』王秋桂（主編）中国傳統訣罡密譜彙編 3 台北：財團法人施合鄭民俗文化基金会	
庾修明／楊啓孝／王秋桂	1993『貴州省岑鞏県平庄郷仡佬族儺壇過職儀式調查報告』台北：財團法人施合鄭民俗文化基金会	牌を使う伝法を記述
王輔世／毛宗武	1995『苗瑶語古音構擬』北京：中国社会科学出版社	
吳永章	1993『瑶族史』成都：四川民族出版社	
謝劍	2004『民族学論文集』（上）雲起樓論学叢刊 7 宜蘭：仏光人文社会学院	133-334 頁に広東連南排瑶に関する論文 道教、道教経書も言及
徐祖祥	2005『瑶族の宗教と社会 瑶族道教と其雲南瑶族関係研究』昆明：雲南出版集团公司 雲南人民出版社	
鄒光潤	2006『湘潭正一道教調査』『民俗曲芸』第 153 期 69-156 頁	
楊民康／楊曉勳	2000『雲南瑶族道教科儀音楽』曹本冶（主編）中国傳統儀式音楽研究計画系列叢書 17 台北：新文豊出版股份有限公司	117 頁に藍靛系の受戒における跳五台に言及
楊民康／吳寧華	2007「瑶族“還盤王願”、“度戒”儀式音楽及其与梅山教文化的關係」曹本冶（主編）『中国民間儀式音楽研究 華南卷』（上）上海：上海音乐学院出版社 268-387 頁	この論文の度戒は藍靛系
『瑶族簡史』編写組	1983『瑶族簡史』南寧：広西民族出版社	
葉明生	1996『福建省龍巖市東肖鎮閩山教広濟壇科儀本彙編』王秋桂（主編）中国傳統科儀本彙編（一）台北：新文豊出版股份有限公司	
葉明生／劉遠	1997『福建省龍巖市蘇邦村上元建幡大醮与龍巖師公戲』王秋桂（主編）民俗曲芸叢書 台北：財團法人施合鄭民俗文化基金会	
曾漢祥／譚偉倫（編）	2000『韶州府の宗教、社会と経済』（上）（下）勞格文（主編）客家傳統社会叢書 9、10 香港：國際客家学会 法國遠東学院 海外華人資料研究中心	
張紅	2001『湖南省地図冊』北京：中国地図出版社	
張勁松	1993「瑶族度戒調査及初探」『民俗曲芸』第 83 期 台北：財團法人施合鄭民俗文化基金会 41-64 頁	
張勁松／趙群	1996「湖南省藍山県匯源郷瑶族度戒儀式」『民俗曲芸』第 100 期 台北：財團法人施合鄭民俗文化基金会 53-122 頁	
張勁松／趙群／馮榮軍	2002『藍山県瑶族傳統文化田野調査』長沙：岳麓書社	第 4 章 131-258 頁にて度戒を記述
張有隽	1998「中国各民族原始宗教資料集成 瑶族卷」李紹明ほか（主編）『中国各民族原始宗教資料集成 土家族卷・瑶族卷・壮族卷・黎族卷』北京：中国社会科学出版社	135-462 頁が瑶族部分
張澤洪	2007『文化伝播与儀式象徴：中国西南少数民族宗教与道教祭祀儀式比較研究』成都：四川出版集团 巴蜀書社	
張振江	2008『三水瑶区変遷的描述与探索 —以改革開放前後为中心—』広州：広東省出版集团 広東人民出版社	
鄭長天	2009『瑶族“坐歌堂”の結構与功能 —湘南盤瑶“剛介”活動研究—』瑶学叢書 北京：民族出版社	
朱洪／李筱文（編）	2001『広東畚族古籍資料滙編 —図騰文化及其他—』広州：中山大学出版社	

欧文

Alberts, Eli.	A History of Daoism and the Yao People of South China. New York: Cambria Press	
Arrault, Alain et Bus-sotti, Michela.	2008 Statuettes religieuses et certificats de consecration en Chine du Sud (XVIIe-XXe siècle) . Ars Asiatiques. Tome63 pp.36-60	
Chan Wing-hoi.	1995 Ordination Names in Hakka Genealogies: A Religious Practice and Its Decline. in Faure, David and Siu, Helen F. eds. Down to Earth The Territorial Bond in South China. Stanford: Stanford University Press. pp.65-82	
Faure, David.	2005 The Yao Wars in the Mid-Ming and their Impact on Yao Ethnicity. in Crossley, Pamela Kyle. Siu, Helen F. Sutton, Donald S. eds. Empire at the Margins Culture, Ethnicity, and Frontier in Early Modern China. Berkeley and Los Angeles : University of California Press. pp.171-189	
Faure, David.	2007 Emperor and Ancestor State and Lineage in South China. Stanford : Stanford University Press. esp.pp.93-108	
Höllmann, T. O. hrsg.	2004 Handschriften der Yao. Teil 1. Bestände der Bayerischen Staatsbibliothek München Cod.Sin.147 bis Cod.Sin.1045. Stuttgart : Franz Steiner Verlag	
Lemoine, Jacques.	1982 Yao Ceremonial Paintings. Bangkok: White Lotus Co.Ltd.	
Lemoine, Jacques.	1978 Les Yao. in Encyclopédie de la Pléiade Ethnologie Régionale II . Paris: Éditions Gallimard. pp.806-814	
Litzinger, Ralph A.	1995 Making Histories Contending Conceptions of the Yao Past. in Harrell, Stevan. ed. Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers. Seattle and London : University of Washington Press. pp.117-139	
Litzinger, Ralph A.	2000 Other Chinas The Yao and the Politics of National Belonging. Durham and London: Duke University Press.	
Pourret, Jess G.	2002 The Yao The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand. Bangkok: River Books	
Shin, Leo K.	2006 The Making of the Chinese State Ethnicity and Expansion on the Ming Boderlands. Cambridge: Cambridge University Press. 明代広西における中国政府との関係から見る壮族と瑶族の政治史	
Skar, Lowell.	1992 Preliminary Remarks on Yao Religion and Society. Unpublished paper 19 pages	
Strickmann, Michel.	1982 The Tao among the Yao Taoism and the Sinification of South China. 酒井忠夫先生古稀祝賀記念の会（編）『歴史における民衆と文化 —酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集—』東京：国書刊行会 pp.23-30	
Ter Haar, Barend J.	A New Interpretation of the Yao Charters. in Paul van der Velde, Alex McKay eds. New Developments in Asian Studies An Introduction. London and New York : Kegan Paul International. pp.3-19	

備考) 以上は手元にて現物が確認できるものです。これらの文献の中に指示される参考文献を一覧表にすればより完全な文献目録に資することができると思います。過去に手元に存在したにもかかわらず、現在、現物を探せずに、この目録に載せていないものもあり、将来に期したいと考えます。なお、もしこの目録に特徴があるとすれば、近年の中国語文献にやや留意している点、ヤオ族宗教研究に関連する、隣接地域やその他の民族の宗教に関する文献を含む点が挙げられます。

ヤ才族研究文献目録 廣田律子編 I

柏果成等	1990年「盤瑶」『貴州瑶族』貴州民族出版社
黄朝中等編	1984年『広東瑶歴史資料』上・下 広西民族出版社
黄書光	1982年10月「瑶族文学与宝教の關係」『広西民間文学叢刊』第7期 広西民間文学研究会
黄書光等	1988年「盤王歌」『瑶族文学史』広西人民出版社
区文化局戲劇研究室編	1982年「馬山瑶族師公戲唱腔」『師公戲音楽』区文化局戲劇研究室
広西壮族自治区民間文学研究会翻印	1980年07月 広西民間文学資料集『広西各地歌圩情况』広西壮族自治区民間文学研究会
広西民族学院中文系民間文学教研組翻印	1980年『瑶族文学資料第三集盤王歌』広西民族学院中文系
広西民族学院中文系民間文学教研室翻印	1980年『盤王歌—瑶族—』広西民族学院中文系
湖南少数民族古籍辦公室主編	1987年 中国少数民族古籍瑶族古籍之一『盤王大歌』上集 岳麓書社
湖南少数民族古籍辦公室主編	1988年08月 中国少数民族古籍瑶族古籍之一『盤王大歌』楊錫光（責任編集）岳麓書社出版
中国科学院民族研究所広東少数民族社会歴史調査組編	1963年10月『広東省瑶族社会歴史情况』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年03月『一九三三年桂北瑶民起義資料』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年03月『広西富川県紅旗人民公社（富陽区）瑶族社会歴史調査』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年05月『広西茶城县三江郷瑶族社会歴史調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年06月『広西竜勝各族自治县日新区潘内郷潘内村瑶族社会歴史調査報告』附該県平等区広南公社盤胖生産隊瑶族社会歴史調査報告 中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年07月『広西僮族自治区百色県洞好郷瑶族社会歴史調査』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年07月『広西僮族自治区荔浦県茶城人民公社瑶族社会歴史調査』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年08月『解放前瑶族社会性質調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年08月『興安县兩金区、臨桂県宛田区柳厄郷金州県東山区瑶族社会調査』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年08月『広西上思県十万大山南桂郷瑶族社会歴史調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年08月『広西凌樂群英公社覽金生産大隊瑶族社会歴史情况調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1963年10月『広西僮族自治区西林県那勞区那兵郷瑶族社会歴史調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1964年03月『広西僮族自治区田樂県作登区平略郷瑶族社会歴史調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1964年03月『睦边県下華公社規六生産隊瑶族社会歴史調査報告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所広西少数民族社会歴史調査組編	1964年03月『瑶族過山牒文彙編』中国科学院民族研究所

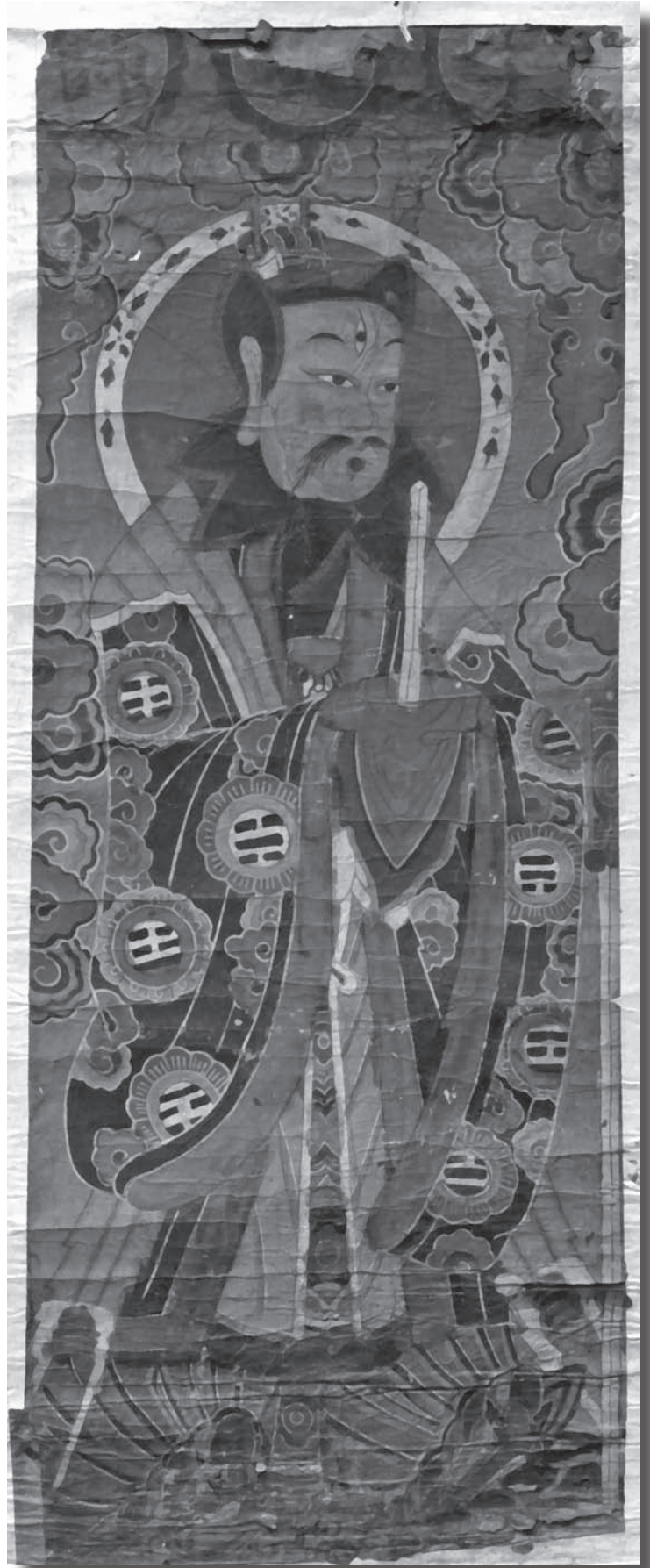
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年04月『广西僮族自治区贺县新华、狮狭乡瑶族社会历史调查』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年07月『贺县富钟瑶族地区解放前商品经济发展情况调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年07月『广西田林县八渡区那拉乡瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年07月『广西僮族自治区都安瑶族自治县三只羊人民公社瑶族社会历史概况』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年08月『广西僮族自治区兴安县两金区瑶族社会历史调查』附：竜勝各族自治县三门区大罗乡同列屯瑶族历史调查报告 中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年09月『广西僮族自治区巴马瑶族自治县甘长乡瑶族社会历史调查』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年11月『广西都安瑶族自治县七百弄、文华区瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年12月『广西都安瑶族自治县下【土+幻】区瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1964年12月『广西僮族自治区田林县渭标乡大瑶山瑶族自治县长垌人民公社瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1965年05月『广西都安瑶族自治县三只羊区瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1965年06月『广西僮族自治区上林县正万乡瑶族社会历史调查报告』中国科学院民族研究所
中国科学院民族研究所广西少数民族社会历史调查组编	1965年06月『广西僮族自治区凌乐县后竜山、伶站、覽金、利田瑶族社会历史情况调查报告』中国科学院民族研究所
中国艺术研究院音乐研究所 何芸等	1987年『瑶族民歌』文化艺术出版社
羅庶長	1981年11月「瑶寨風情」『广西民間文学叢刊』第4期 广西民間文学研究会
陸文祥	1984年「盤王的伝説」『瑶族民間故事選』广西人民出版社
李肇隆等	1984年『瑶山里的伝説』中国民間文艺出版社
黄盛全	1987年09月「瑶族研究論著、資料目錄滙編」『瑶族研究通訊』第5期 广西瑶族研究学会
黄勇刹等	1980年10月 广西民間文学資料集『广西歌圩的歌』广西壮族自治区民間文学研究会
蘇勝興等編	1982年「古歌」『少数民族民間文学叢書瑶族民歌選』上海文艺出版社
張有隽	1985年「十万大山瑶族的道教信仰」『民族研究集刊』1985第2期 广西民族学院民族研究所
張有隽	1986年『瑶族宗教論集』广西瑶族研究学会
張有隽	1988年「十万大山瑶族道教信仰 浅释」『瑶族研究論文集—1986年瑶族研究国际研讨会』民族出版社
楊照昌	1981年03月「瑶族文学概况」『雲南少数民族文学資料』第3輯 中国社会科学院雲南少数民族文学研究所等
藍正祥	1982年09月「瑶族勸世詞」『广西民間文学叢刊』第6期 广西民間文学研究会
范陽主編	1988年「関于瑶族盤王歌」『瑶族歌堂詩述論』广西人民出版社
闌鴻恩	1981年「和竹王有関的伝説」『广西各民族民間文学叢書广西民間文学散論』广西人民出版社

国家民委民族問題五种叢書に整理される前の報告書をリストにしてみました。

さらに盤王歌が入っている80年代の出版部物をリストにしました。

今後雑誌類及び90年代の出版物も整理を試みたいです。

VI. 書評



【書評】

田畑久夫「ヤオ族の評皇券牒—盤瓠神話と移動経路を中心に—（Ⅰ）～（Ⅳ）」

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

博士後期課程 3年 三村宜敬

本稿は、昭和女子大学『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』（以下、昭和女子大紀要）14号に2005年に第Ⅰ稿が掲載され、2010年1月現在で第Ⅳ稿までが発表されている。

本論の中心となるのは、ヤオ族の中でも過山ヤオ族とされる集団が所有している評皇券牒（過山榜）の比較である。この評皇券牒の内容はヤオ族における祖先神話、いわゆる「盤瓠神話」である。「盤瓠神話」については、竹村卓二が「過山ヤオ族の二つの起源神話<盤瓠>と<渡海>—種族的アイデンティティの生成と淘汰—」（竹村：1978）において論じているが、この論は盤瓠神話とヤオ族のアイデンティティの確立に焦点を当てられているため、評皇券牒の材質や形状、描かれている絵画、作成年代については対象とされていない。従って、本稿が目標として掲げる中国の貴州省、タイ北部のヤオ族における評皇券牒の比較・分析である。私がこの論文に注目し取り上げたのは、ヤオ族研究において、漢字で書かれたテキストや文献ばかりではなく、本論中において田畑が行った券牒の材質や描かれた絵画の分析が今後、紙の産地特定によるヤオ族の移動経路、交易の分析や絵画内容による描かれた時代の分析へ繋がる試金石であると考えたためである。

まず発表された論の順に則しその概要について述べる。第Ⅰ稿では、これまでの先行研究とヤオ族の概要が中心となる。先行研究では、評皇券牒を含むヤオ族の古文書類に注目してきた日本人研究者として松本信廣、山本達郎、白鳥芳郎といった名を挙げている。しかしながら、これらの研究者が対象としたのは中国国内のヤオ族ではなく、「移動先であるベトナムおよびタイなどに展開するヤオ族（3頁）」であると述べる。この理由として、「ヤオ族の古文書類に関しては、中国国内ではほとんどすべてを民俗研究所などの研究機関によって収集・保管され（中略）日本人研究者を筆頭に外国人研究者は、これら一連の古文書類を収集するのは勿論のこと、現物を手にとって閲覧することさえできないという状況であった（3頁）。」とする。そして、この民族研究所など政府機関が一括して保管している資料を用いた詳細な研究がなされていない点、日本人研究者が収集した資料は点数が少なく、各種評皇券牒を比較する事ができなかった点を問題としており、本論における評皇

券牒の比較はかような点の克服を目指している。

次にヤオ族の概要では、漢籍史料を基としたヤオ族の移動と歴史についてふれられている。ヤオ族が現在見られるような広地域にまで分布した背景として、彼らの生業の中心が焼畑農業および狩猟であったという単一的な要因ではなく、「歴代の王朝による弾圧・迫圧政策に対する反抗や反乱の失敗から徹底的に弾圧され、それから逃れるための移動であった（7頁）」と述べる。そして、同じ民族として一括りにされてはいるものの、その衣裳や言語には地域差が見られる点について事例を挙げ、その分布について再考を行っている。これは漢籍史料を基としている点で、一方的な視点で述べられている事を鑑みなければならないが、ヤオ族の山地移動に関して、生業による理由だけではなく、歴代の王朝に反抗や反乱を行い、「弾圧を逃れるための移動」とは新たな視点であろう。このような視点から、評皇券牒は従来考えられている「山地移動における許可状」とは別の意味合いがあると考ええる。すなわち、迫害を逃れるのであれば、何故「ヤオ族としての証明書」と言えるものを所持していたのであろうか。この点について疑問が残る。

第Ⅱ稿においては、「3. 盤瓠神話とヤオ族」と題され、神話の成立過程、特長、変遷について述べられる。まず本稿は、『山海経』の記載による最古の盤瓠神話を述べると共に、同音の盤古を『三五歴紀』『五運歴年紀』から引用し、天地創造神話に見られる盤古について述べている。次に『太平御覧』に引用されている『魏略』に見られる槃瓠、そして『搜神記』『後漢書』に見られる槃瓠犬祖神話を中心に比較を行っている。

この中で、過山ヤオ族が漢文化を取り入れた理由として、茶および紙といった製品を「定期市などで販売するためにも、中国語を学習し、漢字を修得する必要があった（2頁）。」と述べており、さらに山を自由に移動するための許可書を必要としたと述べる。そして田畑は焼畑の許可書と同時に「祖先祭祀や冠婚葬祭に関する習俗を行う際に唱えられる祈祷や呪文に類する文書類の必要を強く感じるようになった（3頁）。」とする。しかし、これだけでは、なぜ過山ヤオ族が上記の見解のように儀礼や祈祷などの文書を必要としたのかについては説明不足であり、ともすれば誤解を与えかねない。湖南省藍山県におけるヤオ族は儀礼すべて

を漢族からもたらされたものに則って行っているわけではない。例として挙げるならば、度戒儀礼において「解厄」として唱えられるテキストは道教の「太上玄霊北斗本命延生真経」の一部分である。すなわち藍山県のヤオ族においては彼ら儀礼に必要と考える道教のテキストの一部を引用し、自らが必要とするポイントで用いている。そのため、ヤオ族が漢族の文化を受け入れたというよりは、必要とした部分を受け入れ、ヤオ族の儀礼や祈祷に組み込んでいったのであろう。

次に第Ⅲ稿においては、本論において中心となる評皇券牒の内容が掲載される。ここで掲載されている具体例は、貴州省黔东南苗族侗族自治州從江县斗里郷台里村に所属する盤家が所有する過山榜の全文が紹介されている。この過山榜の特徴として挙げられているのは、①槃瓠犬祖神話の欠落である。ここでは槃瓠の名は無く「盤古」が登場し、天地開闢とヤオ族の祖先に12姓を与えた事。②「ヤオ文字」というヤオ族の音韻に合わせて漢字が用いられているため、「文法理解が困難な箇所が随所に見られる(5頁)。」点。③文章中に前文と関連の見られない新しい登場人物が急に登場するといった点である。

田畑は盤家所有の評皇券牒を便宜上8段に分類し、日本語の大意を掲載している。中でも「盤古聖王(盤古龍王・盤古聖帝)」が天地開闢をし、ヤオ族を12姓に分けるとの記述は、田畑の分類によると第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ段に見られる(第Ⅱ段は天地開闢のみの記述)。そして、第Ⅳ、Ⅵ、Ⅶ段では、ヤオ族が官職に任じられたという内容や租税の免除などが見られ友好関係を強調している。しかし[第Ⅷ段]では最終的には貧者として書かれ、憐みを乞うという面も見せる。この掲載されている評皇券牒の日本語訳はあくまでも大意であるため、詳細な内容の検証においては再度翻訳を行う必要がある。さらに本稿で指摘している「現在でも評皇券牒がかかる免許状としての性格を有しており、実際にその効力がある(2頁)」と述べる根拠として、「所有していると看做される家は、ヤオ族の集落間では中心的な役割を担う家であり、他のヤオ族からは一目置かれる存在となっている(2頁)。」と述べるのみであり、ヤオ族内での認識のみにとどまっている。評皇券牒は、田畑第Ⅱ稿で述べられているように、彼らにとっても他の民族と交渉を行う上で重要な意味を持ちえていたのであろう。そのため他の周辺民族から見た評皇券牒に対する認識について論が展開していないのが残念である。

最後に第Ⅳ稿では、4点の評皇券牒について比較を行っている。分析の対象とされる評皇券牒のうち1点は、第Ⅲ稿(2007)において内容が報告された貴州省のもの、そして白鳥芳郎によって日本に持ち帰られたタイのもので

ある。そして2003年に田畑らが入手したタイ北部の「ミエン」と自称する過山ヤオ族が所有していたもの2点である。この4点の評皇券牒に対して本稿では、表題、用紙、特に絵画に重点を置いて分析を行っている。

この絵画には、ヤオ族の世界観を示したとされる地図のようなもの、太陽、月、衣装まで細かに描かれた人物、墳墓といったものを場面ごとで分析を行っている。この人物の描写の中には、シルエットのみ線で描かれたものや顔が描かれ頭部の背後には、仏画のような頭光が見られるものがある。このような人物の描き分けの違いから、「(略)頭光がみられる。それ故、これらの人物像は一般の人間を表現したものではなく、神の姿を表現したものと考えられる(7頁)」とし、それ故に「ヤオ族の神に該当する人物といえ、ヤオ族と深い関係をもつ評皇が第1に想定できる(7頁)」としている。このように田畑は描写サイズの大小、衣装、持ち物から絵画における解釈を行っているが、ここで注意しておかなければならないのは、これらの分析は田畑の主観の基に成り立っている解釈であり、他の絵画資料との比較及び現地所有者から聞き取りを行っているわけではないという事である。

またタイで田畑が入手したという評皇券牒には墳墓と見られるものが描かれている。これについては絵画の内容を述べるにとどめているが、定住をせず山地を自由に移動し、焼畑を行うための保証書としても意味を持つ評皇券牒に描かれた墳墓は、北タイのヤオ族の墓なのであろうか。ヤオ族の葬送に関する知識に乏しいため推論でしかないが、蓮華座の上に長方形の石を立たせた墳墓の形は漢族のものまねて描かれており、実際のヤオ族の墓とは違うのではないかと考える。このような墳墓が描かれた理由として、葬送においても漢族側に近づける事によって、ヤオ族を野蛮な民族ではなく、漢族視点で文化的な民族であるというアピールになっているのではないだろうか。

本稿は以上に見てきたようにヤオ族研究において、評皇券牒という資料を用いた比較という新たな試みを行っている点で評価されるものである。しかし、漢籍史料からヤオ族の歴史と移動経路の再考については、竹村卓二の論考を踏襲した感がいなめない。また、貴州省の評皇券牒における分析についても内容は意識にとどめられ、いささか物足りない。また本稿が評皇券牒の分析に重点を置いているためか現地におけるかかる資料についての扱われ方についての情報が少ないように感じる。

最後に、本稿に及び今後のヤオ族研究の課題として、現地のヤオ族との連携の下に研究を進めることが重要であらう。著者に敬意を表しつつ、次稿の展開に期待したい。

【書評】

李金叶著『中国とベトナム山地民族の世界 ヤオ族音楽文化に関する基礎的研究』
(2009年・大学教育出版)

神奈川大学歴史民俗資料学研究科
博士後期課程3年 佐川潤子

本書は中国南部およびベトナム北部に居住するヤオ族（ベトナムではザオ族）の、音楽文化についてまとめたものである。構成は、

第Ⅰ部 序論

第Ⅱ部 ヤオ族音楽文化における周辺へのまなざし

第Ⅲ部 ヤオ族の打楽器を中心とする音楽文化

第Ⅳ部 ヤオ族の歌掛けを中心とする音楽文化

第Ⅴ部 結論

である。本書全体ではなく、「ヤオ族の楽器」について理解を深めたいと考えているため、まず第Ⅲ部から検討してみる。

この第Ⅲ部は、二つの章から構成されており、それぞれ

第5章 ヤオ族の長鼓文化に関する分析

第6章 ヤオ族の銅鼓文化に関する分析

となっている。このうち長鼓についての部分のみ検討する。それは韓国の民族楽器であるチャングと、形状が似ているからである。チャングは韓国の民俗芸能では欠くことのできない楽器であり、また長鼓もヤオ族にとって最も重要な楽器であるという。そこで長鼓とチャングを比較してみたいと考え、そのためにはまず第5章の検討をし、長鼓について理解することが必要であると考えた。

第5章はさらに6つに分かれており、まずそれぞれの内容をまとめてみる。

1. 唐宋時代の文献に見られる長鼓

現在ヤオ族の音楽に用いられる長鼓は、古代の細腰鼓から変遷を遂げてきた打楽器である。

唐時代杜佑の『通典』通典巻144（典752頁）

「都曇鼓似腰鼓而小、以槌擊之。毛員鼓似都曇而大…正鼓、和鼓者、一以正、一以和、皆腰鼓也。」

（都曇鼓は腰鼓と似たような形だが、[鼓の胴体が]腰鼓より小さくて、ばちで面を叩く。毛員鼓は都曇鼓と似たような形であるが、[鼓の胴体は]都曇鼓よりも大きいのである。正鼓と和鼓はそれぞれ呼び名が違うが、みな腰鼓である。）

宋時代陳陽の『樂書』樂書巻127（555頁～560頁）にある楽器の比較をおこなうと、唐代の都曇鼓・毛員鼓・正鼓・和鼓はすべて細腰鼓類の打楽器であると確認できる。

宋時代苑成大の『桂海 衡志・制雲』（375頁）

「銃鼓、獠人樂、状如腰鼓」（銃鼓はヤオ族の楽器であり、その形は腰鼓に似ている。）

宋時代周去非の『嶺外代答』巻7（446頁）

「獠人之樂、有蘆沙、銃鼓……銃鼓乃長大腰鼓也。」

（ヤオ族の音楽には蘆沙や銃鼓などの種類があり、……銃鼓という楽器は長大な腰鼓である。）

筆者は、長鼓が宋代のヤオ族社会において主要な楽器として使用されていたことは間違いないとしている。また他民族の鼓類楽器とヤオ族長鼓との間での影響も指摘しており、広西チワン族自治区チワン族の打楽器である蜂鼓や、中国東北部朝鮮族の杖鼓（チャンゴ）を挙げている。

宋時代沈括の『夢溪筆談』巻5（733頁）

「唐之杖鼓、本謂之兩杖鼓、兩頭皆用杖。今之杖鼓、一頭以手附之、則唐之漢震第2鼓也。」

（唐時代の杖鼓は本来は両杖鼓といい、楽器の両側を杖を使って叩いた。宋代の杖鼓は楽器の片側を手で持って演奏する。これは唐代の漢震第2鼓である。）

漢震第2鼓に関して前述『樂書』樂書巻127（560頁）によると、

「震漢之制、廣首而纖腹、漢人所用之鼓、亦謂之漢鼓。」（震鼓の特徴は首が広く、腹が細いのである。震鼓は漢族に使われるので、漢鼓ともいう。）

2. 明清時代の文献に見られる長鼓

ヤオ族は盤古王を祖先として崇拝し、盤古王を祀る儀式を行うときに、長鼓などの楽器を演奏しながら歌舞を演じる。明時代鄭露の『赤雅・獠人祀典』巻1（339頁）

「時節祀盤古…男女左右堯鼓、胡蘆笙、忽雷、匏响、雲陽。祭畢合樂、男女跳躍、擊雲陽為節。」

（明代ヤオ族の社会では、毎年一定の季節に、盤古王を祭祀する儀式が行われている。その儀式活動の中に、男女達は堯鼓[長鼓]、胡蘆笙、忽雷、匏响、雲陽という5つの打楽器と管弦楽器を演奏している。また、各種の楽器の合奏や雲陽演奏のリズムに合わせた男女達の舞踊は、祭祀儀礼の活動を行うときに必要な内容となっている。）

清時代傅恒の『皇清職貢図』巻3（492頁）

「獠瑤、其在湖南者、聚処安化、寧郷、武岡、叙浦山谷間…每稼穡登場後、治酒延賓。擊長鼓、吹蘆笙、男女跳舞而歌、名曰跳歌。」

（湖南省安化、寧郷などの地区に住む八尾族の人々は、収穫の作業を終えた後、収穫を手伝ってくれた客達のために宴会を開催する。その際には、長鼓を叩いて蘆笙を吹き、男女は舞を踊りながら歌を歌う。これを「跳歌」という。）

清時代李來章の『連陽八排風土記』卷3 (228頁)

「元宵擊鑼、搗長鼓、跳躍作態。」

(旧正月から第15日目の元宵の日、ヤオ族の人びとは長鼓を叩きながら物の形象をまねて踊る。)

宋時代沈括の文献から清時代になると広西賀県のヤオ族は、黄色い泥を長鼓の胴体に塗りつけるようになり、土鼓ともいわれるようになった。

清時代金鉞等監修の『廣西通志・諸蛮』卷93 (562頁)

「賀県瑤…迎春入城市、婦人操瑤音、男擊土鼓以和之。」(賀県ヤオ族の男女は旧正月を迎えるために都市に入り、婦人はヤオ族に民謡を歌い、男は土鼓を叩いて伴奏する。)

前述李來章の『連陽八排風土記』卷3 (288頁)

「長鼓、其形頭大中小、黄泥塗皮、以繩掛頸。」

(長鼓はその形状が胴体の両側の鼓面が大きく、胴体の中部が小さく、胴体の表面に黄色い泥を塗りつけて、縄で頸にかけて演奏する楽器である。)

3. ヤオ族長鼓の構造

ここでは長鼓の構造について述べている。長鼓は、胴体の両端が杯状で、中央部が細長く、胴体は堅い木で作られ、羊か牛の皮が張られている。胴体の表面には漆を塗って、花などの絵が描かれている。さらにヤオ族の民間には、大小2種類の長鼓が存在する。大きい長鼓は胴長約200cm、中央部直径約15cm、両端の膜面直径約30cmである。一方、小さい長鼓は胴長約80cm、中央部直径約4cm、両端の膜面直径約12cmである。唐宋時代には祭祀儀礼などで使用されていた楽器ではあるが、唐宋時代の文献からは大小2種類の長鼓があったとは考えられない。祭祀儀礼では力強い音を出す打楽器として、比較的大きな長鼓が要求されたため、唐宋時代には第長鼓に近い長鼓が使われたと推測される。

明の末、清初期の顧炎武の『天下郡国利病書・湖廣下』原編第25冊 (379頁)には

「衡人賽盤古…以木為鼓…中小而兩頭大、如今之杖鼓。四尺者謂長鼓；二尺者謂之短鼓。」

(衡陽地区に居住している人々は盤古王を祭る際に、木で作った両側鼓面の直径が、胴体中央部の直径よりも大きい鼓を使用している。胴体が4尺の長さを持つものは長鼓、2尺の長さを持つものは短鼓と呼ぶ。)

とあり、明清時代には大小2種類の長鼓が使用されていたと考えられる。

また黄泥鼓はヤオ族の長鼓類の打楽器に属する。これは黄色い泥を長鼓の胴体に塗りつけてから演奏するもので、土鼓・長腰鼓ともいわれる。両側鼓面の直径が胴体中央部の直径よりも大きく、羊皮あるいは牛皮が鼓の両側にある円形の鉄輪に固定され、紐で鼓面の両側にある鉄

づりに通して鼓面の皮が一定の力で張られるようにしてある。やはり公(オス)鼓と母(メス)鼓がある。

公鼓は胴長約170cm、中央部直径約6cm、鼓面直径約26cmで、母鼓は胴長約100cm、中央部直径約11cm、鼓面直径約26cmである。ヤオ族の村落では、人が亡くなったときには、遺族は黄泥鼓を叩いて霊を哀悼する。父親が亡くなったときには、霊柩の前で妻は母鼓、長男は公鼓を叩く。また母親が亡くなったときには、父親と長男のいずれもが公鼓を叩く。このように公鼓と母鼓を分けて演奏し、親族の霊を哀悼することは、ヤオ族社会に特有の伝統文化として各村落に伝わっている。したがって公と母という概念はヤオ族の人々から非常に重視され、黄泥鼓が公鼓と母鼓に分けられ、母鼓の胴体中央部が公鼓より太く作られることは、ヤオ族の自然界や生活習慣などに関する認識が、楽器の製作に影響を与えたと考えられる。

4. ヤオ族長鼓の演奏方法

ヤオ族の長鼓は大小に分けられるため、それぞれ演奏方法も異なる。大長鼓は、楽器を演奏台などに置き、両手で鼓面を叩いて演奏する。演奏者が2人の場合は、左右の鼓面を分担して叩く。器楽合奏あるいは歌舞の伴奏のみに使われ、踊りの道具としては使われない。一方、小長鼓は左手で鼓の中央部を持ち、右手で両側の鼓面を交互に打つ。踊りの道具として、踊りながら演奏される場合もある。肩の上に縄を斜めにかけて楽器を支え、両手で鼓面を打つこともある。

また黄泥鼓の演奏方法は、公鼓と母鼓で変わってくる。公鼓は左手で鼓の中央部を掴んで、鼓を胸の前ないし頭の上に持ち上げて、上下左右に振り回しながら右手で両側の鼓面を交互に叩く。母鼓の場合は、ひもで鼓を首にかけ、鼓を横にして腹部の前に置き、踊りながら両手でそれぞれ両側の鼓面を叩く。黄泥鼓は舞踊の伴奏だけでなく、小型の長鼓同様、踊りの道具としても使われる。演奏の際には、常に一つの母鼓と複数の公鼓とが組み合わされて用いられる。

踊りについて見ると、長鼓の伴奏によって踊ることを長鼓舞という。これはヤオ族の伝統的な舞踊で、踊り手が長鼓を演奏しながら踊る。踊り際の長鼓の演奏方法には文と武の2種類がある。「文長鼓」は柔らかく軽やかな動作で、「武長鼓」は豪放で力強い動作である。いずれも統一されたりリズムで鼓を打つ。

長鼓舞は、ヤオ族の歌舞において重要な役割を果たすもので、「祭盤王」の祭りや新年・新築祝い・結婚式などの行事には欠かせない芸能である。広西チワン族自治区金秀大瑶山にあるヤオ族博物館での展示によると、

長鼓4人、シンバル4人、横笛1人

『過山榜』という文字を書いた旗を持つ者1人で、長鼓舞を行う前に、祖先の位牌に拝礼し、互いに挨拶してから始める。長鼓手4人は踊りながら〈盤王歌〉を歌い、2人一組になって交互に踊る。

黄泥鼓は広鼓と母鼓に分けられ、音の高さを調節するため、黄色い泥を胴体に塗りつける。黄泥鼓舞を行う際には、母鼓を先頭にして後に4つの広鼓が続く。母鼓のリズムは最も重要で、広鼓は母鼓のリズムに合わせて演奏する。

5. ベトナム北部ザオ族の「土鼓」

ベトナム北部のラオカイ省に居住するザオ族の一グループである Dao Ho 族の間で、ヤオ族長鼓に構造や演奏方法が近い打楽器が使用されており、「土鼓」と呼ばれている。土鼓は中国チワン族やマオナン族など南部の少数民族の間で使われている「蜂鼓」に形状が似ている。蜂鼓は胴体の片方が球状で、もう片方がラップ状の楽器で、胴体は陶製である。一方土鼓は土を焼いて作ったものではなく、胴を材料として作られたものである。楽器としての耐久性、またより良い音の響きを得るためであると考えられる。

演奏方法についてみると、蜂鼓は細長い旗で鼓を胸の前に吊り、両手で鼓の両側の鼓面を叩く。左手で木あるいは竹製の撥を持って左側の球状の鼓面を叩き、右手で右側のラップ状の鼓面を叩く場合もある。

土鼓は右側を竹製の撥で叩くが、左側を木製の撥で叩くことはない。このことから、土鼓の胴体は銅製であるため、両手あるいは竹製の撥で叩くのみで、音を響かせることが出来ることから、木製の撥は必要ないと考えられる。

6. ヤオ族長鼓の社会的機能

ヤオ族の社会では打楽器と管楽器の伴奏を伴う歌舞が盛んで、長鼓舞もしくは黄泥鼓舞は、ヤオ族の娯楽活動に欠かせない民族伝統歌舞として各地に伝承されている。またヤオ族の社会では、彼らの祖先である盤古王の祭祀において、長鼓の演奏と踊りが必ず行われる。ヤオ族の人々は、盤古王を生き物に恵みを与える太陽の神と見なして崇拝している。その盤古を祀る祭祀において長鼓は欠かせない楽器として使われ、彼らの団結を強めるという社会的機能を果たしている。

ヤオ族の社会では、盤古王の祭祀で太陽の姿を象徴する銅鼓の演奏が欠かせないとされるが、長鼓の形状は太陽樹と似ている。両端の鼓面が太陽を、そして中央部の細長い胴体は神樹を象徴している。また、ヤオ族長鼓の胴体は赤紫色の梓を材料として作られた。漆を塗る技術が知られるようになってからは、赤い漆を胴体に塗ることも行われた。

ヤオ族社会において、長鼓と盤古とは密接な関係にあり、太陽の神を象徴する長鼓を用いて盤古を祭る。集団で踊

り、長鼓を演奏することで、村民同士の緊密な人間関係を築いてきた。長鼓は社会的機能の一端を担っているものである。

以上が第5章の概要であるが、最後に私の感想と今後の目標を述べる。第5章1と2に関しては、実際に文献を入手し検討してみる必要がある。著者の引用文中には省略された部分があるため、全体を再確認しなければならない。また楽器についての知識を深めるために、文献にみられた杖鼓・腰鼓・細腰鼓・蜂鼓などについて、時代によって呼び名が変化しているため、特徴をまとめる必要がある。特に腰鼓と長鼓が似ているという指摘については、いつごろから長鼓に変化していったのかを検討しなければならないだろう。

次に長鼓舞に関しては、韓国の農楽という芸能に形態が似ていると考えられる。農楽にも太鼓や笛、カネ、旗などが登場するため、ヤオ族の長鼓舞を考える上で参考になると思われる。農楽は地域によって差異が見られるが、長鼓舞にも地域差が見られるのか、また農楽に登場する雑色（楽器を持たず場を盛り上げる役）のような者が登場するのか、さらに私が最も興味を持っている点であるが、舞い方はどのようなものであるのか。農楽では螺旋状に回ったり、対角線上に並んで演奏することがあるので、このような動きをするのか実際に見て検討したい。

楽器の構造・演奏方法については、韓国のチャングにも共通することであるが、なぜ中央がくびれているのかということである。チャングという楽器を単に演奏するための道具としてしか見ていなかったため、その特徴的な形については何も考えていなかった。ヤオ族の長鼓も同じように中央がくびれていることから、その形には音や舞に関し意味を持っているのかもしれない。

次に公（オス）鼓と母（メス）鼓について、公と母という概念がヤオ族から重要視されていることから、その概念を楽器に反映させるというヤオ族の考え方を理解しなければならないであろう。韓国のチャングをはじめとする楽器にも、雌雄の区別があるということを知ったことがあるため、雌雄の区別をつけて演奏することには、何らかの理由があると考えられる。楽器を通して子孫繁栄を願う、あるいは長鼓やチャングの形自体が母体を表現しているとも考えられる。

前期課程では農楽という芸能を取り上げ、多くの農楽を見て修士論文にまとめたが、楽器に関しては深く検討を加えていなかったように思う。チャングのような楽器を見たことがなく、後回しになっていたためであるが、ヤオ族の長鼓と形状が似通っていることから、今後は両楽器の比較をし、さらに舞い方についても農楽と長鼓舞とを比較してみたいと考えている。

【書評】

竹村卓二「ヤオ族の《家先単》とその運用—漢族との境界維持の視点から—」

(1991年・『国立民族学博物館研究報告』)

國學院大學文学大学院文学研究科

博士後期課程3年 広川英一郎

ヤオ族文化研究所により2009年夏期に湖南省長沙市内において行われた追調査では、前年の度戒儀礼に参加した受礼者と司祭の縁戚関係や、受礼者による祖先への「加職」「補充」を含めた祭祀関係がより詳細に確認され、データの整理が進められている。度戒儀礼そのものの、藍山県の現地ヤオ族における意味合いを知る上でも、参加者の人間関係や既に世を去った祖先への祭祀の在り方などは、極めて重要な調査テーマとして2008年の度戒儀礼の調査時から取り組みが進められている。

ここでは、祖先祭祀の在り方からヤオ族社会の有り様へとアプローチした先行研究の一つとして、竹村卓二氏の「ヤオ族の《家先単》とその運用—漢族との境界維持の視点から—」を取り上げ、その内容を検討したい。

本稿は1991年、『国立民族学博物館研究報告』の別冊14号に掲載された論文で、北タイの過山ヤオを中心に、彼等の祭祀対象とも言うべき祖先の法名と、経文が記された「家先単」に注目し、その具体的な内容を踏まえた上で「家先単」の保有と継承と運用の実態を明らかにしている。更にそこに直に現れてくるヤオ族の族制について指摘したものとしては、最初の論考であると言えよう。

冒頭でヤオ族を「《漢字》システムを積極的に導入」して“漢化”はしたが“漢族化”はしなかった民族と規定し、「家先単」について、漢族の「総譜」とは異なっており、「家先」というタームはヤオ族が独自に案出した用語である可能性を示唆している。漢族の「総譜」に対する独自性については、「家先単」は家長たる房主の地位の象徴であり、祭祀義務を負っている父系の直系尊属およびその配偶者が九代分のみ記されているという特徴を示した上で、このような祖霊観や系譜大系が2,3所帯の零細な集団を単位として移動生活を続けていた過山ヤオ社会の生態学的条件に適合したものであるとしている。祖霊への供養が、ばらばらに移住生活を続ける個々の小さな集団によって、時と場所を違えて行われても祖霊の受ける供養の量は集団的に行われる漢族の「宗族」の祭祀と変わらない、というヤオ族の論理を発見する一方で、祖霊から子孫にもたらされる「メリット」も個々の「房主」がそれぞれの投資額に応じて受け取る事になる、という側面も指摘している。この事は著者がヤオ族の司祭から得たという

我われの祖先祭祀にとって大事なことは、子孫が一堂

に会することではなく、各自がそれぞれの居所でできるだけ頻繁に供物を捧げることであり、そのために《家先単》があるのだ

と言う証言に集約されており、ヤオ族における家先単の機能と、そこから窺える祖霊観を決定づけるものと言えるだろう。

以上のような、「家先単」の具体的な内容と運用の実態を踏まえた指摘や、漢族との比較からヤオ族の「家先単」の独自性と機能を明らかにしている点は卓見と言えるものの、漢族との比較においては、ヤオ族の漢族に対する意識がやや強調されすぎている印象を受ける記述も多い。本文では以下、神話に見えるヤオ族の十二姓や、家先単に見える法名の法則、掛灯に始まるヤオ族にとっての四段階の宗教的階級と死後に奉職すべき《陰府》について概略が述べられているが、これらは「漢族との《境界》維持」のための「エスニシティのシンボル」であるとしている。漢族の「総譜」をモデルにヤオ族の社会組織と世界観に適合させたものであるという「家先単」の位置付けにしても、「民族離散にともなうアイデンティティ喪失と《境界》消滅の危険を未然に回避すべく、高度に戦略的に作り上げたものである」と結論付けている。本当にここまでヤオ族が漢族に対する独自性や、自分たちのアイデンティティの保持を強烈に渴望し、その結果として「家先単」に現れるような祭祀体系を確立していったのか、という点に関しては、尚一考の余地があるのではないだろうか。洪水の説話を「比較的最近に起こった重大な出来事」とするヤオ族の神話解釈や、漢民族からの「直接的な撃討を受けることを潔しとせず、奔放に居処を変えることを信条としている」と言ったような過山ヤオの移動生活そのものの動機に対する解釈なども、より慎重な考察が必要な部分であると言えよう。

「家先単」についての研究は本稿の後、吉野晃氏が「師弟関係にある父子—タイ北部、ミエン族〈掛燈〉儀礼に見られる父系理念」(東京学芸大学紀要 第44集)において、タイ北部のミエン族(ヤオ族)が必ずしも実際上の生活の上で父系理念が現れているわけではない事を明らかにし、〈掛燈〉儀礼を通じて〈家先〉とのつながりが出来る事によって一族の範疇が確定していく実態を指摘している。

【書評】

十文字美信『澄み透った闇』

(1987年・春秋社)

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

博士前期課程2年 内藤久義

『澄み透った闇』の作者、十文字美信氏はヤオ族の研究者ではない。1970年代から現在まで、コマーシャルフォトとアートの第一線で活躍している写真家である。

広告の分野においても、その作品は高い評価を得ている。古くは資生堂の「ゆれる、まなざし」、忌野清志郎・坂本龍一「い・け・な・いルージュマジック」、最近ではJR東海「そうだ 京都 行こう。」やサントリー「南アルプスの天然水」の広告写真が記憶に新しい。また、海外を含めた写真展や作品集は枚挙にいとまがない。

80年代に美術を学んでいた私は、当時、十文字氏の作品世界を憧憬をもって眺めていた。20年数年後、偶然図書館で本書を手にとった時、氏がヤオ族に深く関わり、『澄み透った闇』(1987年・春秋社)を上梓していることをはじめて知ったのである。

十文字氏の数多くの作品集の中で、本稿で取り上げる『澄み透った闇』は趣を異にする。これは写真集ではない。全体の4分の1をカラー写真の頁がしめるが、内容は1980年から単身タイに渡航し、計7回に渡ってヤオ族の「評皇券牒」を探し求め、儀礼に接したドキュメンタリーなのである。

1980年2月、「評皇券牒」の存在を知った氏は、なんの伝手もないままタイ最北の町、ミャンマーに国境を接するメイサイにたどり着く。数日間滞在するうち、一軒のバーで煙草商人から、アカ族、ムソー族、リス族がメエタンという村にやって来るという話を聞く。

メエタン村の食堂で出会った男に「どこに行けばヤオ族に逢えるか知らないが、あるいはアカ族を尋ねれば教えてくれるかもしれない。奴らは自分の子を銭のためにヤオ族へ売り飛ばすからだ」と教えられる。

インドシナ半島山岳地帯で最も貧しいといわれるアカ族の住むムアナ村に入り、彼らと起居をともにする。この村の生活では、長老からアカ族と精霊との関係を聞き、村人の歌唱や生活、婚姻関係、祭礼、また村落内に設置された、犬の皮を張り付けた悪霊除けの供犠台をつぶさに観察する。

新たな情報からアカ族の村を出発し、偶然ヤオ族の若者に出会う。彼の父親がヤオの呪術師(設鬼)で、その中でも特別に力を持つ大師公であったのである。

大師公・老四の家に寄宿しながら足かけ6年間日本とタイを往復し、様々な儀礼を体験する。それは宗教儀礼のみならず、結婚式、病気治療(架橋接命)などにも参加し、その中から「彼らの精神生活は設鬼を中心とした厳しい儀礼規定によって成立している」ことを知った。

特にヤオ族社会は「掛灯」を最重要視しており、ヤオ人社会で一人前と認められるためには、この儀礼を体験しなければならない。儀礼は下から、掛灯・度師・加職・加太の4段階に分かれており、どの儀礼を体験したかによって霊界での神との関係が決定されるという。

しかし、80年代のタイ・ヤオ族社会では、すでに加職や加太の上級儀礼を執り行う大設鬼がいなくなっており、氏が生活をともにした大師公・老四でさえ、第二段階の度師までしか導く力を持っていない。

ヤオの村に通うようになったある日、老四から「一緒に旅に出よう」と誘われる。老四は「ヤオ人の精神世界を少しでも理解したいと思うなら、祖先から伝わる種々の儀礼に隠されている意味を知ると同時に、ギェセンボンを探し出して、そこに書き記された伝説を読み解くことが必要」だと語る。ギェセンボンとは「評皇券牒」のことである。ヤオ族の始祖伝説でありアイデンティティでもある。その「評皇券牒」を所持している人物がいるのだという。

タイ北部山岳地帯のヤオの村を、「評皇券牒」を探し転々と旅する。そこでは少数民族の独立運動や、いわゆるゴールデンライアングルの現実に直面し、そして、一方ではヤオ族がすでに自らの宗教を離れて、聖母像を飾りキリスト教に帰依している姿を知るのであった。十文字氏は「インドシナ半島北部山岳地帯に居住する少数民族の特徴の一つに、精霊信仰を捨ててキリスト教に改宗する精神生活をあげてもよいかもしれない」と述べる。

タイ北東地域の最深部、ラオス国境まで8キロというカー村に「評皇券牒」を所持する人物がいるという情報を得る。この村で十文字氏と老四は「評皇券牒」と対面した。氏はこれを撮影し、帰国後写真を拡大プリントしつなぎ合わせ、解読作業と全文翻訳を行ったのである。

10ヵ月後全文翻訳は完成した。本書には一章をさいて、タイ北東部カー村のヤオ族・鄧氏の家に保管されていた「評皇券牒」全文と図像の写真及び翻訳が掲載されている。

その後日本に帰国した氏のもとに、タイの老四から「掛

灯」が行われるので来ないかという手紙が届く。かくして氏は、タイ・ラオス・ミャンマーが国境を接するメエボン村で行われた掛灯儀礼に参加するのである。

十文字氏がヤオ族へアプローチするにあたって興味深いのは、まずアカ族の村に入り込んでいくという点である。氏がアカ族の村を訪ねた理由とは、「アカ族はヤオ族に自分の子供を売る」という情報を耳にしたからなのである。

私は漠然と少数民族はそれぞれ地域ごとに住みわけがなされ、他族とは婚姻も含めて接触がないのではないかと考えていた。しかし、本書には「十六歳で同じ村の娘と結婚し、息子が一人生まれた。その子が六歳の時、ラオスから来たヤオ人に一〇〇〇パーツで売った」というアカ族の男の話が書かれている。

売買は現金で支払われるが、豚などの家畜と組み合わせることもあり、まれに成人男女の売買もあるという。これらは100パーセント経済的な事情による。売られた子供はその日からヤオの家族の一員として貴重な労働力になり、新たな人生がはじまると記されている。

これについては吉野晃氏が、「焼畑に伴う移住と先祖の移住—タイのミエン・ヤオ族における移住とエスニシティ」（『東南アジア研究』35巻4号 京都大学東南アジア研究所 1998年）において、タイのミエン・ヤオ族では他民族からの養子が多いことを指摘している。他の少数民族から幼児のみならず成人男女の養子（売買）があるのであれば、そこには漢民族からの文化の受容だけではなく、少数民族間での影響もあるのではないかと考えさせられた。

アカ族の村には竹で作られた供犠台があるという。高さ2メートルあまり、4本の竹柱の上部には竹を編んで作られた板があり、犬の皮を広げて張り付けている。悪霊が下りてくる依代なのである。1本の棍棒がぶら下がっており、犬の皮に降りてきた悪霊をこの棒で叩く。これによって悪霊は他村へ行ってしまうのである。そこには彼らの心を大きく占める悪霊の存在があり、悪霊を招き退治し他所へ追いやるという物語的展開がある。これには犬の皮が重要な位置を占めているのである。

犬はアカ族にとって貴重な資源である。悪霊除けになくてはならないものであり、食糧でもある。アカ族は犬を食べ過ぎて数が少なくなると、麓のタイ人の村に行行って買ってくるのだという。地域的に隣接するヤオ族が犬祖神話を持ち、犬を食べないとするのと対照的な描写を本書は行っている。

また、アカ族の婚姻形態や儀礼にも触れており、80年代のアカ族の生活を記した文献が少ない中、貴重な叙述なのではないだろうか。

十文字氏がなぜ「評皇券牒」に興味を持ち再三タイへ渡ったのか、その動機は本書には書かれていない。知るすべとして、氏のホームページやインタビューを参考にしたい。ホームページ (<http://jumonjibishin.com/ja/chronology/>) の年表には、1975年、28歳当時、自律神経失調症になり犬を飼うことを勧められ、犬の訓練に夢中になるとある。

「評皇券牒」を知るきっかけについては、犬に興味を持つうちに曲亭馬琴『南総里見八犬伝』を読み、その原型となる神話があることを知る。文献を調べるうちにヤオ族に同様の神話があることを突き止めたのである。

1980年、33歳のとき「少数民族ヤオ族の犬祖神話が記された「評皇券牒」を追跡するため、当時危険だったタイ北部山岳地帯に入る。まだ精神的に弱っており、究極のショック療法であった」と記されている。ホームページに述べられたことを信じるなら、氏は自己治療のため「評皇券牒」探しをはじめたのである。

1977年に写真家協会新人賞、78年に広告の分野でADD賞、渡タイ前年の79年には写真集『蘭の舟』が出版され、同作品の写真展『蘭の舟』で第5回伊奈信男賞を受賞するという、コマーシャルとアートの世界両方で不動の地位を築いた時期である。超が付くほど多忙な身であったことは想像に難くない。この世界で、トップを走り続けることの精神的重圧は、計り知れないものがあるのだろう。

十文字氏はヤオ族の歴史や文化、また「評皇券牒」について、白鳥芳郎氏が執筆を担当した『平凡社世界大百科事典30』『やお族』の項で、はじめて知ったと語っている。

また、『世界の少数民族』[東南アジア大陸ヤオ族]の項、村松弥一氏が執筆した『中国の少数民族』にも接していることから、白鳥氏が1972年『上智史学』17に発表した「評皇券牒に見られる盤護伝説とヤオ族の十八神像」や75年に同じく白鳥氏が刊行した『僑人文書』、『東南アジア山地民族誌—ヤオ族とその隣接種族—』（1978年）にも触れていた可能性があるのではないだろうか。

特に『東南アジア山地民族誌—ヤオ族とその隣接種族—』には白鳥氏が1970年、タイのチェンライ州チュンカム県マイロムエン村で入手した「評皇券牒」の全文と要約を掲載している。

1970年に白鳥氏ら上智大学西北タイ歴史文化調査団が、「評皇券牒」を目にするのがタイのチェンライ州チュンカム県マイロムエン村である。その十数年後、十文字氏と大師公・老四も「評皇券牒」を求めてマイロムエン村に3日間滞在している。十文字氏はこの村で得た情報により、同じチェンカム県のカー村で「評皇券牒」と対面するので

ある。

白鳥氏らが「評皇券牒」と対面するにあたって労を取ったのが、村長である鄧富華氏である。十文字氏が訪ねたカー村で「評皇券牒」を所持していたのも、同じ鄧姓を持つ鄧財奉氏なのである。

これは偶然であろうか。十文字氏は老四の話として、「ヤオ族の起源説話を記した評皇券牒は、七百年以上まえに皇帝からヤオ人の『盤』家に授けられたが、後代になって『鄧』家が彼らの長を務めた時、盤家から鄧家に貸し出され、それ以後行方知れずになったまま」なのだと記している。鄧姓はヤオ始原の十二姓の一つで、盤護と皇女間に生まれた六男六女の一人であり、「評皇券牒」と深く関わる名前なのである。

氏と老四がマイロムエン村で「評皇券牒」の行方を知ったのは、以前この村人が古文書の買い手を探しているという話を聞いたからである。

古文書を売ろうとした男は同村のヤオ族女性と結婚した雲南系の中国人で、ヤオの文書を模写することでヤオ族の儀礼を理解し、これを所持することで自身もヤオ人になれると考えていた。

しかし、この地域ではキリスト教への改宗が盛んになり、書き写した文書も使い道がなく金に換えようとしたのだという。噂を聞きつけたタイ警察が踏み込み、共産軍の密書ではないかと嫌疑をかけられた時、目の前で一つ残らず焼いてしまった。しかし、模写したものは本物ではなく、本物の「評皇券牒」は、カー村の族長・鄧財奉氏が所持しているとその男は語ったのである。

ヤオ族の古文書が売買されることについて、これも老四の話として以下のように記している。

「ヤオ族の特徴の一つに、他部族からの買い子という習慣があるが、アカ族やムツー族の子が成人し、ヤオ族として認められるためにはヤオ族と同じような数々の通過儀礼を行わなければならない。その際にもっとも必要なものは祖先から伝えられた儀礼書である。しかし、祖先がヤオ人でないこうした人々のなかには、儀礼書を持たない者もいるかもしれない。彼らがこれから先もずっと、ヤオ族の一人として生きていこうとするなら、儀礼書を手に入れたいと願うことも無理からぬ話である」

氏がヤオ族への手掛かりとして最初に触れた情報が、アカ族がヤオ族へ子供を売ったという話なのである。タイ北部山岳地帯に居住するヤオ族社会において、他民族との子供の売買が本当にあるのか確認できていない以上、これ以上言及はできない。

貴州省で少数民族を調査する中国人研究者の話では、中国国内では80年代には子供の売買は禁止されており、

あり得ないことであると述べるが、タイ北部ではどうであったのだろうか。しかし、他民族からやって来た人間が、ヤオ族社会で同化していくには、「家先単」などの文書は大きなウェイトを占めることは理解できる。

本書の大きな特色の一つに「評皇券牒」の全訳があげられる。

「評皇券牒」は前述した白鳥氏が75年に出版した『僑人文書』に、その全文が写真によって掲載され解説が付されている。また78年の『東南アジア山地民族誌—ヤオ族とその隣接種族—』の中では文字化し要訳を含めて掲載する。しかし、全文翻訳は行われておらず、これを試みたのは十文字氏と、廣田律子氏が「祭祀儀礼の中の神話」(『神話・象徴・文化』楽浪書院 2005年)の中で、中国湖南省新寧県の「評皇券牒」の全訳を紹介しているのみではないだろうか。

十文字氏は10ヵ月の歳月をかけ、各種辞典を使用して記述される文字の意味を抜き出し、最も古い槃瓠伝説が記されている『後漢書』『南史』と、撮影した「評皇券牒」との照合作業を行った。

判読不明な文字や字句の区切り、また誤字と思われるものもあり、自身の翻訳作業の他、台湾出身の中国語を母語とする2名に、現代中国語訳を頼んだということである。

氏の翻訳をそのまま鵜呑みするのは早計であろうが、翻訳からは数々の指摘がなされている。そのいくつかを例示する。

竜犬盤護は敵国の王の首を取って来て、その手柄として皇女得るのであるが、しかし王は「評皇嘆曰畜念宮娥之醜陋傳」と盤護に語るのである。

これは氏の訳では「評王は溜息をつきながら、もしお前が皇女の容貌の醜さを気にしないのならば」となっている。

「宮娥」は宮女の中でも特に美女を指す。「娥」は美しいまで「娥娥」と書く。しかし、同じ文中にある「醜陋」は醜い容貌を表す語であることから、この解釈に氏は疑問を抱き、王が盤護に対して、娘の容貌の醜さを弁解するのは不自然とするのである。

十文字氏の解釈は、その後の文章が、「父皇之命将身打粉遮揜結束五彩班衣一件以體綉花帶一條一縛其腰綉花怕(帕)一幅以束其額綉花褲一條以藏身其股綉花布一領以●(田+衣)其脛全身皆以遮其羞也」となっており、これを「評皇は人に命じて盤護に五色の斑点模様の服を着せ、全身を覆った。さらに刺繍入りのズボンを穿かせ、刺繍入りの布で足先に近い部分を包みまわしてから」と訳すべきでないかと考える。

氏は刺繍を施した布で全身を包んだのは皇女だと推測していたが、しかし、文中の「醜陋」は犬である盤護の醜さの表現であり、美しい娘「宮娥」を犬にやることを王が嘆いたのではないかと解釈する。さらに刺繍の入った布で全身を包むのは、犬である盤護が醜いからなのである。

十文字氏の指摘した部分を、湖南省民族研究所、広西省民研所、中央民族学院民族研究所などが所蔵する、湖南省、広西省で発見された「評皇券牒」（「評王券牒」）8点と比較してみた。

「宮娥」または「宮女」の文字は、湖南省城歩県、湖南省藍山県、湖南省江華県、広西龍勝各族自治県の「評皇券牒」6点で見られたが、「醜陋」はどの文書にも見当たらなかった。

しかし、白鳥氏らがタイで発見した「評皇券牒」には、「評皇嘆曰、畜念宮娥之醜、陋伝于天下而矣」と書かれている。この一文とはヤオ族が移動を繰り返し、タイへたどり着く過程で付け加えられたものなのであろうか。今後タイ版の「評皇券牒」にも詳しくあたってみたい。

また氏の翻訳から他の「評皇券牒」と比較すると相異なる箇所が出てきた。盤護が敵対する王の首を取るために海を渡る場面である。

盤護は高皇の首を取るため、七日七夜かけて渡海をしなければならない。そこに水難の相を見た天帝が盤護に仙丹を与え、尚且つ「鰲」と「大蛇」のサポーターをつけるのである。これによって霊力を得た盤護は高皇の首を噛み切り、再び大海を渡り無事に帰国するのである。

前述した8点の「評皇券牒」には、十文字氏が撮影した「評皇券牒」に書かれる、「上帝不安説到此犬有七日七夜宿之水难赶帯仙丹一顆送他口中含住免他在水中飢寒勅賜大海神鰲將此大蛇●（しんにょう+因）助」の部分は記されていない。これも今後、タイや中国内の他の「評皇券牒」を検討する必要があると考える。

盤護の死について記述した「評皇券牒」は、中国版8点のうち2点に見られた。

十文字版では「●（羊+羊）」、湖南省城歩県版では「凌（羚）羊」、広西龍勝版でも「凌洋（羚羊）」となっており、その動物に突き殺された盤護は、花柄の服とズボンを着せ花柄の布を被せられ、「入如水水函之中」（十文字版）されるのである。

しかし、他の2点の「評王券牒」では遺体を収めたのは「木函」になっており、十文字氏も当初これは「木」を「水」と誤ったのではないかと考えていた。しかし、同文書の他の水の文字との比較から「水函」と書いたことに間違

いないとしている。

一般的な解釈では、遺体は木の棺に納められ葬られることが通常であろう。しかし、氏は「水函」の文字から、花模様の装束でくるまれた遺骸が函に入れられ、「音もなく海上を漂っていく情景」を想像するのである。

盤護は渡海するとき天帝から仙丹を与えられ、七日七夜を経て霊犬へと変貌した。だからこそ、たどり着いた高国（伊国）の王も盤護に霊性を認め、側に侍らせたのである。水を通して霊犬となった盤護は、死して霊界に向うとき再び水の領域を流れていく、と述べるのである。

いささか恣意的ではあるが、氏の指摘する現世と霊界を隔絶しかつ結び繋ぐものが、水の領域であるとする推察は心ひかれる。

ヤオ族は山の精霊を「チンルアンスイ」と呼び、「清龍水」と書くという。山中を涉猟するヤオ族が、山の精霊を表現するのに「清龍水」の文字を使うのは、水はすべての根源であり、水の持つ超自然的な霊力を畏怖したからではないかと氏は述べる。また「架橋接命儀礼」とは現世と霊界の間を渡す橋であり、そこには水の領域が見えると記すのである。

十文字氏の指摘はこれだけに留まらないが、本書の書評を書くにあたり、一番危惧したことはこの本の信頼性であった。冒頭に本書をドキュメンタリーと紹介したが、十文字氏の感情移入もあり独善的な考察も見られる。研究書や研究論文とは一線を画するのである。

しかし、それでもなお本書は魅力をたたえている。研究書としての魅力と十文字氏の叙述の魅力である。氏も書かれているが、80年代初頭のタイ国境地帯を含むアジア情勢は甚だ不安定であった。

カンボジアではベトナムによるポル・ポト派掃討作戦が行われ、ベトナム軍によるタイ国境への襲撃もあり、80年はタイ・カンボジア国境地帯の緊張が極度に高まった時である。また、ゴールドトライアングルは麻薬を巡る危険地帯である。

そんな時期に氏は単独でタイ北部山岳地帯へ旅立つ。資金もサポートない状態である。それは旅人のスタンスであり視点であった。だからこそ、アカ族のコミュニティーに入り込むことができ、そしてヤオ族の大師公のもとに長年に渡って通い、数々の儀礼の場を体験できたのであろう。

本書が書かれてすでに20年以上の歳月が流れているが、今一度『澄み透った闇』に注目してもよいのではないだろうか。写真家と旅人という、研究者とは異なる視点と洞察は新鮮であるし、それ以上に、80年代のアカ族やヤオ族の生活や儀礼の描写は魅力をたたえている。

【書評】

『盤瓠文化探源』

(2004年・中南大学出版社)

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

博士前期課程2年 譚静

2009年3月に、私は現在の指導教授廣田律子先生と共に、筑波大学に於いて開催された2008年度中国湖南省藍山縣度戒儀礼のビデオ上映会に参加した。ヤオ族のことに、ほとんど知識のない私は研究会の後、ヤオ族のを知るため関連書籍を探し始めた。その際、廣田先生は私に何冊かの本を推薦してくださった。その中で深い興味を抱いたのが、『盤瓠文化探源』であった。

盤瓠文化とは、盤瓠神話と盤瓠トーテム信仰から生まれ発展して来た文化である。盤瓠神話については『風俗通義』『搜神記』『後漢書』などの古代文献で詳細に述べられているばかりでなく、中国の西南部ミャオ・ヤオ・シェ等の少数民族中と東南アジアにも広く伝わっている。1990年10月に、盤瓠文化の発祥地といわれている湘西瀘溪縣で、中国民間文芸家協会と湖南省民間文芸家協会は合同で「中国盤瓠文化學術討論会」を開催し、本書はその際に発表された論文をまとめたものである。

本書は四章に分かれており、民俗学・人類学・歴史学・社会学など様々な分野の論文を収録している。

第一章「瀘溪と盤瓠文化の残存」では、論文4本収録している。「盤瓠神話がどこで誕生したのか」という疑問を投げかけ、歴史文献の記録や出土した文化財などを根拠として、盤瓠文化の発祥地は、現在の中国湖南省湘西土家族ミャオ族自治州瀘溪縣内の武陵山岳地帯であると結論している。

第二章「盤瓠文化と南部民族歴史」では、論文6本収録しており、中国南部に居住しているミャオ・ヤオ・シェ、3つの少数民族を中心として、彼らの歴史と盤瓠文化はどのような繋がりがあるかを述べている。

第三章「盤瓠神話と民俗文化」では、論文13本収録しており、湖南省各地に現存している文化・習俗の分析を通し、盤瓠文化が湖湘民俗・文化・信仰などに、どのように大きな影響を与えたかを考察している。

第四章「盤瓠神話及び発展と変遷」では、論文9本収録しており、盤瓠神話の起源・発展・変化について論述している。

本書の中で私が最も興味を抱いているのはこの第四章に収録されている「盤瓠原型考」(楊正存、p225)という論文である。本書に収録された盤瓠原型に関するほぼ全ての論文は、犬トーテム説を採用している。それ以外には

伏羲説と盤古説もあるが、この3種の論説はすでに見慣れ、聞き慣れた周知のものであり興味をひかれない。しかし、「盤瓠原型考」は、この3種の論説と全く異なる主張をしている。盤瓠神話が古代社会の犬トーテム崇拝を反映しており、盤瓠の原型は犬であるという論説を否定し、女性生殖器崇拝を表しているという独特の視点から盤瓠の原型について論述している。このため私は多数の論文の中からこれだけを取り上げて紹介したいと思う。

この論文は古代文献から手をつけ、内容から四つの部分に分けられる。

第一部分では、筆者は『後漢書・南蛮西南夷列伝』・『搜神記』・『広異記』を引用した『蛮書』・『水経注』に記録している盤瓠神話の比較分析を通し、3つの共通点を得た。

1、神話の中で、盤瓠は犬である。但し種類が異なっている。『搜神記』に記録しているのは“帝犬”(高辛^①皇帝の犬)であるが、『広異記』には“民犬”だと記録している。

2、盤瓠の功績は乱を鎮めて部落を守ることが共通であるが、具体的な内容は異なっている。

3、盤瓠と姫は子孫を産んだが、各パターンに記録されている子孫の人数が異なっている。

各パターンの盤瓠神話の比較を通し、盤瓠の原型は犬であることが推測できるようだが、犬トーテム説はまだたくさん疑問を全て解説できていないため、筆者は盤瓠神話中の盤瓠の原型は犬ではないかもしれないと推測している。

疑問1、盤瓠部族は部族内で通婚している。同じトーテムを崇拝する集団内での通婚は禁止されているはずだが？

同トーテム崇拝集団内の通婚禁止制はイギリスの人類学者 John Ferguson Mclennan (1827 ~ 1881) が提唱した観点である。20世紀初期に岑家梧氏などの学者が中国国内学術界に紹介し、現在中国ではすでに定まった考え方になり、多数の学者がこの観点到に賛同している。この観点によると、盤瓠部族が犬トーテムを崇拝する氏族であるならば、盤瓠と結婚した姫は他のトーテムを崇拝する氏族の出身者でなくてはならない。しかし、彼らの子孫たちは部族内で結婚している。これは一般的なトーテム崇拝集団と性格が異なっている。

疑問2、犬は何故盤瓠という名をつけられたのか？ た

だの記号であるのか？ それとも深い意味があるのか？ もしあるのならば、それはどういうものなのか？

疑問3、現在、盤瓠祭祀活動には女性生殖器崇拜の要素が見え隠れしているが、これは盤瓠との繋がりがあのかどうか。あるのならば、どういう関係だろうか？

第二部分では、盤瓠祭祀活動中に女性生殖器崇拜の形跡があるため、筆者は盤瓠信仰と女性生殖器崇拜には一定的な繋がりと考えており、先行研究・考古の出土物・民族学と民俗学の調査資料から女性生殖器崇拜について考察している。

先行研究

中国の古代人類の生殖崇拜に関する問題については、以前から多くの学者が論文を発表している。その中で郭沫若が著わした『甲骨文字研究』②論文集はもともと権威のあるものである。この論文集に収録されている「積祖妣」という論文は甲骨文の“祖”と“妣”二文字を分析している。中国の古代では、父の父を“祖”と呼び、父の母は“妣”と呼んでいる。甲骨文中のこの二文字の象形文字を考察すると両方とも男女生殖器の様子を表している。郭沫若はこれを生殖器崇拜の一種であると指摘している。“祖”と“妣”二文字の考察によって、中国の古代社会には前後女性と男性生殖器の崇拜を行ったことがあると証明できる。

考古の出土物

現在、考古学も男女生殖器崇拜の存在を実証できる。考古の発見によると、中国の青海省楽都柳湾で陶で作った人像を出土した。像の表面に描かれた女性性別を表す乳房と生殖器の輪郭ははっきりとしている。又遼寧省紅山文化建築群で数多くの女性裸の造形を出土し、中でもっとも注目されているのは紅陶で作った女性の裸像である。この像は腹が隆起しており、お尻が大きく作られ、さらに像の正面に女性生殖器を現している三角形文様を押している。これを除き、“陶祖”・“石祖”・“玉祖”・“銅祖”（陶・石・玉・銅で作られた男性生殖器の模型である）の出土も男性生殖器崇拜の存在に実証を提供してくれた。

民族学と民俗学の調査資料

楊学政の雲南省に在住しているモソ族とナシ族の風俗についての調査によると、当地ではへこんでいる地形や鐘乳石などはみな女性生殖器と見られている。又精液を象徴する泉を加え、こういう場所は求子③の婦人たちの願う場所になっている。今でもこのような女性生殖器を崇拜する風習が残っている。これ以外に、西南地域のモソ族の原始宗教についての調査研究によると、宗教の占い書に男女生殖器と性交を表している図象文字を保存している。これはモソ族の中で男女生殖器崇拜が存在していることに根拠を提供してくれた。

以上述べているように、古代社会では生殖器崇拜が広く存在している。古代人類は生命の繁殖について合理的な解釈がまだできないので、生殖器を崇拜するのはごく自然なことであると指摘している。さらに生殖器崇拜の考察に基づいて盤瓠原型の分析に参考したいと筆者は考えている。

第三部分では、第二部分を参考の上で、古代文献『魏略』から着手し、盤瓠の原型について分析している。筆者は各パターン^④の古代文献に記録している盤瓠神話は2つの大きな疑問が存在していると指摘している。すなわち、盤瓠の来歴と名前である。この2つの疑問は『魏略』には解釈があるとする。

『魏略』に記されている盤瓠の誕生は普通ではない。耳の病気にかかった老婦人の耳から蚕のような虫を取り出し、皿に載せると、虫は犬に変化した、それ故盤瓠という名をつけたと記録している。盤瓠の特異出産から、筆者は伊尹⑤の出産を連想している。『呂氏春秋・本味』に記されている伊尹は桑の木の穴から生まれた。木の穴と老婦人の耳は相似しており、両方とも空間容器であり、つまり子宮を象徴する女性生殖器であると筆者は指摘している。

盤瓠の名前を分析すると、瓠というのはユウガオである。この植物は最初中国の江南地域で育てられていた。ごく栽培しやすいので、古代ミャオ・ヤオ族に好まれた植物の一種である。ユウガオは食され、器に加工され、また楽器としても使われている。さらにユウガオは中に種がいっぱい入っているため、多産の象徴と見られ、尽きない生育能力を連想できる。だからユウガオは女性生殖器の象徴になるのは最適だとする。それから盤は古代言語の中で“切り開く”の意味であるので、盤瓠の名前は“ユウガオを切り開く”の意味である。換言すれば、“女性は子供を産む”という意味であるとする。

第四部分は結論である。盤瓠神話と全ての神話は同様で、歴史の真実を反映していないが、筋の込み入った内容から自分なりの歴史を反映しているとする。盤瓠神話は、盤瓠末裔であるミャオ・ヤオ・リーなどの西南少数民族に存在していた初期生殖器崇拜を反映しているとする。社会形態の変化は盤瓠原型変化の原因となる。当時の漁撈・狩猟・原始農耕の社会基盤はこの変化の重要な物質基礎である。この種の経済活動に必要な生産道具は弓矢や木や石などで作った器具と犬である。特に犬は古代人類の暮らしの欠かすことのできない手伝いである。犬は衣食の源であり、人間を守ることができ、さらに人々に安全感を与えてくれる。それ故、犬は選ばれたトーテムになった。この犬トーテムに基づき、さらに神話を加えたら現在の盤瓠神話が誕生した。だから、犬は神話の中の盤瓠の原型ではなく、ただの原型の誘導体であり、その原型はやはり女性

生殖器であるとする。

この論文の「盤瓠の原型は犬である」という論説を否定しているという点については、私も賛成している。ここでは幾つかの疑問点について検討してみたいと思う。

まず論文中の盤瓠神話と伊尹^①神話を検討すると、確かに盤瓠を生み出した老婦人の耳と伊尹を生み出した桑の木は共通点を持っているが、実は異なっていると思う。伊尹を生み出した桑の木は彼の母が変化したものであり、さらに変化する前にもう妊娠しており、だから桑の木の穴は女性生殖器を象徴していることは間違っていない。しかし盤瓠は老婦人の耳から生み出した後、盤に載せ、瓠を被せられている。婦人の耳は女性生殖器を象徴しているが、盤と瓠は女性の生殖器を象徴する理由はまだ不十分であると考えられる。

それから盤瓠の意味については、私は違う意見を持っている。瓠はユウガオの意味であり、盤は“切り開く”の意味があるが、二文字を合わせると“ユウガオを切り開く＝女性の子供を生む”の意味であろうか？ そうではないと思う。古代社会では器がないので、切り割った瓠を皿として広く使った可能性がある。だから、盤瓠の意味はただの切り割った瓠で作った盤（お皿）の意味であると考えている。このほかに瓠で作った器には瓠壺^②・瓠鉢^③があり、盤瓠は現代語で訳すと瓠盤になるはずである。瓠の位置が前後するのは古代と現代文法の違いであり、意味は変わらないと考えられる。

盤瓠の意味は原型を探す大切な鍵だと思う。もし盤瓠が瓠で作った盤の意味であれば、盤瓠の原型は最初に瓠を切り割って盤という器を発明した人間かもしれない。盤瓠はその人の名号だと推測できる。こういう命名法は珍しくない。燧人氏^④・有巢氏^⑤・神農氏^⑥という名前もつけられた経緯は同様である。また盤瓠の子孫の命名も参考になる。例えば、シエ族の『盤瓠歌』に記録している盤瓠と姫の長男は生まれた時に金盤に載せたため、盤姓を与えられた。次男は生まれたときに籃（かご）に入れたため、藍（籃の同音異字）姓を与えられた。三男は生まれたときにちょうど雷が鳴ったので、雷姓を与えられた。このような自然のものや人間の功績で命名する方法は神話の世界でごく普通である。だから、盤瓠は瓠を切って盤を発明した人を記念するためつけた名号だと考えられる。

以上私が関心を持つ点について検討してみたが、まだ勉強が足りないので、不足のところがたくさんあると思う。今回この論文のおかげで自分は多くの古代資料を調べて、自身として非常によい勉強になった。特に盤瓠に関する神話・古代文献などの資料を少し集めたので、今後自分の研究に役立てようと思う。

盤瓠の原型はいったいどういうものなのか？ まだはっきりとわからないと思うが、今回紹介したこの論文はわれわれに非常に独特な視点を提供し、新鮮な視野を広げてくれた。各分野の知識を合わせて様々な視点から考察すれば、いつかは、盤瓠原型の問題を解明できると思っている。

注

- ①：『史記・五帝本紀』：“帝？高辛者、黄帝之曾孫也。”
- ②：『甲骨文字研究』、郭沫若、1962年、北京科学出版社
- ③：求子：子が生まれるように願をかける。子宝を授かりたいと神仏に祈ること。
- ④：『呂氏春秋・本味』：“有莘氏女子採桑、得嬰兒于空桑之中、獻之其君、其君令口人養之。察其所以然、曰、其母居伊水之上、孕、夢有神告之曰：曰出水東走、毋口。明日視曰出水、告其口、東走十里、口口其邑、尽為水、身因化為空桑、故命之曰伊尹”。
- ⑤：『博古図』
- ⑥：『詩経・小雅・瓠葉』
- ⑦：『太平御覧・王子年拾遺記』：“申彌国去都万里、有燧明国、不識四時昼夜。其人不死、厭世則昇天。国有火樹、名燧木、屈盤万頃、雲霧出于中間。折枝相鑽、則火出矣。後世聖人變腥臊之味、遊日月之外、以食救万物；乃至南垂。目此樹表、有鳥若（号鳥）、以口啄樹、粲然火出。聖人感焉、因取小枝以鑽火、号燧人氏。”
- ⑧：『韓非子・五蠹』“上古之世、人民少口禽獸衆、人民不勝禽獸虫蛇、有聖人作、構木為巢以避群害、民悅之、使王天下、号曰有巢氏。”
- ⑨：『白虎通義』：神農氏能拋天時之宜、分地之利、創作了耒耜等之農具、教民耕作、使人民獲得很大之好処、故号神農氏。

瑶族文化研究所 通訊 第二号

発行日 2010年 7月 29日

編集・デザイン

神奈川大学 ヤオ族文化研究所
岡本 浩一

発行

神奈川大学 ヤオ族文化研究所

印刷

株式会社 ポートサイド印刷

※本書の内容について文書による許可無く転載・複製することを禁止します。

聖
辭
地
府
閻
浮
門

群
仙
同
赴
圓
燈
會

上清玉境玉宸天寶天尊聖前之位





瑶族文化研究所 通訊 第二号

発行日 2010年7月29日 編集・発行 ヤオ族文化研究所

〒259-1293 神奈川県平塚市土屋 2946 神奈川大学 湘南ひらつかキャンパス 1号館 238 室
廣田研究室内ヤオ族文化研究所

Tel:0463-59-4111 E-mail: hirotr01@kanagawa-u.ac.jp URL: <http://www.yaoken.org/>